# 金沢市寺中B遺跡

県営寺中住宅団地建設に係る発掘調査報告書

1991

石川県立埋蔵文化財センター

# 金沢市寺中B遺跡

県営寺中住宅団地建設に係る発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター

# 目　次


頁

第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　遺跡の位置と周辺の地形 …… 1
　第２節　遺跡の成立と展開 …… 1

第２章　調査に至る経緯と経過 …… 5
　第１節　調査に至る経緯 …… 5
　第２節　調査の経過 …… 7

第３章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　Ａ区の遺構と遺物 …… 14
　第２節　Ｂ区の遺構と遺物 …… 20
　第３節　Ｃ区の遺構と遺物 …… 21
　第４節　Ｄ区の遺構と遺物 …… 45
　第５節　Ｅ区の遺構と遺物 …… 64
　第６節　Ｆ区の遺構と遺物 …… 69
　第７節　Ｇ区の遺構と遺物 …… 70
　第８節　Ｓ区の遺構と遺物 …… 75
　第９節　Ｔ区の遺構と遺物 …… 77

第４章　まとめと考察 …… 81
　第１節　遺物について …… 81
　第２節　遺構について …… 89
　第３節　寺中Ｂ遺跡の全体像について …… 94
　第４節　寺中・畝田遺跡群と古墳時代初期の金沢平野 …… 97

# 《挿図目次》


頁

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の地形と遺跡 …… 2
第３図　自然環境の変化 …… 3
第４図　周辺の遺跡分布の変化 …… 4
第５図　調査区位置図 …… 10
第６図　寺中Ｂ遺跡全体図 …… 11
第７図　Ａ区～Ｔ区基本層序柱状図 … 13
第８図　Ａ区２号建物 …… 14
第９図　Ａ区土坑 …… 14
第10図　Ａ区１号溝・２号溝層位…… 14
第11図　Ａ区全体図 …… 15
第12図　Ａ区１号建物 …… 17
第13図　Ａ区出土遺物 …… 19
第14図　Ｃ区全体図 …… 23
第15図　Ｃ区竪穴状遺構 …… 25
第16図　Ｃ区出土遺物(1) …… 28
第17図　Ｃ区出土遺物(2) …… 29
第18図　Ｃ区出土遺物(3) …… 30
第19図　Ｃ区１号土坑・２号土坑 …… 32
第20図　Ｃ区出土遺物(4) …… 33
第21図　Ｃ区３号土坑 …… 34
第22図　Ｃ区出土遺物(5) …… 35
第23図　Ｃ区大溝層位…… 37
第24図　Ｃ区出土遺物（銭貨）…… 38
第25図　Ｃ区土器溜まり …… 40
第26図　Ｃ区出土遺物(6) …… 41
第27図　Ｃ区柱穴 …… 42
第28図　Ｃ区出土遺物(7) …… 43
第29図　Ｃ区出土遺物(8) …… 44
第30図　Ｄ区２号土坑・３号土坑 …… 45
第31図　Ｄ区・Ｔ区全体図 …… 47
第32図　Ｄ区出土遺物(1) …… 49
第33図　Ｄ区主要遺構 …… 50
第34図　Ｄ区５号土坑 …… 51
第35図　Ｄ区出土遺物(2) …… 52
第36図　Ｄ区２号落ちこみ …… 53
第37図　Ｄ区出土遺物(3) …… 55
第38図　Ｄ区３号溝 …… 57
第39図　Ｄ区４号溝・５号溝 …… 57
第40図　Ｄ区出土遺物(4) …… 59
第41図　Ｄ区７号溝 …… 60
第42図　Ｄ区出土遺物（玉類）…… 62
第43図　Ｅ区土坑 …… 64
第44図　Ｅ区・Ｓ区全体図 …… 65
第45図　Ｅ区１号溝・２号溝層位…… 67
第46図　Ｅ区出土遺物 …… 68
第47図　Ｇ区大溝層位…… 70
第48図　Ｂ区・Ｇ区全体図 …… 71
第49図　Ｇ区出土遺物 …… 73
第50図　Ｓ区大溝層位…… 75
第51図　Ｓ区出土遺物 …… 76
第52図　Ｔ区出土遺物 …… 79
第53図　Ｔ区出土遺物（玉類）…… 80
第54図　出土土器主要器種一覧 …… 83
第55図　出土土器の組成 …… 85
第56図　甕形土器の法量別組成 …… 88
第57図　周溝を有する建物一覧 …… 90
第58図　県内の弥生時代から古墳時代
　　前期にかけての土壙墓一覧 … 92
第59図　土壙墓の規模別分布 …… 93

# 《図版目次》


図版１　上　遺跡遠景（南東から、中日新聞北陸本社提供）　　下　出土玉類（実物大）
図版２　上　Ａ区１号建物（南東から）　　下　Ａ区土坑（北西から）
図版３　上　Ａ区調査後全景（北から）　　下　Ｂ区調査後全景（南から）
図版４　上　Ｂ区調査後全景（北から）　　下　Ｃ区竪穴状遺構（北東から）
図版５　上　Ｃ区１号土坑・２号土坑（北西から）　　下　Ｃ区３号土坑（東から）
図版６　上　Ｃ区大溝木器出土状態（西から）　　下　Ｃ区大溝南半（北から）
図版７　上　Ｃ区大溝北半（南から）　　下　Ｃ区１号土器溜まり（北から）
図版８　上　Ｃ区２号土器溜まり（東から）　　下　Ｃ区浄化槽部分主要遺構（東から）
図版９　上　Ｃ区南半部調査後全景（北から）　　下　Ｃ区北半部調査後全景（西から）
図版10　上　Ｄ区２号土坑・３号土坑（南から）　　下　Ｄ区４号土坑（東から）
図版11　上　Ｄ区５号土坑（西から）　　下　Ｄ区１号溝・２号溝（北西から）
図版12　上　Ｄ区３号溝（北東から）　　下　Ｄ区１号柱穴（南西から）
図版13　上　Ｄ区２号落ちこみ（北から）　　下　Ｄ区主要遺構（西半部、北から）
図版14　上　Ｄ区西半部調査後全景（北東から）　　下　Ｄ区東半部調査後全景（東から）
図版15　上　Ｄ区東半部調査後全景（西から）　　下　Ｅ区土坑（南から）
図版16　上　Ｅ区大溝（南から）　　下　Ｅ区調査後全景（西から）
図版17　上　Ｆ区調査後全景（南から）　　下　Ｇ区主要遺構（西から）
図版18　上　Ｇ区調査後全景（北から）　　下　Ｓ区大溝（南から）
図版19　上　Ｓ区調査後全景（東から）　　下　Ｓ区調査後全景（西から）
図版20　上　Ｔ区１号溝（北から）　　下　Ｔ区２号溝（北から）
図版21　上　Ｔ区３号溝（北から）　　下　Ｔ区調査後全景（西から）
図版22　出土遺物(1)　Ｃ区竪穴状遺構(1)
図版23　出土遺物(2)　Ｃ区竪穴状遺構(2)
図版24　出土遺物(3)　Ｃ区１号土坑・２号土坑・大溝（金属製品）
図版25　出土遺物(4)　Ｃ区４号土坑・包含層
図版26　出土遺物(5)　Ｃ区１号土器溜まり・２号土器溜まり
図版27　出土遺物(6)　Ｃ区大溝
図版28　出土遺物(7)　Ｄ区１～４号土坑
図版29　出土遺物(8)　Ｄ区溝・５号土坑・ピット
図版30　出土遺物(9)　Ｄ区落ちこみ・５号土坑・包含層
図版31　出土遺物(10)　Ａ区・Ｅ区・Ｇ区・Ｓ区
図版32　出土遺物(11)　Ｔ区

# 例　言

1．本書は石川県金沢市寺中町地内に所在する寺中Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は県営住宅建設事業に係るもので、石川県土木部建築住宅課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが昭和63年度・平成元年度に実施した。

3．本遺跡の調査期間、面積および担当者は次の通りである。

第１次調査

調査期間　昭和63年10月17日～12月13日、平成元年３月６日～24日　　調査面積約1,600㎡

担当　藤田邦雄（石川県立埋蔵文化財センター主事）

第２次調査

調査期間　平成元年４月24日～７月17日　　調査面積約1,658㎡

担当　中島俊一（石川県立埋蔵文化財センター主査）

安　英樹（石川県立埋蔵文化財センター主事）

4．本遺跡の発掘調査、遺物整理および報告書刊行に関する費用は建築住宅課が負担した。

5．本遺跡の発掘調査と報告書刊行にあたっては次の方々および諸機関のご協力とご教示を得た。記して感謝する。

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、石川県建築住宅課、中日新聞北陸本社、伊藤雅文、大藤雅男、大藪智子、垣内光次郎、川畑　誠、木立雅朗、北野博司、楠　正勝、芝田　悟、田嶋明人、田畑　弘、栃木英道、中屋克彦、西谷昌司、橋本澄夫、久田正弘、平田天秋、福田弘光、真智敏郎、松山和彦、三浦純夫、宮本哲郎、横山貴広（敬称略、五十音順）

6．本遺跡の出土遺物の整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託し、辻森由美子、小林直子、戸澗かがり、新谷由子、尾崎昌美が担当し、復元は勝島栄蔵、小間博文、前田すみ子が担当した。記して感謝する。遺構の写真撮影は調査担当者がそれぞれ行った。出土遺物の写真撮影は安が行った。遺構・遺物挿図および写真図版は安が作成した。

7．本書の編集は各担当者と協議の上で、安が行った。本書の執筆分担は次の通りである。

第１章、第３章、第４章第１節・第２節・第３節　　安　英樹

第２章　　中島俊一・藤田邦雄

第４章第４節　　橋本澄夫（石川県立埋蔵文化財センター所長）

8．本書の遺構・遺物挿図の表示は次の通りである。

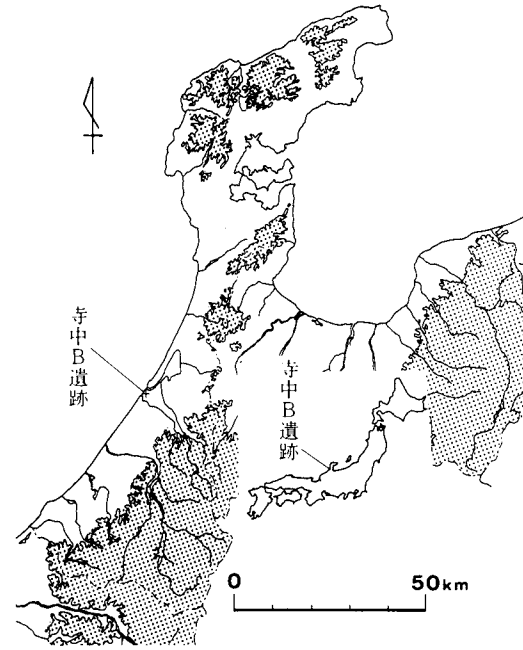
(1)挿図の縮尺は図内に表示した。(2)方位はすべて真北を示す。但し、第４章については磁北とする。(3)水平基準線は標高で示した。(4)遺物実測図中のアミは薄く粗いほうが赤彩・濃く細かいほうが黒色処理をそれぞれ表し、その都度文中で説明した。(5)写真図版中の遺物番号は挿図の遺物実測図番号と一致する。(6)註・参考文献は一括して文末に付した。

9．本遺跡の発掘調査で得た諸記録や写真、出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管にあたっており、活用に便宜を図っている。

# 第1章　位置と環境

## 第1節　遺跡の位置と周辺の地形

寺中B遺跡は、石川県金沢市の海側北部、金石海岸の東方約1.5kmに位置する。金沢市は、東は浅野川、西は犀川に挟まれて発達した河岸段丘上に位置する金沢市街地から標高を徐々に下げながら広がるが、遺跡周辺に至ってはシルト質粘土が堆積した低湿な沖積平野が展開している。



第1図　遺跡の位置　　（S＝1／200,000）

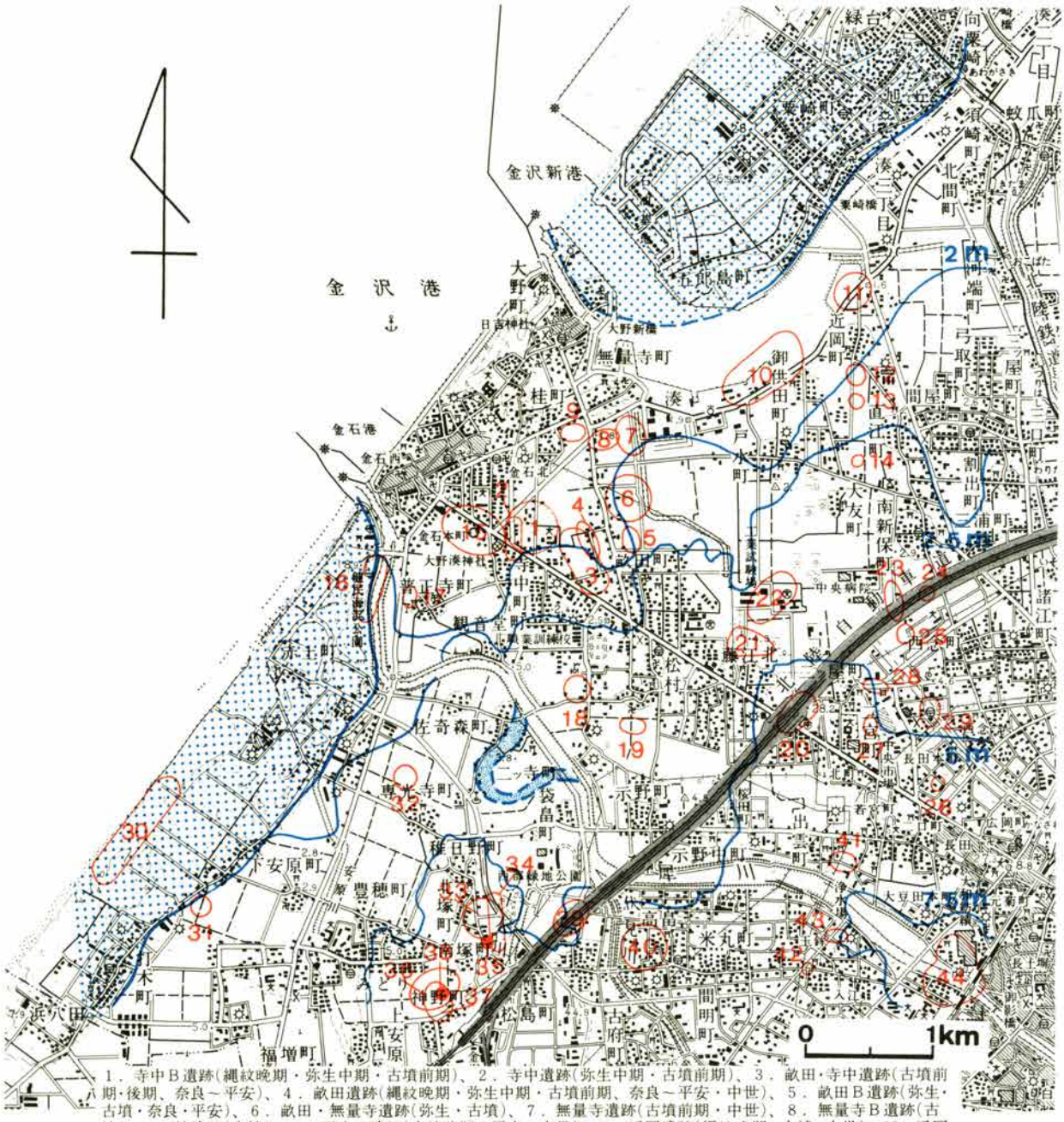
遺跡の東を流れる浅野川は、河北潟に源を発する大野川に注ぎ、大野川は金沢新港を擁する港湾地帯を臨みながら日本海へ流れ出る。大野川はその両岸で大きく地形を違える。北岸は日本有数の規模をもつ内灘砂丘が加能国境まで、南岸は標高2mを超えない低湿平野が河北潟まで続いている。遺跡の西を流れる犀川は金沢の市街地を貫流し、下流で蛇行しながら金石港へ注ぐ河川であり、古都金沢の象徴の一つでもある。幾度かの洪水は、河道周辺に氾濫原を形成している。犀川の西岸の一部は、遠く鶴来町を起点とする手取扇状地の伸びと重なり、等高線は現在でもきれいな扇形を描くほどに典型的である。東岸の低湿平野とは地質的に異なるといえよう。一方、河口付近では安原砂丘が形成され、松任市まで伸びている。

内灘砂丘・河北潟を含めて遺跡周辺をみてみると、近年の干拓・港湾整備・宅地化などの事業による開発が進み、その外観は一変しつつある。

## 第2節　遺跡の成立と展開

人々が本遺跡周辺の低湿平野に住み始めたのは、縄紋晩期頃からと推定されている。縄紋晩期から現在に至るまでは凡そ3000年が過ぎているが、その間の自然環境が同一でなかったことは、地質学の分野からも言及されている。植生の変化や海水生貝層などから証明できる気候の変化や海水面の変動現象はその代表的なものといえよう。ここでは低湿平野における遺跡の分布について、主として自然環境の変化という面から考えてみたい。

気候の変化と海水面の変動とは密接に結びついたもので、気温が高くなると海水面も上がり、海水が内陸に入りこむ（海進）。気温が低くなると海水面が下がり、陸地が広がる（海退）。この現象は地球上の氷河の増減によるもので、交互に繰り返す氷河期と間氷期、言い換えれば寒冷期と温暖期が到来するごとにもたらされるようである（第3図）。縄紋時代から古墳時代にかけての遺跡周辺もまた何度かの海進・海退を繰り返している模様である。縄紋早期から中期は比較的




1．寺中B遺跡(縄紋晩期・弥生中期・古墳前期)、2．寺中遺跡(弥生中期・古墳前期)、3．畝田・寺中遺跡(古墳前期・後期、奈良～平安)、4．畝田遺跡(縄紋晩期・弥生中期・古墳前期、奈良～平安・中世)、5．畝田B遺跡(弥生・古墳・奈良・平安)、6．畝田・無量寺遺跡(弥生・古墳)、7．無量寺遺跡(古墳前期・中世)、8．無量寺B遺跡(古墳)、9．桂遺跡(古墳)、10．戸水C遺跡(古墳前期・平安・中世)、11．近岡遺跡(縄紋晩期・古墳・中世)、12．近岡ナカシマ遺跡(弥生・奈良・平安)、13．近岡カンタンボ遺跡(弥生・奈良)、14．大友遺跡(平安)、15．金石本町遺跡(奈良・平安)、16．普正寺遺跡(中世)、17．普正寺・高畠遺跡(古墳後期・中世)、18．松村A遺跡(縄紋後晩期・古墳・中世)、19．松村B遺跡(縄紋・弥生・近世)、20．藤江B遺跡(弥生中期)、21．藤江C遺跡(弥生・古墳・古代・中世)、22．戸水B遺跡(弥生・平安)、23．南新保三枚田遺跡(弥生末～古墳初め)、24．南新保D遺跡(古墳前期)、25．西念・南新保遺跡(弥生・古墳前期)、26．二口町遺跡(弥生後期)、27．二口ロクチョウA遺跡(古墳前期)、28．二口ロクチョウB遺跡(古墳前期)、29．西念ネジタ遺跡(弥生)、30．下安原海岸遺跡(縄紋・弥生・古墳)、31．下安原遺跡(縄紋・弥生)、32．佐奇森遺跡(奈良・平安)、33．北塚A遺跡(縄紋)、34．北塚B遺跡(縄紋・古墳・平安)、35．おまる塚古墳(古墳)、36．南塚遺跡(縄紋後晩期)、37．南塚B遺跡(古墳)、38．びわ塚古墳(古墳)、39．古府クルビ遺跡(弥生・古墳・奈良・平安)、40．高畠遺跡(古墳)、41．若宮遺跡(中世)、42．玉鉾遺跡(古墳前期)、43．玉鉾B遺跡（奈良～平安)、44．犀川鉄橋遺跡(縄紋・古墳)

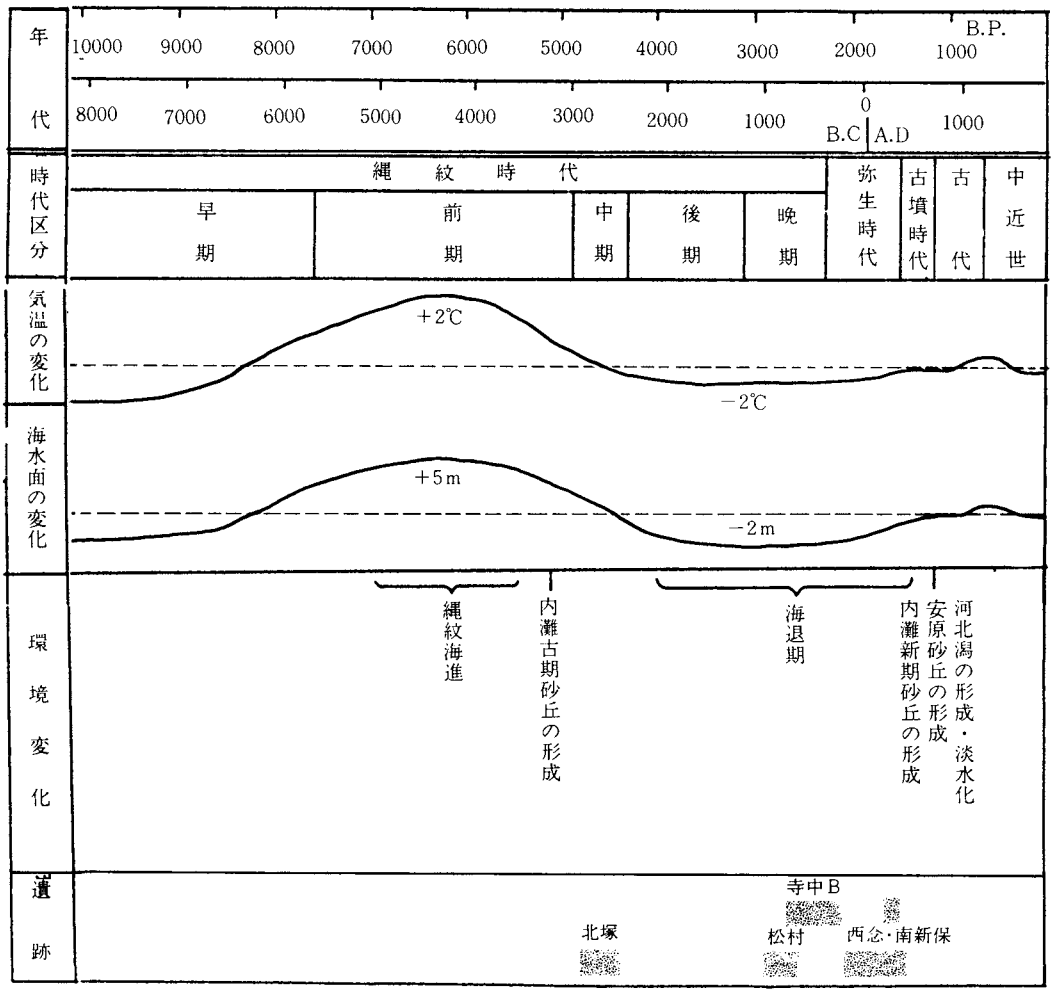
第２図　周辺の地形と遺跡（S＝1/50,000）

(図中の等高線について、2.5m～7.5mは大日本帝国陸地測量部が明治42年に製作した地形図から、２mは現地図の三角点から復元して用いた。砂丘は明治42年当時の範囲をあらわしている。)

温暖な気候で、海水面は現在より２～３ｍ高かったらしい。[1] 現在の海抜２～３ｍ等高線ラインまで汀線が進行していたとすれば、遺跡周辺は水没していた可能性が高い。付近の該期の遺跡は犀川西岸の手取扇状地に北塚Ａ遺跡（33）があげられるに過ぎず、低湿平野部では皆無に近い。

縄紋中期末には海退が始まり、海水面は現在より２～３ｍ下がる。１㎞以上海岸線が後退し陸地となったらしい。低湿平野に人々が進出するのは縄紋後期以降であろう。縄紋後期から弥生後期にかけて若干冷涼であった気候は、現在の平均気温より２～３℃低いものという。縄紋晩期以降の多くの遺跡の出現は、縄紋中期に代表される温暖な気候に育まれてきた時代が終焉を迎え、環境の変化によって人々が段丘等の高地から平野へ進出してきたものと捉えるべきであろう。

海岸線の後退は湿気や水害を緩和し、点在する微高地は進出してきた人々の居住に適していたと考えるならば、多くの遺跡が形成されるのも自然なことであろう。本遺跡をはじめとして、畝田遺跡（４）などは、いずれも標高２～３ｍの等高線にあらわれる微高地に立地し、縄紋晩期から弥生中期にかけて営みを開始している。この時期のどこかに稲作農耕が伝播したのは確実であり、より冷涼な東北地方でも水田遺構の発見例がある。[2] ただし、気候が冷涼になり狩猟採集生



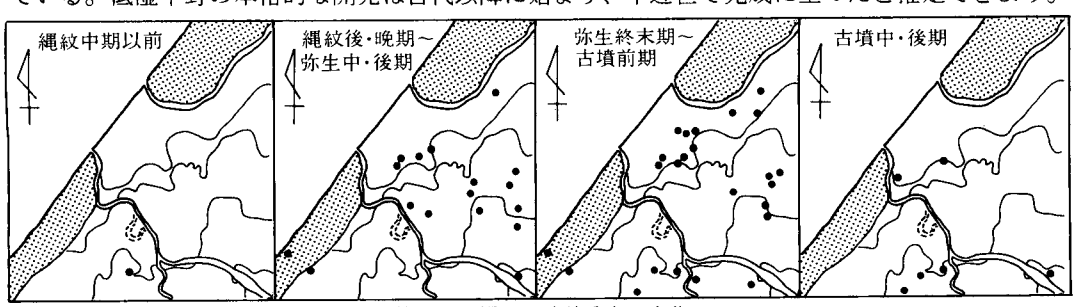

第３図　自然環境の変化（藤1975を加筆し転載）

活が成立しなくなってきて、やがて稲作の伝播と共に農耕が始まった、と一様に生活様式の転換が行われたかどうかはわからない。稲作農耕の普及については今後の調査・研究に期待されるところが大きい問題である。

気候および海水面の変動は弥生時代末から古墳前期にかけてふたたび起きるらしい。冷涼な気候がやや緩和されると同時に小海進が始まり、平均気温・海水面とも現在並みに落ち着くようである。安原砂丘や新期の内灘砂丘が形成され、河北潟は陸湖化し淡水湖となる。第2図でみる地形がほぼ成立したことになるこの時期に、この地に存在した集落が自然環境の変化でどのような影響を受けたのかは推し量るべくもない。しかし、古墳前期までに大幅に増加した遺跡のほとんどが、古墳中期・後期へと存続し発展することなくとだえてしまう傾向がみられる（第4図)。この原因について、政治・社会的背景のほかに、自然条件があるとも考えられよう。周辺の遺跡のほとんどがこの傾向を示すことは事実である。代表的な遺跡をあげると、本遺跡をはじめとして、寺中遺跡（2)、畝田遺跡（4)、畝田・無量寺遺跡（6)、無量寺遺跡（7)、近岡遺跡（11)、南新保D遺跡（24)、西念・南新保遺跡（25）などになる。

注目すべきは前述した縄紋晩期～弥生中期の遺跡と複合するものがきわめて多いことで、これはすなわち、周辺の遺跡のほとんどが、縄紋後晩期から弥生中期にかけて海退と共に形成され、弥生時代末から古墳前期にかけて海進と共にとだえると考えることを可能にするものであろう。とはいえ、戸水C遺跡（10)・近岡遺跡（11）などは標高2mを切る超低湿地にある。どちらも海岸線が後退したとしても決して居住に適地とは思えない地点に、確実に遺跡が存在する例である。単純に気候・海水面の変動と現在の等高線でみる地形だけで遺跡の立地を論ずることの難しさをこの両者は証明している。局地的・通年的な隆起・沈降の存在も考える必要があろう。[3] さらに、後世の開墾や近現代の圃場によって、高低差すなわち微高地・微低地の多くは削平されている。かつては存在した古墳が墳丘を削平され周溝だけ検出される例も少なくない。藤江C遺跡（21）では前期の前方後方噴が、北塚B遺跡（34）では中期から後期の円噴が確認されている。[4] これらは我々が古環境を復元する上で、検討に欠かせない要素であろう。金沢市の低湿沖積平野において、自然環境の変化から遺跡の消長を捉えるには上記の問題をクリアーする必要がある。その上で自然環境を超えた人々の活動、人的行為を考えねばならないことは言うまでもあるまい。

古代について、遺物は各地で散布するが、確実な遺跡は少なく、大友遺跡（14）などが数えられるにすぎない。中世以降、水運が発達してくると、普正寺遺跡（16）のような港湾遺跡が形成されている。低湿平野の本格的な開発は古代以降に始まり、中近世で完成に至ったと推定できよう。




第4図　周辺の遺跡分布の変化

# 第２章　調査に至る経緯と経過

## 第１節　調査に至る経緯

県営住宅建設事業に係る寺中Ｂ遺跡の発掘調査の実施（昭和63・平成元年度）に至る経緯については、昭和56年度に遡る県関係各開発部局への事業計画の照会事務によって、当初の計画概要を知ることとなるが、この計画では、寺中地内の石川県森林組合連合会所有地（緑化木センター）の約1/2（6,000㎡）を石川県住宅供給公社が買収・整備して、県営共同住宅団地を造成しようとするものであった。

仮にこれを第１期計画と呼ぶことにすれば、６年後の昭和62年に至って、上記緑化木センターの残りの約6,000㎡（1/2）も新たに買収して木造の小建て売り住宅を建設・販売するという、いわば第２期的計画を知ることになるが、当該報告書に係る発掘調査地点はこの第２期計画地の部分である。

第１期とするものの経過では、設計段階における県建築住宅課より県文化課への埋蔵文化財所在に関する問い合わせに対して、昭和56年５月７日付けで「寺中Ｂ遺跡が存在するので分布調査し、範囲を確定したあと保護について協議したい」との回答が行なわれている。

これを受けた県住宅供給公社では、県埋蔵文化財センターへの分布調査依頼と進展し、昭和56年７月に試掘調査が行なわれている。この調査では、予定地内の南東隅に限られる約250㎡が包蔵地と判断（従って、微地形推測からも遺跡の北縁端部と想定され、周辺部の既応の調査事例などを参照すると、遺跡の中心部は当該予定地区の南方域に開けるもの）される結果を得ることとなり、少範囲という条件も手伝って設計等の工夫で構造物をのせない方向（発掘調査回避）で調整されたようである。

これによって、当該地での住宅団地建設計画が完結したものと考えられていたが、間断をもった昭和62年１月に至り、県建築住宅課より第２期的計画が浮上してきた。昭和62年度中に用地買収。63年度より建設と販売の計画ということで、埋蔵文化財の所在の可能性についての問い合わせである。

第１期計画時の分布調査資料を基に、可能性が富に高い旨が伝えられている（昭和62年１月28日埋文センター応接記録）が、主要な問題として、用地買収・発掘調査費用（額）と分譲価格設定に係る見通しあるいは計画内容自体との懸案的問題があるため、分布調査の実施と発掘調査となった場合の費用面の概算的提示も依頼されることとなった。

この第２期対象地に係る試掘分布調査は、地権者の承諾の基に昭和62年２月16日に実施され、北西隅側の一部を除く約5,000㎡内に弥生時代～中世にかけての遺跡の所在が確認され、結果は即、県文化課を通じて県建築住宅課へ回報されて検討が重ねられてきたものと思われる。

昭和63年４月に至り、県関係各部局より提示される当該年度の発掘調査要望遺跡（事業）一覧では、土木部関係事業での優先順位を上位として当該事業（遺跡）計画の協議資料が回送（石川県が現在採る方式は、人的問題も含めて、開発事業関係で要望される遺跡の発掘調査について件

数・面積を全て消化できるという現状ではないため、各部局の優先施策がある程度反映・対応されるように、部局毎の事業優先順位の提示を求めて、これを基に現実的な細部協議・調整を行う方式を慣例化させてきている）され、これに従って同年４月19日に県建築住宅課と当埋文センターとの細部調整が行なわれている（埋文センター応接記録）。

ここでは、第２期的計画当初の県住宅供給公社による木造小建て売り住宅建設計画から、鉄筋３階建とする県営住宅建設事業（県建築住宅課）に変更があったこと・用地買収完了の時期と埋文センター年間調査計画との係わりで９月以降で調査に着手すること・発掘調査は２ケ年に分割して実施すること・発掘調査部分は若干の周囲も含む半永久的構造物（棟）の範囲および、附帯的工事となる側縁排水路と同道路部分とすること・工事の優先順序に即して今年度は約1,600㎡について実施すること。などの調整・確認が行なわれている。

第１次調査は、文化財保護法（57条の３・98条の２）に基づく手続きの後、同年10月17日より開始し、同12月13日までの期間と、平成元年３月６日～同３月24日の期間に分断しながらも所期目的を達して無事終了した。

第２次調査は、第１次調査の経過をふまえて平成元年４月24日から同年７月17日にかけて予定区分の残り約1,658㎡について実施した。この間、前年度で終了した調査区（棟）では建築工事が進行しており、又、掘削土は当該用地内処理という要件の基、建築資材置場・掘削土置場・重機車輌類の通用路の確保など、混然とした状況のなかで、一調査区画を小分割区画毎として自転車操業的方法によって進行させた。ここには、県建築住宅課を議長として関係者が定期的に寄り集う連絡調整会が設けられてあり、建設関係各５社・埋文センターそれぞれの作業日程・工程に障害が生じないよう連絡と、細部の調整が目的である。互いの協調関係の基、和やかに終始することができた。

調査前風景

## 第2節　調査の経過

（第1次・日誌抄）

昭和63年

10月17日(月) 曇

現場作業開始。発掘器材整理および調査地の排水作業を行う。

10月20日(木) 晴～21日(金) 雨のち曇

バックホー（0.4㎥）によるA区表土除去作業。包含層の遺物は少なく、遺構は南に行くほど多いようである。

10月24日(月) 曇

調査区内に側溝を設け排水作業と併行しながら遺構検出作業を進める。土質は粘性が強くやりにくい。

10月25日(火) 曇

調査区内杭打ち作業。北半部遺構検出および掘り下げ作業を行う。遺物は出土せず時期は不明。

10月27日(木) 晴

南半部遺構検出および掘り下げ作業。北半部平面図実測作業。

10月31日(月) 晴

A区1号土坑、1号溝を完掘し、A区の遺構掘り下げ作業完了。

11月1日(火) 晴

調査区内清掃作業の後A区全景および個別写真撮影。

11月4日(金) 晴

A区平面図実測およびレベル記入作業完了。

11月8日(火) 晴

調査区壁面および遺構断面図実測作業。

11月9日(水) 曇時々晴

バックホー（0.4㎥）によるB区表土除去作業。しっかりした包含層は見られず、出土遺物は少ない。

11月14日(月) 曇

B区遺構検出および掘り下げの後平面図実測作業。

11月15日(火) 曇時々晴

B区平面図実測およびレベル記入作業。調査区写真撮影。バックホー（0.4㎥）によるS区表土除去作業。

11月16日(水) 曇時々晴

S区包含層掘り下げおよび遺構検出作業。灰褐色包含層中に遺物の混入が認められる。

11月18日(金) 曇時々晴

大溝掘り下げ作業。最下層より箸状木器が出土する。S区写真撮影および平面図実測、レベル記入作業終了。

11月24日(木) 曇時々晴

S区遺構断面図実測作業終了。

11月28日(月) 曇一時晴～29日(火) 曇一時雨

バックホー（0.4㎥）によるG区表土除去作業。

12月6日(火) 曇時々晴

G区大溝掘り下げ作業。調査区の長軸に沿うように検出されたため、時間的に完掘は難しいと判断し全体をすり鉢状に下げていく。

12月7日(水) 晴

G区大溝の南と東側にトレンチを設定する。トレンチ下層より平安時代後期と思われる柱状高台の一部を確認する。

12月8日(木) 晴

G区清掃の後写真撮影。

12月9日(金) 曇時々雨～12日(月) 晴

G区平面図実測およびレベル記入作業。調査区全域の平板実測作業。

12月13日(火) 晴

図面、機材等を整理し、一旦現地調査を終了する。

平成元年

3月6日(月) 曇

T区の調査開始に際し、建築住宅課等との打ち合わせを行う。

3月10日(金) 曇時々晴

バックホー（0.3㎥）によるT区表土除去作業。二箇所で弥生時代後期の遺物散布を確認する。

3月16日(木) 曇時々晴

T区遺構検出および掘り下げ作業。2号溝内からガラス小玉、管玉剝片が出土する。

3月20日(月) 曇時々晴

T区清掃、写真撮影の後平面図実測作業。

3月22日(水) 曇一時雨～23日(木) 曇時々晴

遺構断面図実測およびレベル記入作業。

3月24日(金) 曇

バックホーによる調査区埋め戻し作業を以て、寺中B遺跡（第1次）の現地調査を終了する。

（第２次・日誌抄）

平成元年

4月24日(月) 晴

依頼者側と現地の確認および調査手順について打ち合わせを行う。

4月25日(火) 晴

住宅用地内で建築工事と調査作業が同居した状況となるため、関係者間（建築住宅課・建設業者５社・埋文）の調整会（於業者現場事務所）に出席する。当日現場用プレハブ建設。

4月27日(木) 晴～5月２日(火) 晴(この内４日間)

Ｆ区・Ｅ区・Ｄ区の約1/2についてバックホー（0.3㎥）による表土除去作業を行う。

5月９日(火) 曇～10日(水) 晴時々曇

Ｆ区の発掘～精査作業（旧建物のコンクリート基礎でかなりの部分が壊れている他、遺構らしきもの発見なし)。

5月11日(木) 曇～12日(金) 曇のち小雨

Ｅ・Ｄ区へのベルトコンベアー設置作業および、調査区側縁に排水用溝を設ける。排土はＤ区東側半分（未掘部分）に充てる。

5月15日(月) 晴

Ｅ区西端より発掘開始。第１次調査につながる大溝跡現われる。排水への活用も兼ねて即発掘にとりかかる。

5月16日(火) 晴

Ｅ区大溝の発掘と、Ｆ区土層断面図の作成を行う他、調査区区割杭を設置する。

5月17日(水) 晴のち曇

Ｅ区内遺構検出作業を行う。かなり希薄な状況で、小溝跡２条、土坑１基を発見。

5月18日(木) 晴

Ｅ区遺構の発掘とＤ区の発掘に一部取りかかる。

5月19日(金) 晴

Ｄ区の発掘作業及びＦ区の実測作業を行う。本日第２回目の関係者間連絡調整会に出席。

5月22・23日(月・火) 晴

Ｄ区遺構の検出作業を行う。土坑となるのか不定形で、土器片が内包されている黒色粘性土の輪郭が数ケ所現われる。

5月24・25日(水・木) 晴、29～31日(月～水) 晴

遺構の発掘を行う。平面形態を予測しかねるため土層観察用畦を多分に残しながら掘ることとした。なお、Ｅ区方向から平面図を作成し、31日には当該部分の調査を終了させる。

6月１日(木) 晴

Ｄ区残りの東側部分についてバックホーによる表土除去・排土移動を行う。

6月２・５日(金・月) 晴

Ｄ区東側部の発掘作業および遺構の検出作業を行う。

6月６～９日(火～金) 晴時々曇

遺構の発掘作業～掘り上り次第に写真撮影及び実測作業を行う。大半が浅い不定形な土坑状のものとなるが、比較的深さを保って遺存するものでは上面からプランが確認できている。

6月12・13日(月・火) 晴

Ｃ区の盛土層の除去作業（旧耕作土面までの約1.5m厚）の立合い（建設住宅課＝建築業者対応)。

6月14日(水) 晴

表土のバックホーによる掘削を行う。排土置場の確保が難しく、Ｃ区北端部をこれに充てる。

6月15・16日(木・金) 晴・曇、19・20日(月・火) 曇・晴

排水用溝の掘削作業～調査区画壁体の整理および発掘作業を行う。

6月21～23日(水～金) 晴時々曇

Ｃ区の長軸方向に沿って検出した近世以降と想われる溝（農業用水路か）跡の発掘を行う。

6月26・27日(月・火) 晴時々曇

調査区北側の遺構検出作業と併行して、南側検出遺構の発掘を行う。南端部では土器溜まり状で遺物の点在があり、これに近接して弥生末期頃の土壙墓かと考えられる長方形の土坑２基が切り合いをとって遺存する。遺構平面図・土層断面図の作成にも取りかかる。

6月29・30日(木・金) 曇時々晴

北側部で竪穴状の大型遺構の発掘を行う。既発掘部の実測図作成作業。

7月３～５日(月～水) 曇

遺構内遺物の取り上げ整理。実測作業。

7月７日(金) 晴

Ｃ区北端（排土置場としていた部分）のバックホーによる表土除去を行う。

7月10～13日(月～木) 曇時々晴

遺構の検出～発掘作業。

7月14・15日(金・土) 晴時々曇

実測作業。撤収準備作業を行う。

7月17日(月) 晴

発掘機材の撤収。本日を以て現地調査を終了する。

A区　表土除去風景

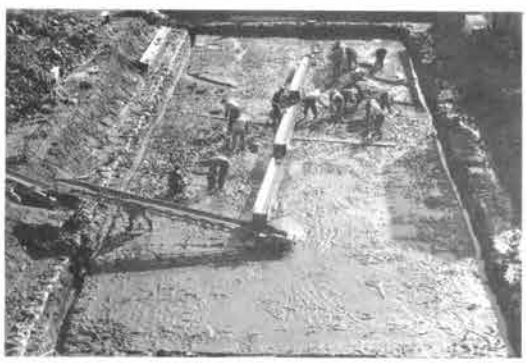
S区　作業風景

A区　作業風景

T区　作業風景

B区　作業風景

D区　作業風景



G区　作業風景

E区　作業風景

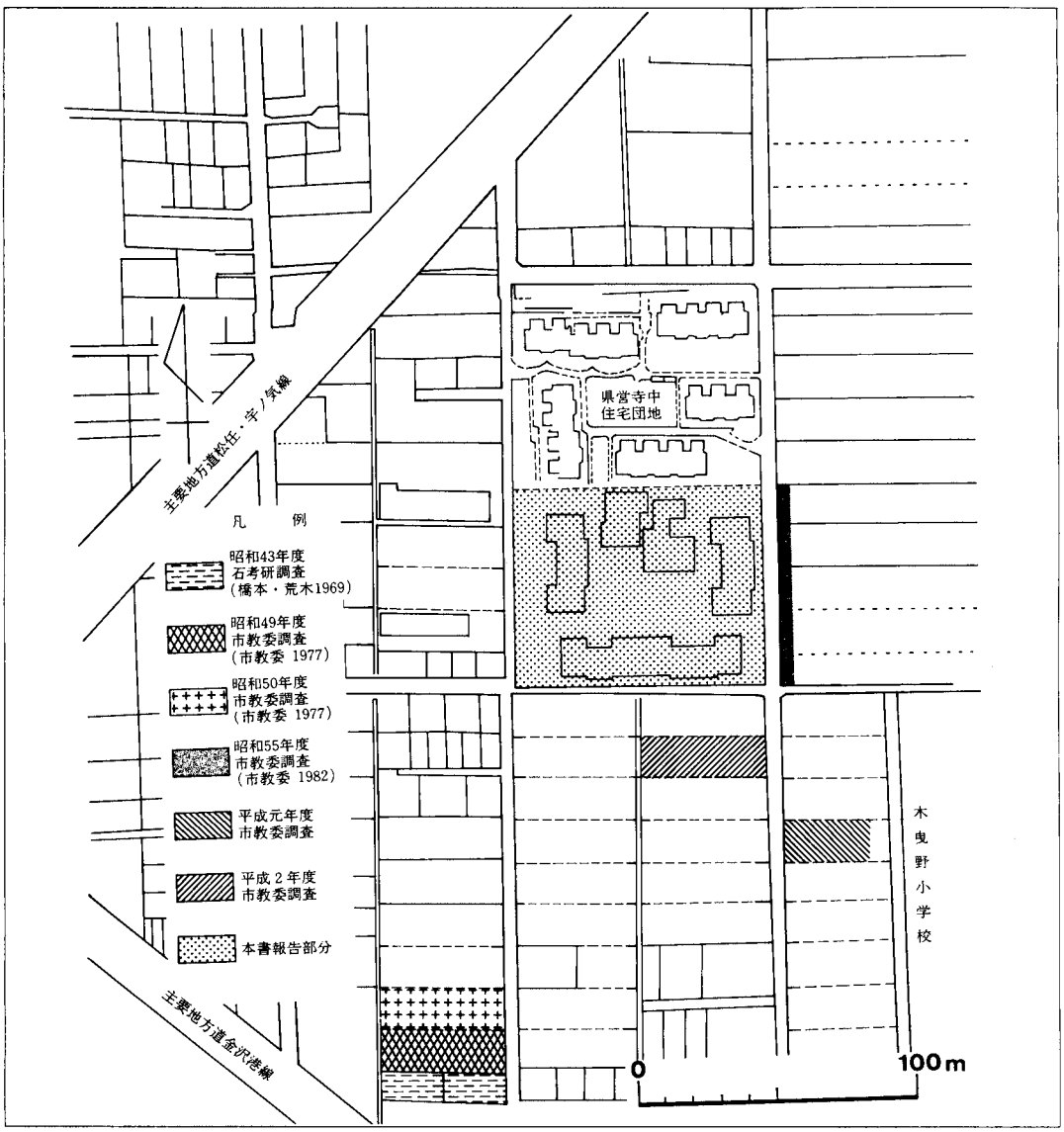
**発掘調査参加者**（五十音順）

**第１次調査**

伊藤伸幸、市村耕治、岩岸峰子、大町政弘、川端美智子、上村外志雄、倉部三郎、来間清市、小島清高、坂井かず子、坂井澄江、坂田進午、炭　博子、竹内千鶴子、竹山くに子、高倉英明、高崎春子、高村松子、高柳美代子、谷口宗治、中栄みゆき、長田一雄、並川祐治、西　年男、西川愛子、西村みどり、蓮田貞子、藤森重信、三谷正子、宮田ハル、村上勝次、村上義雄、山田幸夫、山本外男、渡辺栄吉

**第２次調査**

坂井かず子、坂井澄江、坂田進午、高崎春子、高村松子、高柳美代子、竹山くに子、西川愛子、西村みどり、宮田ハル、村上勝次、最里健太郎




第５図　調査区位置図（Ｓ＝1/2,000）

第6図　寺中B遺跡全体図（S＝1/400）

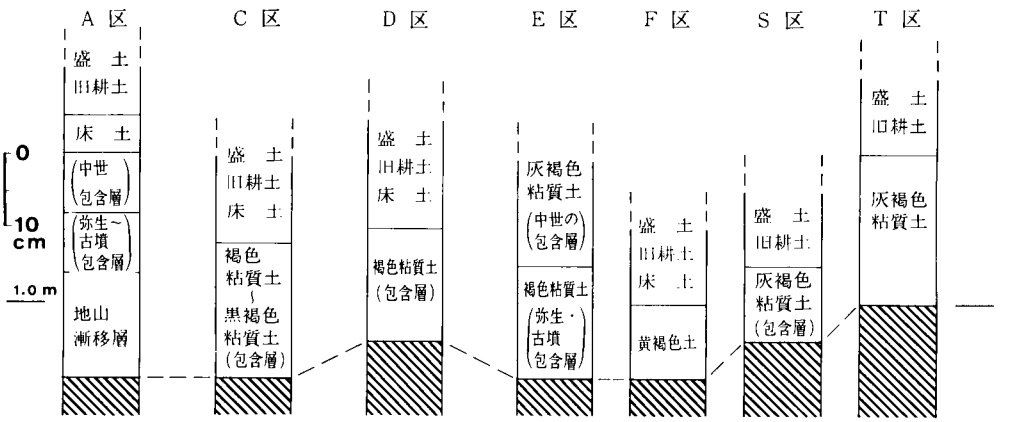
# 第3章　遺構と遺物

今回の発掘調査では調査区がA～T区に細かくわかれている。これは第2章で述べたように、団地棟の番号を調査区にあわせたもので、他に特に意味をもつものではない。報告書刊行にあたっても特に変更の必要性を感じなかったので、ここでそのまま用いることにしたい。但し、B区・S区は団地棟ではなく水路の部分であり、T区は道路部分である。また、C区の南端の出っぱった部分は浄化槽が設置される部分である。H～R区は調査区では欠番となるので注意したい。第7図は各調査区の基本層序を対応させるために作成した柱状図である。地勢・土層や遺構面の標高を見る際などに参照してほしい。

調査した順序は第2章第2節の日誌抄のとおりだが、ここでもう一度まとめておきたい。第1次調査ではA区→B区→S区→G区→T区の順であり、第2次調査ではE区→F区→D区→C区の順であった。このうち、C区とD区に関しては調査区を2分割して一方を発掘調査しもう一方を排土溜めとして使用した。一方の発掘調査が終われば今度はそこを排土溜めとして使用しもう一方を調査する方式である。調査後の全景写真が存在しないのはこうした理由による。

調査区の全体図は第6図の通りであるが、前述したように調査区が細かくわかれるため、調査区ごとアルファベット順に遺構と遺物を説明していきたい。検出された遺構はA～T区全てをあわせると、掘立柱建物2棟、柵1基、竪穴状遺構1基、土坑14基、落ちこみ5基、溝36本（同一のものあり）、大溝4本（同一のものあり）、土器溜まり2箇所、間数不明のつながらない柱穴5基、ピット多数である。遺物はパンケースで合計10箱であった。

遺構・遺物を説明する上での時代区分は、関係する部分のみを大まかに分けた。紀元前3世紀～紀元後3世紀を弥生時代、4世紀～6世紀を古墳時代、7～11世紀を古代、12～15世紀を中世、16世紀～18世紀を近代、19世紀以降を近現代とする。さらに細かい時期は参考にした文献の土器編年によるものとする。また、文中で多出する「弥生～古墳時代の土器」の表現は弥生時代か古墳時代かを判別しがたい土器を示すものであり、弥生時代終末の月影式[5]前後の土器を指す「弥生時代末～古墳時代初めの土器」という表現とは異なるものである。




第7図　A区～T区基本層序柱状図（S＝1/10）

# 第1節　A区の遺構と遺物

## 1．概　要

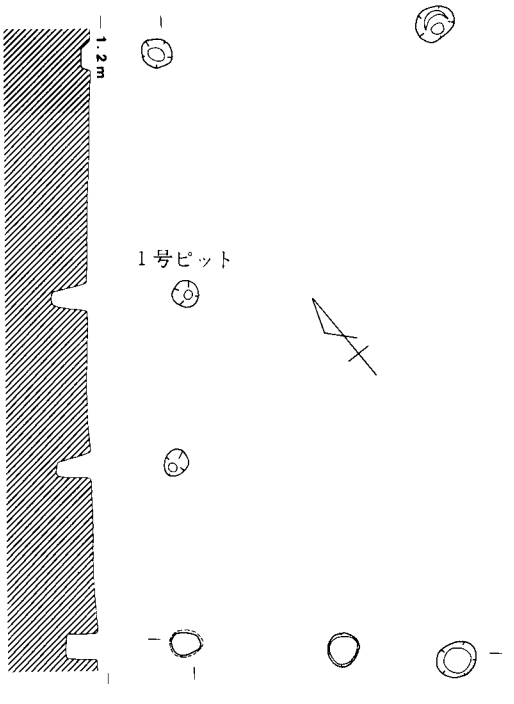
C区とF区に挟まれ、北と東に伸びる平面形L字形の発掘区をA棟建設部分に合わせてクランクさせる。第1次調査の調査区である。

基本層序は、上層から第1層盛土・旧耕土、第2層床土、第3層暗灰褐色粘質土、第4層褐色または暗褐色粘質土、第5層濁黄褐色粘質土、地山となる。他の調査区に比べ比較的判別しやすい土層であり、第3層は中世の包含層、第4層は弥生～古墳時代の包含層、第5層は地山への漸移層である。A区では、掘立柱建物2棟、土坑1基、溝3本、ピット多数と、柵と推定する遺構を検出した。他にも溝状のものが数本あるがいずれも深さ5cmほどで、削平を受けたのかもしれないが遺構とは認められない。出土遺物は少なく、パンケース1箱にも満たない。

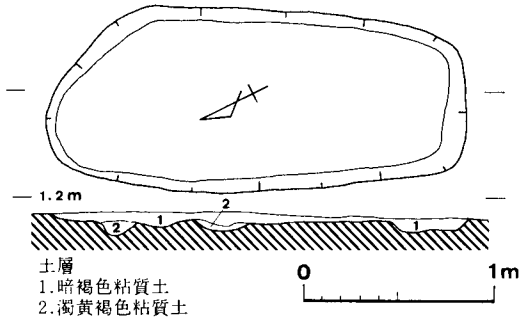
## 2．遺構と遺物

### 1号建物（第12図）

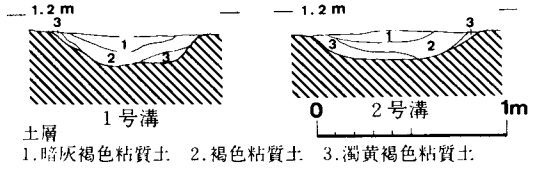
A区南半の東側で検出した。南北方向に伸び、その両端は調査区外へ出る。現状から桁行4間（11.5m）以上×梁行2間（4.6m）で、床面積52.9㎡以上の総柱建物と推定する。桁方向はN－15°－Wを指す。柱穴はやや並びがばらつく複雑な間取りをもつものと推定され、その掘り方はほとんどのものが径0.3～0.35mの平面形円形もしくは隅丸方形で、検出面からの深さ0.2～0.3mを測る。覆土は全てのものが灰褐色粘質土である。遺物を出土したピットのうち、3号～6号・10号ピットが1号建物の柱穴となるが、出土した遺物はいずれも摩滅した土器の小破片である。本遺構の時期は、総柱建物であることと覆土から判断して中世以降としておく。また、2号ピットは建物内に位置する




第8図　A区2号建物（S＝1/60）




第9図　A区土坑（S＝1/40）

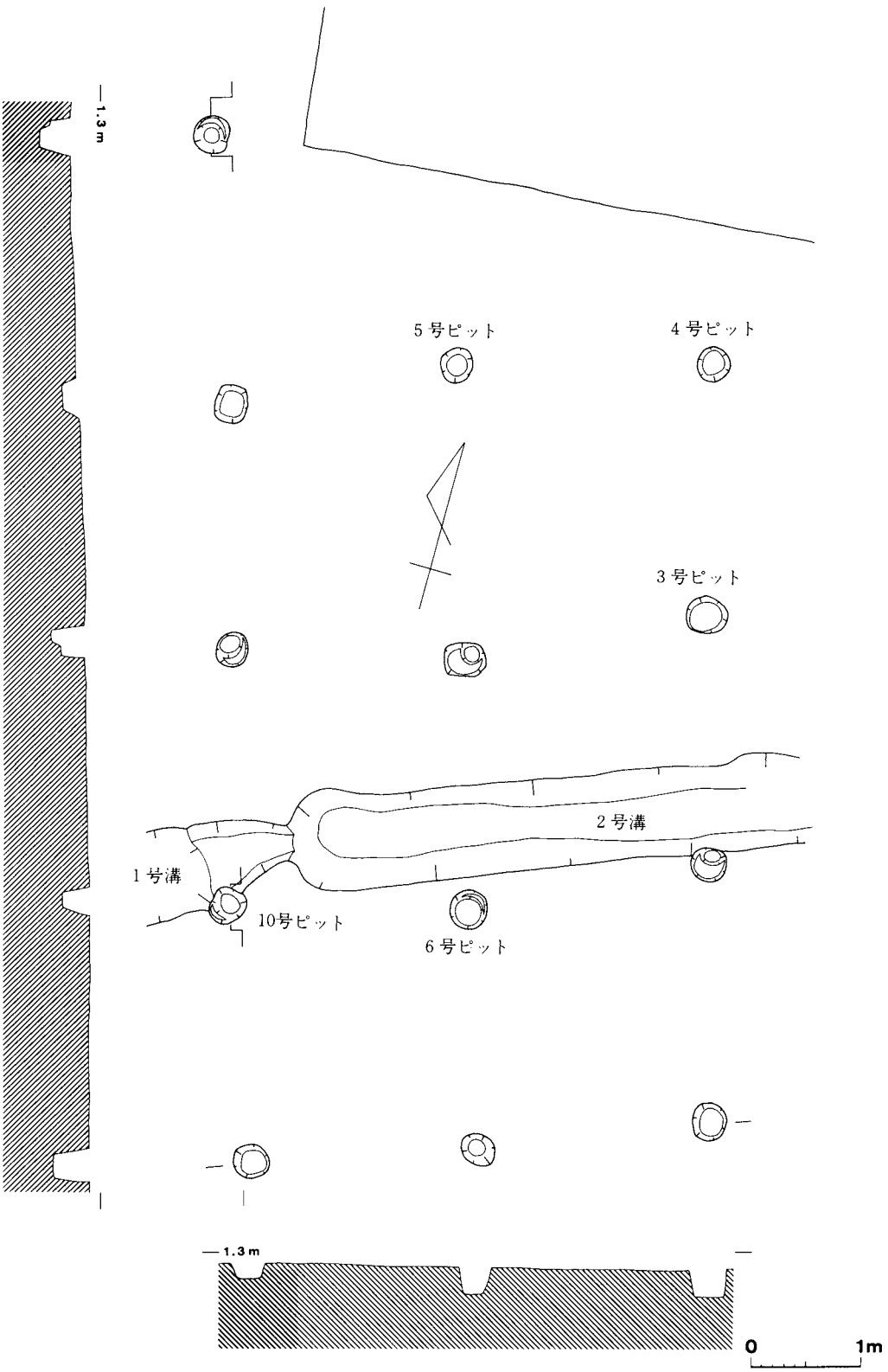



第10図　A区1号溝・2号溝層位（S＝1/40）

土層

1．盛土・田耕土　2．床土　3．暗灰褐色粘質土(中世の包含層)　4．褐色～暗褐色粘質土(弥生～古墳時代の包含層)
4'．部分的な4　5．濁黄褐色粘質土(地山漸移層)　5'．部分的な5　6．濁灰褐色粘質土　6'．6と同質
7．暗灰色粘質土　8．3と同質かやや暗い色調

第11図　A区全体図（S＝1/100）




第12図　A区1号建物（S＝1/60）

が、覆土・出土遺物から考えると別時期のもので、建物とは関係しないであろう。これについての詳細はピットの項で述べる。2号溝もその一部が1号建物内にあるが、同様の理由から別時期のものとする。

**2号建物**（第8図）

A区南半の北西隅で検出した。南北方向に走り、桁方向はN－36°－Eを指す。柱列の並びが悪く規模は不明確であるが、桁行3間（5m）×梁行1～2間（2.5m）、床面積12.5㎡程度と推定した。柱穴の掘り方は全てが平面形円形に近く径0.2～0.3m、検出面からの深さ0.1～0.3mを測るが、規格をもつ大きさとは考えにくい。覆土は1号建物とは異なりより古い時期が考えられるが、規模も掘り方もはっきりしないため、明言はできない。1号ピットは東側の桁行柱列上にあり、2号建物の柱穴の一つであろう。

**柵**

A区北半部で検出したピット列である。2号建物の北コーナーから北東方向に走り、列方向はN－32°－Wを指す。ピットは径0.2～0.3m、深さ0.05～0.3m程度のもので、大きさに特に規格はないが、掘立柱建物部分を除いてのピットは北半部ではここに直線的な集中を見せる。2号建物に接し、その桁行方向と軸方向がほぼ一致することから何らかの関連を考えることもできるが、現状ではその性格は明らかにできないだろう。覆土は基本層序の第4層（弥生～古墳時代の包含層）と同質であり、本遺構の時期もその頃であろう。

**土坑**（第9図）

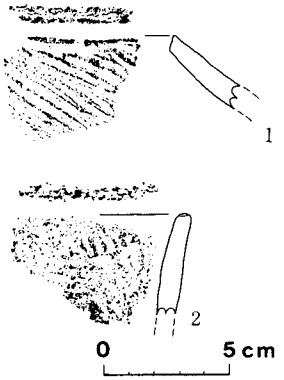
A区南半のほぼ中央、1号建物の西に接して検出した。平面形は長辺2.2m×短辺約1mの隅丸の不整長方形を呈する。検出面からの深さは、0.05～0.1mと浅い。長軸はN－25°－Eを指す。覆土は1層、暗褐色粘質土で、その下層は部分的に濁黄褐色粘質土が堆積している。覆土がA区基本層序第4層（弥生～古墳時代の包含層）とほぼ同質であることから、一応その時期のものとしておく。小破片であるが、弥生時代初めの土器、弥生～古墳時代の土器が出土している。

**1号溝**（第10図）

A区南壁近くのほぼ中央、南西から北東方向へ走る。南端は調査区外へ伸び、北端は浅い溝を介して2号溝につながる。検出面で幅0.5～0.8m、深さ0.13～0.19mを測る。覆土は基本的に2層、上層から暗灰褐色粘質土、褐色粘質土で、部分的に濁黄褐色粘質土が堆積する。弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。

**2号溝**（第10図）

A区南半の東部、1号溝よりやや東西方向に振って走る。南端は完結し、北端は浅い溝を介して1号溝につながる。検出面で幅0.6～0.9m、深さ約0.14mを測る。覆土は1号溝と同じく基本的に2層、上層から暗灰褐色粘質土、褐色粘質土で、部分的に濁黄褐色粘質土が堆積する。1号溝・2号溝とも層位はほぼ同じで、下層の褐色粘質土で溝が埋まった後、しばらくの時間をおいて上層の暗灰褐色粘質土が堆積したものであろう。下層の覆土がA区基本層序第4層（弥生～古墳時代の包含層）とほぼ同質であることから、1号溝・2号溝の機能し始めた時期はそれ以前と推定する。弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。



第13図　A区出土遺物（S＝1/3）

3号溝

2号溝の東部北側に接して存在する。北方向へ伸びるがやや東へ曲がり、北端は完結する。2号溝との切り合いはわからない。検出面で最大幅約0.7m、深さ0.03mを測る。弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。

ピット

多数あるが、遺物を出土したものについて番号を付けた。1～10号まである。2号ピットからは第13図1・2の弥生時代初めの土器の他、摩滅した弥生～古墳時代の土器が出土している。4号ピット・6号ピット・7号ピット・9号ピットからはそれぞれ弥生～古墳時代の土器の小破片が出土している。1号ピット・5号ピット・8号ピット・10号ピットからも土器小破片が出土しているが摩滅がひどくて時期はわからない。ただし、建物の項で述べたとおり、3～6号・10号ピットは1号建物の柱穴であり、覆土は灰褐色粘質土である。1号ピットは2号建物の柱穴となっている。出土遺物はそれぞれきわめて摩滅しており、埋まる際の土に入っていたものと考え、遺物でピットの機能時期を特定することは避けたほうがよかろう。

2号ピット出土遺物（第13図）

1・2とも甕形土器口縁部である。どららも小破片であり、口径などは推定できない。1は口縁部が強く内傾する器型で、胴部は口縁部よりも張り出すものであろう。口縁端部は垂直に切り落としたかのようなしっかりした面をとる。外面は斜方向の条痕調整を行い、内面はなでている。2はやや外傾する器型であり、外面は口縁端部付近まで条痕調整をのこしている。内面はなでている。1・2とも弥生時代前期から中期にかけての所産のものである。その胎土は石英・長石・海綿骨針を含むが、該期の標式土器である柴山出村式土器[6]とくらべれば石英等や砂礫の含みが少ない精良な胎土といえ、むしろ縄紋晩期終末の下野式[7]などの胎土に類似する。わずか2片の小破片であるが、1・2は柴山出村式の古い段階かさらにそれ以前に遡る時期に位置付けられる可能性がある土器といえよう。

## 3．小　結

建物2棟などを検出した割には遺物はきわめて少なく、弥生～古墳時代の土器以外は皆無といえる。土坑・2号ピットから弥生時代初めの土器が出土しているが、混入したものの可能性が高く、弥生時代の遺構の存在は確実ではない。土坑・1～3号溝は、その出土遺物から弥生時代末～古墳時代初めに帰属するものと考えている。1号建物からは中世の遺物が出土しなかったが、中世の総柱建物は時期的にも遺構的にも遺物が少なくなる種類のものと考え、大まかな年代を与えることにしたい。2号建物と柵については、確実に遺構とはいい難いので、明言は避けたい。今回の発掘調査では、全体的に南側へ遺構が集中しており、A区はもっとも北側に位置する調査区である。遺構・遺物の少なさはこの傾向に沿ったものであろう。

## 第2節　B区の遺構と遺物

### 1．概　要

最も西に位置し、南北に走る水路部分に合わせた東西約3m×南北約38mのトレンチ状の調査区で、第1次調査の調査区である。基本層序はA区と同じで、上層から第1層盛土・旧耕土、第2層床土、第3層暗灰褐色粘質土、第4層褐色または暗褐色粘質土、第5層濁黄褐色粘質土、地山となる。ただし、A区と異なり、第3層・第4層は遺物をほとんど含まないので包含層とはいえない。遺構は少なく、溝2本と少数のピットを数えるのみである。B区中央部には旧森林組合建物の基礎があり、径15cm程度の杭が等間隔にならんでいる。又、2号溝のわきには便槽があって攪乱されていた。出土遺物は1号溝以外では皆無に近い。B区では壁面・遺構の層位断面は実測しなかった。

### 2．遺構と遺物

#### 1号溝

B区の北端、北西から南東方向に走り、両端は調査区外へ伸びる。検出面で幅0.25～0.35m、深さ約0.07mを測る。覆土は1層、黒褐色粘質土である。弥生～古墳時代の土器の他、図化しなかったが、穿孔された軽石が出土している。

#### 2号溝

B区の北部、ほぼ東西方向に走り、両端は調査区外へ伸びる。幅は東側が広くなり約0.7m、西側で約0.35mである。検出面からの深さは0.14～0.18mを測る。覆土は1層、黒褐色粘質土である。

### 3．小　結

1号溝・2号溝とも覆土が基本層序の第4層（A区では弥生～古墳時代の包含層）に近い質であることからその時期を考えているが、出土遺物が少ない上に摩滅しており、明確にはできない。また、1号溝と2号溝の中間ぐらいの位置に溝が東西方向に走っている。幅約0.15m、深さ0.07～0.08mの狭く浅いもので、覆土は灰褐色粘質土1層である。覆土は攪乱土とも似ており、遺構とも何ともいえないので数えなかったものである。1号溝・2号溝がそれぞれG区3号溝・2号溝へつながって行く可能性があるというほかには特記することはない。どちらも弥生時代末～古墳時代初めに帰属するものであろう。

## 第3節　C区の遺構と遺物

### 1．概　要

もっとも東の調査区で、南北に長く、C棟建設部分に合わせて西側が複雑にクランクする。南部は浄化槽設置予定部分も含まれている。第2次調査の調査区である。

基本層序は、旧耕土が削平され、上層から第1層暗灰褐色土（旧耕土の床土も含む）、第2層褐色または黒褐色強粘質土、地山となる。遺構は、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝11本、大溝1本、土器溜まり2箇所、柱穴1基、ピット多数である。パンケース5箱分の遺物が出土し、A～T区中でもっとも多かった。

### 2．遺構と遺物

**竪穴状遺構**（第15図）

C区のほぼ中央部で検出した。平面形は隅丸の長方形で、南東から西へゆるやかに孤を描くように伸びる。そして大溝に切られ、大溝を西へ越えるとほとんど確認できなくなる。規模は検出面で長辺7.5m以上×短辺約3.9m、深さ0.2～0.3mを測る。覆土は4層で、上層から暗黒褐色強粘質土、淡黒褐色弱粘質土、地山ブロック含む黒褐色土、地山・黒褐色土混成層（細粒）、地山・黒褐色土混成層（粗粒）となるが、断面図A－A′でみるように南西に進むにつれて地山・黒褐色土混成層（粗粒）がぬけて3層、暗黒褐色強粘質土と地山・黒褐色土混成層（細粒）がぬけて1層となっている。ただし、上層については削平された可能性が強く、大溝の影響も無視できないので一概に断面図どおりにはいえないだろう。底面は平坦ではなく、土坑や溝との切り合いも考えられるが、層位では確認できない。遺物はきわめて大量の弥生時代末～古墳時代初めの土器が出土した。本遺構は竪穴住居というよりは、その形状から幅広の溝として捉えたい。第14図で見ると、11号溝・4号土坑と発掘区外で環状につながる周溝と考えることもできる。この問題については第4章で後述し検討することとしたい。

**竪穴状遺構出土遺物**（第16図～第18図）

全て弥生時代末～古墳時代初めの土器である。この遺構のみ器種別に説明する。

**甕形土器**（1～10、20）

1～5は「く」字口縁を呈する。調整にハケを多用する点以外では個体差は明確である。法量的には、1を除けばほとんど口径16～18cmの大きさにおさまる。1は口径12.2cmと小型、最大径15cmは胴部中位にくるものか。頸部の屈曲は弱く、短い口縁部は外反し端は先細りとなる。内面は接合痕を胴部上位にのこし、明確な段差となっている。調整は接合痕の上下で明確に別れる。口縁部から頸部がヨコナデ、内面の段差部分のみヨコハケ、胴部は外面ハケ・内面ナデを行う。口縁部から頸部が、別につくられた胴部と接合する分割成形を如実にあらわす例といえよう。2は頸部で強く屈曲し口縁がゆるく外反するもの。3は口縁部がやや短く、端部に斜めの面をとる。調整はハケを多用するもので、外面ナナメハケ・内面ヨコハケである。4は短い口縁部が外反し、端部は少し肥厚しナデにより面をとるもの。5は胴部が張り出して19.5cmの最大径となる

もので、口縁部はやや厚手で角を丸めた感じのものがつく。胴部内面はヘラケズリ調整を行う。6～10、20は有段口縁を呈するもの。口縁部にヨコナデ調整を行うこと、内面の段が弱く口縁帯が外反すること以外は共通する特徴に乏しい。6は口縁帯下半に強いヨコナデを行い、外反を強調する感じになる。7は口径13.7cmと小型、胴部内面はヘラケズリ調整である。全体にかっちりとしたつくりは壺形土器の可能性をのこす。8は口径13.7cm、摩滅しており、調整等は不明である。9は口縁端部すなわち口縁帯上端がやや先細りの感じで、口縁帯下端もやや突出するもの。10は口径20cmを超える大型のものと推定する。口縁帯は外反せずほぼ直立する。擬凹線紋は13条を施す。20は口径28.5cmを測る大型の甕で、頸部の屈曲が弱くずん胴な感じの器型である。内面は頸部の屈曲が強く、口縁帯は無段で「く」字口縁と変わらない。

**壺形土器**（21～27、30～33）

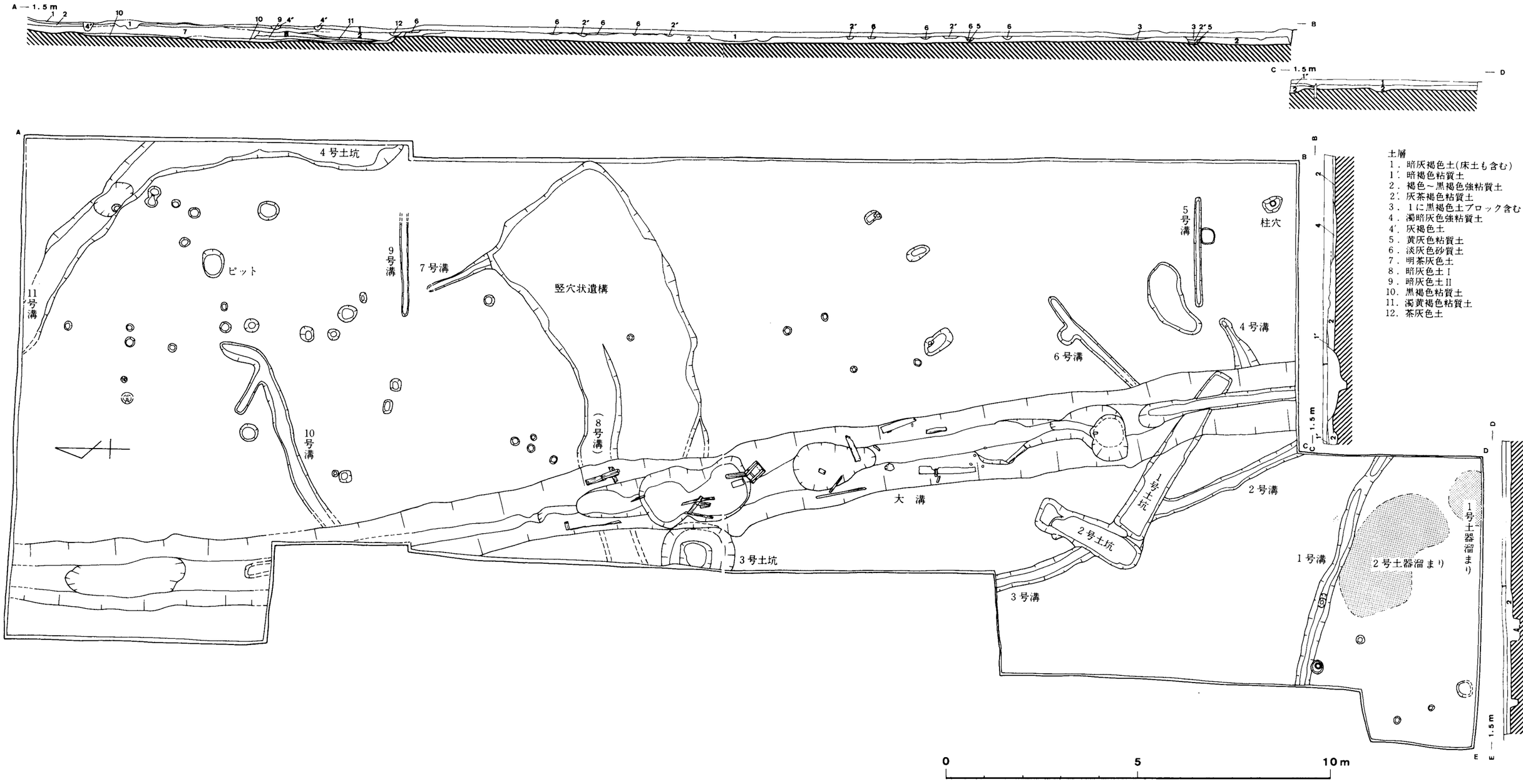
21はゆるく外反して開く口縁部である。端部を肥厚し、強くヨコナデして中凹みの面をとる。22は下半部で、最大径19cmの球形の胴部に径2cmの矮小な平底の底部がつき、何とか自立できる。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリを行う。23は22同様の器型で、口縁部のみを欠く。22より一回り大きく、最大径25cm、底部径6cmを測り、より安定感をもって自立する。24も球形の胴部をもつものと推定する。調整は外面ハケのちナデ、内面はより細かいハケである。25は有段口縁を呈し、口縁帯は直線的に外傾する。口縁帯下端は強いヨコナデによりややふくらむ。調整は内外面ともヨコナデのちヘラミガキである。赤色の胎土を用いている。26は外反する口縁の端部に粘土を貼り付けて下方に肥厚し面をとるもの。27は屈曲が弱くて短い「く」字口縁を呈するもの。端部はなでて面をとる。30は有段口縁を呈し、口径17.7cmを測る。全体にきわめて厚手なつくりであり、胴部はおそらく球形で最大径は30cmを超えるであろう大型壺である。外反する口縁帯は上端は丸め、下端は突出する。口縁帯・頸部・胴部の分割成形が明確にわかる例である。口縁帯は接合部に突起列をつくり、頸部の接合部にはそれに対応する刻み目をいれる。ぴったり合わせるための工夫であろう。調整は口縁部から頸部までヨコナデ、胴部は外面ハケメ・内面ナデを行う。31は頸部で屈曲し、直線的に立ち上がる円筒状の口縁部をもつ壺である。口径8.5cm、口縁端部は細く丸まる。調整は口縁部タテヘラミガキ、頸部は外面ヘラミガキ・内面ハケメを行う。口縁端部のみヨコヘラミガキである。頸部外面には沈線状の細い抉りをいれる。32は31と似た器型でより口縁が開くものであるが、摩滅しており調整等はわからない。33は口径9cm、赤彩された小型壺である。頸部から丸みをもって立ち上がり、外反する口縁である。

**鉢形土器**（11、28）

11は器高が低く胴径も口径を下回ることから鉢形土器とする。屈曲の弱い「く」字口縁で、口径15.5cmを測り、端部は斜めに面をとる。頸部の継ぎ目は明確である。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面は上半ナナメハケ・下半ヘラケズリ、胴部内面はナデを行っている。28は平高台状の厚い底をもち、そこから伸びる胴部は段をもって屈曲し鉛直方向に立ち上がっていく。そこから上があまり伸びないようなので鉢としたものである。

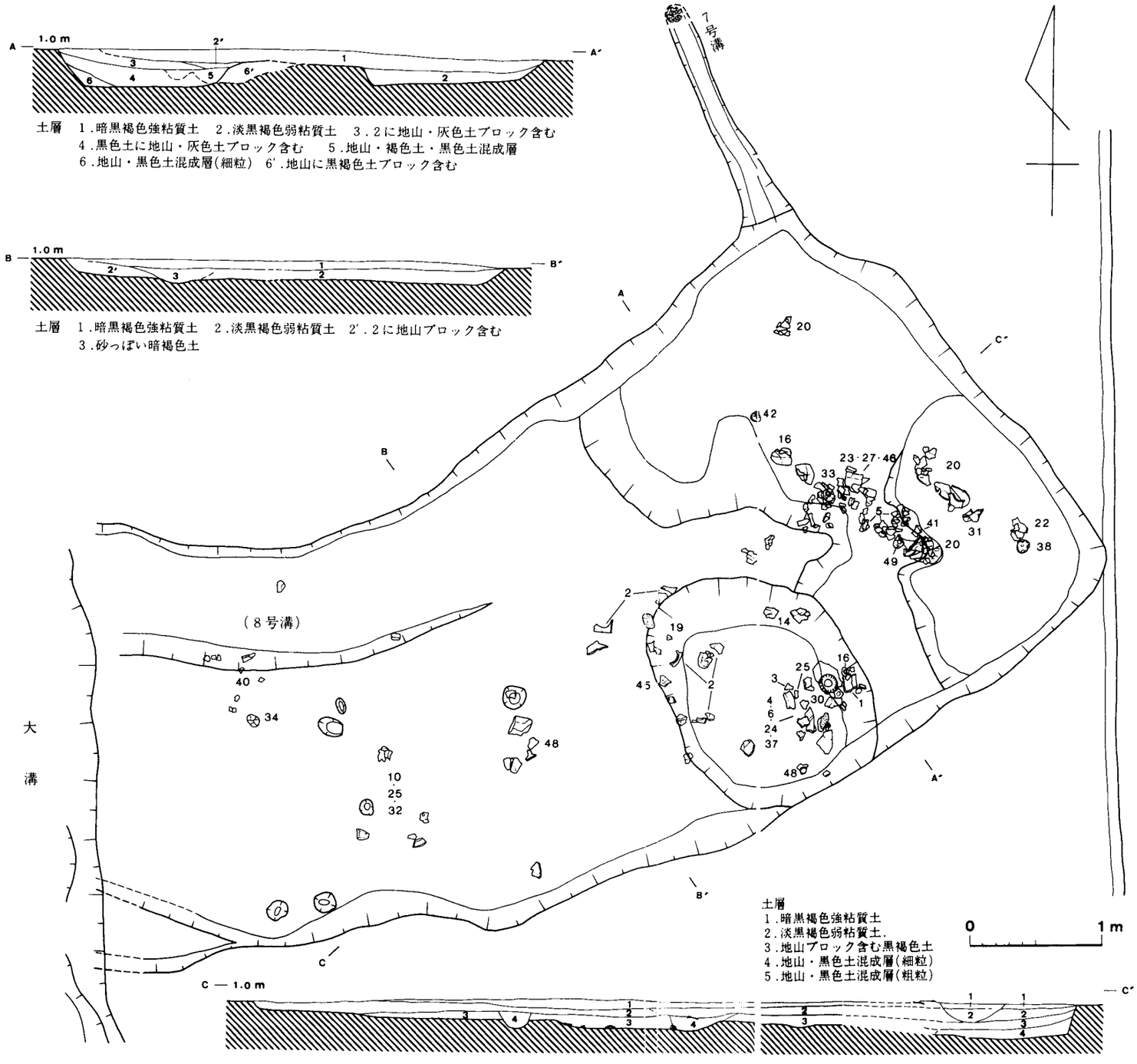
**蓋形土器**（34・35）

34は裾径8cmと小型だが、そのわりに摘みは径2.8cmと大きい。裾はややそり返って開く。35




土層
1．暗灰褐色土(床土も含む)
1′．暗褐色粘質土
2．褐色～黒褐色強粘質土
2′．灰茶褐色粘質土
3．1に黒褐色土ブロック含む
4．濁暗灰色強粘質土
4′．灰褐色土
5．黄灰色粘質土
6．淡灰色砂質土
7．明茶灰色土
8．暗灰色土Ⅰ
9．暗灰色土Ⅱ
10．黒褐色粘質土
11．濁黄褐色粘質土
12．茶灰色土

第14図　C 区 全 体 図 (S＝1/100)




第15図　C区竪穴状遺構（S＝1′40）

は直線的に大きく開く笠型で、裾径11.2cm、摘み径2.5cm、器高4.2cmを測る。

**台付土器**（16、29）

16は台付土器の台部である。台部内面にはくもの巣状のハケをのこす。29は断面・割れ方から、成形時に最後に栓を充塡し底を塞いだ過程が明確である。

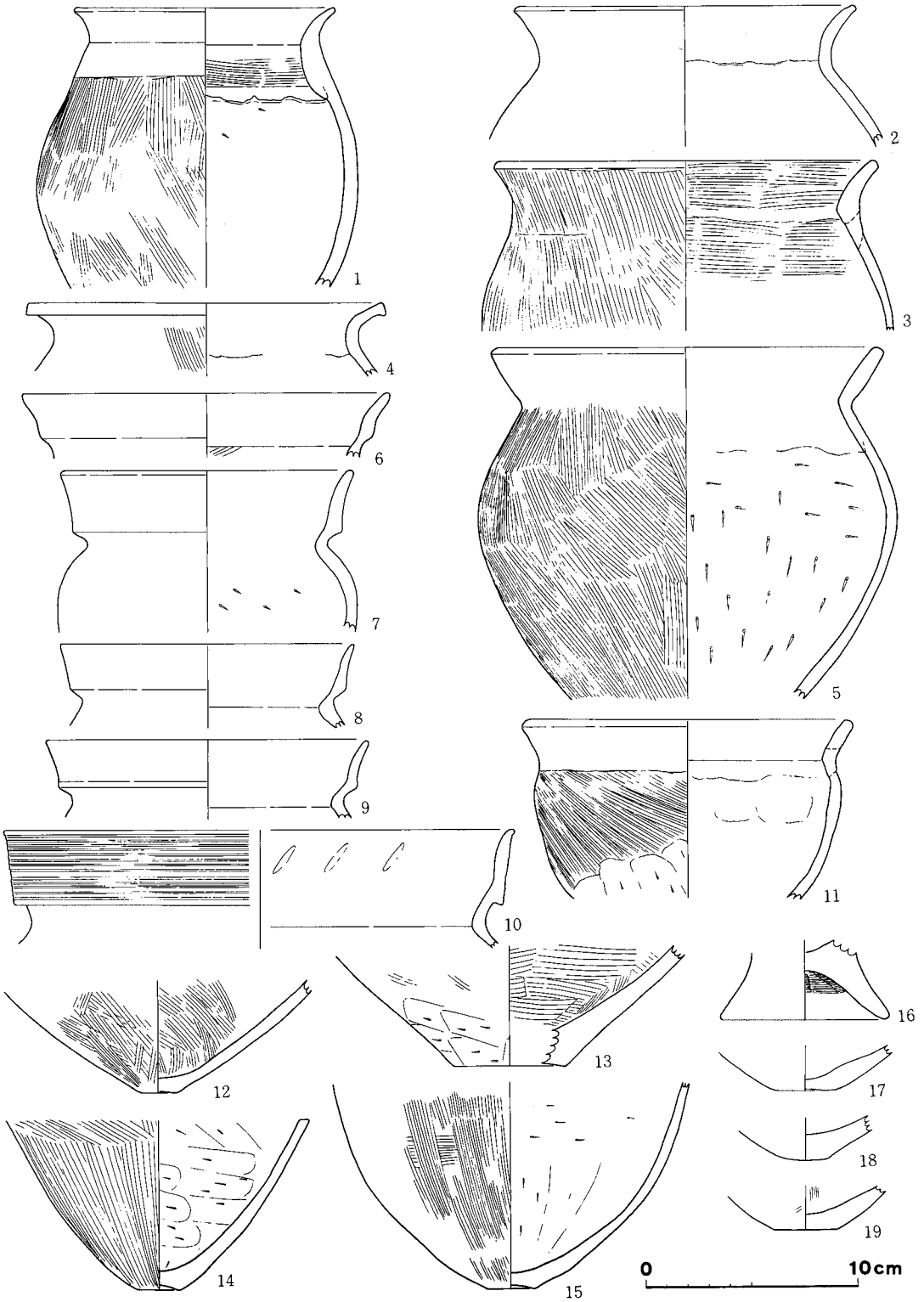
**底部**（12～15、17～19）

いずれも平底である。12は内外面ともハケ調整を行う。底部はきわめて矮小なうえ、胴部へは大きく広がっていくのでおそらく自立は不可能であろう。13は厚手なつくりで、外面の調整は底部付近のみヘラケズリで、他はナデである。内面は粗いヨコハケを行う。14・15ともあまり胴の張らない細身の器型に、径2cmほどの中凹みの平底がつくものである。14の胴部の先端はきれいに面とられて擬口縁状を呈する。底部からここまでを上半と分割して成形したものが、またここから剝離したのだろう。17～19は大きくふくらむ球形の胴部をもつと推定する。

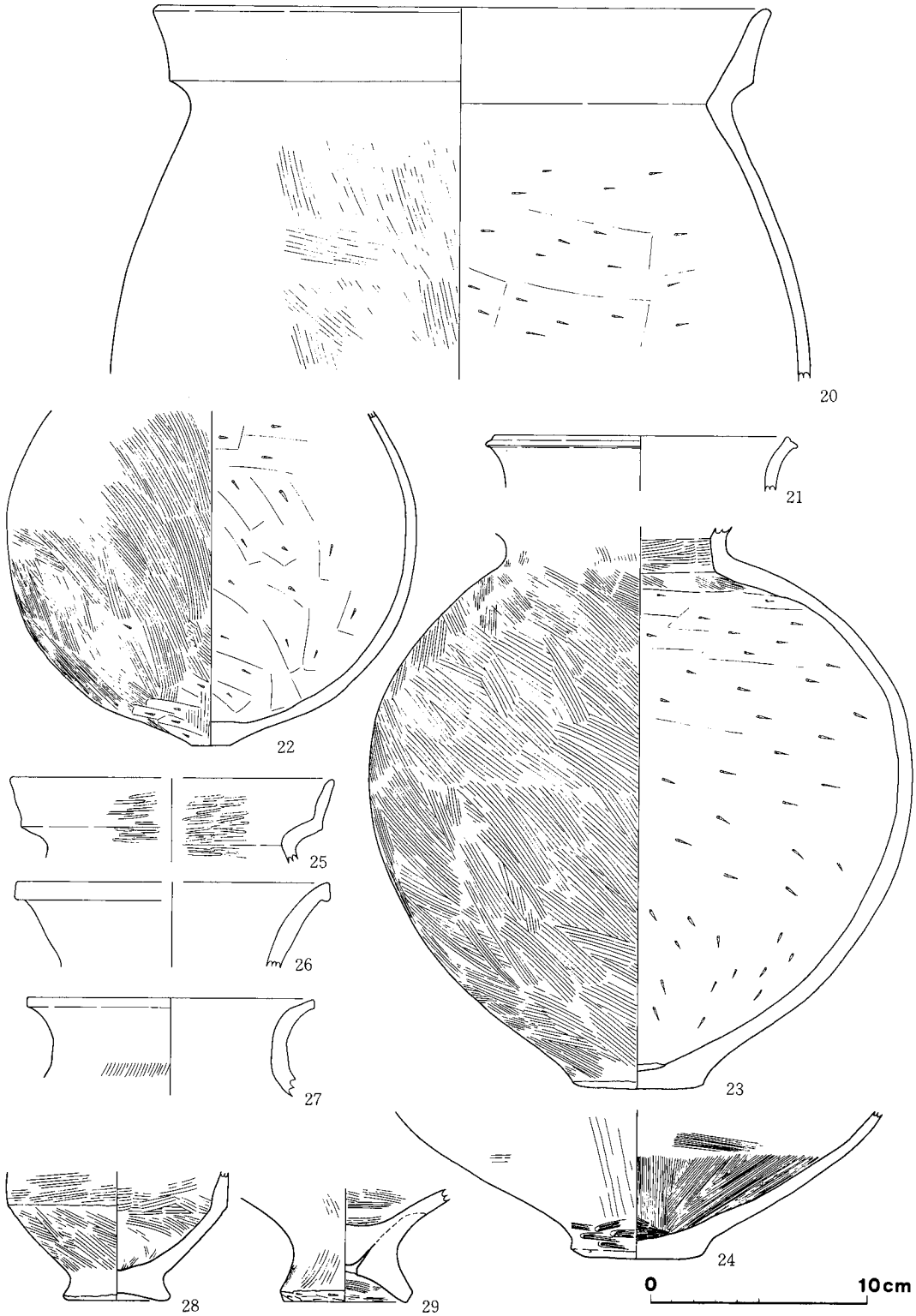
**高坏形土器**（36～49）

36は脚部で、末広がりの器型である。37は小型高坏である。口径10.6cmの椀形の坏部が、そり返って開く脚部に付く。摩滅しており、調整は脚部内面のハケ以外はわからない。38は小型高坏の坏部で口径10.7cmを測る。坏底部がきわめて平坦に作られており、内面の栓充塡部分がかえって盛り上がっている。調整は内外面ともヘラミガキである。39・40は坏部の底、39は38タイプの小型高坏、40は48タイプの高坏であろう。41は坏部・脚部とも大きく広がる器型である。42は脚部が全存し、わずかにそり返って「八」字に開く器型を呈する。裾径10cmを測り、裾端部は内面下がりの斜めに面をとる。調整は外面ヘラミガキ、内面ハケである。三方に孔を有し、径約1cmである。43はそり返らず直線的に開く脚部、裾端部は先細りである。44・45ともにそり返って開く脚部で、三方に孔を有する。46・47はともに坏口縁部先端で、ヘラミガキ調整の後、内面に同じパターンの紋様を施している。46は直線的な器型で、紋様は上からヘラ鋸歯紋・擬凹線紋6条・ヘラ鋸歯紋・擬凹線紋2条・ヘラ鋸歯紋となる。斜めに面をとる端部にも擬凹線紋2条を施している。47は丸みをもった器型で、紋様は上からヘラ鋸歯紋・擬凹線紋4条・ヘラ鋸歯紋・擬凹線紋3条・ヘラ鋸歯紋・擬凹線紋3条・ヘラ鋸歯紋となる。48は口径22cm、脚部下半を欠く。坏部は、小径の底から段を付けて内湾気味に大きく伸びて広がる。段部の接合痕が明確であり、口縁部と坏底部以下を分割成形したことは明らかである。調整は外面はヘラミガキ、内面は坏部ヘラミガキ・脚部ハケである。坏部内面には黒色処理ともいうべき被膜が存在し、その上からヘラミガキしているようである。脚部は四方に孔をもつ。49はほぼ完形で、坏部径22.2cm、脚裾部径12.6cm、器高15cmを測る。坏部はほぼ平坦な底から段をもって内湾気味に大きく伸びる。脚部はややそり返って「八」字に開くが裾で内湾気味に丸まる。脚部は三方に孔を有する。胎土は焼土塊を含んでいる。

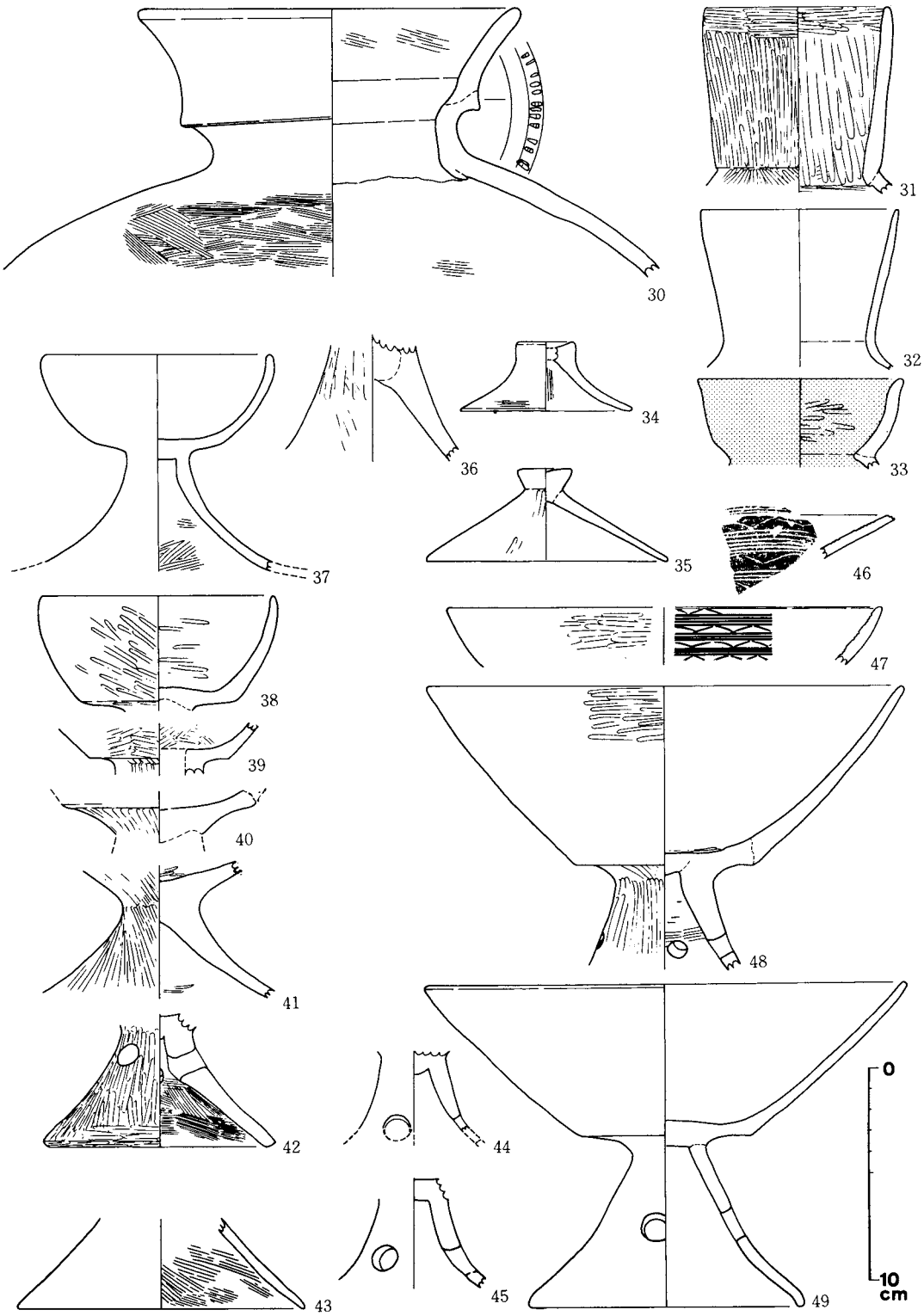
出土土器の胎土は全般的に径1～2mmの石英・長石等の砂礫を多く含むもので、時折それに海綿骨針が含まれる。こうした傾向のなかで、24・25・33・36・39・42・46・47・48など壺・高坏類の胎土は他の土器より砂礫の含みが少なく精良なものと感じられた。甕類以外の土器に精良な胎土が用いられるのは、甕の煮沸と壺・高坏の貯蔵・供献・祭祀という用途から考えればそう奇




第16図　C区出土遺物(1)（S＝1/3）




第17図　C区出土遺物(2)（S＝1/3）




第18図　C区出土遺物(3)（S＝1/3）

異なことではないだろう。

1号土坑（第19図）

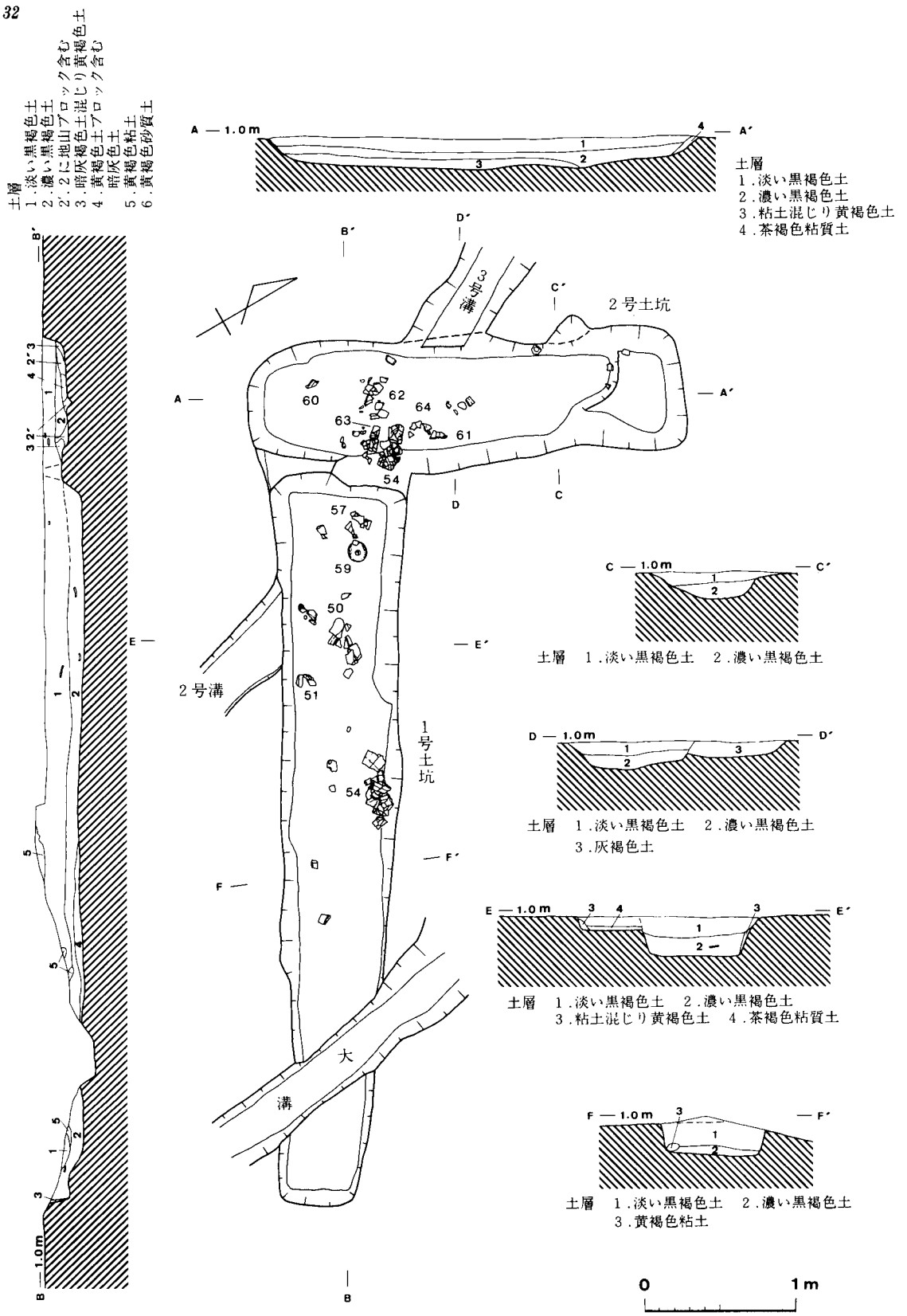
C区南部、C棟建物予定地の南端に検出した。平面形は隅丸の長方形で、検出面で長辺4.86m×短辺0.53～0.91m、深さ0.28mを測る。長軸はN－60°－Wを指す。土坑東部は大溝に切られるが溝肩部に残影をのこす。土坑西部は南側で2号溝と切り合い、層位では不明確だが2号溝を切っている。2号土坑とはつながったものなのか接するものなのか、それとも切り合っているのかはわからない。覆土は基本的に2層で上層から淡い黒褐色土、濃い黒褐色土となる。遺物は多くの弥生時代末～古墳時代初めの土器が坑底からやや浮いた状態で出土しており、2号土坑出土土器とも接合する。規模・形状等から土壙墓として考えており、第4章で考察を加えたい。

1号土坑出土遺物（第20図50～59）

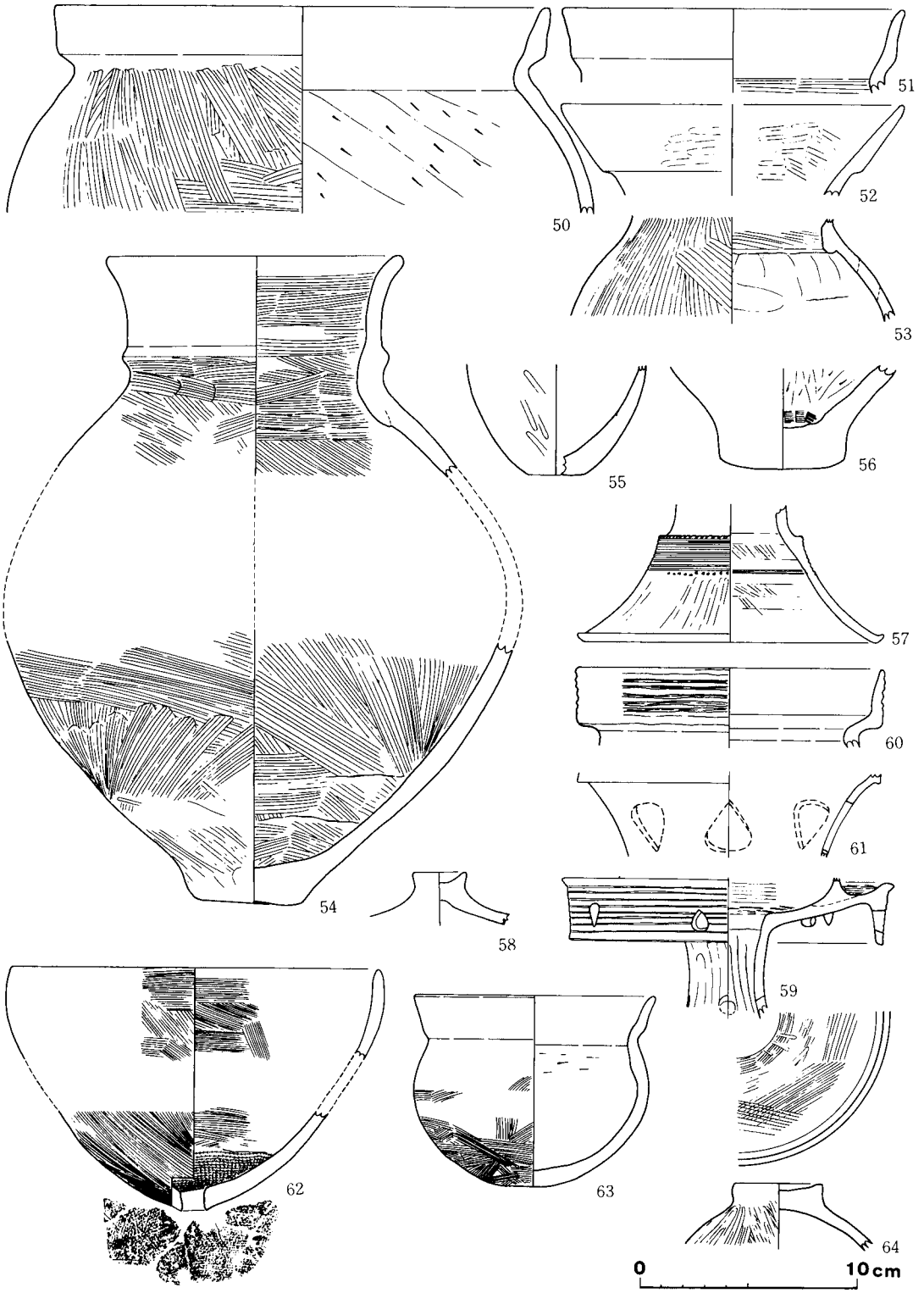
すべて弥生時代末～古墳時代初めの土器。50・51は有段口縁を呈する甕形土器である。50は口径23.2cmと大型、口縁帯は短く直線的なもので、下端を肥厚し有段状としただけのものであろう。口縁部内面では無段で、「く」字口縁と変わらない。51は内面の段が弱く、口縁帯はわずかに外反する。頸部内面はヨコハケ調整をのこす。52～54は壺形土器であろう。52は直線的に開く有段口縁状を呈するが、内面はまったく無段であり、粘土を貼り付け肥厚しただけのものである。頸部が不明確で、器台の可能性もある。53は頸部と胴部を接合した際の段を内面にのこす。調整は外面ハケ、内面は頸部の段のみヨコハケ、以下ナデである。54は口径14cm、器高は推定で30cm以上と、やや大型の壺形土器である。全体に厚手なつくりで、分厚い底部をもつ。口縁部は下端に凸帯を設けて有段口縁状になり、上端は外反する。胴部のあまり張り出さない背が高い器型であろう。調整は口縁部外面ヨコナデ・内面ヨコハケ、頸部以下は内外面ともハケである。継ぎ目は内面の胴部下半で2箇所、頸部から口縁部で1箇所みられ、調整が異なる部分は分割成形を行ったのであろう。口縁部は凸帯部でもう一分割されるかもしれない。2号土坑出土土器と接合する。55・56は底部で、ともに平底である。55は丸みをもった器型。56は厚手なつくりで、底面部分が特に分厚い。57は高坏か器台の脚部であろう。段をもって「八」字にそり返り、裾端部は上方へ肥厚して内面下がりの斜めの面をとる。段部は列点状にヘラで刻み、その下は細い擬凹線紋8条、その下はまた列点状のヘラ刻みを行っている。この擬凹線紋は1本1本引いたものなのか条が揃っていない。58は蓋形土器である。裾へはそり返って開いていくようだ。59は結合器台であり、脚部下半と結合口縁部を欠く。器受部径15.5cm、端部を垂直方向に拡張し口縁帯をつくる。口縁帯の上端は突出し下端は水平な面をとる。調整は脚部・器受部はヘラミガキ、器受部の裏面はハケ、口縁帯はヨコナデ後ヘラミガキである。結合口縁部は外面ヘラミガキ・内面ハケを行うようである。口縁帯は七方に雨滴形の孔を有し、交互に上下逆転させて配している。擬凹線紋は細いものを8条施す。脚部は4方に孔をもつものと推定する。

2号土坑（第19図）

1号土坑の北西すぐ近くに接して存在する。平面形は隅丸長方形で、検出面で長辺2.91m×短辺0.79～0.87m、深さ0.21mを測る。長軸はN－29°－Eを指し、1号土坑とほぼ直交する。土坑北端はやや掘り込みが浅い。土坑西側では3号溝と切り合い、層位では3号溝を切っている。




第19図　C区1号土坑・2号土坑（S＝1/40）




第20図　C区出土遺物(4)（S＝1/3）

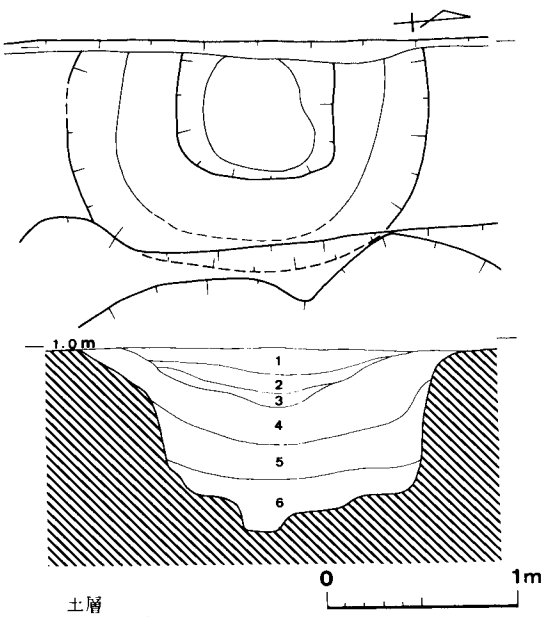
1号土坑との切り合いはわからない。覆土は3層で掘り込みの浅い部分は2層になる。上層から淡い黒褐色土、濃い黒褐色土、粘土・地山混成土となる。遺物は多くの弥生時代末～古墳時代初めの土器が坑底からやや浮いた状態で出土しているが、その多くは1号土坑の長軸の延長線上に集中している。土坑の先後関係が不明確である以上は、1号土坑へ帰属する可能性も考えねばなるまい。現に1号土坑出土土器に接合するものがある。1号土坑同様、土壙墓と考えている。

**2号土坑出土遺物**（第20図60～65）

すべて弥生時代末～古墳時代初めの土器。60は甕形土器であり、口径14.3cmと小型で、有段の口縁帯に5条まで確認できる擬凹線紋を施す。口縁帯はほぼ直立し端は先細りとする。61は結合器台の結合口縁部である。やや外反して開き、上方は段をもって立ち上がるようである。かなり狭い間隔で、大きな雨滴形の透かしを入れているようだ。1号土坑出土の59と同一個体の可能性がある。62は鉢形土器（甑）である。砲弾形の器形を呈し、口縁端部は先細りである。底部穿孔は焼成後に行う。内面底部には繊維を押しつけたかのような網目痕がのこる。明らかに焼成前に行われたもので、器面調整の一種なのだろうか。使用に際しての滑り止め等の工夫とも考えられる。63は鉢形土器である。完形で口径11.3cm、頸部径9.8cm、胴部最大径11cm、器高9cmを測る。屈曲の弱い「く」字口縁で、端部は先細りである。口縁部内外面はヨコナデを行う。球形の胴部は平底をもつが、丸底をなでて面をつくった程度のもので安定感は少ない。1号土坑出土土器と接合する。64は蓋形土器か。摘み部を分厚く中凹みにつくっているが、竪穴状遺構出土の第17図28のような底部の可能性もある。

**3号土坑**（第21図）

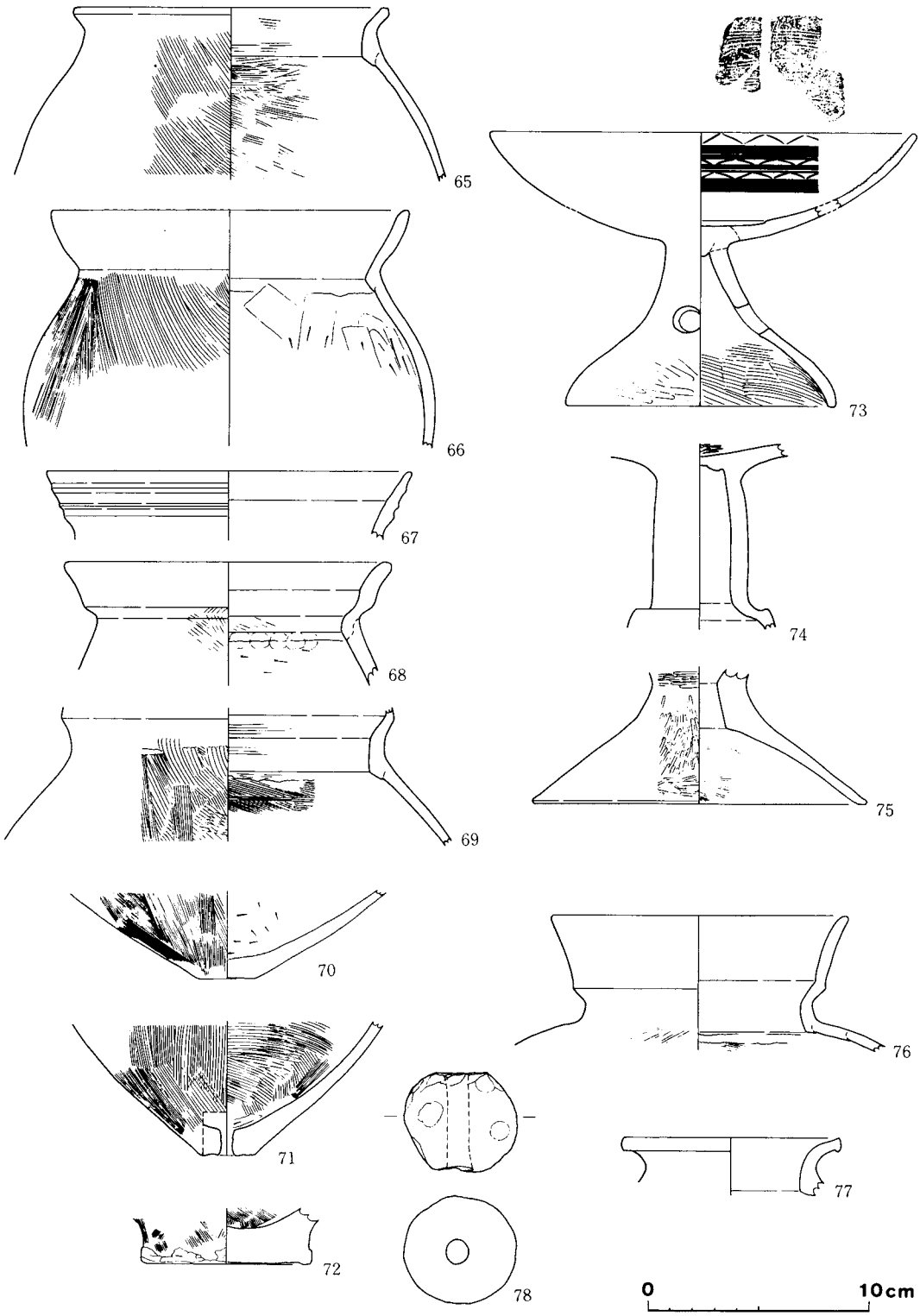
C区西壁のほぼ中央、大溝との間に検出した。平面形は現状では判断しがたいが、径約1.9mの円形か隅丸方形であろう。上半レンズ状、下半円筒状の断面形を呈し底には径約0.3m、深さ約0.15mの小さな掘り込みが付属する。検出面からの深さは約1mを測る。覆土は6層で、上層から暗茶褐色土Ⅰ、暗茶褐色土Ⅱ、炭層、淡い暗灰褐色土、濃い暗灰褐色土、黒褐色粘質土となる。1～3層は掘り込み幅最大約1.5mで、4～6層より小さくまた層厚も薄い。いったん4～6層で埋まったものがその上からまた使用され、1～3層が堆積したものと考える。遺物はきわめて少量であるが、弥生～古墳時代の土器、中世の土師器、加賀焼陶器が出土している。




第21図　C区3号土坑（S＝1/40）

**4号土坑**

C区の北部、東壁沿いに存在する。検出したのは一部分だけで、現状では全形等は不明であるが、少なくとも検出面で3.6m以上の長さをもち、深さは約0.3mを測る。11号溝とつながる




第22図　C区出土遺物(5)（S＝1/3）

が、層位では11号溝に切られる。覆土は4層（第14図8～11層）、上層から濁黄褐色粘質土、暗灰色土Ⅰ、暗灰色土Ⅱ、黒褐色粘質土となる。竪穴状遺構・11号溝とは一連のもので、円形にめぐる周溝と推定している。その場合、層位から11号溝とは重複する周溝となる可能性がある。

**4号土坑出土遺物**（第22図）

11号溝出土遺物とは判別しがたいため、ここに一括する。65～69は甕形土器である。65は口径14.4cmと小型で、短い「く」字口縁を呈する。屈曲は弱く、口縁端部は斜めに面をとるが、上方へ粘土が盛り上がってやや肥厚する感じになる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下はハケである。66は「く」字口縁を呈するが、頸部をなでて丸みをもたせるため、有段口縁と似た感じになっている。内面頸部以下はヘラケズリ調整を行う。67は「く」字口縁か。きわめて強いヨコナデを行い、凸帯状の微隆起を削り出している。68は厚手の有段口縁を呈し、短い口縁帯は外反する。69はゆるく外反して段をもって立ち上がる口縁のようだが、端部を欠いている。内面頸部の接合痕は新たに粘土を継ぎあてて段差を消そうとしたものか。70～72は底部である。71は底部穿孔を行う。調整は内外面ともハケである。72は分厚い底である。底面を成形した際の余った粘土を折り返し器面になでつけているようだ。73～75は高坏形土器である。73は内湾する皿形の坏部と、「八」字にそり返って開き裾が内湾する脚部をもつ。杯底部と口縁部の接合痕は明確である。坏部内面には先端からヘラ鋸歯紋・擬凹線紋6条・ヘラ鋸歯紋・擬凹線紋3条・ヘラ鋸歯紋・擬凹線紋6条と施す。74は円筒状の脚部、下半は有段となる。75は脚部で、上半が円筒状、下半が大きく開く笠形となる。76・77は壺形土器である。76は有段口縁を呈し、口縁帯は外反する。77は口径9.8cmと小型で、強く外反する「く」字口縁を呈する。口縁端部は上下に肥厚し面をとる。78は土錘である。立てた状態で長さ4.5cm×厚さ5cmの球形である。

**1号溝**（第25図）

C区の南部、浄化槽部分で検出した。ほぼ東西に走る。幅0.3～0.45m、検出面からの深さは約0.13mを測る。

**2号溝**

C区の南部、C棟部分の南端のほぼ中央から北西方向に走り、1号土坑と切り合う。検出面で幅0.3～0.4m、深さ0.05～0.09mを測る。層位は第19図E－E′から、覆土は基本的に2層、上層が淡い黒褐色土で、下層は茶褐色粘質土である。3は地山崩壊土に覆土が混じったものであろう。土坑との先後関係は層位からは不明確である。覆土は異なるが、3号溝と同一のものが土坑に切られたと推定する。

**3号溝**

C区南部、西壁のクランク部分から南東に伸び、2号土坑と切り合う。検出面で幅0.4～0.5m、深さ約0.13mを測る。覆土は1層、灰褐色土である。層位から2号土坑に切られることが観察できる。2号溝と同一のものと推定する。

**4号溝**

C区南部で検出した。そのほとんどを大溝に切られ、全形等はわからない、北東の端部は円形の掘り込みを伴う。検出面での最大幅は約0.6m、深さ0.05～0.12mを測る。

5号溝

C区南部で検出した。ほぼ東西方向に走る。検出面で長さ約2.85m、幅約0.2m、深さ0.02～0.05mを測る。溝の南側に1辺約0.4mの隅丸方形の掘り込みが付属するが、掘り込みはきわめて浅くて切り合いも少ない。

6号溝

C区の南部で検出した。南西から北東方向に走り、南部は大溝に切られる。検出面で幅約0.3m、深さ0.03～0.06mを測る。溝の西側に径約0.5mの円形のふくらみが付属するが同一のものか切り合うものかは不明である。摩滅した弥生～古墳時代の土器が出土した。

7号溝

竪穴状遺構の北隅部に接し、そこから北北西に伸びる。検出面で幅0.18～0.44m、深さ約0.07mを測る。竪穴状遺構との関係はわからない。遺物は溝北部端で弥生～古墳時代の土器底部が正位直立した状態で出土しているが、細かく砕けており、図示し得なかった。

8号溝

竪穴状遺構の内部で確認したが先後関係ははっきりしない。竪穴状遺構の底まで掘り下げた状態で幅約0.95m、層位でみる深さは竪穴状遺構よりやや深くなるようである。竪穴状遺構に沿って走っており、竪穴状遺構が周溝の一部とするなら、重複する周溝の可能性もある。

9号溝

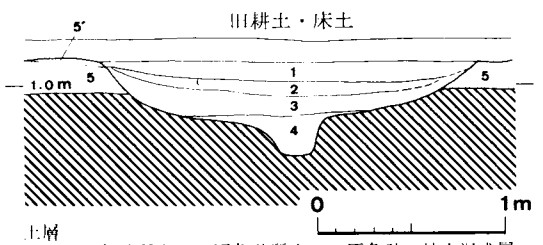
7号溝のすぐ北で検出した。ほぼ東西方向に走り、東部では徐々に確認できなくなる。検出面で幅0.16～0.2m、深さ0.02～0.05mを測る。

10号溝

C区北部で検出した。西南西から東北東方向に伸び、溝西部は大溝に切られ、溝東部は2又にわかれて終わる。検出面で幅0.3～0.45m、深さ0.05～0.08mを測る。

11号溝

C区の北東端、北西から南東に伸びる。検出面で幅は約0.9m、深さは0.09～0.1mを測る。覆土は2層、上層が明茶灰色土、下層が黒褐色粘質土である。溝南部で4号土坑とつながるが、層位では4号土坑を切っている。竪穴状遺構・4号土坑と一連の、円形にめぐる周溝と推定している。その場合、層位から周溝の重複が考えられよう。




第23図　C区大溝層位（S＝1/40）

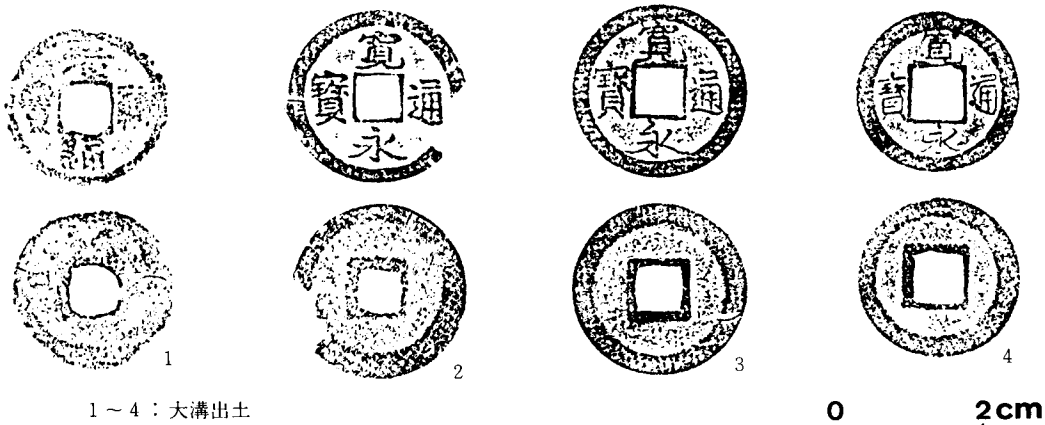
大溝（第23図）

C区を南南東から北北西方向へ縦貫して走り、各遺構を切る。おそらくはもっとも新しい時期の遺構である。検出面で幅1.8～2.2m、深さ0.2～0.5mを測る。現遺構面のより上層から掘り込まれており、この遺構の機能していた時期が他のものよりかなり新しいことを明確に示している。遺物は近世の陶磁器・土製品・鉄製品・木器、中世の陶磁器、古代の土器、弥生～

古墳時代の土器が出土している。古代以前の遺物はひどく摩滅しているので、流れこんだか埋土に入っていたものとしたい。図示できた遺物は近世のものが主体であるが、中世の加賀焼陶器・越前焼陶器・青磁・白磁も出土している。また、近現代の陶磁器も出土していることから、明治以降も使用されていた可能性が高いことを付記しておきたい。

**大溝出土遺物**[8]（第29図97～119、第24図）

第29図97・98は弥生～古墳時代の土器である。97は台付土器の台部、低平な器型で広がりも小さい。98は底部である。99・100は古代の須恵器である。99は無台坏で、底部はヘラ切り離しを行う。底部と口縁部の境に強いロクロナデを行い、段を付けている。100は有台の皿もしくは椀であろう。底部糸切り離しの後、断面三角形の高台を付ける。胎土は精良なもので灰白色を呈する。どちらも平安時代の所産で、99は9世紀後半以降、100は10世紀後半の年代が与えられよう。101・102は中世の珠洲焼陶器である。101は壺か甕の胴部下半で、もう底に近い部分である。外面に平行タタキを行う。102は擂鉢底部である。底部は静止糸切りを行っており、内面にはオロシメを入れる。102は珠洲Ⅱ期以降のものであろう。103・104は瀬戸美濃系陶器の丸椀であろう。103は淡明黄色を呈する釉薬をかけ、貫入がみられる。所々に斑点状の緑色釉が見られることから近世のものであろう。104は白っぽい色調の釉薬をかけ、貫入がみられる。内面に重ね焼きを示す目あとがのこる。105は磁器で、肥前産の染付である。白色だが透明感はなく、濁った感じの色調を呈する。呉須もくすんだ感じである。18世紀以降のものか。106は瀬戸美濃系陶器の落とし蓋である。口縁下にはやや下方へすぼまるかえしが付く。釉薬は外面の口縁部から上にかかっている。107は陶器の鉢で、口縁が水平方向に屈曲するものである。下反は回転ヘラケズリを行っているようだ。年代・産地等はわからない。108・110は瀬戸系陶器である。108は丸椀で、口縁部はやや内湾するものである。底部外面以外の器面に、黒か茶色に発色する鉄釉をかける。110は鉢である。口縁端部は内外面を若干肥厚し斜めの面をとる。口縁端は一部で稜花状に凹んでいる。内面に目あとをのこす。底部外面を除いた全面に飴釉をかける。109・111は唐津系陶器の甕である。109は口縁端部を外方へ肥厚、上端に幅広の面をとる。釉薬は暗赤褐色で、外面全部と内面口縁部にかかる。内面の三日月形に着いた釉薬は絵柄であろう。初期の唐津




1～4：大溝出土

第24図　C区出土遺物（銭貨、S＝1/1）

で、16世紀末から17世紀初めのものである。111は強く屈曲する短い口縁をもち、外面に平行タタキを有する。109よりは後出的な要素をもつ。112・118は越前焼陶器である。112は擂鉢底部である。内面にオロシメを観察できる。底が薄く、成形にろくろを用いないことから近世前半のものだろう。118は甕口縁部であり、口径46cmを測る大型品である。端部は肥厚とナデにより面をとるが、内側が幅の狭い内下がり、外側が幅の広い外下がりを呈して口縁を成す。器面に土壌中の鉄分、すなわち鬼板を塗り付けるものであり、甕の器型も中世には見られないものであることから、近世前半、17世紀代のものとしたい。この時期は珠洲焼・加賀焼が衰退し絶えて陶器が不足したため、鬼板を塗布して焼成温度を下げて大量生産が行われたと考えられている。113は土製品である。中央がくびれる器型で、断面四角形の対角線で接合する型合わせの成形を行っている。製品を垂直に貫通する孔は、乾燥時に固定するために棒をさしたものだろう。下半には三つの段をつける。人形の類いならば、京都の伏見人形に源流をもつもので、土人形が一般に普及した近世後半以降の作品であろう(9)。114～117は土錘である。長さ3～4cm、厚さ約3cmほどである。114・117は中央がふくらむもの、他は円筒形を呈する。117は陶質であるが、断面が焼けていることからも、土錘が二次的な加熱を受けて硬化したものとわかる。119は銅製品、煙管の吸い口である。一枚の金属板を丸めてつくったもので長さ6.4cm、最大径は9mmを測る。第24図1～4は本遺構より出土した銭貨である(10)。1は北宋銭の元祐通寶である。銭径2.1cm、重さ1.2gを測り、篆書体で、11世紀末の鋳造年代が与えられる。2～4は寛永通寶である。2は銭径2.4cm、重さ1.6gを測り、「通」字部分の縁が欠損する。字体から古寛永で、17世紀代に鋳造されたものとわかる。3・4は18世紀から幕末にかけて鋳造された新寛永である。3は銭径2.3cm、重さ2.6gを測る。4は銭径2.2cm、重さ2.8gを測り、遺存は良い。

**1号土器溜まり**（第25図、出土遺物　第26図79～82）

C区の南部、浄化槽部分の南壁東隅で確認した。弥生時代末～古墳時代初めの土器が地山面に集中して出土している。79・80は有段口縁を呈する甕形土器である。ともに口縁帯は外反しないものである。79は口縁部に強いヨコナデを行う。擬凹線紋は6～7条、とぎれる部分である。80は器面を薄く仕上げる。矮小な平底の底部は、バランス次第で自立可能だが安定感はない。口縁帯は外面に擬凹線紋9条を施し、内面に1.5cm毎の円形の指頭圧痕をのこす。81・82は高坏形土器である。81は径の大きい平坦な坏部とわずかに広がる脚部である。坏部内面には不定方向のハケがのこる。82は椀状の底部から段をもって外反する口縁部をもつものである。

**2号土器溜まり**（第25図、出土遺物　第26図83～88、第27図89）

C区の南部、浄化槽部分のほぼ中央、1号溝の南側に確認した。弥生時代末～古墳時代初めの土器集中地点である。83・84・89は有段口縁を呈する甕形土器である。いずれも径20cmを超える大型品であり、外反しない口縁帯に擬凹線紋を施すものである。83の口縁端部は内面が細まっていく。84の擬凹線紋ははっきりせず、確認できるものは2条にとどまる。89は口径30.8cm、最大径は胴部上位にあり36cm、器高39cmを測る。径4.5cmの小さな平底で、自立はできない。85は高坏形土器である。平坦な底から段をもって立ち上がり大きくそり返る坏部と、ゆるやかにそって「八」字に開く脚部をもつ。坏部は段の接合部分で下方へ少し突出している。86は蓋形土器であ

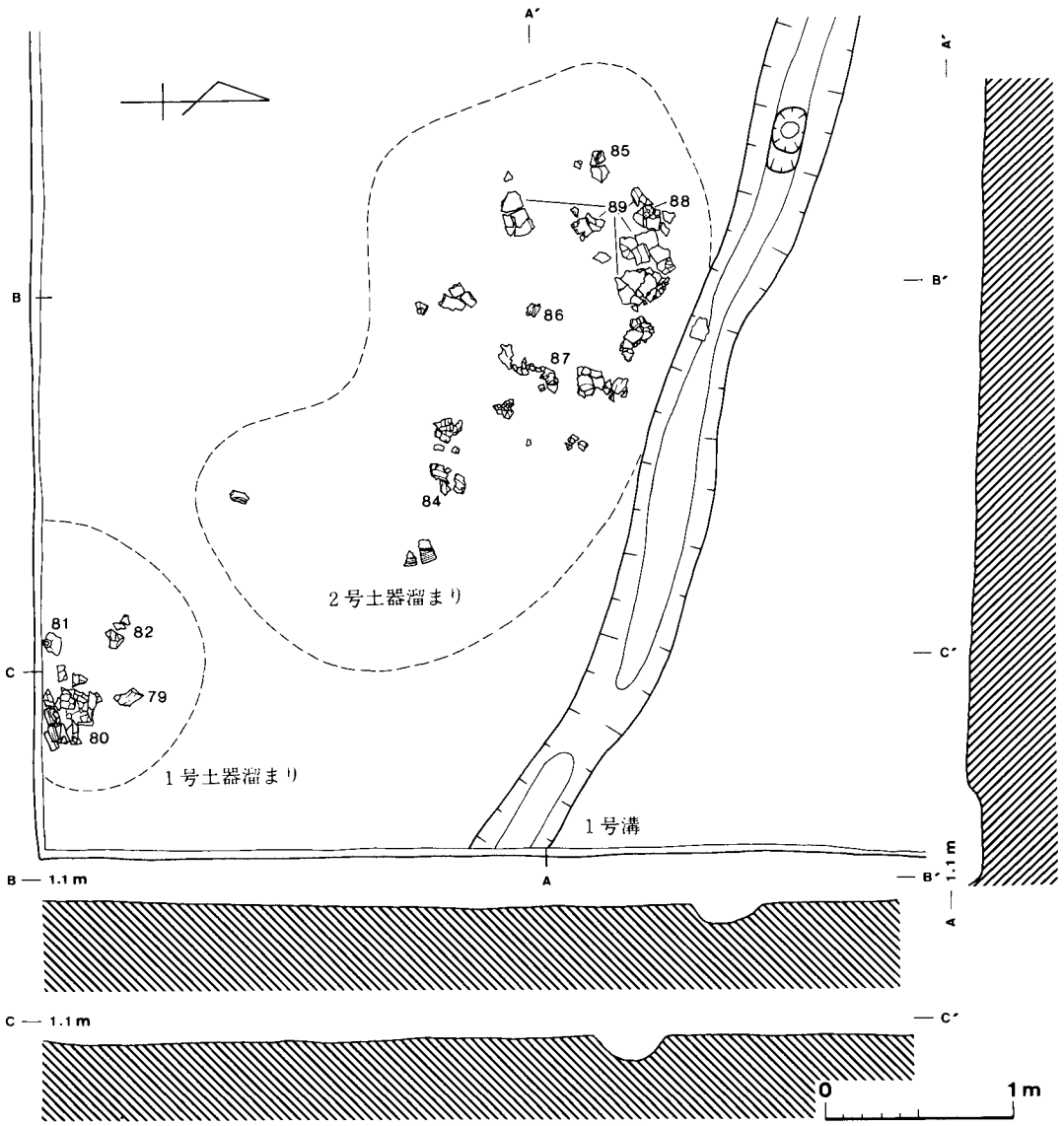
る。摘み径5.2cm、大きく中凹みする。大型の土器につくものだろう。87・88は底部である。

**柱穴**（第27図）

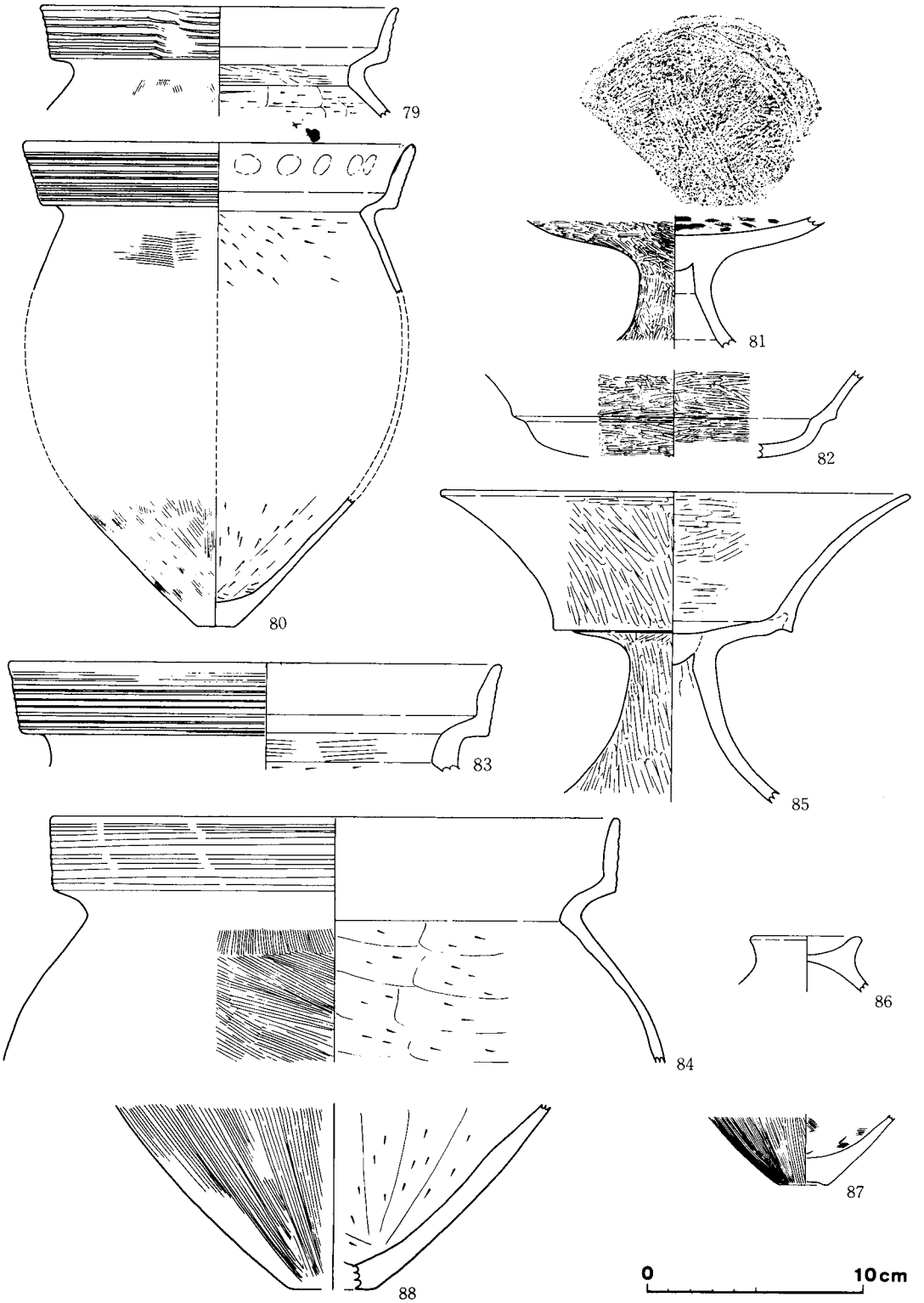
C区の南部、C棟部分東隅で検出した。平面形は長径0.53m×短径0.3mの楕円形を呈する。中央部にはさらに径0.14mの円形の掘り込みをもち、その側面には曲げ物状に木の皮を配している。深さは検出面から0.1～0.14m、掘り込みの底までは約0.3mを測る。機能した時期は曲げ物状木皮の残存状態から中世以降としたい。

**ピット**（出土遺物　第28図92・94）

少穴は多数あるが、遺物を出土した1穴のみをピットとして扱う。C区北端に近く、10号溝・4号土坑・11号溝に取り巻かれる位置にある。平面形は長径0.75m×短径0.55mの楕円形で、検出面からの深さは0.35mを測る。周囲のピットより一回り大きく、柱穴とも考えられるが確証に




第25図　C区土器溜まり（S＝1/40）




第26図　C区出土遺物(6)（S＝1/3）

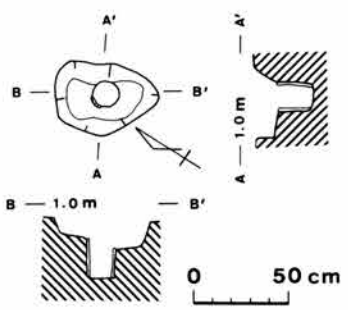
は欠ける。弥生～古墳時代の土器が出土している。92・94は弥生時代末～古墳時代初めの土器で、92は中凹みする底部である。成形の際、円盤で穴を塞いだのだろう。94は高坏で、大きくそり返って開く脚部である。

**包含層出土遺物**（第28図90・91、第29図93～96）

90・91・93～95は弥生時代末～古墳時代初めの土器である。90・91は甕形土器である。90は有段口縁を呈し、口縁帯は外反する。擬凹線紋は9条、口縁帯内面には2cm毎の指頭圧痕がのこる。91は「く」字口縁を呈するが、屈曲はそう強くない。頸部内面はヘラケズリ調整である。93は外反する有段の口縁部で、壺もしくは器台形土器であろう。95は高坏形土器脚部で、そり返って大きく開く低平なものである。孔を有するが、正確な数はわからない。96は古墳時代後期の須恵器である。甕もしくは瓶類の肩部であろう。沈線2条を施し、その間を斜行紋を連ねてうめる。紋様帯の下は回転ヘラケズリを行っている。胎土はきわめて緻密で精良なものであるが。焼成は良くなく、軟質である。和泉陶邑窯の所産と推定し、年代は6世紀前半代を考えている。

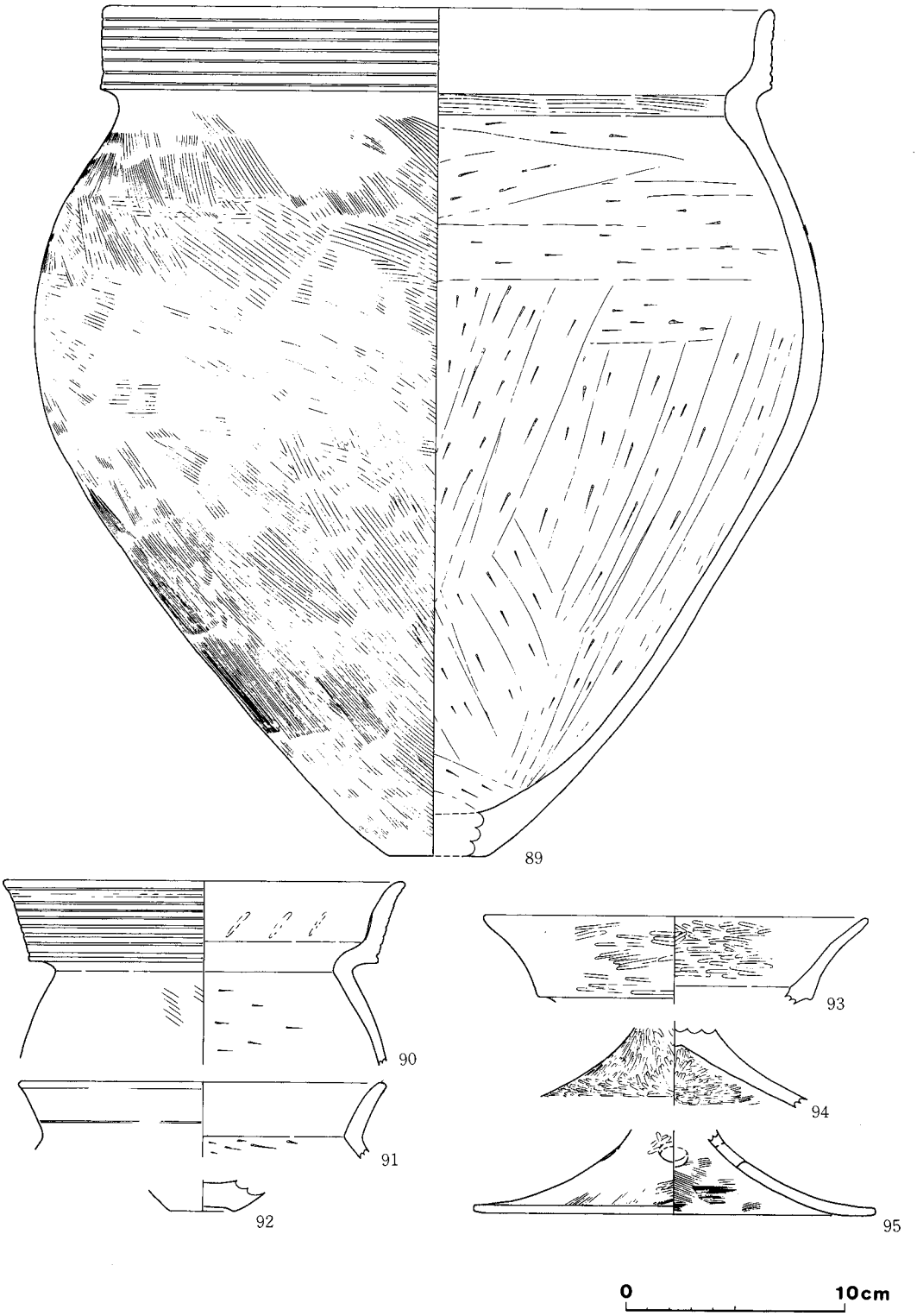
## 3．小　結

C区は大規模な遺構が存在し、遺物も多く出土したが、遺構密度は決して高いものではない。遺構は弥生時代末～古墳時代初めにかけてのものと中世以降のものにわかれる。竪穴状遺構と1号土坑・2号土坑・4号土坑・7号溝・11号溝は明確に古いほうと推定できる。中世以降と断定できる遺構は大溝と、あと柱穴があげられる程度である。他の遺構については遺物も少なく時期を特定できないが、大きくはこの両者のどちらかの時期に帰属するものであろう。竪穴状遺構・4号土坑・11号溝は前記したように一連の周溝遺構として捉えたい。その場合、出土土器では1号土坑・2号土坑と大きく様相を違えることが注目できよう。これらと同時期の土器が地山直上に集中して出土したのが、1号土器溜まり・2号土器溜まりであるが、その性格については一括して投棄されたものとしかいえない。大溝は、中世以降使用されていた農業用水路とみるのが最も無難であろう。出土遺物は中世から近世前半のものが主体で、近世後半のものが少ない印象を受けるが、木器等の遺存状況から、かなり継続的な使用と水流があったと推定されるため、細かい時期は言及できない。年代は、大まかに中世に造られ近現代の圃場整備前まで使用されていたとしておきたい。

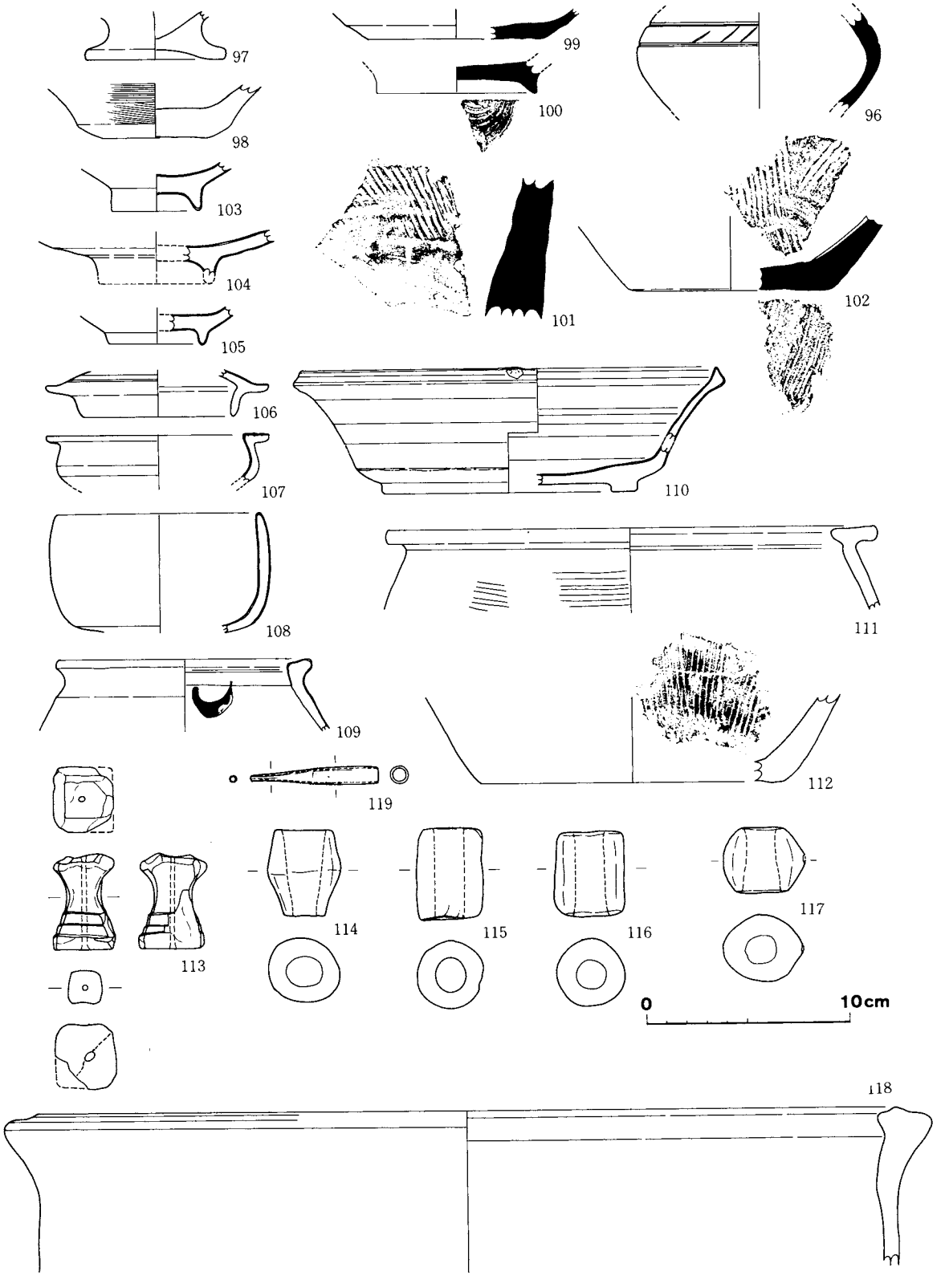



第27図　C区柱穴（S＝1/40）

竪穴状遺構遺物出土状態近影




第28図　C区出土遺物(7)（S＝1/3）




第29図　C区出土遺物(8)（S＝1/3）

# 第4節　D区の遺構と遺物

## 1．概　要

県営住宅団地ではもっとも南側のD・E棟の部分である。隣りのE区とつながる第2次調査の調査区であるが、調査区中央に用水路による攪乱が南北に走っており、攪乱から東をD区、西をE区とした。

基本層序は、旧耕土が削平され、上層から第1層灰褐色粘質土（旧耕土の床土も含む）、第2層褐色粘質土（包含層）、地山となる。遺構は、東西に長い調査区の中央に集中するかたちになり、土坑5基、落ちこみ5基、溝7本、柱穴4基、ピット多数がある。パンケース3箱の遺物が出土し、C区に次いで多かった。

## 2．遺構と遺物

### 1号土坑

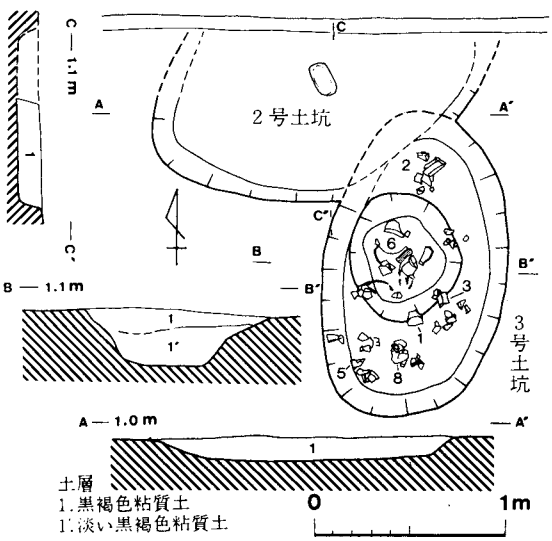
D区南壁のほぼ中央部に接して検出された。確認したのは一部分のみであり、平面形は現状では何ともいえない。検出面で最大長約2.7m、深さ0.1～0.16mを測る。遺物は弥生～古墳時代の土器少量のほか、碧玉チップを出土している。

### 2号土坑（第30図、出土遺物　第32図9・10）

D区北壁のほぼ中央部、クランクして南へ入り込んだ壁に接して検出した。平面形は現状では長辺1.6m程度の隅丸長方形になると推定できる。検出面からの深さは約0.13mと浅く、断面形はA－A´、C－C´どちらも偏平な逆台形状を呈する。土坑南東隅で3号土坑と切り合うが先後関係は層位ではわからない。覆土は1層、黒褐色粘質土である。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器のほか、石が出土した。9・10は壺形土器であり、9は口縁部のみ、10は胴部以下が残存する。9は有段口縁で、口径12.6cm。やや外傾する程度で外反はしない直線的なつくりであり、端部は細くおさめる。10は球形の胴部に平底の底部がつくものである。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリを行う。

### 3号土坑（第30図）

2号土坑の南東すぐ近くに検出した。平面形は長径約1.63m×短径約0.97mの長楕円形を呈する。土坑内のほぼ中央部はさらに掘り込んで二段掘りとしており、長径0.68m×短径0.57mの平面形楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.12m、二段掘り部分では約0.31mを測り、掘り込みを含めた断面形は斜辺が屈曲して広がる逆台形状を呈する。土坑北端では2号土坑の南東部隅と切り合い、2号土坑の長辺と3号土坑の長径がほぼ




第30図　D区2号土坑・3号土坑（S＝1/40）

直交する感じである。先後関係は層位ではわからない。覆土は基本的に1層で、黒褐色粘質土であるが、二段掘りの部分はやや淡い色調を呈する。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器多数と、碧玉チップおよび原石を多数出土している。二段掘りの形態と出土遺物から玉造に関係した遺構と考えている。

**3号土坑出土遺物**（第32図1～8）

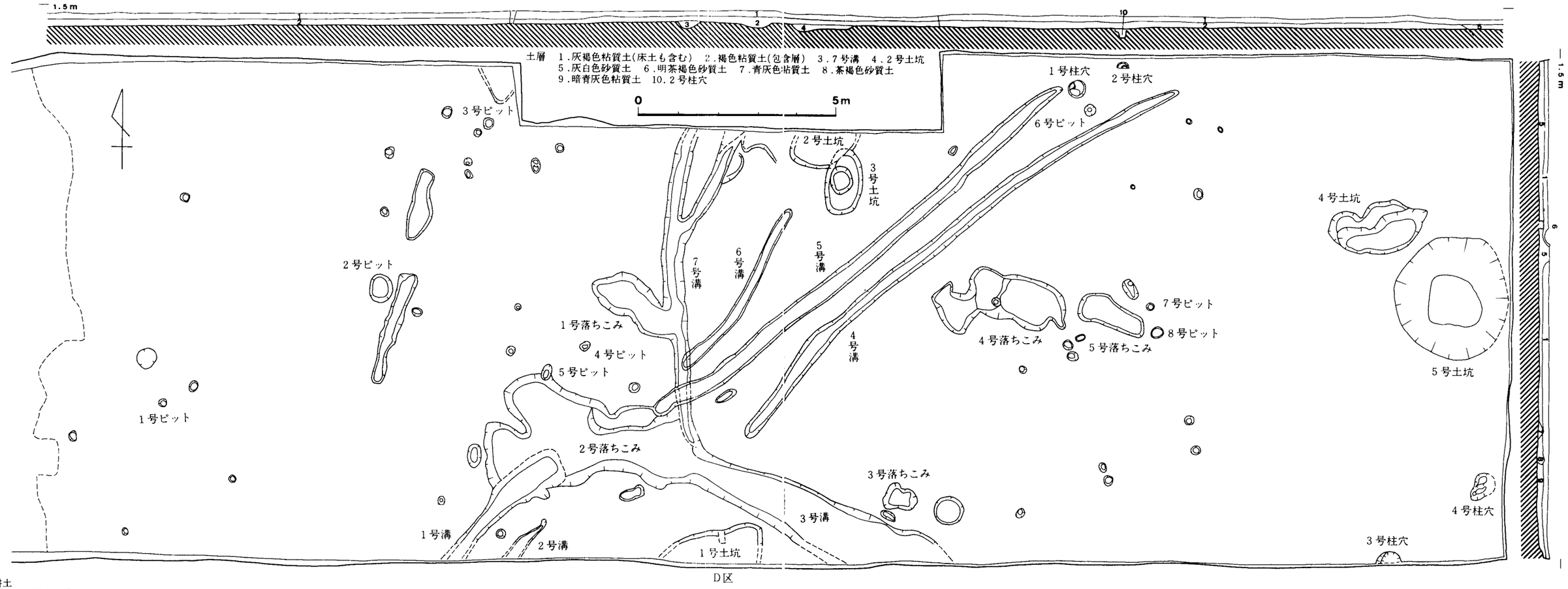
1～6は甕形土器である。いずれも有段口縁をもち、口縁帯に擬凹線紋を施すが、口縁帯は外反せず直立するものが多い。標準的なもので、口径17～18cm、調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は外面ハケ・内面ヘラケズリを行う。1は口縁端部を細めるもの、内面は摩滅しており調整等は不明である。2は前述した標準的なタイプの典型である。3は口径20.4cmとやや大型で、口縁帯はゆるく外反し、端部を丸める。4は口径16cmと小型のもので、口縁帯はゆるく外反し、端部を丸めている。6はほとんど完形で、口径18.2cm、底径2.5cmを測る。口縁帯は外反するもので、端部は先細りする。本遺跡ではあまり量的に多くないタイプである。内面にのこる指頭圧痕は口縁を外反させた際に押さえたものだろう。口縁部は歪曲しており、焼成前に粘土を継いだ痕跡がある。焼成前に破損し補修したものだろうか。7は平底の底部である。8は蓋形土器である。摘み部径2.5cm、口径10.4cmを測る。摘み部は中凹みである。調整は外面ハケ、内面ナデを行っている。

**4号土坑**（第33図）

D区東壁近くで検出した。平面形は、北半分が瓢箪形、南半分が長楕円形が合わさった感じになり、長辺約2.5m×短辺0.95～1.3mを測る。断面形は不整な台形状を呈し、北側が浅い2段掘り状になる。検出面からの深さは上段底までが約0.1m、下段底まででは0.23mを測る。2つの土坑が切り合ったものとも考えられるが、層位では確認できない。覆土は3層、上層から暗褐色土、黒褐色強粘質土、地山・黒褐色土混成層である。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器が多数出土している。

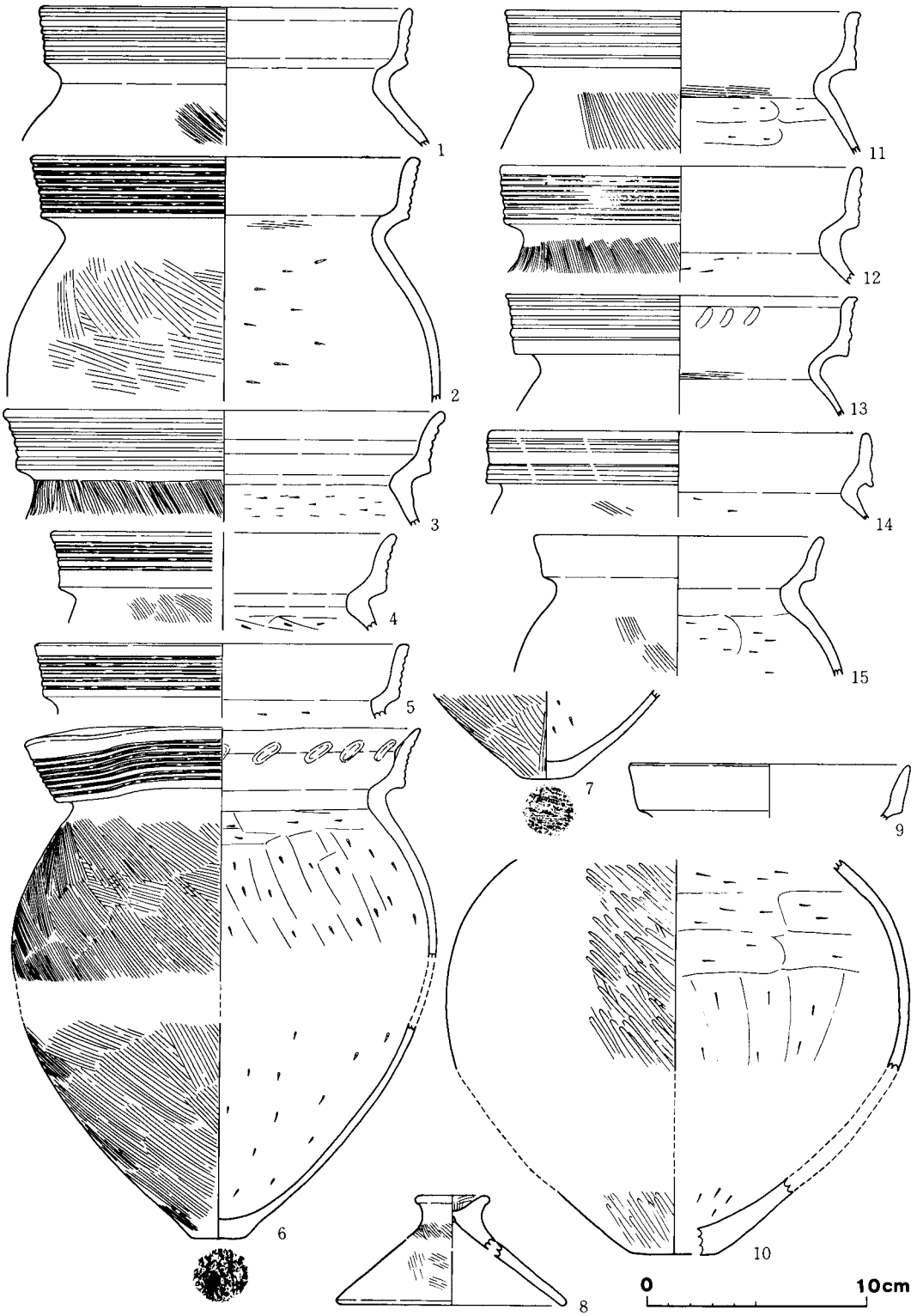
**4号土坑出土遺物**（第32図11～15、第35図16～20）

11～16は甕形土器である。いずれも外反せずほぼ直立する有段口縁をもち、口径は15～17cmを測る。11は口縁端部に水平な面をとる。口縁帯内面は強いヨコナデにより中凹みする。12は深くはっきりした擬凹線紋5条を施す。13は11と同様な口縁のつくりであるが、指頭圧痕が口縁帯内面にめぐる。14は口径17.4cm、有段口縁は内面では段が弱い。口縁帯はやや内傾し、中央部は強いヨコナデにより凹んでいる。その上端は丸まるが下端は突出する。15は口径13.2cm、他の有段口縁に比して短い口縁帯はわずかに外反する。調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は外面ハケ・内面ヘラケズリである。16は15とほぼ同じつくりであるが、口径は15.5cmとやや大きく、口縁帯も長い。17は平底の底部である。18は器台形土器の上半、器受部である。粘土を貼り付け有段状としている。調整は外面ヘラミガキ、内面ナデである。19は高坏か器台の口縁部である。大きく外反する器型で、口径19.6cmを測る。内外面ともヘラミガキ調整を行う。18・19とも胎土は石英等の砂礫の含みが少ない精良なものである。20は高坏形土器である。脚裾径は14.2cm、坏口縁部先端をわずかに欠く。坏部の段は内外面に抉りを入れた感じのもので凹凸は小さく、大きく開くが外反は小さい。脚部はゆるく開いていき、段をもって屈曲し外反する。裾端部は上方に肥厚し、

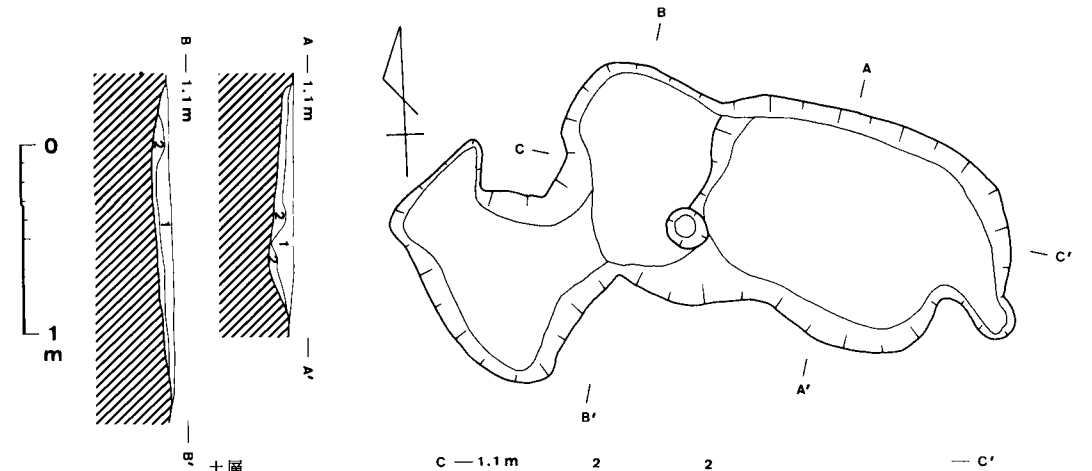



1．耕土
2．灰褐色粘質土（遺物の含みは少ないが包含層と思われる）
3．褐色粘質土
4．暗褐色粘質土
5．4に地山混じる
6．黄褐色粘質土
7．2よりやや暗い色調
8．黄褐色粘質土 6と同質か
9．淡黄褐色粘質土
10．黄褐色砂層（3号溝）

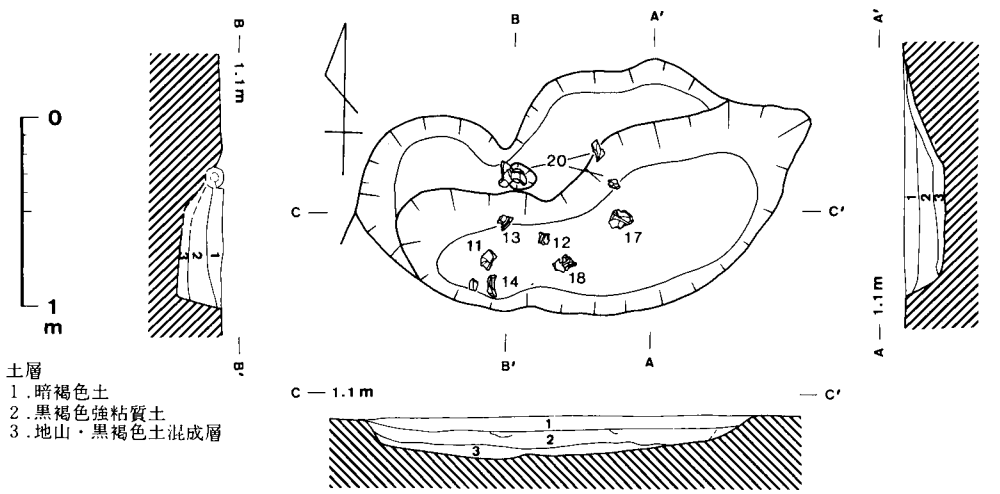
第31図　D区・T区全体図（S＝1/100）



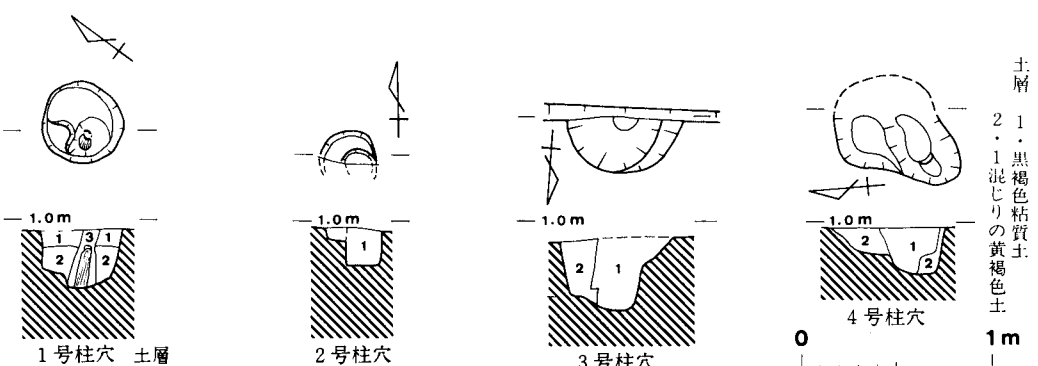

第32図　D区出土遺物(1)（S＝1/3）




4号落ちこみ




4号土坑




第33図　D区主要遺構（S＝1/40）

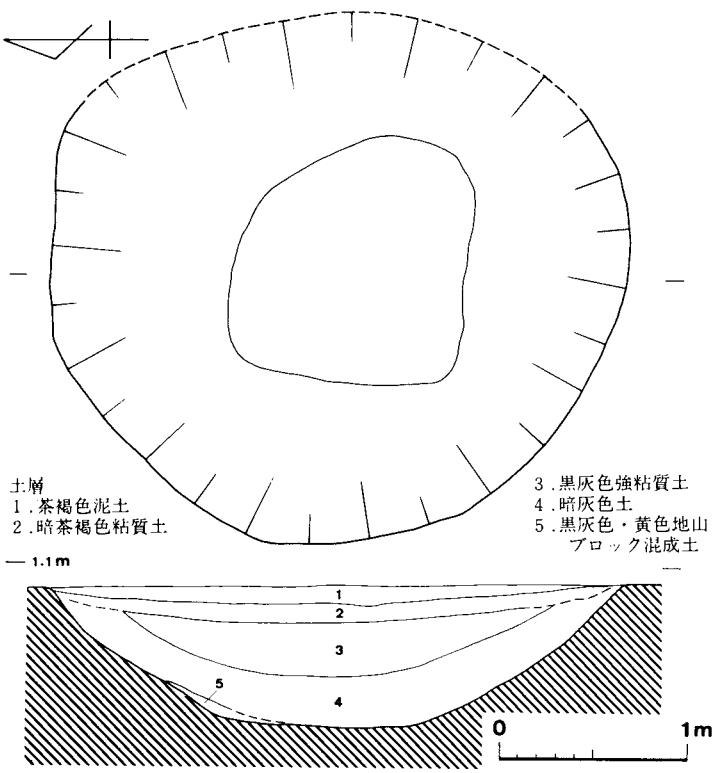
面をとる。調整は外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はハケ・ナデを行う。

**5号土坑**（第34図）

D区東壁に接して、南北方向ではほぼ中程に検出した。東端が少し切れるが、平面形は径約3mの不整円形である。断面形と層位はゆるやかなレンズ状をなし、検出面からの深さは、最大で0.75mを測る。覆土は4層、第1層茶褐色泥土、第2層暗茶褐色粘質土、第3層黒灰色強粘質土、第4層暗灰褐色土で、部分的に地山崩壊土と思われる第5層が堆積する。層位をみると、当初に遺構が機能していた直後の堆積が第4層で、一時機能が停止した後、遺構を縮小して使用した際に第3層が堆積したと推定する。遺物は、弥生～古墳時代の土器、古代の土器、中世の土器、土錘の他、碧玉チップを多く出土した。遺物は小破片が多いが、第3層から第37図54の珠洲焼甕が出土しており、このことから遺構の年代は中世以前とする。下限も第4層の覆土の質から考えると中世を遡らないものとしたい。それ以外の時期の遺物は埋土に混じったものだろう。

**5号土坑出土遺物**（第37図50～55）

50・51は弥生時代末～古墳時代初めの土器である。50は厚手の有段口縁をもつ壺形土器で、口縁帯下端がやや突出する。調整は外面は摩滅していて不明、内面は口縁帯がヘラミガキ、頸部はヘラケズリのようである。51は台付の壺形土器であろう。内外面とも摩滅している。52は古代の須恵器無台坏である。口径13.5cm、口縁部は直線的に大きく外傾し広がる。胎土は径2ミリ大の石英粒を含む精良なものである。平安時代初め、9世紀前半の所産であろう。53・54は中世の珠洲焼甕で同一個体である。54のみ図中の縮尺を異にする。53は底部で径16cmを測る。底面には成形時にひいた砂が付着している。54は胴部で、外面に細かい平行タタキ、内面には当て具痕をのこす。55は土錘、先端をわずかに欠損し、最大長5.8cm、厚さ1.4cmを測る。



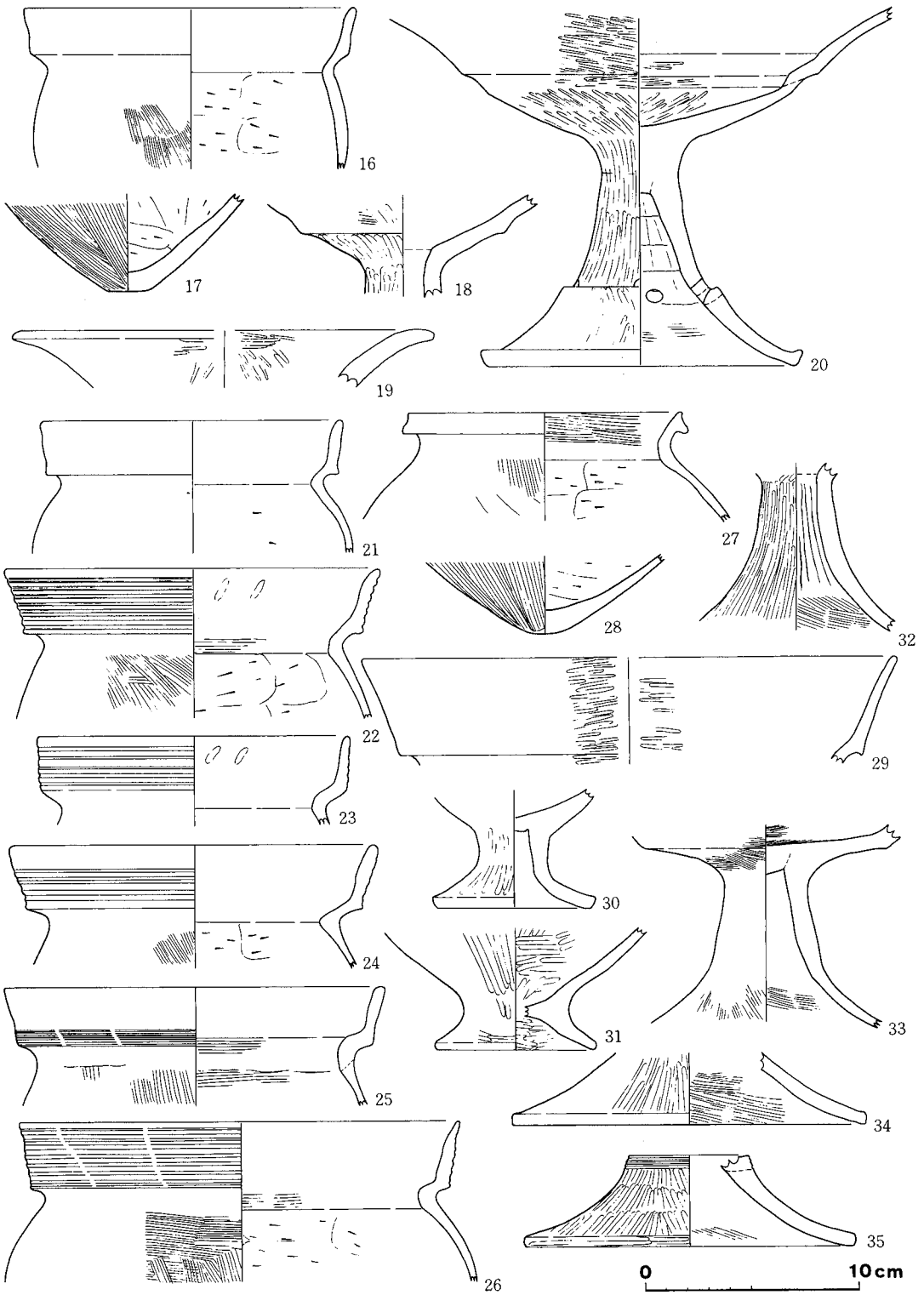

第34図　D区5号土坑（S＝1/40）

**1号落ちこみ**（第41図）

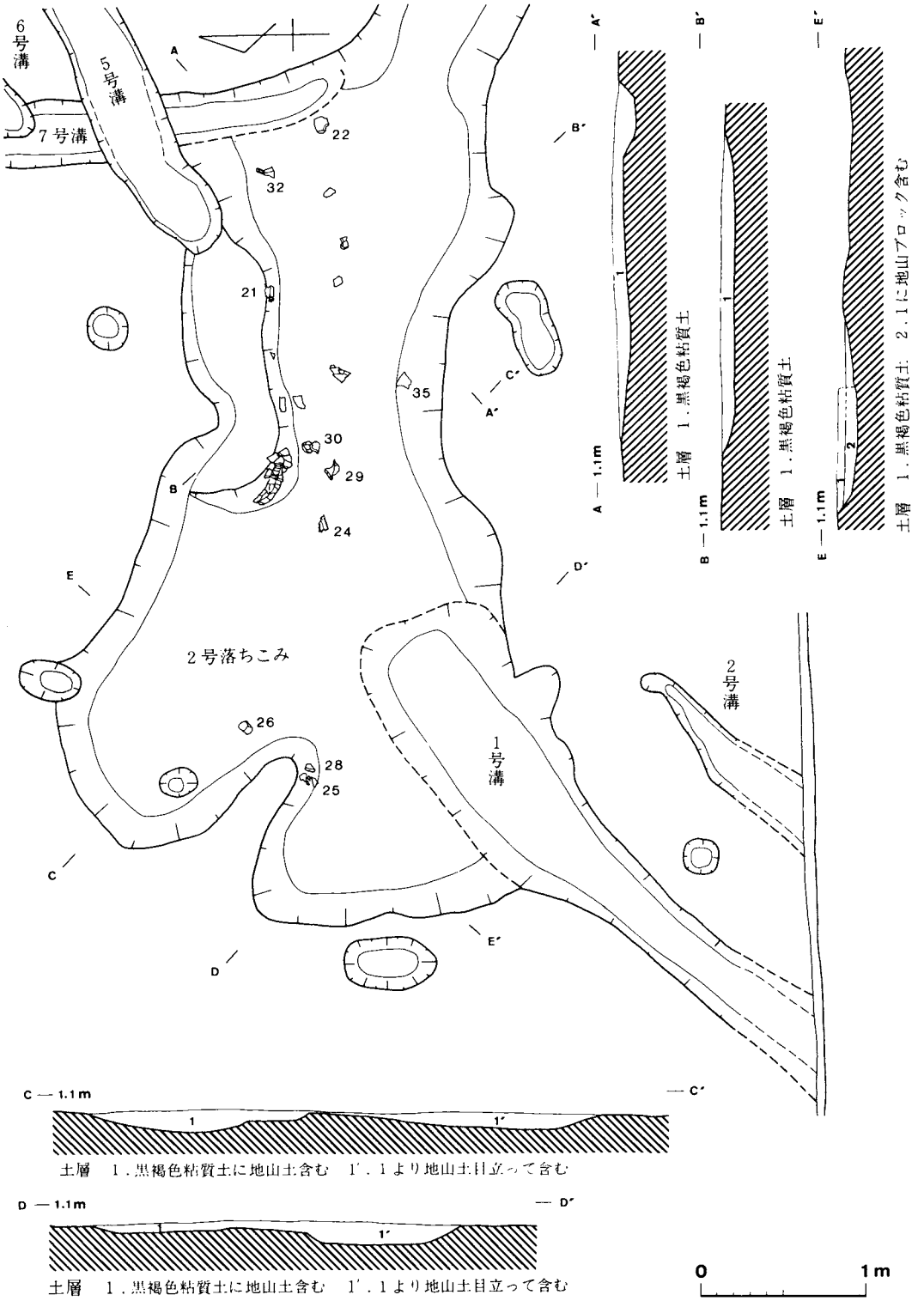
D区のほぼ中央、7号溝に付属して検出した。平面形はやや孤状に曲がっている。長さ0.8～2m、検出面からの深さ約0.14mを測る。覆土は基本的に1層、黒褐色粘質土で、下層のほうはやや淡い色調を呈する。断面B－B′でも7号溝と識別できず、先後関係はわからない。弥生～古墳時代の土器が出土した。

**2号落ちこみ**（第36図）

D区の中央やや南寄り、D区遺構がもっとも集中する位置に存在す




第35図　D区出土遺物(2)（S＝1/3）




第36図　D区2号落ちこみ（S＝1/40）

る。平面形は、不整形なうえ他の遺構と切り合っておりよくわからない。遺構西部は二又に突出し、1号溝と切り合う。東部は東西に幅広い長方形の土坑状で、端は3号溝・5号溝・7号溝が絡む。遺構内は北側にテラス状の平坦面をもっている。長さ1.4～5.5m、検出面からの深さ約0.1mを測る。覆土は1層、黒褐色粘質土で、遺構西部では地山ブロックを含んでくる。断面D－D´では、1号溝の覆土のほうが地山ブロックを多く含んでいる。5号溝が新しい時期である以外は先後関係はわからない。出土遺物は多くの弥生時代末～古墳時代初めの土器の他、フイゴの羽口と推定するものがある。3号溝とつながるものであるなら、第6図で見るように方形周溝の一部となる可能性がある。

**2号落ちこみ出土遺物**（第35図21～35）

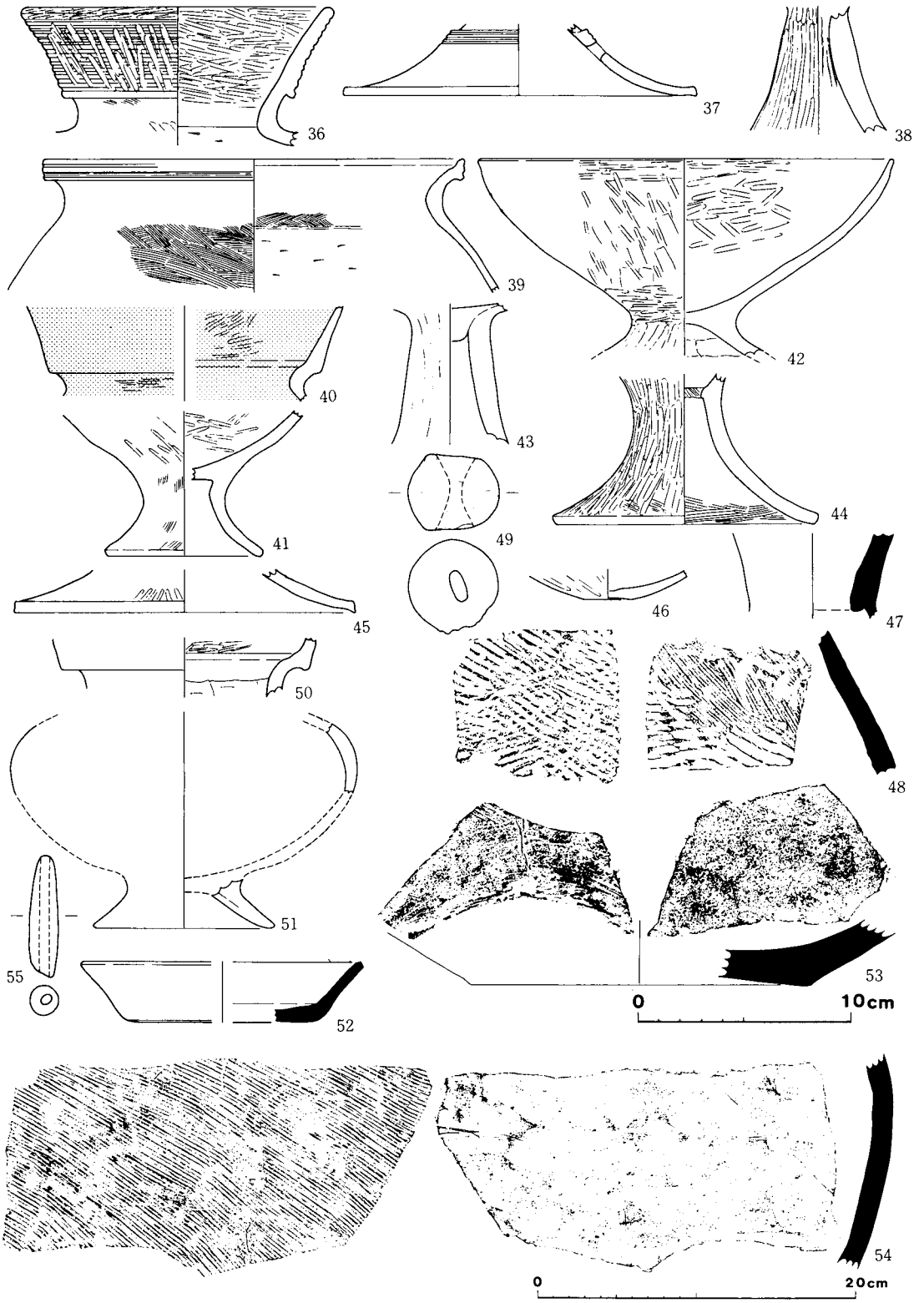
21～27は甕形土器である。21～26はいずれも有段口縁を呈するが、細かい形態差がある。21は口径14cm、口縁帯はほぼ直立し、上端は丸まり、下端が突出する。器面は焼成時に赤く発色したものだろう。22は口縁帯がやや外反するもので、ヨコナデは強く徹底されており屈曲や稜が明確である。深くはっきりした擬凹線紋7条を施す。胎土は他の甕形土器が、石英・長石等の砂礫や海綿骨針を含むのに対して精良である。色調も白っぽくやや異質な感じを受ける。23は口径14.5cmと小型のものである。24も22同様ヨコナデが強く、メリハリがついた器型である。口縁帯内面下半は特に強くヨコナデしている。25は口縁端部がやや角張る。頸部は外面タテハケ、内面ヨコハケを行う。擬凹線紋は不明確である。26は口径20.5cmとやや大型、口縁端部は先細りする。27は口径13cm、「く」字口縁に端部の粘土を貼り付けて下方に伸びる口縁帯をつくり、強いヨコナデを行ったものである。調整は口縁内面にヨコハケを行う以外は、有段の甕と変わらない。28は底部である。矮小な平底で、底径は測り得ない。29は器台形土器の器受部上半であろう。有段口縁で、口縁帯は直線的に外傾し、その下端は突出する。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキを行う。30・31は台付土器底部である。30の台は高坏の脚に見られるような円筒部分をもつ。胎土は砂礫を含まない精良なものである。31は全面にヘラミガキ調整を行い、点々と赤彩痕をのこす。32～35は高坏形土器で、いずれも脚部である。32はゆるやかに裾が開いていくものである。内面の坏部に近い筒状の部分は絞り目、脚口縁に近い広がった部分ではヨコハケをのこす。33は平坦な坏部底が付いている。32同様裾がゆるやかにひらく器型。ハケ調整痕が各部にみられるが、器面が摩滅し一次調整があらわれたものだろう。34・35は裾の部分で、いずれも端部は垂直な面をとり、その際余った粘土は内面へ折り返して薄く盛り上げたようである。35は有段で、屈曲する部分は3条の擬凹線紋を施す。35の胎土は海綿骨針と細かい砂礫しか含まず、甕類より精良である。

**3号落ちこみ**（第38図）

3号溝のすぐ東に存在する。平面形はくびれの浅い瓢箪形で、東西幅は0.85m、くびれ部幅0.5m、検出面からの深さは0.04～0.06mを測る。弥生～古墳時代の土器小破片が出土した。

**4号落ちこみ**（第33図、出土遺物　第37図36・37）

D区中央からやや東にずれる。平面形はきわめて不整形で、いくつかの遺構が切り合ったとも考えられる。言葉で表現すれば、東端は溝状に突出し、西端は鍵爪状に曲がり、中央はくびれの弱い瓢箪形となる。長さ0.6～3.9m、検出面からの深さは0.02～0.12mで西側が浅くなる。遺構




第37図　D区出土遺物(3)（S＝1/3、54のみS＝1/4）

内ほぼ中央に径0.25mの円形の掘り込みを有し、底までの深さは0.18mを測る。覆土は2層、上層から黒褐色粘質土、地山混じりの黒褐色粘質土である。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器と、碧玉チップ・原石が出土した。36は壺形土器である。口径14.8cm、一見すると有段口縁だが、内面は無段である。口縁帯はゆるく外反して開き、上端は水平面とり、下端は突出する。調整は口縁ヨコナデ後ヘラミガキ、頸部は外面ヘラミガキ・内面ヘラケズリを行う。ただし、口縁外面は擬凹線紋を引いた後でヘラミガキを行い、擬凹線紋を一部消している。3号土坑出土の土器と接合する。37は高坏形土器の脚裾部である。段をもって大きく外反し、端はほぼ垂直に面をとる。段部近くに擬凹線紋を3条施している。

**5号落ちこみ**（出土遺物　第37図38）

4号落ちこみのすぐ東に存在する。平面形は隅丸の不整五角形で、長幅約2.7m×短幅約0.5m、検出面からの深さ約0.05mを測る。弥生時代末～古墳時代初めの土器少量が出土した。38は高坏形土器か。脚部で、裾に向かって開いている。かなり絞ってあり内面坏部近くではほとんど隙間がない。

**1号溝**（出土遺物　第40図56、第42図1）

D区南壁の中央部、北東から南西方向に走る。北端は2号落ちこみにつながり、南端は調査区外へ伸びる。検出面で幅0.35～0.55m、深さ0.05～0.13mを測る。覆土は1層、2号落ちこみとほぼ同じで、地山を含む黒褐色粘質土である。こちらの覆土が地山をやや多く含む程度の差で、切り合いは層位ではわからない。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器と碧玉原石を出土している。第40図56は甕形土器で、有段口縁を呈し、口径16.4cmを測る。口縁帯はほぼ直立し、端部は外面寄りに細まる。口縁帯外面に棒で刺突したような痕跡がある。口縁帯内面は強いヨコナデにより、中凹みとなる。頸部内面には一次調整時のハケをのこしている。碧玉原石は第42図1と他にもう1点ある。

**2号溝**

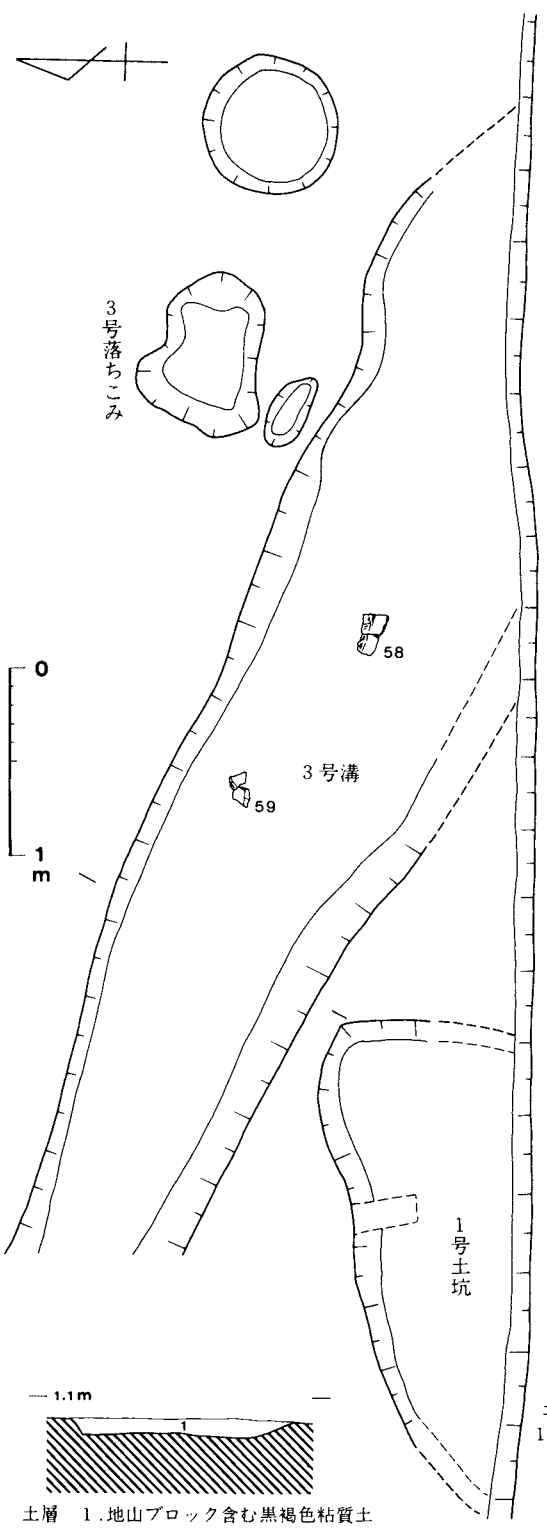
1号溝のすぐ東にあり、ほぼ並走する。北端は鍵爪状に曲がって完結し、南端は調査区外へ伸びる。検出面で幅0.1～0.3m、深さ0.02～0.07mを測る。摩滅した弥生～古墳時代の土器小破片が出土した。

**3号溝**（第38図）

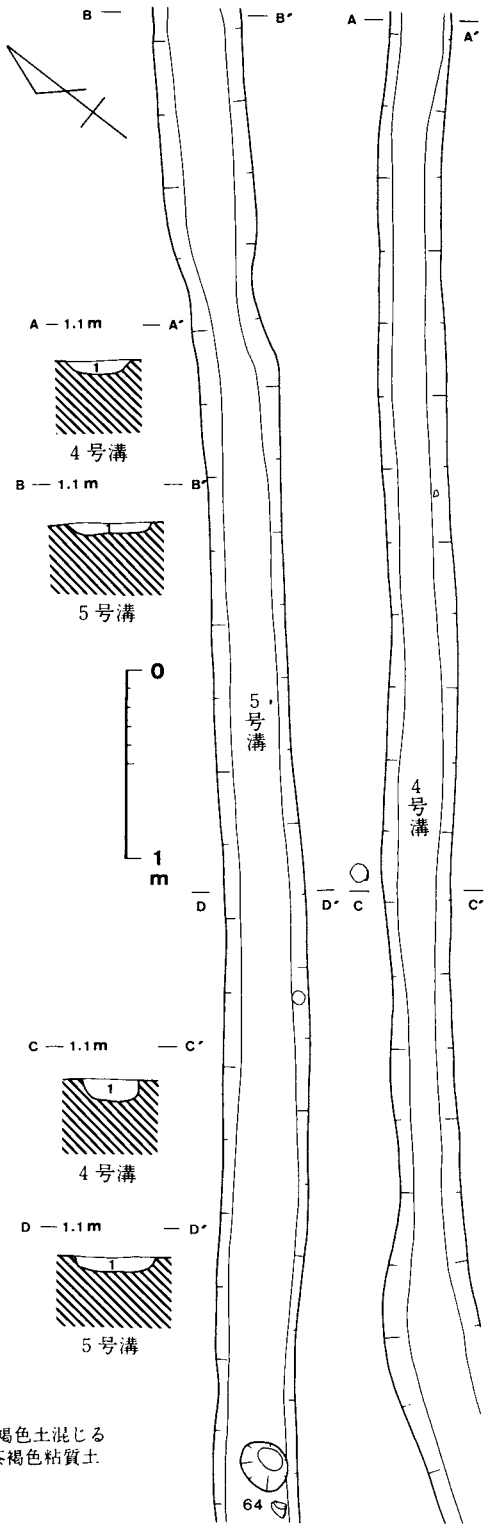
D区のほぼ中央、東南東から西北西に走る。南端は調査区外へ伸び、北端は2号落ちこみにつながる。直線的に走るが幅は0.9～1.4mで南壁に近づくにつれて徐々に広がる。断面形はきわめて偏平な逆台形状を呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。2号落ちこみとの先後関係は層位ではわからない。覆土は1層、地山ブロックを含む黒褐色粘質土である。遺物は弥生～古墳時代の土器と碧玉チップ・原石や火山礫凝灰岩の剝片らしきものが出土している。第6図でみるとT区2号溝とつながる同一のもので、ほぼ直角に曲がる周溝と推定できる。方形周溝（墓）の可能性もあるので、遺構の性格については第4章で改めてふれたい。

**3号溝出土遺物**（第40図57～63）

すべて弥生時代末～古墳時代初めの土器である。57～60は甕形土器である。いずれも有段口縁




第38図　D区3号溝（S＝1/40）




第39図　D区4号溝・5号溝（S＝1/40）

をもつが、その形態は異なる。また、60を除いては全体に厚手なつくりという感じである。57は口径15cm、口縁帯がほぼ直立し、端部は弱い面をとる。口縁部は無紋で強いヨコナデを行うのみである。頸部の調整は外面ハケ、内面は口縁部との境にのみハケ、他の部分にはヘラケズリを行っている。58は頸部の屈曲が弱く、厚手のつくりでずんぐりした感じである。口縁帯はわずかに外反し、端部は先細りとする。調整は口縁部ヨコナデ、頸部は外面ハケ・内面はより粗いヨコハケを行う。擬凹線紋は多条だが、所々摩滅している。胎土は砂っぽく、他のものとやや異質な感じを受ける。59は57とよく似る土器で、端部は内面下がりの面をとる。口縁帯に走る条は擬凹線紋というより強いヨコナデである。60は口径13cmと小型で薄手のつくりであり、口縁の段は明確である。口縁帯はわずかに外反し、端は細める。61・62は底部である。ともに平底だが、61のほうが安定する。63は蓋形土器である。ゆるやかにそり返って開く笠型の蓋に円筒のかえしを付けたもので、ほぼ完形品である。摘み径2.5cm、蓋縁径8.5cm、かえし径6.4cm、器高5.7cmを測る。蓋縁は端部で面をとり、内面に折り返し気味におさめる。調整は外面ヘラミガキ、内面はかえしにハケをのこすほかはナデである。赤彩痕を各部にのこしている。

**4号溝**（第39図）

D区の中央部、南西から北東方向にほぼ直線的に走り、両端は完結する。隣接する5号溝とはほぼ並走する。検出面で幅0.3～0.5m、深さ0.07～0.11mを測り、伸びている長さは約14mである。覆土は1層、黒褐色土が混じる茶褐色粘質土である。遺物は、遺構内では時期不明の土器小破片しか出土していないが、5号溝との中間の地山直上で平安時代の土師器が出土している。

**5号溝**（第39図、出土遺物　第40図64）

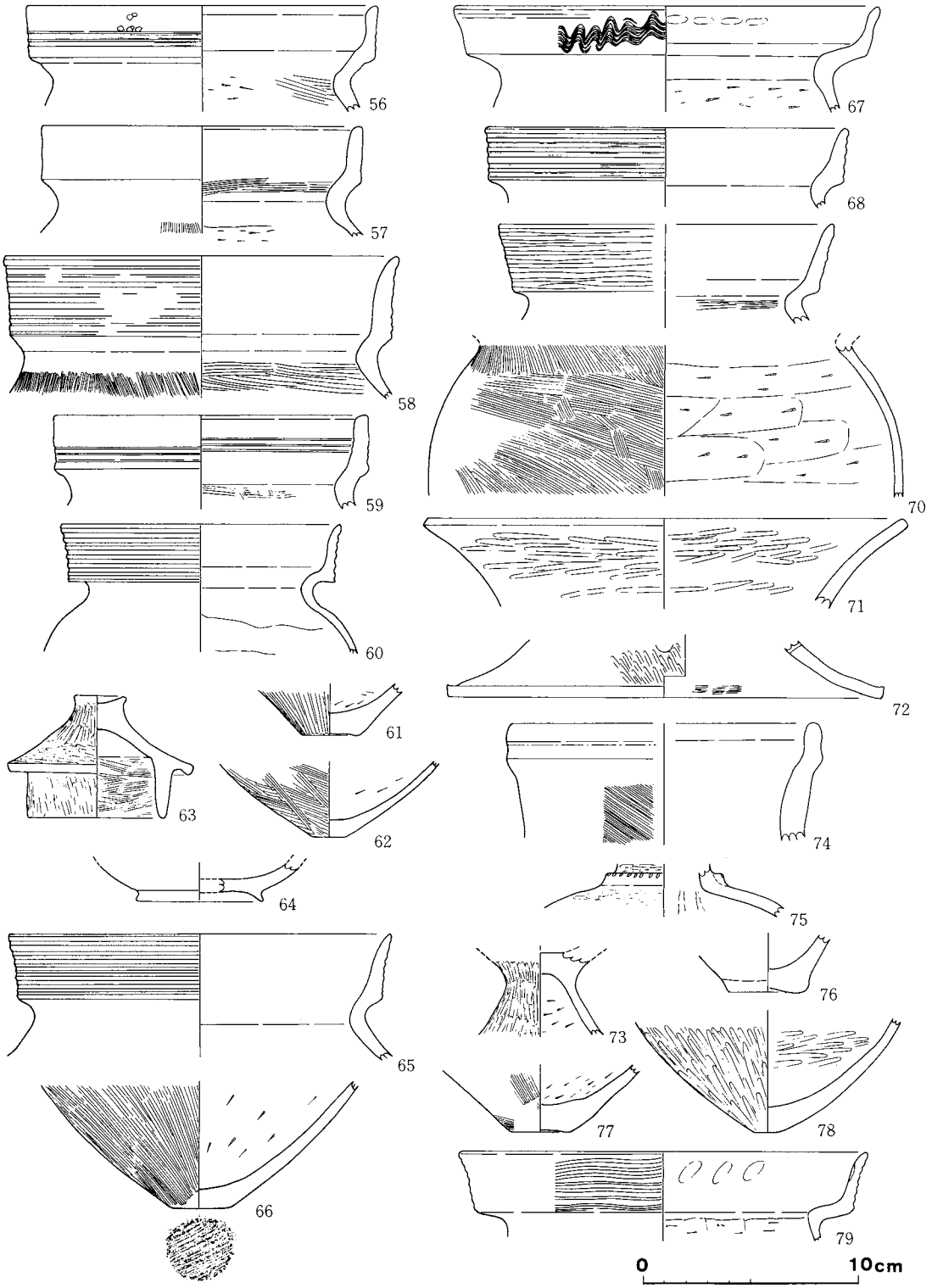
D区の中央部で検出し、隣接する4号溝にほぼ並走する。北東端は完結し、南西端は7号溝や2号落ちこみと切り合う。遺構間の先後関係は層位からはわからない。溝内には長径0.28m×短径0.23mの楕円形の掘り込みを有する。検出面で幅0.33～0.47m、深さ約0.07m、伸びている長さ約13mを測る。覆土は1層、4号溝と同じく黒褐色土が混じる茶褐色粘質土である。遺物は古代の土師器のほか、弥生～古墳時代の摩滅した土器が出土した。本遺構は2号落ちこみ、7号溝と覆土が異なりまた出土遺物も新しい時代のものが主であることから、2号落ちこみ・7号溝を切って古代に造られ、機能したものと考える。4号溝も本遺構と同じ覆土であるから、ほぼ同じ年代が与えられよう。64は土師器有台椀の底部である。断面三角形の低平な高台は径6.5cmを測る。胎土はきわめて精良である。平安時代後半、10世紀後半～11世紀前半に位置付けられよう。

**6号溝**（第41図、出土遺物　第40図65・66）

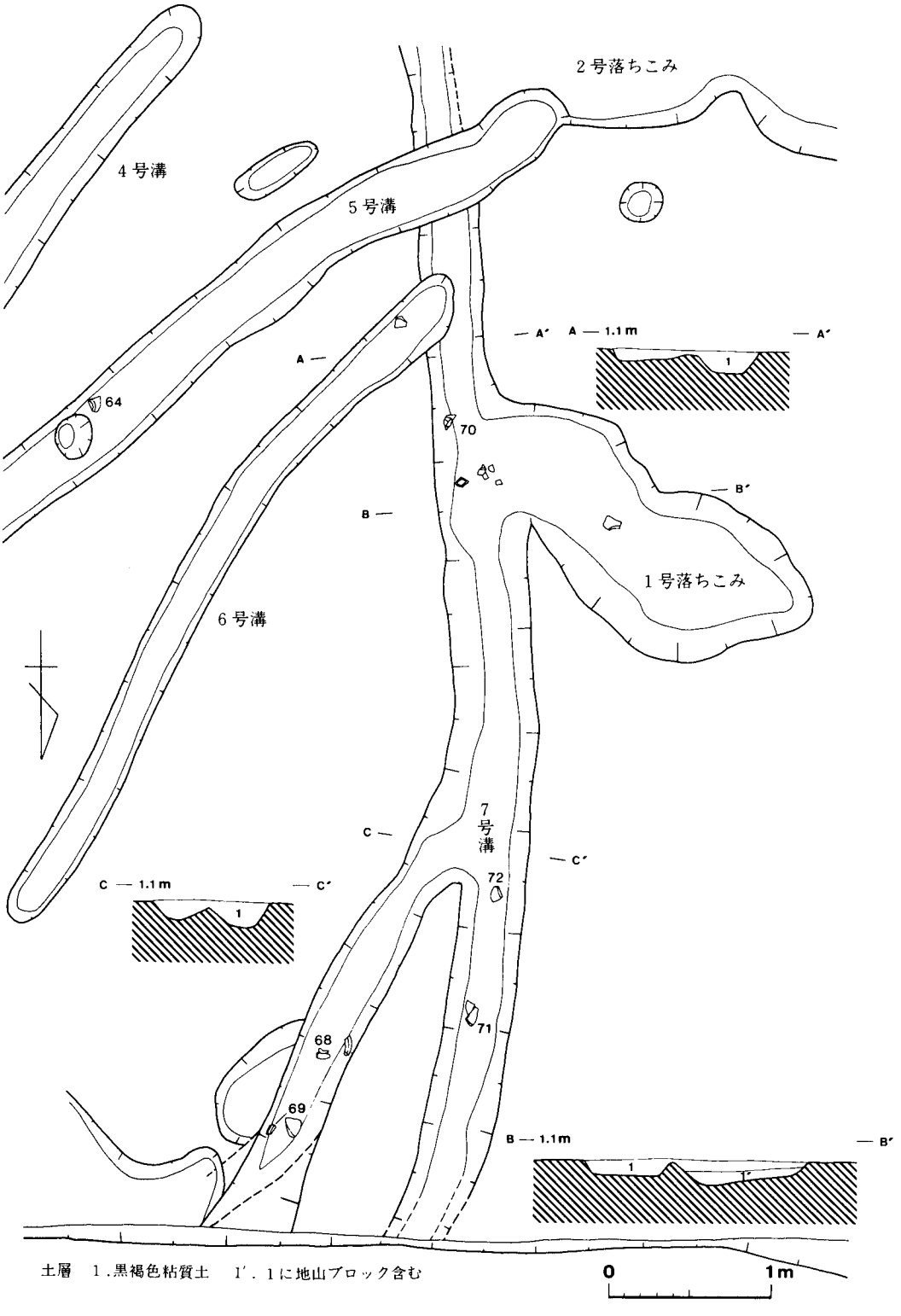
5号溝と7号溝に挟まれるかたちで、南西から北北東方向にやや孤状に走り、北端は完結するが南端は7号溝と切り合う。検出面で幅0.25～0.35m、深さ0.07～0.09m、伸びている長さ約4.9mを測る。覆土は1層、7号溝と同じ黒褐色粘質土で、先後関係は層位からはわからない。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器が出土している。65は甕形土器、有段口縁を呈し、口径18cm、内面の段は弱い。口縁帯はわずかに外反し、端部は先細りする。66は平底の底部である。

**7号溝**（第41図）

D区のほぼ中央を南北方向に走る。溝の北部は二股にわかれ、調査区外へ伸びる。中央部には




第40図　D区出土遺物(4)（S＝1/3）




第41図　D区7号溝（S＝1/40）

1号落ちこみが付属している。溝の南部は6号溝と切り合い、その先は3号溝・5号溝・2号落ちこみと複雑に切り合う。検出面で幅0.35～0.75m、深さ0.1～0.15mを測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は1層、黒褐色粘質土である。遺構間の切り合いは層位では不明確で、前述した5号溝のみが後出のものとわかる。遺物は弥生時代末～古墳時代初めの土器多数のほか、第42図2の碧玉の管玉未製品や、チップ・原石、フイゴの羽口と推定するものが出土している。

**7号溝出土遺物**（第40図67～78）

67～70は甕形土器である。67～69は有段口縁を呈するものである。67は口径19.6cmとやや大型、頸部の屈曲は強い。短い口縁帯は外傾し、わずかに外反する。口縁帯は強いヨコナデにより中凹みし、端部は丸まる。口縁帯外面に4条の波状紋を施す。擬凹線施紋具で引いたものだろうか。68の有段口縁は内面では無段で、短い口縁帯はほぼ直立し、端部は細く丸まる。69は口径15.5cm、口縁帯は直線的に外傾し、端部は先細る。擬凹線紋は7～8条で、1本の幅が広く、引き方は雑である。70は胴部である。71は器台か高坏上半部だろう。口縁部は大きく外反し、端に面をとる。調整は内外面ともヨコヘラミガキである。72・73は高坏形土器であろう。72は脚部、大きく外反する器型で、端部に垂直に面をとる。73は坏口縁部と脚部を欠くものである。脚部内面の調整はヘラケズリである。74・75は壺形土器であろう。74は口縁部に強いヨコナデを行い、有段状とする。75は頸部か。凸帯をもち、その端にヘラ状具による斜めの刻みを巡らせる。76～78は底部で、いずれも平底である。78は矮小な平底で、内外面ともヘラミガキ調整を行う。

**1号柱穴**（第33図）

D区北壁の東側、5号溝のすぐ東隣りに検出した。検出面で径約0.5mの円形を呈し深さは約0.3mを測る。柱痕は径0.2mほどで、木柱が残存していた。覆土は3層、上層が灰褐色土、下層が暗灰褐色粘質土で、柱痕には上層とよく似た灰褐色粘質土が堆積する。弥生～古墳時代の土器小破片が出土した。

**2号柱穴**（第33図）

1号柱穴のすぐ東でより北壁に寄る位置にある。約半分が欠損するが、径約0.3mの円形で、柱痕は径約0.2mである。検出面からの深さは掘り方で約0.07m、柱痕の底で約0.2mを測る。覆土は1層、黒褐色粘質土である。碧玉原石を出土している。

**3号柱穴**（第33図）

D区南東隅近くで、南壁に寄って検出した。半分は欠損するが、径約0.6mの円形で、検出面からの深さは約0.4mである。掘り方・柱痕ともはっきりしない。覆土は2層、黒褐色粘質土と、黒褐色粘質土混じりの黄褐色土である。後者は地山崩壊土であり、前者の部分が柱痕になるのだろう。弥生～古墳時代の土器小破片が出土している。

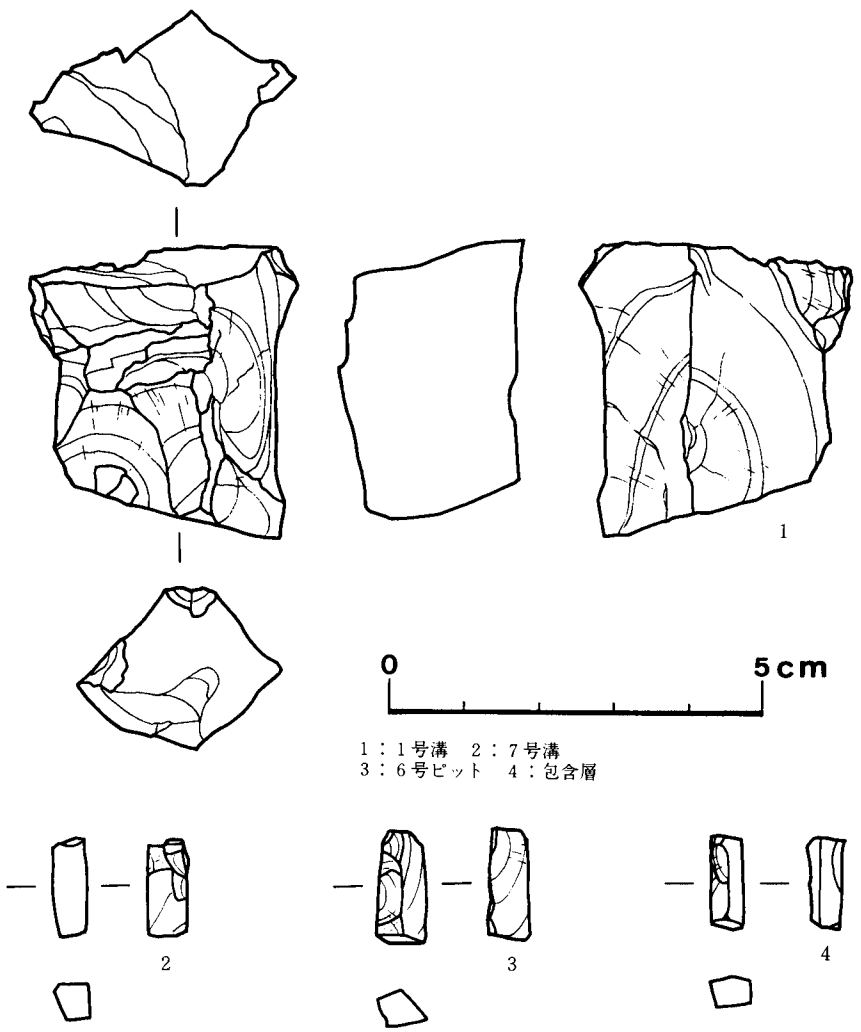
**4号柱穴**（第33図）

D区南東隅近くで、東壁に寄って検出した。3号柱穴とは約3mの間隔がある。半分を欠損し平面形は不明であるが、隅丸の台形と推定した。現状での最長辺約0.75m、検出面からの深さは掘り方で0.15m、柱痕の底で0.25mを測る。覆土は2層、柱痕部が黒褐色粘質土で、他は黒褐色粘質土混じりの黄褐色土である。覆土は3号柱穴とほぼ同じで、間隔も適当であることから、両

者が同じ掘立柱建物の柱穴である可能性は高いといえよう。時期不明の土器小破片が出土した。

ピット（出土遺物　第40図79、第42図３）

多数あるが、遺物を出土したものに関して番号を付けた。１号～８号ピットまである。２号ピット・７号ピット出土土器は摩滅した小破片であり時期不明である。１号ピット・３号ピット・８号ピットからは少量の弥生～古墳時代の土器が出土した。４号ピットからは平安時代の土師器とフイゴの羽口らしきものが出土した。５号ピットからは弥生～古墳時代の土器のほか、フイゴの羽口らしきものが出土している。６号ピットからは碧玉を多く出土している。管玉未製品と推定するもの１点のほか、チップ・原石がある。第40図79は１号ピット出土の弥生時代末～古墳時代初めの甕形土器である。口径19cm、有段口縁を呈し段は明確である。口縁帯はゆるく外反し、外面には曲がった擬凹線紋７条を施し、内面には約1.5cm毎に指頭圧痕をのこしている。第42図３は碧玉製の管玉の未製品である。出土遺物で図化できたものは以上の２点のみである。




第42図　D区出土遺物（玉類、S＝1/1）

包含層出土遺物（第37図39～49）

弥生～古墳時代の土器、古代の土器、中世の土器・陶器、フイゴの羽口と推定するものが出土している。39～46は弥生時代末～古墳時代初めの土器である。39は甕形土器である。口径20cm、「く」字口縁の端部を肥厚し、なでて垂直な面をとる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部は外面ハケ・内面ヘラケズリを行っている。端部の擬凹線紋は2条である。40は有段口縁の壺形土器である。内外面ヘラミガキ調整を行い、さらに内外面とも赤彩する。40の胎土は砂礫をあまり含まない精良なものである。41は台付土器底部である。器面調整は、土器身の部分は内外面ともヘラミガキ、台部はハケかナデを行っている。42は台付鉢か。口径19.5cmを測る。椀状にゆるく内湾し、口縁端部は細める。調整は内外面ともヘラミガキである。42の胎土も甕類より精良なものである。43～45は高坏形土器脚部である。43は円柱状の脚で、裾の形状はわからない。44は大きくそって開く脚部で器高が低いものである。45は脚裾部で端は面をとり下方へ尖る感じになる。壺等の口縁部の可能性もある。46は壺底部であろう。きわめて薄手の平底である。胎土は砂礫が少なく精良なものである。47・48は古代の須恵器である。47は長頸瓶の口縁部のつけねである。胎土には細かい砂礫を多く含む。48は甕形土器胴部で、外面に平行タタキ、内面に上から同心円タタキ、ハケ、平行タタキを行っている。胎土は砂っぽく、径2㎜大の石英を少し含む。47・48は奈良時代におさまり、9世紀以降に降るものではない。49は土錘である。長さ3.5cm×厚さ4.5cmのほぼ球形で、孔は断面形が細長いものである。

D区出土玉類（第42図）

1は1号溝出土の碧玉原石である。長さ3.9cm、幅3.6cm、厚さ2.5cm、重さ31.8ｇを測る。2～4は碧玉製の管玉未製品である。2は7号溝出土で、長さ1.5cm、厚さ0.6cm、重さ0.5ｇである。3は6号ピット出土で、断面形は菱形を呈する。長さ1.5cm、厚さは最大で0.7cm、重さ0.5ｇである。4は包含層出土で、長さ1.4cm、厚さ0.5cm、重さ0.3ｇである。石質は摩滅してやや軟質である。4はもっとも整った四角柱であり、より調整加工が進んだ段階のものであろう。

## 3．小　結

遺構は中央部でのみ複雑に切り合い、他の部分の密度はそう高くない。時期的には弥生時代末～古墳時代初め・平安時代後半・中世と断続的な三期に分けることができる。1～4号土坑・溝・落ちこみなどほとんどの遺構は弥生時代末～古墳時代初めに帰属し、D区の中心時期といえる。平安時代後半に4号溝・5号溝、中世に5号土坑が造られ機能したと推定する。4号溝・5号溝についてはほぼ平行して走る浅いものであることから、古代の畝溝と考える。5号土坑は調査中終始湧水していたことから素掘りの井戸とも考えたが、周辺自体が湧水地帯でもあり、井戸の存在は疑問であるので断言はできない。弥生時代末～古墳時代初めの遺構は、他区よりも集中して存在する傾向にあり、二段掘りの3号土坑を初めとして碧玉を多く出土したことは注目できる。また、3号溝や2号落ちこみはT区の遺構とつながる可能性が高く、同一のものとすれば方形の周溝(墓)とも考えられよう。また、遺構間で接合する土器がかなりあるが、遺構が後世に削平を受けた際に散乱し混入したとも考えられる。その性格や機能については慎重な検討が必要であろう。

## 第5節　E区の遺構と遺物

### 1．概　要

県営住宅団地ではもっとも南側のD・E棟の部分である。調査区中央に用水路による攪乱が南北に走っており、攪乱から西をE区とした。第2次調査の調査区である。

基本層序は、旧耕土を削平され、上層から灰褐色粘質土（旧耕土に対応する床土も含む）、第2層褐色粘質土（包含層）、地山となる。遺構は、土坑1基、溝2本、大溝1本のみと少ない。出土遺物もパンケース1箱に満たなかった。

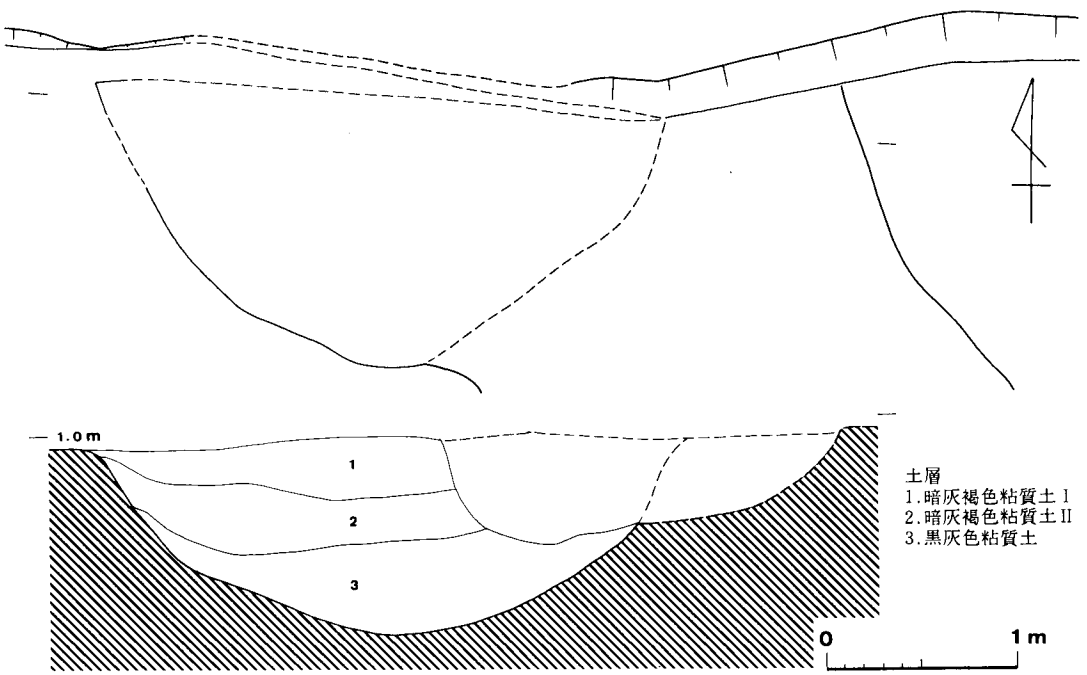
### 2．遺構と遺物

**土坑**（第43図、出土遺物　第46図1）

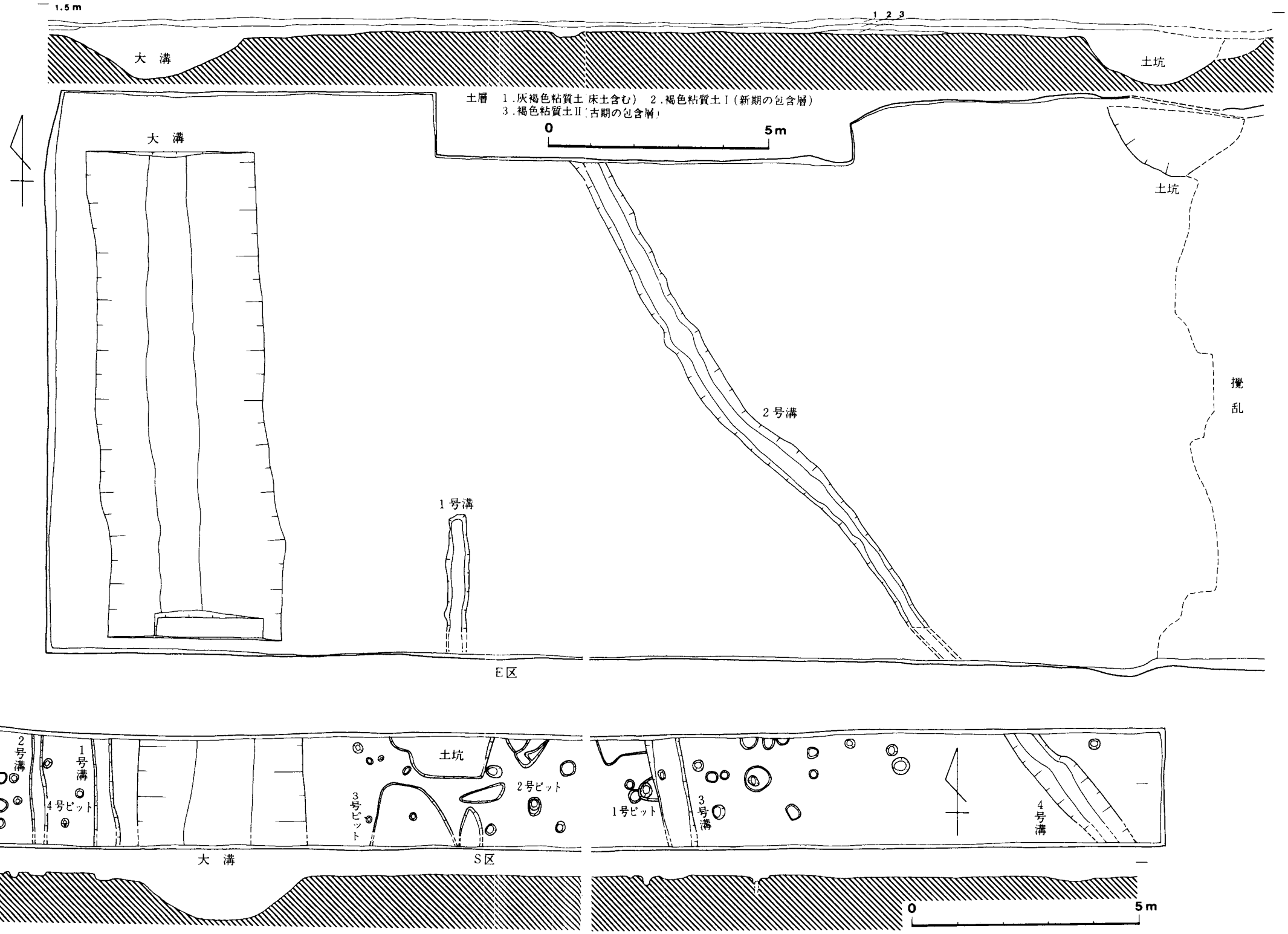
E区北東隅、攪乱のすぐ脇で検出した。遺構は約半分が攪乱に切られており、平面形は不明である。現状での最大幅は約3mと推定する。検出面からの深さは1.05mを測る。断面形はゆるやかな半円形をなすものか。覆土は3層で、上層から暗灰褐色粘質土Ⅰ、暗灰褐色粘質土Ⅱ、黒灰褐色粘質土となり、下層ほど粘度を増す。少量の弥生～古墳時代の土器が出土した。第46図1は弥生時代末～古墳時代初めの甕形土器である。有段口縁を呈し、口径18.2cm、少し外傾しながら直接的に立ち上がる器型である。口縁部は内外面をヨコナデし外面は擬凹線紋を8条施す。

**1号溝**（第45図）

検出面での幅0.45m、深さは0.11mを測り、ほぼ南北方向に伸びている。断面は不整な逆台形状となる。覆土は1層、黒褐色粘質土が堆積する。弥生～古墳時代の土器小破片が出土した。




第43図　E区土坑（S＝1/40）




第44図　E区・S区　全体図（S＝1/100）

2号溝（第45図）

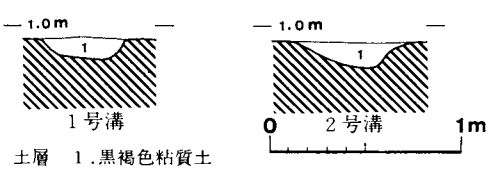
検出面での幅0.6m、深さは0.13mを測り、北西から南東方向に走る。断面は東端が深くなる逆三角形状となる。覆土は1層、1号溝と同じく、黒褐色粘質土が堆積する。第6図で見るように、S区4号溝とつながる同一のものであろう。遺物は出土しなかった。

大　溝

E区西端、ほぼ南北方向へ走る。検出面では、幅3.6m～3.9m、深さ約1mを測る。下端の角がとれたゆるやかな感じの掘り込みである。覆土は上層の土を多く含むもので、より上層から掘り込まれたものと推定できる。すなわち中世以降の年代が与えられよう。第6図で見るように、G区大溝、S区大溝とつながる同一のものであろう。層序は第47図・第50図を参考にしてほしい。遺物は弥生～古墳時代の土器、古代の土器、中世の土器、土錘などが出土している。

大溝出土遺物（第46図2～15）

2～4は弥生時代末～古墳時代初めの土器で、すべて甕形土器である。2は胴部破片である。摩滅しており外面の調整は不明だが、内面はヘラケズリを行ったようだ。肩部と推定するあたりにハケ状具による斜め方向の刻みを行う。列点紋状に巡らしたものだろう。3・4は有段口縁の甕である。3は口径15.4cmで、弱く外反し先端を細くおさめる器型である。摩滅しており調整等は不明であるが、口縁帯外面には擬凹線紋を数条施し、内面には指頭圧痕を巡らしていることは確認できる。4は口径17cm、3よりもっと摩滅しており、擬凹線紋の有無さえわからない。5～14は古代の土器。5～9は須恵器で、調整はいずれも内外面ロクロナデを行う。5は有台坏の口縁部で、口径12.7cmを測り、やや外反する器型である。端は先細らせるが丸くおさめる。胎土は長石等砂礫を含む。6・7は無台坏である。どちらもヘラ切り離しの底部で、口縁部を欠く。胎土はわずかに砂礫を含む。6は底径10cm、7は底径9cmを測る。7は底部に墨書を行っているが判読できない。8は台付壺の底部で、径10cmを測る。強いロクロナデを行うもので、つくりだした面は中凹みになり、全体にシャープな感じをもっている。器面は外面のみ自然釉がかかっている。胎土は精良だが砂っぽい。9は高坏の脚部であり、底径9.8cmを測る。器型は、ラッパ状に広がり裾端は垂直に面をとる。胎土は細かい砂礫を多く含み、それが器面に浮き出る。坏と接合する部分の近くには、内外面ともに絞った痕跡がのこる。脚の中ほどには沈線を2条施すが、その下に強いロクロナデによる沈線状の凹凸がのこる。器面は外面のほとんどと内面の下半に自然釉がかかっており、焼成時の安置状態が推測できる。9は7世紀前半、5は8世紀の前半、8は8世紀の後半、6・7は9世紀前半の所産であろう。10・11は土師器有台椀で内面黒色処理を行うもので、ともに底部のみ残存する。胎土はどちらも砂礫をわずかに含むが精良である。10は底径6cmを測る。高台は断面三角形でそれ自体は器高の低いさり気ない感じである。底部はほぼ中央に穿孔を行っている。11は底径7.8cmを測る。外面は赤彩痕、底部は糸切り痕がのこる。後付けの高台は断面三角形だが、10に比して器高が高く鋭い。10・11は平安時代後半、10世紀を前後する年代が与えられよう。12～14は中世土師器の無台皿で、底部

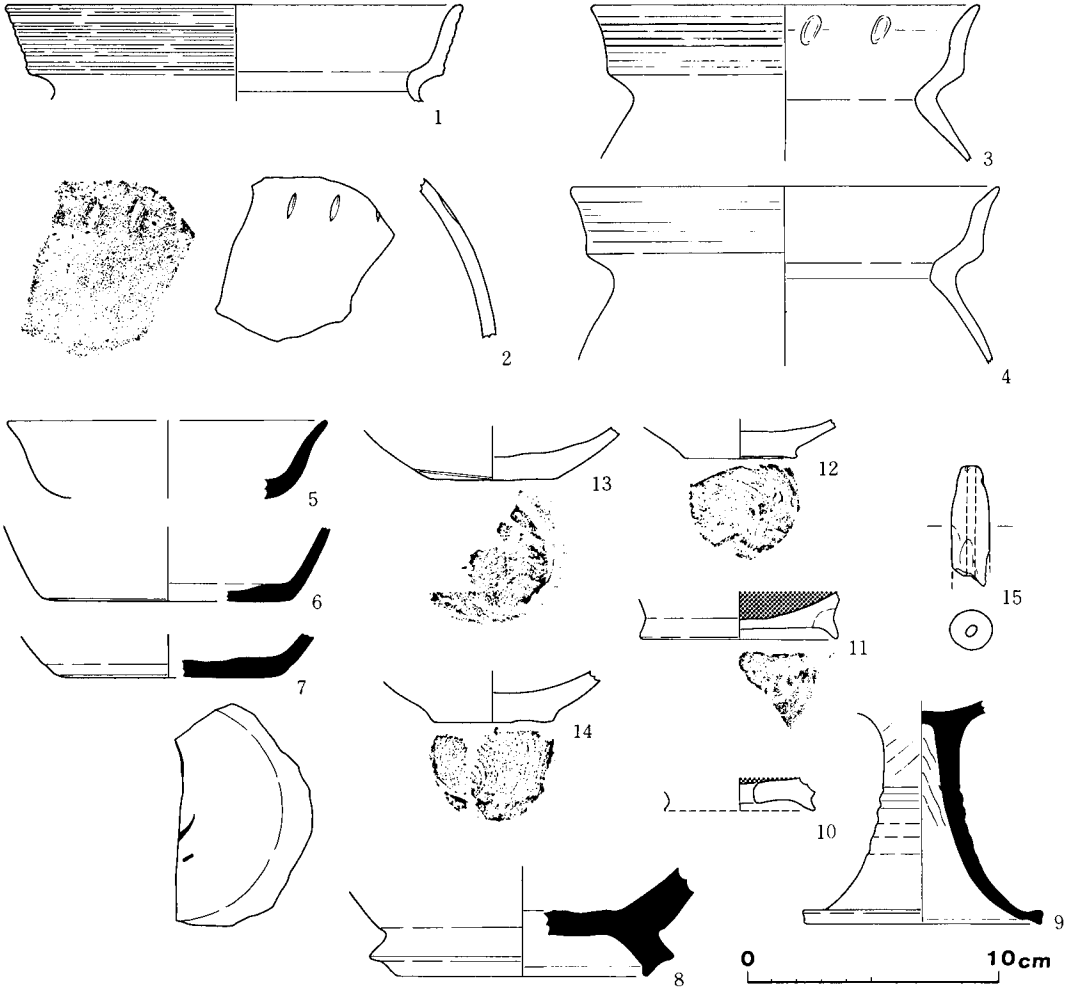



第45図　E区1号溝・2号溝層位（S＝1/40）

はいずれも糸切り離しを行う。いずれも底部のみ残存する。12は底径4.5cm、底を2枚の円盤接合でつくった痕跡がある。平高台と呼ぶべきか。胎土は精良である。13は底径5.2cm、摩滅している。胎土は少し砂礫を含む。14は底径4.9cmを測る。胎土は細かい砂礫を多く含む。12～14は中世初めごろ、12世紀前半の所産であろう。15は土錘である。半分を欠損し、現存長4.8cm、最大厚1.7cmを測る。孔は断面で長径5cm×短径4cmの楕円形である。

## 3．小　結

溝2本は覆土や出土遺物から判断して、弥生時代末～古墳時代初めのものである可能性が高い。大溝はC区大溝と同様に農業用水路と考えてよかろう。遺物は弥生末のものから古代末～中世のものまでが出土しているが、軟質なものはすべて摩滅しており、流水を考えると時期決定の参考にはならないであろう。C区大溝とある程度離れ、ほぼ流れの方向が同じであることから、同時期に使用されていたものと考え、時期は中世以降としたい。このように遺構はきわめて少ない。A～T区全体でみると、E区を含む西半は遺構密度が希薄なようである。




第46図　E区出土遺物（S＝1/3）

## 第6節　F区の遺構と遺物

### 概　要

A区とG区の中間に位置する長方形の調査区で、敷地北端にもっとも近接する。南北約18m×東西約9mである。旧建物の基礎コンクリートによる攪乱が大きく、南半ではそれにより調査区が分断されている。基本層序は他区と大きく変わるものではないが、地山検出面の標高は0.8～0.9mを測り、他区より0.1～0.2m低くなる。全体に低湿な地区であり、調査中も土が乾燥することはなかった。そのためか、遺構は確認できず、遺物は近世以降と推定される陶磁器の小破片を採集したに過ぎなかった。第2次調査の調査区である。

F区調査風景

# 第7節　G区の遺構と遺物

## 1．概　要

最も西に位置する団地棟部分で、南北32m×東西13mの長方形の調査区である。第1次調査の調査区である。

基本層序は、A区・B区と同じく上層から第1層盛土・旧耕土、第2層床土、第3層暗灰褐色粘質土、第4層褐色または暗褐色粘質土、第5層濁黄褐色粘質土、地山となる。遺構は土坑2基、溝4本、大溝1本、ピットがある。大溝は調査区のほぼ中央を南北に走り、G区北部に至っては東西方向に走る大溝との交差路となり、G区はほとんどがこの大溝で占められる。人力で全掘するのは不可能なため、部分的にたちわって層位断面を確認するにとどめた。その他の遺構は主に調査区中央から南部にかけての大溝両岸で検出した。大溝を除いて、壁面・遺構の層位断面は特に実測しなかった。遺物はそのほとんどが大溝から出土したが、量は少なく、パンケース1箱に満たなかった。

## 2．遺構と遺物

### 1号土坑

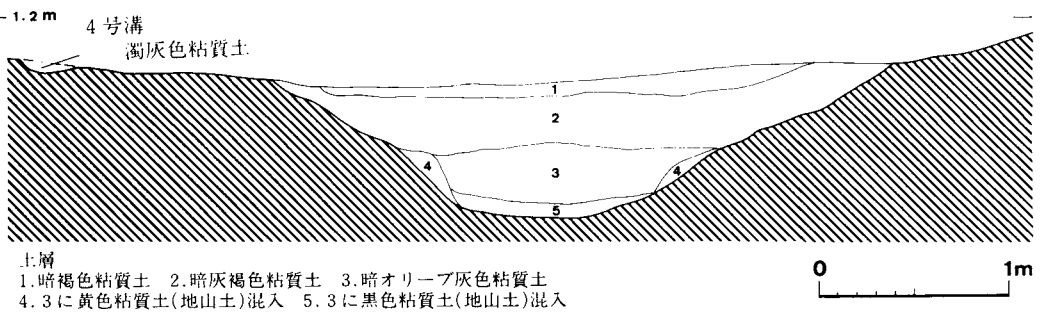
G区北半、大溝の西岸で検出した。2号土坑・4号溝と切り合っているので全形は不明だが、現状では方形もしくは長方形、という印象を受ける。検出面からの深さは0.07mを測る。土坑内にはピット状の掘り込みを2穴有し、西側のもので深さ0.25m、東側のもので深さ0.05mである。遺物は、弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。

### 2号土坑

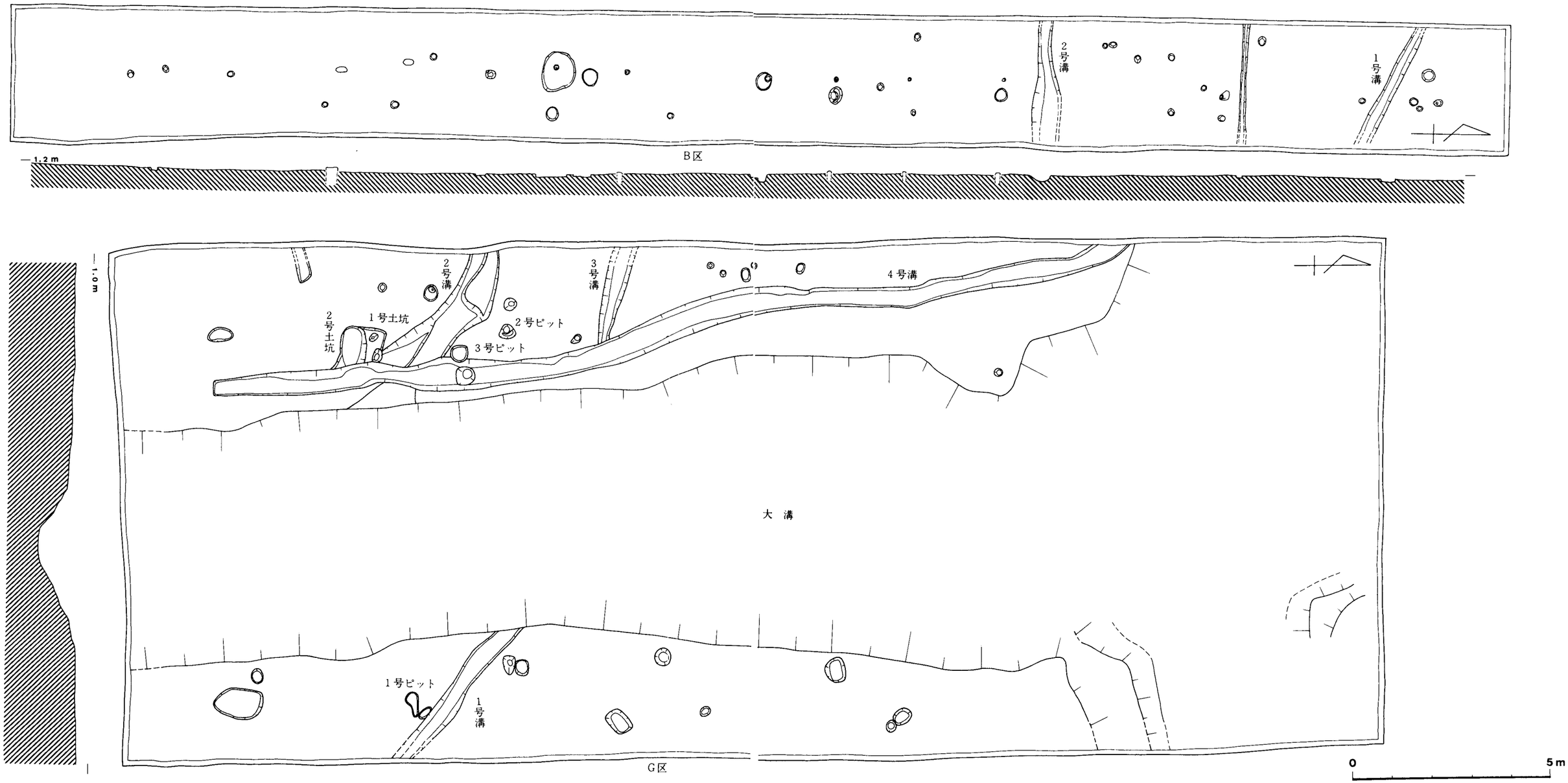
1号土坑のすぐ南に切り合って存在する。4号溝とも切り合っているが、全形はある程度推定できる。現状では長辺1.1m×短辺0.55mの隅丸長方形の平面形で、深さは0.45mを測る。遺物は、弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。

### 1号溝

G区南半、大溝の東岸で検出した。南東から北西方向へ走る。東端は調査区外へ伸び、西端は大溝に切られる。検出面で幅0.4～0.55m、深さ0.05～0.1mを測る。覆土は1層、黒褐色粘質土である。弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。




第47図　G区大溝層位（S＝1/40）




第48図　B区・G区 全体図（S＝1/100）

**2号溝**

G区南半、大溝の西岸で検出した。南東から北西方向へ走り、平面図で見るかぎり、やや弧状を呈する。東端は4号溝や1号土坑と切り合い、西端は調査区外へ伸びる。溝内にはテラス面をもつ部分や、さらに落ちこむ部分がある。検出面で幅0.75～1.1m、深さは最深部で0.11mを測る。覆土は1層、黒灰褐色粘質土である。遺物は少量だが、弥生時代初めの土器、弥生～古墳時代の土器、碧玉チップが出土した。

**3号溝**

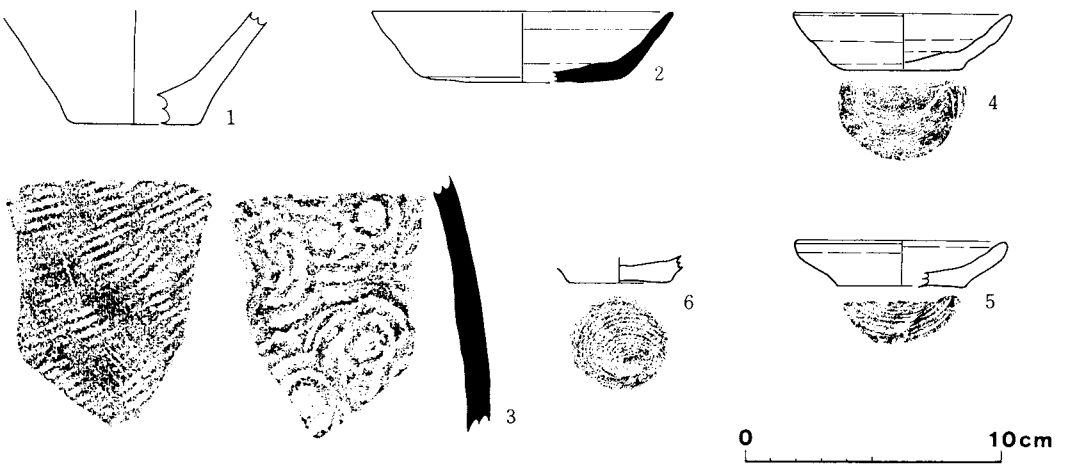
G区南半、大溝の西岸で、2号溝より北に位置する。ほぼ東西方向に走るが、やや北西から南東方向に振れる。東端は4号溝に切られ、西端は調査区外へ伸びる。検出面で幅0.3～0.6m、深さは最深部で0.09mを測る。覆土は1層、明黒灰色の砂っぽい粘土である。弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。

**4号溝**

G区北半、大溝西岸に位置し、大溝のクランク部分からG区南半にかけて，北北西から南南東方向に走る。大溝にほぼ並走する格好で、北端は大溝に切られるが、南端は完結する。1号土坑、2号土坑、2号溝、3号溝、3号ピットと各部分で切り合う。溝内にピット状の掘り込みを有する。検出面で幅0.4～0.85m、深さ0.05～0.15mを測る。覆土は1層、黒灰褐色粘質土である。弥生～古墳時代の土器の小破片が出土した。

**大溝**（第47図）

G区を南北に走るかたちで検出した。北部では東西に直交する大溝と交差し、十字状になっているようである。たちわり部分で確認した断面形と層位は角張らずにゆるやかに落ちこんでいる印象を受ける。地山検出面で幅約3.3m、深さ約0.7mを測る。覆土は基本的にこの状態で2層、上層から第1層暗灰褐色粘質土、第2層暗オリーブ灰色粘質土である。最上層の暗褐色粘質土は、溝が埋まった後でその上に流れこんだものだろう。底面に堆積する地山混じりの土は崩壊土であろうか。本溝は第6図で見るようにE区大溝・S区大溝とつながる同一のものであり、それらの層位を参考にすると、実際に大溝が機能していた時点の地表は基本層序の第3層（A区では




第49図　G区出土遺物（S＝1/3）

中世包含層）の上面であることが理解できよう。遺物は、近世以降の煉瓦質土器、中世の土器、古代の土器のほか、弥生時代初めの土器、弥生～古墳時代の土器、碧玉チップが出土した。

**大溝出土遺物**（第49図）

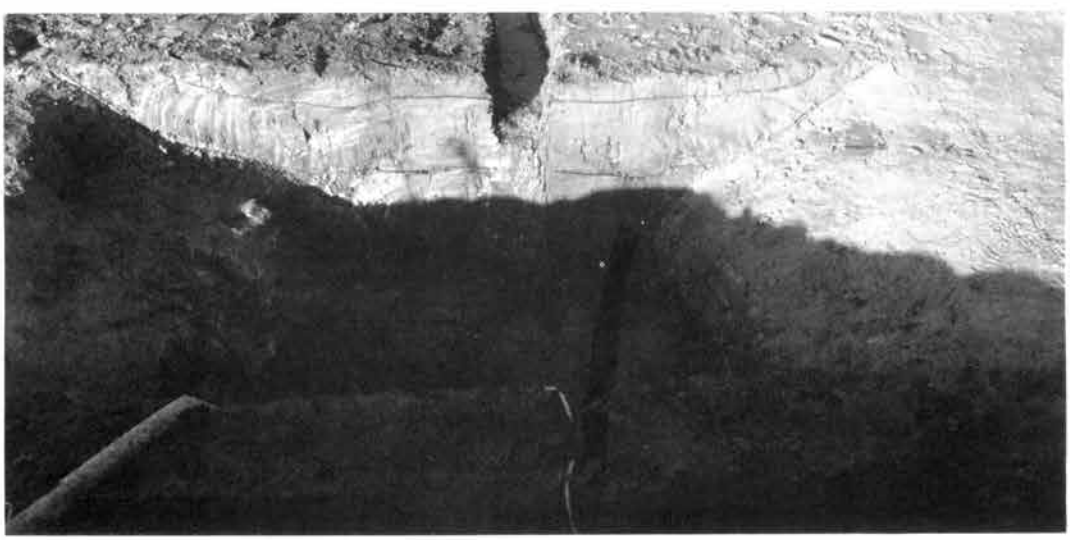
1は弥生時代末～古墳時代初めの土器底部で、底径約5㎝である。厚手なつくりで直線的に外方へ開いていく。摩滅しており、調整は不明である。2・3は古代の須恵器である。胎土はどちらも細かい砂礫を含むものである。2は無台坏で、口径12㎝、底径約8㎝を測る。3は甕胴部で、外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを行う。摩滅はきわめてひどく、溝内をかなり流されたのだろう。2は平安時代前半、9世紀後半の所産であろう。3は摩滅がひどく、時期不明である。4～6は中世の土師器皿である。底部はいずれも糸切り離しを行っている。4は口径8.5㎝、底径4.6㎝を測る。口縁部は強く広がるが短く、2段に分けてロクロナデを行う。胎土は砂っぽいが精良で、色調は淡橙色を呈する。5は口径8.3㎝、底径5.0㎝を測る。口縁部は強く広がるが短くおさまり、端部はロクロナデで面をとる。6は底部のみ残存し、底径4.1㎝を測る。5・6の胎土は砂礫を多く含むものであり、その色調は茶褐色を呈する。4～6は中世初め、12世紀前半の所産であろう。

**ピット**

遺物を出土したものは3穴あり、それぞれ1～3号ピットとした。それぞれ弥生～古墳時代の土器の小破片を出土している。

## 3．小　結

1号土坑・2号土坑、1～4号溝については弥生時代末～古墳時代初めのものと考えたい。G区はほとんどを大溝が占めており、大溝の北部は他方向からの大溝が結合している。これは同様の大溝が周辺に巡っていることを証明するものであり、C区大溝と同様に中世以降の農業用水路と考えてよかろう。近接するB・E・F・S区の状況から見て、大溝が築かれる前に多くの遺構が存在したとは考えにくく、G区は遺構の希薄な部分とみてよかろう。



大溝たちわり状態

# 第8節　S区の遺構と遺物

## 1．概　要

団地敷地の南端、東西に走る水路に合わせた東西約27m×南北約2.6mのトレンチ状の調査区である。基本層序は、上層から、第1層盛土・旧耕土、第2層灰褐色粘質土、地山となる。第2層は古代・中世の包含層である。遺構は土坑1基、溝4本、大溝1本、ピットがある。遺物は少なく、パンケース1箱に満たなかった。第1次調査の調査区である。

## 2．遺構と遺物

### 土坑

北壁のほぼ中半部で検出した。北部が調査区外へ伸びるため全形は不明である。最長辺2.3m、深さ約0.08mを測る。小破片であるが、弥生～古墳時代の土器、古代の土器が出土した。

### 1号溝

S区北端、大溝と2号溝の中間に位置し、ほぼ並走する。検出面で幅0.4～0.55m、深さ約0.13mを測る。覆土は3層、上層から鉄分を含む灰褐色粘質土、暗黄灰色粘質土である。遺物は弥生～古墳時代の土器を出土している。

### 2号溝

1号溝の西すぐ近くに位置し、ほぼ並走する。検出面で幅0.2～0.4m、深さ0.05mを測る。

### 3号溝

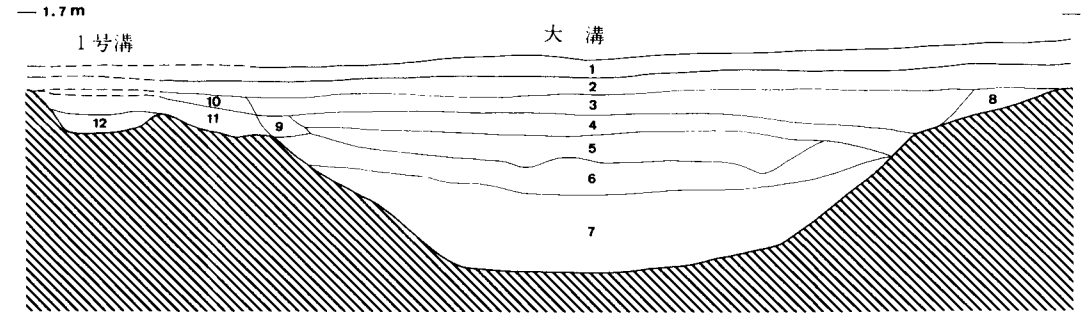
S区のほぼ中央、南北方向に走るがやや北西から南東方向に振る。検出面で幅約0.7m、深さ約0.07mを測る。

### 4号溝

S区の南端、北西から南東方向に振る。検出面で幅0.7～0.9m、深さ0.07～0.17mを測る。第6図で見る通り、E区2号溝とつながる同一のものであろう。

### 大溝（第50図、出土遺物　第51図1）

S区北端に位置し、南北方向に走る。検出面で幅3.6m、深さ約0.95mを測る。断面形は上層からゆるやかな掘り込みがあり、そして逆台形状となる。覆土は基本的に5層、上層から第1層濁灰色粘質土、第2層暗灰色粘質土、第3層暗灰褐色粘質土、第4層地山混じり濁灰色粘質土、




土層
1.盛土・旧耕土　2.灰褐色粘質土(平安時代～中世の包含層)　3.濁灰色粘質土　4.暗灰色粘質土
5.暗灰褐色粘質土　6.3に地山混じる　7.灰色粘質土　8.7に植物遺体入る　9.灰褐色粘質土
10.7に鉄分含む　11.鉄分含む灰褐色粘質土　12.暗黄灰色粘質土

第50図　S区大溝層位（S＝1/40）

第５層灰色粘質土である。第50図８・10・11の層は溝造成時に切られた層と考えたい。もともとの鞍部状流路であったところに堆積していたもので、そこに大溝を造ったのであろう。小破片であるが弥生～古墳時代の土器、中世の土師器が出土している。本溝は第６図で見る通り、Ｅ区大溝、Ｇ区大溝とつながる同一のものである。これらの層位で見るかぎり大溝が機能していた時期の地表面は包含層より上にある。また、溝底からは、図示し得なかったが、箸状木器と中世の土師器皿が出土している。こうした理由から、大溝の機能した時期は中世以降と考えたい。１は弥生時代末～古墳時代初めの壺形土器で、口径10.7cmを測る。有段口縁を呈するが、内面は無段である。ゆるやかに外反する口縁に粘土を貼り口縁帯をつくったのであろう。口縁部は内外面ともヘラミガキ調整であり、頸部内面は指押さえ痕がのこる。

**ピット**

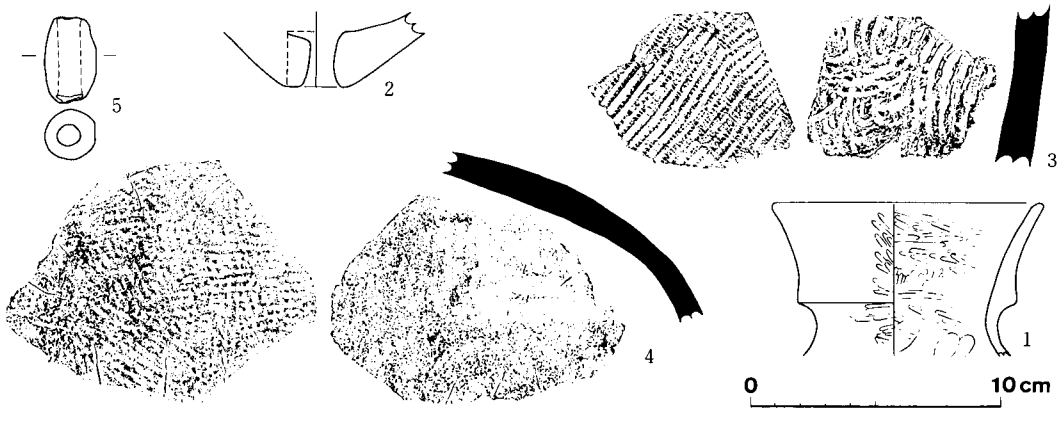
西半部を中心に多数あるが、遺物を出土したものについて番号を付けた。１～４号ピットまである。１号ピット出土土器は摩滅がひどく時期はわからない。２号ピットからは中世の土師器が出土している。３号・４号ピットからは弥生～古墳時代の土器小破片が出土している。

**包含層出土遺物**（第51図２～５）

２は弥生～古墳時代の土器底部である。底径2.5cmで自立は可能、かなり厚手のつくりであり、穿孔を行っている。摩滅しており、調整は不明である。３・４は古代の須恵器。３は甕で、調整は外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを行う。外面の平行タタキはタタキの条の中に、条と直交する木目が観察できる。胎土は細かい砂礫を含む。４は横瓶と推定する。調整は外面は平行タタキ、瓶の張り出し部はナデ、内面は全面ナデを行う。胎土は長石等をわずかに含む。３は平安時代まで降るものではない。４は、外面の平行タタキ内の木目の方向から、３よりさらに遡らせたい[11]。５は土錘である。端をわずかに欠損し、現存長3.4cm、厚さ2.1cmを測る。

## ３．小　結

大溝は中世以降、他の遺構は弥生時代末～古墳時代初めの年代が与えられよう。ただし、土坑については古代の土器も出土しており、明言は避けたい。Ｓ区はＥ区と隣接し、つながる遺構が多い。様相はＥ区とそう変わるものではないといえるだろう。




第51図　Ｓ区出土遺物（Ｓ＝1/3）

# 第9節　T区の遺構と遺物

## 1．概　要

団地敷地の南端、敷地外を東西に走る通学路に合わせた東西37.5m×南北約3mのトレンチ状の調査区である。基本層序は、上層から第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、地山である。第2層は包含層であるが、遺物の含みは少ない。南壁の東半は道路壁構築時の攪乱を受けていた。遺構は溝3本とピット多数がある。パンケース1箱の遺物が出土した。第1次調査の調査区である。

## 2．遺構と遺物

### 1号溝

T区西端に位置し、南北方向に走るが直線的なものではない。検出面で幅1.7～2.3m、深さ0.08mを測る。溝内にはピット状の掘り込みが多数あり、深さ0.06～0.1mのものである。覆土は1層で、暗褐色粘質土であり、その下層は地山土が混じったものが部分的に堆積する。第6図で見るとD区1号溝につながるような印象を受ける。太さの差はあるが、何らかの関係をもつものかもしれない。遺物は、多くの弥生時代末～古墳時代初めの土器の他、剥片らしき石が出土した。

**1号溝出土遺物**（第52図1～12）

1～7は上面から出土した。8～12は遺構内覆土中から出土した。1～4、8～10は甕形土器であり、3が「く」字口縁の他はすべて有段口縁を呈する。有段口縁の甕については、概ね口縁帯がほとんど外反しない直線的なもので、調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は外面ハケメ・内面ヘラケズリを行う、と特徴付けることができる。1は口径22cmと大型、口縁帯の外反は弱く直線的に外傾する感じで、端部は丸める。摩滅しており、調整・紋様等は口縁部のヨコナデと擬凹線紋の最下線以外は不明である。2は口径16.5cm、内面は段が外面ほど明確でない。口縁帯はやや内傾し、端部は丸める。口縁帯外面には6条の擬凹線紋を施す。土器のつくりは雑で、口縁は歪んでいる。焼成前に胎土と質の異なる粘土を継ぎあてた痕跡がのこる。擬凹線紋が継ぎあて部分には施されていないことから、施紋後で焼成前に口縁を破損し、補修したものと考える。3は口径15.1cmと小型で、ゆるく外反する「く」字口縁を呈する。口縁端部は少し突出気味で、先端は細く丸くおさめる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部は外面タテハケ・内面ナナメハケを行っている。内面では頸部の継ぎ目は明確にのこり、粘土をなでつけた盛り上がりがある。外面には煤が付着する。4は口径15.6cm、口縁帯はほぼ直立しており、端部はほぼ水平に面をとる。調整・紋様等は、摩滅しており頸部内面のヨコハケ以外はわからない。8は口径18.5cm、内面の段は弱く、口縁帯はわずかに外傾する程度である。施す擬凹線紋は5条である。器外面には煤が付着する。9は口径16.6cm、段の屈曲は強いが口縁帯は直線的で外傾するのみである。端は丸める。口縁部はヨコナデ調整だが、内面はその他に指頭圧痕を1.5cm毎にのこす。口縁帯は外面に擬凹線紋4条を施すが、曲がっている。器外面には煤が付着する。10は口径16.5cm、きわめて屈曲は弱く、段は角がとれ、全体に丸みを帯びた器型であるが、一応有段口縁とする。直線的にやや外傾する低平な口縁帯は、その下半に強いヨコナデを行い凹ませている。また、その端部はわずかだ

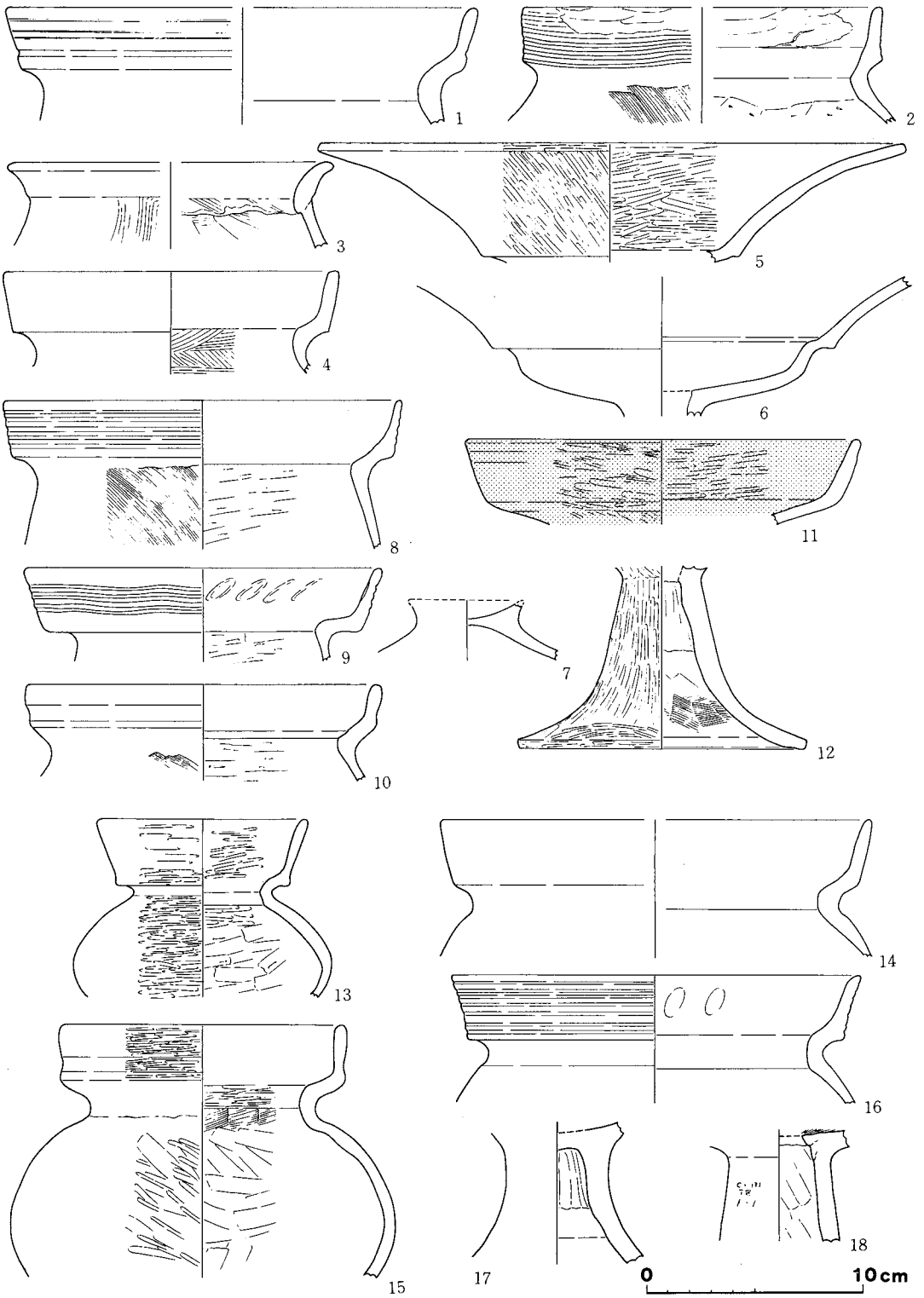
が水平な面とりを行っている。器外面には煤が付着する。5・6・11・12は高坏形土器である。5は坏部で口径27.7cm、坏下半部を欠損する。坏部中位に段をもって屈曲し大きく外反するものである。段部は沈線状の抉りが入る。口縁端部は斜めに面をとる。調整は内外面ヘラミガキを行う。胎土は細かい砂礫を含むが甕類と比べて精良である。D区1号溝・7号溝出土の土器と接合している。6は坏部で口縁端部を欠損する。段部は5よりもさらに強く屈曲する。坏部のバランスとしては段から上半部が下半部よりも長いものである。11は坏部で口径18.2cm、下半部を欠損する。口縁部は直線的に立ち上がり、やや外傾する短いものである。調整は内外面ともヘラミガキを行うが、外面の一部では、一次調整のハケをのこしている。内外面とも赤彩である。胎土は細かい砂礫しか含まない精良なものである。器台もしくは鉢の可能性もある。12は脚部で脚径13.1cm、段はなくなめらかにそり返って開いていき、裾端は垂直に面をとる。調整は外面ヘラミガキ、内面ハケである。坏部に近い部分の内面には絞り痕が観察できる。胎土は砂礫をわずかに含むが精良である。7は蓋形土器の摘みの部分である。摘みの上面は凹む。摩滅しており、調整は不明である。かなり大型のものと推定するが、底部の可能性もある。胎土は石英・長石等の砂礫を含み、甕類と変わらない。

2号溝

T区の中央に位置し南北方向に走るが、平面形はやや円弧を描く。検出面で幅約3.9m、深さは0.05mを測る。2号溝は2本の溝が切り合っているようであるが先後関係は層位で西半が勝つ。西側が落ち込むがレベル的にはほとんど差がない。溝西岸は北方向からの別の溝と切り合っているようだ。溝内には2号ピット、3号ピットがある。その他にもピット状の掘り込みが多数あり、深さ0.05～0.15mを測る。覆土は2層、溝西半に堆積する暗褐色粘質土と、東半に堆積する淡黄褐色粘質土である。第6図で見るとD区3号溝につながるような印象を受ける。また、T区1号溝・2号溝が南側の発掘区外でつながり、周溝となる可能性も考えられよう。遺物は、弥生時代末～古墳時代初めの土器多数のほか、第53図のガラス小玉が出土した。

2号溝出土遺物（第52図13～17、第53図）

13は遺構上面と遺構内の3号ピットから、14は遺構上面から、15・16は遺構内覆土から、17は遺構内の2号ピットからそれぞれ出土した。13・15は壺形土器である。13は口径9.8cm、頸部径6.4cm、胴部最大径12cmを測り、有段口縁を呈する。口縁帯は直線的に外傾するもので、下端はやや突出し、上端部は丸くおさまる。胴部は丸く張り出す球形状のものである。調整は口縁部はヨコナデ後ヘラミガキ、頸部は外面ヘラミガキ・内面ヘラケズリを行う。15は口径13.2cm、頸部径10.4cm、胴部最大径17.8cmを測る。全体に丸みを帯びて角のとれた器型である。口縁部は有段を呈し、その口縁帯はほぼ直立して、端は丸くおさまる。口縁帯外面下半は、強いヨコナデを行い凹ませている。胴部は大きく張り出す球形状のものである。調整は口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、頸部以下は外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ（ミガキとケズリの中間ぐらいの調整）を行う。器外面と口縁内面に赤彩痕を確認した。また、器外面には黒斑、煤の付着を確認している。14・16は甕形土器である。14の口径は20cm程か、小破片のため正確にはいえない。有段口縁を呈し、口縁部はやや外傾する。調整等は摩滅しており不明である。16は口径18.9cm、有段口縁




第52図　T区出土遺物（S＝1/3）

を呈するが屈曲は弱く、口縁部は直線的に伸びわずかに外傾する。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。口縁帯外面の擬凹線紋は1本の幅約1㎜と細く、施紋の仕方は丁寧でない。基本的には7条だが部分によっては10条にもなっている。口縁帯内面には指頭圧痕が確認できる。胎土は砂礫を多く含む。器外面には黒斑や煤の付着を確認している。17は高坏形土器脚部で、裾端と坏口縁部の大半を欠く。摩滅しており、調整等は不明である。坏部に近い部分の内面には絞り目が見える。胎土は石英・長石等の砂礫を含むが、甕類より密度が低い。第53図はガラス製の小玉である。半分を欠損し、長さ5㎜×最大厚5㎜を測る。色調はライトブルーを呈するが、透明度は低く濁った感じである。

**3号溝**

T区の東端、南北方向に走る。溝内は段をつくって落ちこみ、東側が上段、西側が下段となる。検出面で幅1～1.2m、深さは上段で0.05m、下段で0.13mを測る。断面で見ると基本層序の第1層から掘り込まれており、きわめて新しい時期に機能していたことが推定できる。覆土は1層、黄褐色砂質土である。遺物は、小破片であるが、古代の須恵器、中世の土師器、弥生～古墳時代の土器が出土している。

**ピット**（出土遺物　第52図18）

多数あるが遺物が出土したものについて番号を付けた。1～4号ピットまであり、いずれも弥生～古墳時代の土器を出土している。ただし、2号ピット・3号ピットは2号溝内に位置するため、出土土器は2号溝の項にまとめた。第52図18は1号ピット出土の弥生時代末～古墳時代初めの高坏形土器脚部である。調整は、坏部内面にハケが確認できるほかは、摩滅しており不明。充塡した栓もはがれている。他の土器はすべて小破片で摩滅しており、図化できなかった。

## 3．小　結

無数のピットを除けば、検出した遺構は溝3本と少ない。1号溝・2号溝は弥生時代末～古墳時代初めに帰属するものだろう。3号溝は他の遺構より新しい時期に造られたことは確実であるが、はっきり決定できない。T区はD区と隣接しており、弥生時代末～古墳時代初めの時期に他区よりも遺構が集中する傾向が見られる。つながりそうな遺構や接合する土器も存在することからも、D区とほぼ同じ様相をもつものとみてよいだろう。

T区　表土除去風景

第53図　T区出土遺物
（玉類、S＝1/1）

# 第4章　まとめと考察

今回の発掘調査では、弥生前期、弥生時代末～古墳時代初め、古代、中世、近世の遺構・遺物を得ている。本章では、これらを検討し考察を加えることによって、遺跡の全体像を類推していきたい。考察は、遺構・遺物の主体である弥生時代末～古墳時代初めの時期に対して行う。

## 第1節　遺物について

### 1．はじめに

今回出土した寺中B遺跡の土器群は、北加賀の弥生時代後期終末期の標式土器である「月影式」とその前後の時期に位置付けられるものである。昭和43年に始まり現在に至るまでの既往の発掘調査（第5図）でもまた同様の時期の土器が出土していることから、寺中周辺に立地する遺跡の一時代を示すものといえそうである。この時期の土器は現在、量的に比較的多くかつ型式の流れもほぼ把握されており、土器資料ではもっとも研究が盛んな分野の一つといえよう。

本節は寺中B遺跡の出土土器に計量的な分析を加え、主にその土器組成について論じたものである。土器の計量は、口縁部計測法と個体識別法を併用して行った。口縁残存による数値の隣の（　）内に個体識別による数値を表示するものとする。高坏・器台については、坏部と脚部もしくは器受部と脚部で数の多いほうを採用した。

### 2．土器群と編年案の提示（第54図）

**D区7号溝出土土器**

甕形土器は有段口縁を呈するもので、中でも口縁帯に擬凹線紋を施すものが主体である。だが、口縁帯は幅が狭くあまり発達していないもので、厚手で鋭さを欠く印象がある。底部・胴部を見ても同様で、底部は自立可能なものだろう。10などは弥生後期からの伝統的な長頸壺に系譜をもつものであろう。これらの古い要素から月影Ⅰ式[12]以前に位置付けたい。本遺構は他遺構との切り合いが激しく、土器の出土も散漫な感じであった。土器はかなり動いているものと思われるので、月影Ⅰ式を遡るかどうかははっきりと確定できない。

**D区・T区方形周溝出土土器**

D区の2号落ちこみ・3号溝と、T区の1号溝・2号溝はひとつながりの方形周溝状遺構と考え、出土土器をあわせて一括遺物として扱う。甕形土器は有段口縁に擬凹線紋を施すものと無紋のものが主体である。全体に厚手のつくりであり、口縁帯は直立に近い立ち上がりのものである。擬凹線紋をもつものは6・7・8など口縁端を細らせるものと5など同じ厚みのままのものがあり、無紋のほうは端部に面をとるものがある。「く」字口縁も少量あり、口縁部があまり伸びない3の他、4のような口縁端を面とりする北陸東部に多いタイプ[13]がある。甕底部は自立可能なものである。壺形土器は9・11など直線的な有段口縁をもつものである。高坏形土器は15などの段をもって大きく外反する坏部をもつが、法仏式期のように大型でもなく端部を肥厚する

丁寧さもない。全器種において有段化が盛行するこの土器群は月影Ⅰ式に比定したい。

**D区4号土坑出土土器**

各器種は全般にD区・T区方形周溝出土土器に類似した形態をとる。16のように脚部が円筒状でない高坏や、13のような有段で小型の器台は、法仏式期には少ない。月影Ⅰ式に比定したい。

**D区2号土坑・3号土坑出土土器**

3号土坑が2号土坑を切ると推定するが、出土土器に大きな違いはなく、1土器様式内におさまるものであろう。甕形土器は有段口縁に擬凹線紋をもつものがある。口縁帯は外反傾向が見られ、頸部以下の器壁は徹底した内面ヘラケズリ調整でより薄く仕上げている。18などがその典型といえよう。こうした理由からD区・T区方形周溝出土土器などより1様式新しい月影Ⅱ式に位置付けたい。平成元年から平成2年にかけて本調査区に隣接する区域で行われた金沢市教育委員会による発掘調査では、出土土器の大半がこの時期のものであり、本調査区で月影Ⅱ式期の遺構・遺物が存在してもそう奇異なことでもない。ただし、17・19など型式的に古い要素をもつ甕が存在するのも事実であり、これらが古い時期のものなのか新しい時期にのこる古い要素なのかを明らかにするのは、この遺構単独の出土土器では量が少ないため、難しい。

**C区1号土器溜まり・2号土器溜まり出土土器**

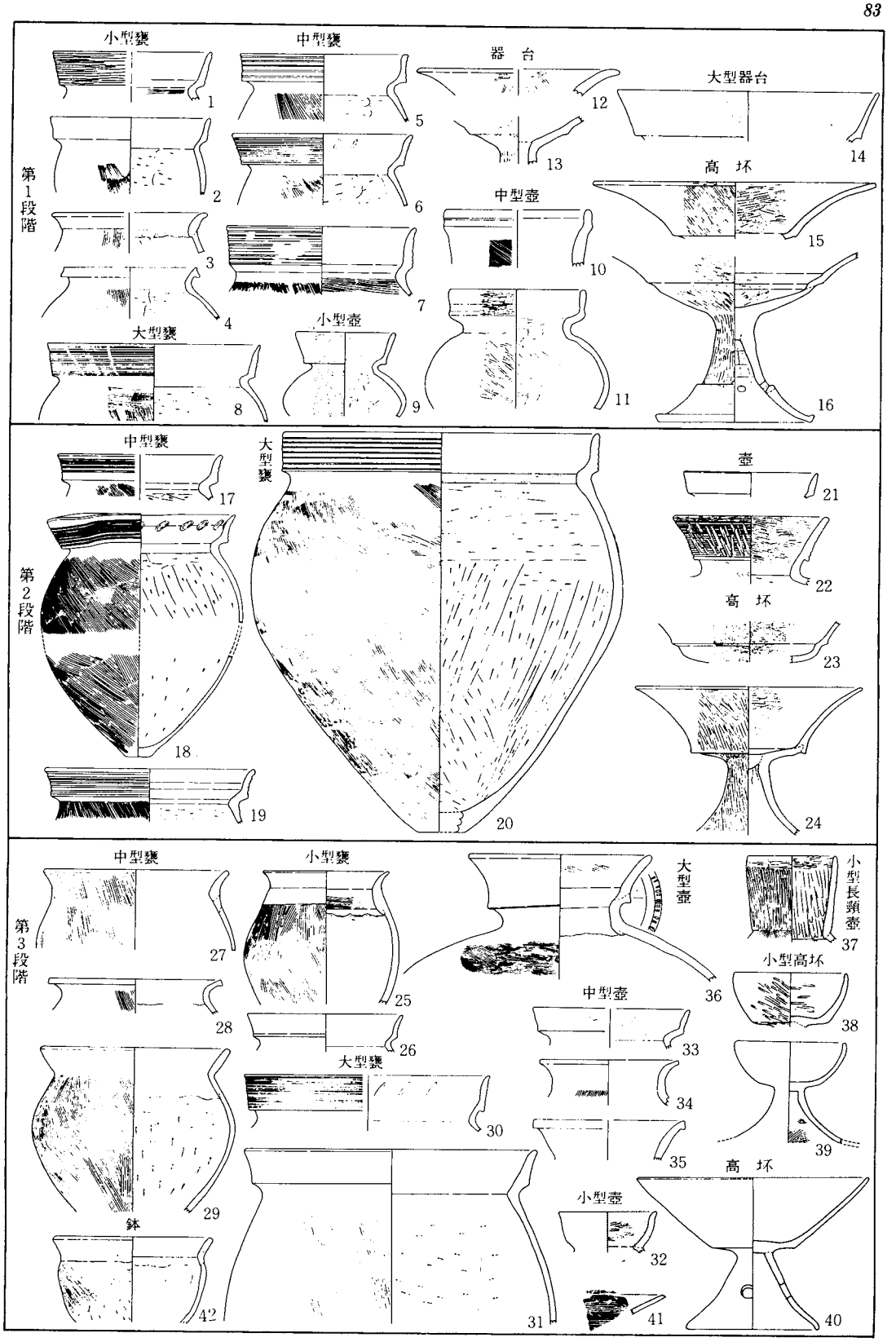
甕は有段口縁に擬凹線紋をもつものがある。有段口縁はよく発達しているもので、段も明確である。高坏は23のような有段の坏部をもつものが存在するが、脚部は24で見る通り八の字状に開いていき無段のようである。本土器群は、甕・高坏の特徴から月影Ⅱ式に位置付けたい。

**C区1号土坑・2号土坑出土土器**

甕は有段口縁をもつものであるが、無紋のものが目立って多い。それらのほとんどは段の屈曲が弱く、内面では「く」字口縁甕と同じように無段のものである。器台ははっきり識別できるものが比較的多く、一般的なものの他に結合器台や図示できなかったが小型器台がある。有段口縁甕の衰退と、小型器台の存在から月影式直後の時期を想定したい。だが、本遺構を土壙墓と考えた場合、これらの土器が供献用に使用されたことになる。土壙墓の供献土器にどのような土器が使用されるのかは不明であるが、本遺構出土土器を集落の土器の編年と直接比較して時期を決めるのは難しいだろう。

**C区建物周溝出土土器**

C区の竪穴状遺構・4号土坑・11号溝は同一の周溝を有する建物の一部と考え、出土土器をあわせて一括遺物として扱う。本遺跡で最も量的に多く器種も揃っている土器群である。甕形土器は有段口縁のものと「く」字口縁のものがある。有段口縁甕は口縁帯に擬凹線紋を施すものと無紋のものがあり、どちらも口縁帯は外反するものであるが段は弱く内面は「く」字口縁とあまり変わらない。有段口縁の均整が崩れた、より後出的な形態といえよう。「く」字口縁甕は25・27のように短い口縁部の端部を先細りかまたは自然な感じにおさめるもの、28のように端部をなでて面をとるなどの加工を行う北陸東部に多いタイプのもの、29のように頸部に強いヨコナデを加えて凹ませた有段との中間的なもの、など少なくとも3タイプが存在している。各部位にハケ調整を多用すること、成形時の継ぎ目を明確にのこすこともその大きな特徴といえる。壺形土器は有段




第54図　出土土器主要器種一覧

S＝1/6

1・10：D区7号溝、2・5・12・13・16：D区4号土坑、3・4・6～9・11・14・15：D区・T区方形周溝、17～19：D区3号土坑、20・24：C区2号土器溜まり、21：D区2号土坑、22：D区4号落ちこみ、23：C区1号土器溜まり、25～42：C区周溝建物

口縁を呈するものが大型・中型・小型と存在するが、「く」字口縁や装飾長頸壺など他の形式も多数認められる。頸部以下は球形化が進んでいるようである。鉢形土器は「く」字口縁や甑などの直口縁のものがある。高坏形土器は有段のものはあまり見られず、小型高坏[14]と40のような東海地方に類例の多いタイプが主体である。小型高坏は椀形坏39タイプとコップ形坏38タイプの2種があり、それぞれが宮本哲郎氏の分類で小型高坏Cグループと Bグループに相当するものであろう。小型高坏としてはどちらも後出的なタイプであり、月影Ⅱ式から高畠式にかけて存在するものである。40などは平坦な坏底部とゆるくふくらむ脚部の形態から、尾張・三河地方の古墳時代前期の標式土器である元屋敷式[15]に比定される東海系[16]の高坏である。他地方との併行関係を示しうる数少ない資料である。41は坏部の内面に擬凹線紋・ヘラ描紋をもつものであり、北陸で他には金沢市南新保三枚田遺跡に類例がある。尾張・三河ではやはり元屋敷式期に存在するが決して主体的な形式ではなく、坏下半部以下の形態も不明であるという。その系譜は東海地方でも別の地域に求められそうである。器台形土器は図示できなかったが有段のものと小型器台がある。これら各器種からいえることは東海系高坏・小型器台など他地域の古墳時代初めに比定しうる外来系[17]の土器をもつことと、月影式通有の在地系の土器も残存していることである。月影式直後で古府クルビ式[18]との間をうめる過渡的な土器様式として位置付けたい。北加賀では金沢市松寺遺跡A1号溝出土土器と同時期ということになる。南加賀では白江式（漆5・6群）[19]に対応するものである。

以上のことから、寺中B遺跡の土器群は月影Ⅰ式から月影式直後までの期間におさまるものということになる。よって、月影Ⅰ式併行のD区7号溝、D区・T区方形周溝、D区4号土坑の出土土器をもって本遺跡の第1段階、月影Ⅱ式併行のD区2号土坑・3号土坑・C区1号土器溜まり・2号土器溜まりの出土土器をもって第2段階、月影式直後のC区建物周溝、C区1号土坑・2号土坑の出土土器をもって第3段階としたい。これは寺中B遺跡の弥生時代末～古墳時代初めを三時期に区分するものである。第2段階は前後段階と明確に分離し得ない土器を含むが、この後の考察で時期設定を補強していきたい。それと同時に、各土器群の組成を比較しながら第1段階～第3段階の土器組成や遺構の性格を考えることにする。

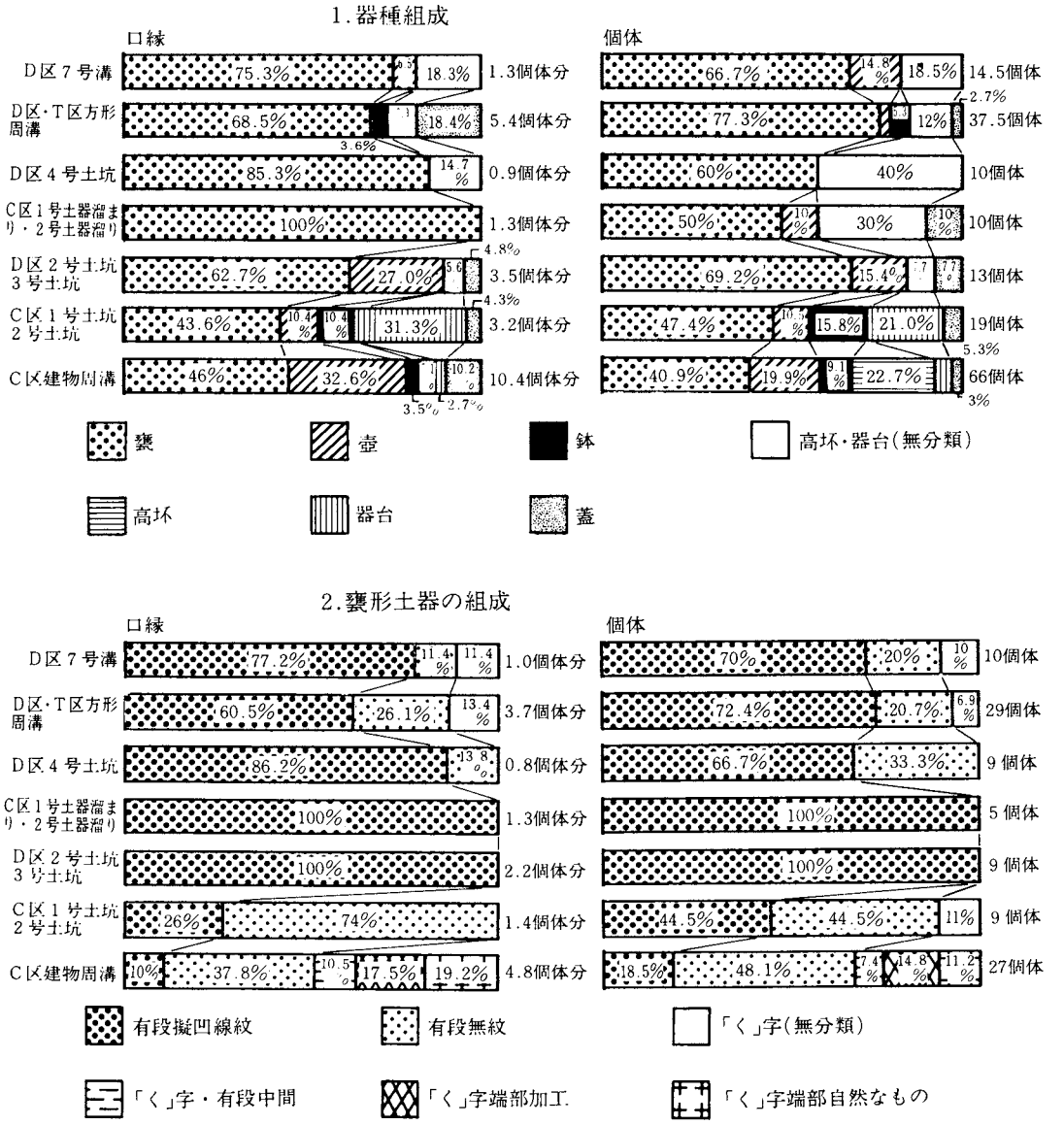
## 3．各土器群の組成について

### a）器種組成について（第55図－1、同－3）

(1) 器種組成について

第55図－1は第1段階から第3段階にかけての各土器群の器種組成を示したものである。基本的な器種分類は、甕・壺・鉢・高坏・器台・蓋の6種である。

まず、第1段階から第3段階までに甕形土器の比率が減少してきていることが看取できる。具体的には、月影式期の第1段階・第2段階はD区・T区方形周溝で68.5%（77.3%）、D区2号土坑・3号土坑で62.7%（69.2%）と過半数以上を占めていた甕が、月影式直後の第3段階にC区建物周溝で46%（40.9%）と減少するということである。月影式からその直後の時期に移行する際に、甕の比率が減少するという組成比は興味深いデータである。月影式は弥生時代後期末、すなわち北陸の弥生時代の最終段階に位置付けられる土器様式であり、その直後の時期には何ら




第55図　出土土器の組成

かの古墳時代へ向けての胎動が存在する可能性は大いにある。そして北陸東部では、月影式併行期前後にかけて東海・畿内・山陰など外来系の土器があまり顕著でなく、土器の器種組成もほとんど変わらないと理解されている[20]。寺中B遺跡における月影式直後の土器組成の変化が外来系の土器が出現したことによるものとするなら、北陸西部と東部の該期の社会を考える上できわめて重要な問題といえる。現在北陸西部において正確に北陸東部と器種組成比を比較しうる資料が少ないため、この仮説の正否については今後の課題とし、データの蓄積を待つことにしたい。

(2) 器種組成にみる遺構の性格について

ここで注意したいのは、異なる性格をもつ遺構の出土土器を比較する場合にあらわれる様相のもつ意味が変わってくる可能性があることである。例えば土壙墓から出土する土器は供献的な色彩が強いことが考えられ、その集落で生活に使用された器種組成を正しくあらわすとは考えにくい。逆に住居跡から出土する土器は実生活に使われた器種の組成があらわれる可能性が高いだろう。また、遺構の性格により異なる土器組成が時期差によるものとみなされる危険もある。様相の異なる土器群が存在する場合、同じ性格をもつ遺構という前提があってはじめて、時期差によるものと断言できよう。第1段階のD区・T区方形周溝や第2段階のC区1号土坑・2号土坑は墓の可能性が高く、本来は他の土器群と同列に比較するべきものではない。本来は同じ性格をもつ遺構、たとえば住居跡同士、土壙墓同士の比較が望ましいことはいうまでもない。とはいえ、現在では型式の流れで編年がほぼ把握されている状況にあるから、土器群の先後関係が逆転するなどの大幅な変動はまずあるまい。逆に、編年が確定しているのならば、土器組成である程度の遺構の性格を考えることができないだろうか。ここで挙げた7土器群はそれぞれに多用な器種組成を示しており、これらを用いてこの方法を試行してみたい。

甕形土器の比率が高い土器群の中に、他の器種の種類がかなり少ないものがある。例えば、第1段階にはD区4号土坑出土土器群があり、甕の他の器種は、小片で識別できずに一括した高坏器台しかない。D区7号溝出土土器群も壺と高坏器台のみである。第2段階ではD区2号土坑・3号土坑出土土器群やC区1号土器溜まり・2号土器溜まり出土土器群に同じことがいえよう。この傾向は土器の使用や遺構の使用を考える上で非常に重要である。土器の用途を考えた場合、最も苛酷な使用条件におかれるものは、煮炊に使われるものすなわち甕形土器であろう。当然破損も早く生産・使用・廃棄のサイクルがもっとも短い器種と考えられる。各段階を通してもっとも多量を占めるのも当然といえよう。他の貯蔵・盛付・祭祀用途の器種が明確でないのは使用サイクルが比較的長いことに起因するからであろう。また、これらの土器群は、土坑や土器溜まりなど廃棄用途の可能性が高い遺構から出土していることからも、集落が存続していた時に行われた小規模な廃棄行為によるものである可能性が高いともいえよう。こう考えるならば土器が比較的少量ずつであることも納得できる。これに対して、第3段階のC区建物周溝出土土器群は各器種が揃っており、住居跡が廃棄される時や、集落が廃絶する時の大規模な廃棄行為によるものと考えたい。こちらは、使用サイクルが長いものも短いものも関係なくそのとき所有していた土器すべてを一度に廃棄する「後始末」的行為によるものだろう。第3段階のC区1号土坑・2号土坑出土土器群は第55図－1、同－3でみる通り、他のどの土器群とも異なる土器組成を示す。特

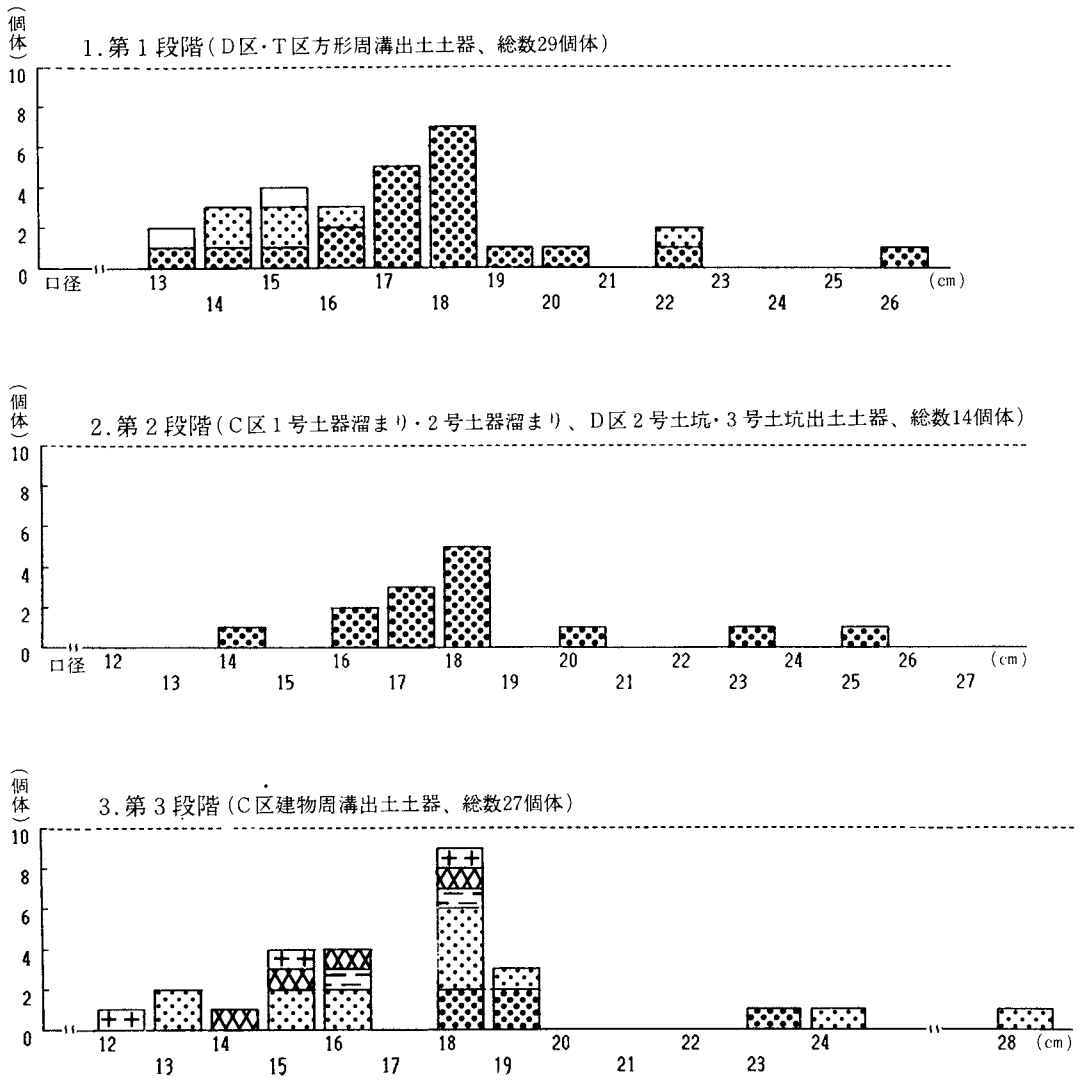
に、はっきり器台と識別できる器台が多く含まれて高坏が存在しない点は特筆してよい。C区1号土坑・2号土坑は土壙墓と考えており、すなわちその出土土器は供献・副葬が目的の祭祀・埋葬行為に関わるものの可能性が高い。第1段階のD区・T区方形周溝はその形状以外に墓と断定できる要素に欠ける。土器の器種組成も多種多様なあり方で、大規模な廃棄と想定したC区建物周溝出土土器群と大きく変わることろがないので、その性格についてはここでふれないことにする。

以上、遺構の性格を考えると、寺中B遺跡の出土土器は①小規模な廃棄によるもの、②大規模な廃棄によるもの、③埋葬に伴うもの、の3類に分かれる。一括出土という概念を考える上で、小規模な廃棄と、大規模な廃棄はきわめて重要な要素と考える。小規模な廃棄は集落が存続していたのなら、数次にわたって継続的に投棄されたことも考えられる。しかしその時期幅は土器1様式を超えない短いものであろう。逆に大規模な廃棄は集落廃絶時に一度で捨てられた可能性が高いが、その中には保管されてきた古いものや使用サイクルの極端に長いものを含み、やはり時期幅が考えられる。また、埋葬に伴う土器も伝統・因習などの面からその時点で使われていない土器を用いることがあるかもしれない。どの出土パターンにおいても、安易に一括出土土器として同時性をもたせるのは危険であり、より慎重な検討が必要であろう。

**b）甕の形態・法量別組成について**（第55図－2、第56図）

甕形土器の分類については、有段口縁と「く」字口縁に大別し、さらに有段口縁は擬凹線紋をもつものと無紋のものの2タイプに分けた。「く」字口縁については、多く見られるC区建物周溝出土土器群に限って、端部が自然なものと先細るものを面とり・肥厚など端部を加工するものと分け、さらに有段口縁との中間的な口縁形態を呈するものとの3タイプに分類した。第55図－2はその分類による組成を各段階の土器群ごとにあらわしたものである。第56図は甕形土器の組成を法量別にさらに細かくあらわしたものであり、個体識別による数値を採用した。土器量の比較的多かった第1段階についてはD区・T区方形周溝、第3段階についてはC区建物周溝の出土土器を用い、第2段階についてはC区1号土器溜まり・2号土器溜まりとD区2号土坑・3号土坑の出土土器をあわせて集計したものである。

まず第1段階のD区・T区方形周溝についてみてみる。主体は60.5%（72.4%）を占める有段擬凹線紋甕であり、以下有段無紋甕、「く」字甕と続く。さらに細かく法量別にみると有段擬凹線紋甕が中型（口径18cm付近）を主として大～小型にわたって幅広く分布していることがわかる。有段無紋甕は大型と小型が存在し中型を避けるかのような分布を示す。これに比べて「く」字口縁はほぼ小型に限られることは注目すべき点である。同じ第1段階のD区4号土坑は有段擬凹線紋甕が86.2%（66.7%）と主体で有段無紋甕が続く。D区7号溝も有段擬凹線紋甕77.2%（70%）と、同じ傾向である。第2段階のD区2号土坑・3号土坑やC区1号土器溜まり・2号土器溜まりの土器群では有段擬凹線紋甕のみが存在する。やはり中型主体で大～小型も存在している。第3段階のC区建物周溝では「く」字甕と有段無紋甕が40%程度ずつのほぼ等量存在し、10%（18.5%）の有段擬凹線紋甕よりも多くなっている。細かく法量別に見てみると有段擬凹線紋甕はほぼ中型のみ、有段無紋甕は大小幅広い分布、「く」字甕は中型から小型に限られる傾向がわかる。「く」字甕をさらに細かくみると、中間タイプは有段タイプの主体でもある中型に限




第56図　甕形土器の法量別組成

られる分布、他の2タイプは中～小型に分布しているといえよう。C区1号土坑・2号土坑でも有段無紋甕が有段擬凹線紋甕を74%対26%（44.5%対44.5%）と量で凌いでおり、有段無紋甕のめざましい進出が看守できよう。まとめると、まず第1段階は有段口縁の擬凹線紋を施すタイプが主体でありかつ法量分化が進んでおり、有段無紋・「く」字は中型の法量を外れて少量存在する、という段階である。次の第2段階は法量分化した有段擬凹線紋甕にほぼ限られる段階である。そして第3段階は主体は有段無紋甕と「く」字口縁甕に移り、有段無紋甕が大～小型に法量分化し、「く」字甕が中～小型に集中し形態も多様になる段階である、とすることができよう。この第1段階・第2段階・第3段階はそれぞれ月影Ⅰ式・月影Ⅱ式・月影式直後に相当し、前項で提示した編年を裏付けると同時に、より具体的な土器様式の推移をあらわすものである。

ここでもう一つ重要なことはどの段階にも大・中・小型の甕が存在し、中型主体のあり方は変化していないことである。それは、段階ごとに有段擬凹線紋甕などの組成は変わるが基本的な法量別組成の変化は少ないということである。すなわち、甕の使用状況に大きな変化は生まれていないことが考えられる。第1段階・第3段階では各形態は補完し合って存在しているのであり、用途による使い分けは当然なされていたであろうし、製作時点でつくり分けもなされていたのであろう。器種組成が大きく変わっていることとは対照的なあり方といえよう。ただし、この仮説は正確な土器容量値をもってはじめていえることに注意したい。本遺跡では完形土器や遺存のよい土器が少なかったのでやむを得なかったとはいえ、本来、口径は容量の目安でしかない。比較しうる他遺跡の資料と正確な容量値の累積を待って結論付けたい。

## 第2節　遺構について

### 1．周溝を有する建物

C区の竪穴状遺構・4号土坑・11号溝は円形に連なる周溝の一部である可能性が高いことは前記してきたが、周溝内に柱穴らしいピット群が集中することからも、この周溝内の空間を「周溝を有する建物」と改めて呼称したい。この種の建物は近年北陸各地で確認されており[21]、その特徴として①中央部に主柱穴をもつ、②主柱穴の周囲を周溝かあるいは切り合って連なったかのような土坑列が円形に巡る、③周溝または連土坑列は何箇所かで途切れて開口する、④周溝または連土坑列の内側に竪穴住居状の掘り込みをもたない、などがあげられる。

第57図は北陸各地で報告されている類例を集成したものである。これによると、①規模的には外径20m前後の大規模なものから10m前後の小規模なものまで存在する、②構造的には4本主柱のもの、6本主柱のもの、10本以上の多主柱のものにわかれる、③時期的には弥生時代中期～古墳時代前期（田嶋Ⅲ～Ⅶ期）[22]まで存在している、とまとめることができる。寺中B遺跡の周溝を有する建物は周溝の外径18mと大型の部類に属し、内径16m、周溝幅0.6～3.9m、開口部幅3.5mの規模をもつ。主柱穴数は明確でないが一応多角形に線で結ぶことはできる。時期は田嶋Ⅶ期に位置付けられよう。

この種の建物の性格については、①平野や低標高地に存在するため、防湿用に周溝をもったものとする見解、②周溝や柱穴・ピットから玉造関係の遺物が多く出土した例から玉造工房とする

見解、③土壙墓状の周溝や周囲に墓域が伴う例から墓に関わる建物とする見解、などがある。[23]このなかで検出例にもっとも多くあてはまるのは高橋保氏や楠正勝氏の指摘の如く①の防湿住居の説であろう。これらの建物はそのほとんどが平野部のそれも低湿な地域に存在しており、竪穴住居が生活に適しないことは容易に想像できる。しかし同じ地域に竪穴住居が存在しないわけではなく、両者が併在する場合、それぞれどういう人々が居住したのだろうか。②の工房説については、周溝を有する建物全体では玉造関係の遺物を出土するものはまれであり、また竪穴住居でも玉造関係の遺物が出土することからも普遍性はもち得ないだろう。③の墓関連説については、金沢市寺中遺跡の例がもっともはっきりしており、他にも、周囲に同時期か近い時期の土壙墓や方形周溝墓が存在する例は確実にある。しかし、土器の1様式内で住居域から墓域へ、もしくはその逆へ作り替えることが可能であるなら、両者の関連を明言するにはその同時期併存を証明することが必要であろう。現在までのところ両者を確実に関連付ける資料はない。

住居は、検出される平面形態や柱穴数・柱間距離でのみ語られるものではなく、上屋構造と地下構造の考察が加わってはじめて復元することができるものである。上屋構造を発掘調査で知ることがほぼ不可能と言える現状では、今後地下構造の解明に大きな期待が寄せられることになろう。礎板や根絡み・布掘り等の検討で、耐雪対策などが考えられる北陸特有の住居形態を確立できる可能性は高いと考える。周溝を有する建物についても、やはり類例の増加を待たざるを得ないが、それに加えて地下構造の解明にも重点をおいて検討していくべきであろう。

## 2．土　坑

本遺跡では様々な形態の土坑が確認されたが、弥生時代末～古墳時代初めにはっきりと位置付

| 所　在 | 遺跡・遺構 | 外　径 (m) | 内　径 (m) | 周溝幅 (m) | 開口部長 (m) | 柱穴配置 | 中心ー開口部方位 | 時期 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石川・金沢 | 寺中B　C区建物 | 約18 | 16 | 0.6～3.9 (重複か) | 3.2～3.5 | 5角形か4本柱 | S－42°－E | Ⅶ | 周溝 |
| 石川・金沢 | 寺中　土壙墓群 | 約15.3 | 8.4 | 1.5～4.0 | 不明 | ピット群あるが不明 | 不明 | Ⅲ | 連土坑状 |
| 石川・金沢 | 磯部運動公園　2号建物 | 13.8～18 | 9.8～11.5 | 0.6～4.8 | 2 | 6角形＋求心（2本側柱） | S－14°－E | Ⅲ末 | 連土坑状 |
| 石川・金沢 | 磯部運動公園　3号建物 | 18.3～22 | 7.7～11.2 | 0.6～5.9 (重複) | 2.0～2.2 (2か所か) | 不明ピット多い　求心 | N－15°－W | Ⅲ末 | 周溝状、竪穴状 |
| 石川・金沢 | 西念・南新保　SB01 | 11.1～11.4 | 7.0～7.4 | 0.8～2.3 (重複) | 5.3～6.4 | 6角形　求心 | N－43°－W | Ⅳ | 土坑＋溝（住居と重複） |
| 石川・金沢 | 新保本町西　1号住 | 12.3～12.6 | 10.7～11.4 | 0.3～1.3 | 3程か (切られる) | 4本柱、他ピット多数 | S－11°－E | Ⅵ末～Ⅶ | 周溝 |
| 石川・小松 | 第一小学校、漆町方形周溝状遺構＋8号建物・9号建物 | 17～21.6 | 12.4～14.8 | 0.1～0.5 (重複) | 3.6～4 | 4本柱×2棟 | S－86°－E | Ⅵ | 周溝 |
| 福井・三国町 | 下屋敷　住居址（工房） | 18.5～21.5(外) 16.5～17.1(内) | 12.8前後 | 0.5～2.4 (二重) | 5.8 | 円形ピット多い、浅皿土坑 | N－28°－W | Ⅲ | 東部少し欠ける 玉造関連、二重周溝 |
| 富山・上市町 | 江上A　SB14＋SD03 | 15.5～16.5 | 10.8～12.5 | 1.6～3.2 | 2.7～4.5 | 4本柱、ピット他有 | N－89°－E | Ⅵ | ヒスイ、碧玉出土、周溝、礎板 |
| 富山・上市町 | 江上B　SB111＋SD020 | 16.4～17 | 16～17 | 0.7～0.9 | 4程 | 4本柱 | S－64°－E | Ⅵ | 礎板、周溝 |
| 新潟・柏崎 | 下谷地　第1号住居跡 | 16.3～18.4 | 13.9～15.5 | 0.64～1.6 | 7.36～8.3 | 10本以上円柱、求心 | S－74°－W | Ⅲ | 開口3ケ所(1.6／1.9) 周溝土坑？連土坑＋溝 |
| 新潟・柏崎 | 下谷地　第2号住居跡 | 15.7～16.3 | 14.1 | 0.8～1.8 | 8 | 10本以上か、求心か | N－49°－E | Ⅲ | 連土坑状 |
| 新潟・柏崎 | 下谷地　第3号住居跡 | 15.4～17.0 | 11.7～13.4 | 0.6～3.4 | 開口部多い | 求心、10本以上他ピット有 | 開口部多い | Ⅲ | 連土坑状 |
| 新潟・柏崎 | 下谷地　第4号住居跡 | 13.0～13.6 | 9.8～11.8 | 0.6～2.2 (重複か) | 開口部多い | 求心、9本柱か | 開口部多い | Ⅲ | 連土坑状 |
| 新潟・柏崎 | 下谷地　第5号住居跡 | 10.4～11.8 | 8.3～8.6 | 0.8～1.9 | 4 | ピットのみ、柱穴未確認 | S－48°－W | Ⅲ | 周溝 |

第57図　周溝を有する建物一覧

けられるものはC区では1号土坑、2号土坑、D区では2号土坑、3号土坑、4号土坑がある。C区4号土坑は周溝の一部であるので除き、ここではこれらの機能について検討してみたい。

土坑の機能としては①貯蔵穴、②廃棄用穴、③土壙墓などが考えられる。①の貯蔵穴は円筒土坑・袋状土坑などに代表される。貯蔵穴として使用された後、廃棄穴となるかまたは簡易な土壙墓となる可能性が考えられる。②の廃棄穴については、出土遺物を廃棄されたものとして捉えるかどうかが問題になろう。③の土壙墓については平面形状（屈肢葬・伸展葬に向く長方形など）、しっかりした掘り込み、坑底面の状態（敷粘土・敷砂・整地などの有無）、供献遺物などから判断されよう。遺物が土坑内の一箇所に集中するものや安置したことが明確なものも土壙墓の可能性が高いといえよう。だが実際には、ここで列挙した特徴を備える典型的な土坑よりも、これにあてはまらない土坑が多く、①～③の判別は難しい場合が多いといえよう。本遺跡ではD区3号土坑を貯蔵穴か廃棄穴と、C区1号土坑・2号土坑を土壙墓と推定している。その論拠についてこれから詳しくふれることにしたい。

a）D区3号土坑

貯蔵用穴かまたは廃棄用穴と推定する。ただし、第1節で述べたように集落の最終的な段階での廃棄ではなく、存続途次でなされた小規模なものという前提が付く。最も使用頻度が高い甕形土器が顕著に見られることや他の器種が限定されかつ少量であることからもそれがいえよう。D区4号土坑は出土土器からは廃棄としたが、形態が大きく異なるので明言はできない。また、D区2号土坑は半分も検出できなかった遺構であるから、切りあっているとはいえD区3号土坑と同じ形態と機能をもつとはいえない。この両者についてはこれ以上言及しないことにしたい。

D区3号土坑は長楕円形の掘り込みの中にさらに不整円形の掘り込みを有する2段掘り構造となっている。遺物は土器のほかに碧玉のチップが多数出土している。いわゆる2段掘りの特殊ピットは玉造遺跡で住居跡内によく見られるものであり、玉造によって生まれる滓であるチップが坑底に溜まっていることが多い。3号土坑は玉造に関係した特殊な廃棄用穴と考える。

D区では第3章で述べた通り、碧玉原石・チップ・管玉未製品等の玉造に関連した遺物が数多く出土している。作業場や完成製品こそ確認していないが、関連遺構が存在しても不思議ではなく、D区3号土坑を玉造と関連付けて考えてもよいと思う。寺中B遺跡、特に第1段階・第2段階が玉造と密接に関係していることは明らかであり、D区の南半に集中する遺構、さらに金沢市教育委員会の調査結果などから考えて、D区・T区の南方に玉造遺跡の中心部が存在する可能性は高いといえよう。

b）C区1号土坑・2号土坑

2基1対の土壙墓と推定する。平面形は長方形で掘り込みはしっかりしている。出土土器も土坑の一方に集中しており、供献に用いたものと推定できる。土壙墓は埋葬施設をもつ墓制としてはもっとも原始的な形態であり、縄紋時代から存在している。ただし縄紋時代の土壙墓は屈葬用の小規模なものがほとんどであり、弥生時代になってから屈肢葬・伸展葬に向く長方形・長楕円形の土壙墓が出現している。また、弥生時代より出現する方形周溝墓が土壙墓より格上の墓制として位置付けられることも忘れてはならない。

| 遺跡・遺構 | 平面形 | 長軸(m) | 短軸(m) | 深さ(cm) | 長軸方位 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (金沢)寺中B・C区1号土坑 | 長方形 | 4.86 | 0.53~0.91 | 28 | N-67°-W | VII | 切り合いか接する |
| 寺中B・C区2号土坑 | 長方形 | 2.91 | 0.79~0.87 | 21 | N-22°-E | VII | 切り合いか接する |
| 寺中II次37号土坑 | 長楕円 | 4.65 | 0.95 | 40 | N-57°-E | III | 3~4基切り合いの可能性あり |
| 寺中III次1号土坑 | 不整長方形 | 1.25 | 0.9 | 20 | N-1°-E | III | |
| 寺中III次3号土坑 | 長楕円 | 4.10 | 1.2 | 40 | N-44°-W | III | 炭化物出土 |
| 寺中III次12号土坑 | 長楕円 | 2.49 | (推)0.8 | 8 | S-65°-E | III | 南側こわれる |
| 寺中III次15号土坑 | 長楕円 | 2.25 | 1.05 | 20 | N-2°-W | III | 土器散在 |
| 寺中III次22号土坑 | 不整長楕円 | 3.50 | 0.95 | 30 | N-34°-W | III | 直上打斧出土 |
| 寺中III次23号土坑 | 不整楕円形 | 1.50 | 0.9 | 30 | N-65°-E | III | |
| 西念・南新保A区P-8-2 | 方形 | 0.75 | 0.6 | 17 | S-88°-E | V | |
| 西念・南新保A区P-10-3 | 楕円 | 1.05 | 0.7 | 16 | S-85°-E | V | |
| 西念・南新保A区P-21 | 楕円 | 1.95 | 1.15 | 27 | N-33°-W | V | P-23と切り合う |
| 西念・南新保A区P-22 | 楕円 | 1.57 | 0.92 | 23 | N-25°-W | IV | |
| 西念・南新保B区P-11 | 楕円 | 2.41 | 1.43 | 28 | N-34°-W | III末 | 覆土2層あり切り合う |
| 西念・南新保C区P-11 | 楕円 | 2.03 | 1.3 | 22 | S-60°-E | III | |
| 西念・南新保F区P-2 | 楕円 | 1.32 | 0.93 | 35 | N-84°-W | IV | |
| 西念・南新保G区P-120 | 長方形 | 1.52 | 0.41 | 9 | N-11°-E | V | |
| 西念・南新保G区P-202 | 隅丸方形 | 2.05 | 0.95 | 30 | N-31°-W | III | 切り合う覆土2層 |
| 西念・南新保G区P-208 | 長方形 | 2.89 | 0.8 | 33 | N-45°-E | VI | |
| 西念・南新保G区P-212 | 楕円 | 2.08 | 1.73 | 22 | N-24°-W | III | |
| 西念・南新保G区P-215 | 楕円 | (推)3.5 | 2.13 | 24 | N-23°-E | III | 切り合う |
| 西念・南新保J区SK19 | 長楕円 | 2.7 | 1.1 | 40 | N-18°-W | III末 | SK20と切り合う |
| 西念・南新保J区SK31 | 隅丸長方形 | 1.9 | 1.4 | 51 | N-64°-E | IV | |
| 西念・南新保K区SK09 | 隅丸長方形 | 2.9 | 1.4 | 18 | N-13°-W | III末 | |
| 西念・南新保K区SK15 | 隅丸長方形 | 2.6 | 1.4 | 35 | N-10°-E | III末 | |
| 西念・南新保K区SK25 | 隅丸長方形 | 3.0 | 1.6 | 45 | N-3°-W | III末 | 1号周溝墓コーナに接する |
| 西念・南新保K区SK26 | 隅丸長方形 | 3.7 | 1.2 | 41 | N-4°-W | III末 | 4号住内、最下層黄褐色土木棺墓? |
| 西念・南新保K区SK27 | 隅丸長方形 | 4.3 | 1.2 | 37 | S-79°-W | III末 | |
| 松寺B1号土坑墓 | 隅丸方形 | 約2 | 約2 | 70 | N-2°-E | VII | 2段掘り、上層高畠、下層弥生(覆土2層) |
| 無量寺B4次B1・2号土坑 | 隅丸長方形 | 3.7以上 | 0.89 | 60 | N-67°-E | V | |
| 矢木ジワリ18号土坑 | 隅丸長方形 | 2.9 | 1 | 50 | N-39°-W | II | |
| 矢木ジワリ19号土坑 | 不整長楕円 | 3.45 | 1.1 | 57 | N-3°-W | II | 数基が切り合う可能性あり |
| 矢木ジワリ30号土坑 | 長楕円 | 2.1 | 1.4 | 34 | N-86°-E | II | 29号と切り合う |
| 矢木ジワリ33号土坑 | 長方形 | 3.9 | 1.25 | 51 | N-71°-E | II | |
| 矢木ジワリ47号土坑 | 隅丸長方形 | 2.75 | 1.05 | 44 | N-6°-E | II | |
| 矢木ジワリ49号土坑 | 隅丸長方形 | 5 | 0.7 | 66 | N-84°-W | II | |
| 磯部運動公園2号土坑 | 不整方形 | 3.05 | 2.57 | 32 | N-63°-E | III末 | 規則的配列 |
| 磯部運動公園3号土坑 | 隅丸長方形 | 1.88 | 1.65 | 24 | S-54°-W | III末 | 規則的配列 |
| 磯部運動公園4号土坑 | 隅丸長方形 | 2.8 | 1.85 | 52 | N-35°-W | III末 | 規則的配列 3号土坑と直交 |

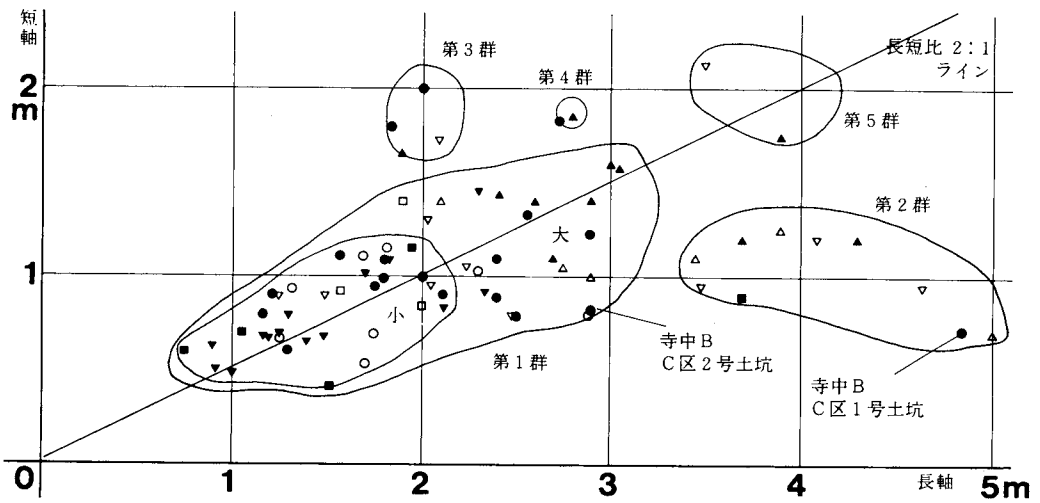
| 遺跡・遺構 | 平面形 | 長軸(m) | 短軸(m) | 深さ(cm) | 長軸方位 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 磯部運動公園10号土坑 | 隅丸長方形 | 3.9 | 1.75 | 58 | N-49°-E | III末 | 2段おちこみ、炭化物層、木質層木棺墓? |
| 新保本町西4号土坑 | 長方形 | 2.4 | 0.88 | 12 | N-3°-W | VII | |
| 新保本町西16号土坑 | 長楕円 | 2.4 | 1.08 | 7 | N-55°-W | VII | 一方に土器集中 |
| 高畠1次1号土坑 | 不整 | 1.99 | 1.02 | 25 | 測定不能 | VII | 重複? |
| 高畠1次4号土坑 | 楕円 | 1.84 | 1.8 | 31 | 測定不能 | VII | 一方に土器集中(北側) |
| 高畠1次7号土坑 | 楕円 | 1.75 | 0.95 | 32 | 測定不能 | VII | 標示石×4 |
| 高畠1次8号土坑 | 楕円 | 1.29 | 0.6 | 35 | 測定不能 | VII | 2段掘り |
| 高畠1次9号土坑 | 不整 | 2.89 | 1.24 | 28 | 測定不能 | VII | 重複? |
| 高畠1次10号土坑 | 楕円 | 2.56 | 1.33 | 31 | 測定不能 | VII | 玉未製品出土標示石は石冠 |
| 高畠1次11号土坑 | 不整 | 2.74 | 1.83 | 48 | 測定不能 | VII | 重複? |
| 高畠1次12号土坑 | 楕円 | 1.8 | 0.99 | 27 | 測定不能 | VII | 土器片は2群 |
| 高畠2次1号土坑 | 長方形 | 2.12 | 0.92 | 68 | 測定不能 | VII | 玉原石出土 |
| 高畠2次5号土坑 | 不整 | 1.22 | 0.9 | 28 | 測定不能 | VII | |
| 高畠2次8号土坑 | 長方形 | 1.80 | 1.08 | 40 | 測定不能 | VII | |
| 高畠2次10号土坑 | 楕円 | 1.25 | 0.67 | 30 | 測定不能 | VI | |
| 高畠2次11号土坑 | 長方形 | 1.82 | 1.16 | 32 | 測定不能 | VI | |
| 高畠2次17号土坑 | 長方形 | 1.16 | 0.8 | 32 | 測定不能 | VII | |
| 高畠2次27号土坑 | 楕円 | 2.48 | 0.8 | 37 | 測定不能 | VII | |
| 高畠2次28号土坑 | 楕円 | 1.68 | 1.12 | 28 | 測定不能 | VI~VII | |
| 高畠2次32号土坑 | 楕円 | 1.57 | 1.12 | 32 | 測定不能 | VII | |
| 戸水B3号土坑 | 長楕円 | 2 | 0.84 | 20 | N-23°-W | IV | |
| 塚崎A13号土坑 | 隅丸長方形 | 2.3 | 0.95~1.1 | 40 | N-82°-W | VI | 西に寄って河原石の石組検出鉄滓出土 |
| 塚崎A14号土坑 | 長方形 | 1.7 | 0.5~0.55 | 30 | N-20°-W | VI | 土器(壺鉢)ほぼ完形で出土 |
| 塚崎C17号土坑 | 不整長方形 | 1.75 | 0.63~0.77 | 55 | N-60°-W | VI | 西端に拡底より浮いて高杯東端に鉄滓出土 |
| (七塚)細口源田山1号土坑墓 | 隅丸長方形 | 2.34 | 0.92 | 78 | N-17°-E | III末 | 管玉104個、木棺等覆土上部に石鏃・石錐供献 |
| 細口源田山2号土坑墓 | 長方形 | 1.7 | 1.02 | 30 | N-17°-E | III末 | 木棺墓。覆土上部に石鏃・石錐供献 |
| 細口源田山3号土坑墓 | 長方形 | 1.19 | 0.67 | 33 | N-67°-W | III末 | 木棺墓。覆土上部に石鏃・石錐供献 |
| 細口源田山4号土坑墓 | 長方形 | 1.29 | 0.79 | 33 | N-19°-E | III末 | 木棺墓。覆土上部に石鏃・石錐供献 |
| 細口源田山5号土坑墓 | 長方形 | 2.3 | 1.45 | 73 | N-17°-E | III末 | 木棺墓覆土上部に平板石 |
| 細口源田山6号土坑墓 | 長方形 | 1.39 | 0.65 | 30 | N-86°-W | III末 | |
| 細口源田山7号土坑墓 | 長方形 | 1.16 | 0.68 | 30 | N-86°-W | III末 | |
| 細口源田山8号土坑墓 | 長方形 | 0.9 | 0.63 | 23 | N-67°-W | III末 | |
| 細口源田山9号土坑墓 | 隅丸長方形 | 1 | 0.48 | 23 | N-69°-W | III末 | |
| 細口源田山10号土坑墓 | 不整長方形 | 1.25 | 0.7 | 10 | N-10°-E | III末 | |
| 細口源田山11号土坑墓 | 長方形 | 0.91 | 0.5 | 22 | N-10°-E | III末 | |
| 細口源田山12号土坑墓 | 隅丸長方形 | 1.81 | 1.08 | 22 | N-59°-W | III末 | 覆土より磨製石斧出土 |
| 細口源田山13号土坑墓 | 隅丸長方形 | 1.48 | 0.68 | 37 | N-88°-E | III末 | |
| 細口源田山14号土坑墓 | 長楕円 | 2.12 | 0.83 | 43 | N-50°-E | III末 | 木棺墓 |

第58図　県内の弥生時代から古墳時代前期にかけての土壙墓一覧

北陸地方において、方形周溝墓は畿内第Ⅲ様式併行期に出現し、石川県内では第Ⅲ様式の末から普及していると見てよかろう[24]。周溝で個人の墓域を区画する方形周溝墓は明らかに土壙墓よりも格上の墓形態であり、両者が併存する場合、被葬者の身分差が考えられる。金沢市西念・南新保遺跡などがこうした墓制のあり方をよく示している。また、金沢市七ツ塚墳墓群では台状墓と土壙墓が併存して墓域を別にする例がある。

第58図は主として金沢平野の弥生時代から古墳時代前期にかけての土壙墓と推定される遺構を集成したもので、第59図はその規模別の分布をあらわしたものである（時期区分は1.と同じ）。楕円形・長方形などの形状を無視すると、およそ5群に分類できる。第1群は長短比がほぼ2対1で長辺2m×短辺1m周辺に分布するものである。さらに大小の2群に分けることができる。本遺跡のC区2号土坑は第1群（大）に属する。第2群は長辺4～5mを有する大型の土壙墓であり、短辺1m前後で長短比が高く細長いものである。本遺跡のC区1号土坑はここに属する。第3群・第4群・第5群は量的にきわめて少なく、第3群は長短比がほぼ1対1で1辺2m前後のもの、第4群は長短比3対2で長辺3m程のもの、第5群は第1群と同じ長短比で約2倍の規模をもつものである。

時期別に見ると、もっとも多様な規模を有するのは弥生中期、なかでもⅡ期とⅢ期といえよう。それ以後の時期の土壙墓は第1群へ集中しており、大型の土壙墓が急減している。この現象は方形周溝墓の登場・普及と関連するものと考えたい。例えば、Ⅲ期末に方形周溝墓と土壙墓が確実に共存する七尾市細口源田山遺跡では第1群の小型長方形の土壙墓に分布が集中しており、大型の土壙墓はきわめて少ない。方形周溝墓という上級被葬者用の新しい墓制の出現に連動してそれまでの上級墓であった大型の土壙墓が減少し、その結果一般人用の小型の土壙墓がのこったのであろう。大型の土壙墓は、辺を共有するなど集団墓的様相も帯びてくる方形周溝墓に交代していくのであろう。Ⅶ期については、小型化が一層進み、形状もばらつきが少ないきわめて規格化した斉一的なものになることに古墳時代前期の特質を見い出せるものと考える。弥生時代から




第59図　土壙墓の規模別分布

（Ⅲ期末）
（Ⅱ～Ⅶ期は、埋文研1990での田嶋明人氏の時期区分を使用。
Ⅱ～Ⅳはほぼ弥生土器の第Ⅱ～第Ⅳ様式にそれぞれ相当する）

古墳時代前期にかけて、土壙墓に見られる変化は方形周溝墓・古墳と密接に関連するものであり、新しい墓制の出現・普及の過程が反映されているものと捉えたい。

ただし、Ⅳ期やⅤ期などは極端に遺跡数が少なく、データの偏りは無視できない。また、本遺跡のC区1号土坑のように弥生時代末～古墳時代初めに至っても第2群に属するような大型の土壙墓が存在しているので、この推論は一面では的外れなものになっている。ここで得た推論を確定付けて多くの成果を引き出すにはより精密な分析を加える必要があろう。今後はさらに広汎な地域からの資料集成と厳密な分類を行って、慎重に検討していきたい。

### 3．方形周溝

ここでは調査区を越えてまたがる方形周溝（墓）の一部と推定したD区2号落ちこみ・3号溝、T区1号溝・2号溝について、周囲の様相からその性格を考えることにしたい。

第5図に示す通り寺中遺跡・寺中B遺跡は数次にわたって発掘調査が行われており、遺跡の広がりは年々明確になりつつある。中でも金沢市教育委員会は平成元年度の調査区で掘立柱建物2棟、平成2年度の調査区では掘立柱建物1棟、他にも土坑・溝など多くの月影式期の遺構・遺物を得る成果をあげており、注目される[25]。どちらも本書報告部分に近接したより南の区域であり第2図、第6図で見る通り南方がより微高地へ向かうことからも、寺中B遺跡の中心により近づいていると推定できる。本書報告部分ではD区・T区に遺構が集中するかたちであるが、金沢市教委の調査区と比べると遺構密度は絶対的に低く、本書報告部分は遺跡の縁辺部にあたっているものとわかる。遺跡の縁辺を集落部分から離れた区域とみなすなら、D区・T区方形周溝が墓である可能性はより高まるものと考える。もしそうであるなら、方形周溝墓が単独で存在する可能性が高く、松任市一塚遺跡[26]や金沢市畝田・寺中遺跡[27]で見られるような集団墓的なものとは異なったあり方を考えることもできよう。しかし、後世の削平が進んでおり、主体部が見つからないばかりか周溝もきわめて浅くなっている。遺物も遺構内外へ散乱したかのような出土状態を示すものが多く、不確実な要素は多いといえる。この項での検討は、あくまでも推定の域にとどまるものとしておきたい。

## 第3節　寺中B遺跡の全体像について

本章では、前2節で遺構と遺物の両側面から寺中B遺跡の性格を検討してきた。遺物では出土土器について論じた。遺構では周溝を有する建物・土坑・土壙墓・方形周溝（墓）について考えてみた。両方から得られた成果は、多様な可能性を寺中B遺跡に与えることができよう。本節では多くの成果を関連付けてまとめると同時に、遺跡の全体像を考察し、時期的・地域的に寺中B遺跡が存在する意義を追求していこうと思う。

### 1．遺物について

寺中B遺跡の主な出土遺物は弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる土器であることは第3章から述べてきた通りである。その時期は3段階に分かれ、第1段階・第2段階・第3段階

が北加賀の土器様式でそれぞれ月影Ⅰ式・月影Ⅱ式・月影式直後に相当し、ほぼ連続するものである。このなかで大きな土器の画期は器種組成に外来系の土器が確実に加わる第3段階にある。

この現象は北陸で共通する様相であるが、北陸という地域内でそのあり方が異なる。月影式直後の時期に、北陸東部（能登・越中）では高坏・器台等が外来系土器にほぼ交替し、甕は「く」字口縁甕と有段口縁で無文の甕が大勢を占めるという土器様相が展開する。甕は擬凹線紋をほとんどもたない月影式併行期からの特徴に加えて、外来系をほとんど含まずに在地系土器の組成を変えることで対応するという保守性を見せる。東海系高坏は基本的に外来系の土器が少ない北陸東部でも顕著にあらわれる。小型器台も同様であり、祭祀の変化を反映するものであろう[28]。北陸西部（加賀・越前）では、外来系土器が高坏・器台に顕著に加わる点は北陸東部と共通するが、より容易にかつ汎く他器種に受け入れられた印象がある。その一方で従来もっていた有段口縁に擬凹線紋をもつ甕などに代表される土器組成が確実にのこることも特徴といえる。まとめると、北陸東西で月影式以来の様相差をひきずりつつ祭祀土器・精製土器が地域差をもつが外来系に交替する、となる。すなわち両地域の関係に大きな変化がなく、祭祀や細かい生活様式が変化した時期と意義付けておきたい。

寺中B遺跡の第3段階の土器も大きくはこの動きの中におさまるものであるが、北陸西部、特に南加賀の白江式などと比較して、「く」字口縁甕や有段口縁無紋甕が顕著であることや、祭祀・精製土器をはじめとして前段階と大きく組成を変えていることから、より北陸東部的なあり方といえる。これに対して、近在の他遺跡では月影式にそのまま外来系土器を加えたかのような組成が見られる。こちらは北陸西部よりのあり方といえよう。大きくは北陸西部に含まれて扱われる北加賀地方に、北陸東部的な土器様相をもった遺跡が存在していると考えてみたい。北加賀や口能登は北陸地方のほぼ中央に位置し、北陸東西の文化の接点を考える上で欠かせない地域である。北加賀内でも遺跡毎に様相のばらつきがみられることを考えると、月影式直後には北陸の東西土器圏の狭間で、きわめて個別的な、極端にいえば遺跡単位に異なる様相をもつという一つの土器圏が展開したのではないだろうか。もしこの想定が正しいならば、北加賀には、北陸東部的な様相や、東西の中間的な様相をもつ遺構・遺跡がもっと多く存在してもよい[29]。口能登も同様であり、北陸西部的な様相をもつ遺構・遺跡が存在する可能性が高い[30]。寺中B遺跡の第3段階の土器群はその複雑な状況の一面を北加賀で示しているものと考えたい。

## 2．遺構について

遺構について、寺中B遺跡の全体像を明らかにしうるものは確認できなかった。だが、その一端を窺わせるものとして周溝を有する建物、玉造関連の土坑、土壙墓がある。さらに既往の調査成果を借りるならば[31]掘立柱建物や柵があり、位置を変え別遺跡として弥生中期の墓域が存在する。時期的にみて本遺跡の第1段階・第2段階には掘立柱建物・玉造関連土坑・方形周溝（墓）の他に多数の土坑や溝が存在する。かなりまとまった集落が存在し、玉造と何らかの関わりをもっていることが考えられよう。その集落は今回の調査区のD区とC区南端付近を縁辺とし、そこから南方へ広がっているのだろう。その場合、縁辺に墓をもつ可能性も考えられよう。第1段

階・第2段階の寺中B遺跡は、金沢平野全体でも最も遺跡数の多い時期の一般的な集落と考えられる。玉造については、より確実な遺構・遺跡が確認されるまでは関連を指摘するにとどめたい。

第3段階の遺構は、これまで寺中遺跡内では確認されておらず、今回はじめて確認したものである。周溝を有する建物と2基の大型土壙墓という組合せは、遺跡としてどう理解すべきだろうか。周溝を有する建物と墓の関連については前節でも述べたが、両者を結びつける確実な根拠はない。大型の土壙墓自体も、集団墓的な色あいが強い土壙墓が2基1対とはいえほぼ単独で存在することと、第3段階の墓制が方形周溝墓か古墳か不明確であることを考えると、特異な存在といえる。

そして、遺構分布が明確に第1段階・第2段階＝D区・C区南端以南、第3段階＝C区とわかれ、遺構が切り合わないことは大いに注目できる。第3段階の遺構はC区西方のA区・B区・F区・G区でも存在せず、南方にも存在しない。第3段階の遺構が集落や墓域として何らかのまとまりをもっているのならば、遺跡は北方か東方へ伸びているとしか考えられない。南方へ伸びる第1段階・第2段階の集落とは全く重ならないことになる。第1段階・第2段階の遺跡が第3段階へ続かず、縁辺を接する程度に少し離れた地点から第3段階の遺構が出現する現象は、遺跡がその中心を移動したものと捉えたい。この問題は、第3段階の寺中B遺跡の性格に深く関わり、ひいては月影式直後の社会をどう評価するかによって大きく左右されよう。

該期の社会様相についてはまだ何も具体的なことはわかっていない。だが、土器の項で述べた「月影式が北陸西部で保っていた強固な地域性が月影式直後で崩れ、きわめて細かい小地域性が発生した」とする仮説が正しいものならば、遺跡の移動と土器組成の変化を結びつけて考えることも可能ではないだろうか。遺跡の小規模な移動と、土器圏の小規模化は何らかの関係をもつものと考えたい。両者とも古墳時代的色彩を強めた他地域との交渉による社会的・政治的状況の変化が影響している可能性が強く、北陸における古墳時代への転換の一つの端緒とも捉えられる。ただし、前節で付け加えた通り、考察に問題点も多く、今後はそれを十分考慮したうえで、慎重に検討していきたい。

### 3．寺中B遺跡の全体像について

寺中B遺跡は、今回の二年次にわたる発掘調査により、月影式期の集落遺跡であることが改めて確認され、さらに月影式直後の時期まで遺構・遺物が存続するという新たな知見を得て、その全体像の一部が明らかになった。月影式から月影式直後への移行については、本遺跡に限らず不明な点が多く、資料も決して多くない。月影式直後の資料は寺中遺跡内では初見であり、また、月影式から月影式直後へ推移する過程を遺構・遺物両面から示した遺跡例もきわめて少ない。研究面ではほとんど未知の領域であると同時に、きわめて重要な遺跡であるといえる。これを確認したことが今回の調査の最大の成果であり、今後の研究課題が多いこともいうまでもないであろう。また、古墳時代以降の寺中B遺跡は遺構密度を大きく減らすが古代（主として平安時代）・中世・近世以降にも人的な活動の痕跡があり、灌漑・治水技術の進歩とともに水田地帯として存在した、と高い確実性をもっていえることも付け加えておきたい。

## 第4節　寺中・畝田遺跡群と古墳時代初期の金沢平野

犀川・浅野川下流域を中心とした金沢平野は、石川県下でもいち早く農耕文化を採り入れた地域であることは、矢木ジワリ遺跡、下安原海岸遺跡、寺中遺跡、畝田遺跡、西念・南新保遺跡、戸水B遺跡、磯部運動公園遺跡、沖町遺跡など幾多の弥生時代集落遺跡が分布していることで明らかである。それは、犀川・浅野川をはじめとする多数の中小河川が形成した肥沃で広大な沖積地を擁すること、さらに手取川扇状地の扇端部東辺と重なることから、地下水の湧出による水田用水の確保が容易であったからだと推定される。また、大河川手取とはかなりの距離を隔てて、氾濫などによる災害も比較的少ない安定した環境だったことも、初期の農業集落を発達させた要素の一つだと考えたい。

寺中B遺跡などで代表される弥生時代末から古墳時代初めにかけての過渡期（月影式期前後）においては、とくに集落遺跡の濃密な分布が指摘されている。おそらく、人口の増加などに伴なう分村現象が進行したことも、集落数の急激な増加の一因だったと考えられ、規模の大きい親村を核とし、中小規模の幾つもの支村からなる単位集団が、政治的かつ祭祀的な結束を深めており、その影響範囲の拡張に向けて、盛んな動きをみせていた時期に当たろう。このような地域統合の動きは、弥生時代の中ごろからすでに始まっている現象であるが、この時期に至って急速に進展をみたと考えたい。個人的な予測としては、倉部川・犀川（安原・伏見川）・浅野川・金腐川・森下川といった水系を中心として、政治的結束が固められたものと推定している（水系を単位とするといっても、金沢平野においては、共用されたとみられる隣り合う二つの河川に挟まれた範囲を想定したのであるが）。そうした集団が管理下に置いたのは、単に沖積地における河耕地に限らず、周辺の台地・低丘陵地帯や海・潟にも及ぶものであり、狩猟・漁撈などの採集活動の場を含むものだったと考える。弥生時代といえば、稲作を中心とした農業生産を重視しがちであるが、採集活動にも積極的に取り組んでいたことは言うまでもないことである。また、当時の人びとが食料獲得にのみ時を過ごしたのではなく、塚崎遺跡を例にあげるまでもなく、玉生産などにかなり専業的な体制で取り組み始めた時期でもあった。

寺中B遺跡は、犀川と河北潟から日本海に流入する大野川に挟まれた沖積地（微高地）に所在する。その範囲は、奈良時代末（『日本霊異記』など）に初見する加賀郡大野郷（大野庄）に当たり、大野湊（戸水C遺跡が当てられる）を擁する地域であるとともに、延喜式内社であって、郡津としての大野湊の守護神だったとされる大野湊神社もこの地にあった。大野川河口付近に古代港湾施設を擁することで、北加賀における重要な地域として繁栄することになるが、その兆しは、すでに弥生・古墳時代の過渡期にあったと考えたい。寺中B遺跡の東方約500mに所在する畝田遺跡からは、やはり弥生時代から古墳時代への過渡期の時期の遺構・遺物多数を出土している。とくに、注目された遺物には、玉杖形木製品・弧文板・卜骨の三点がある。玉杖とは碧玉製の儀礼用杖のことであり、出土品は儀杖の頭部を象った木製品（黒漆塗り）であった。弧文板は奈良県纒向遺跡出土品に類似した直弧文（祖形的な）を陰刻した什器の断片であり、これも祭祀・儀礼の際に用いられた可能性が高い。一方、鹿の肩甲骨を加工している卜骨は、焼灼に

よる占い行為の存在を示す資料であり、専門的な占い師が存在したことを物語っている。

儀礼に伴なう杖や什器、さらに卜占術者の出現は、かなりの政治的支配者の出現をも示すものである。いうまでもなく当時の権力は、富と軍事力のみで支えられるものではなく、神との強い結び付きを背景として成り立ったもので、政治的支配者とは、生産と祭祀をも一体として掌握する存在であった。したがって、畝田遺跡から儀礼・祭祀・卜占に関わる考古学的資料が集中していることは、この遺跡周辺に弥生・古墳時代過渡期における他に卓越した権力の所在を意味するもので、地域の中核となるいわゆる親村であったことを示すものであり、その首長権力の及ぶ範囲は、おそらく後の大野郷に匹敵するものだったかもしれない。なお、卜骨による卜占行為は、首長層の個人的な吉凶占いも含むが、その主体となるのは、集団そのものが首長の意思によって行うものとされる。

寺中B遺跡や畝田集落の首長たちは、どのような墳墓に葬られたのであろうか、という疑問にはなかなか答えられない。弥生時代中期以降には、方形周溝墓群の出現をみていることは確かであり、弥生時代末から古墳時代初めにかけての首長墓としては、すでにある程度の盛り土を施したいわゆる墳丘墓状のものが存在したと考えられる。しかし、海岸にほど近い沖積平野では、その発見は容易でない。ただ、やや年代が下るものに、古府クルビ式期を中心とした小型の前方後方墳状の墳墓（前方後方形周溝墓）がある。犀川・浅野川周辺の沖積地では、戸水C遺跡や藤江C遺跡でその周溝部分が検出されており、なお類例は増加するものと推定される。全長約17メートル前後の小規模なもので、前方部前端部分に溝を設けないなど、定型的な前方後方墳には成長していないものの、初現的な古墳と呼べるものに近づいており、過渡期における首長墓の一つの形態とみなすことは可能であって、このような小型前方後方墳をもって、平均的集落の首長たちの墳墓だと考えることができる。

ただ、畝田遺跡にみるような、かなり広域的（親村的）で、幾つかの集落を集合体として支配するような統括的支配者の墳墓が、同じような規模・形態を採っているか否かについては、なお明確だとはいえない。過渡期において、小型前方後方墳の規模・内容を超えるような墳墓が発見されていない現況では、中核村の首長層も、これに従属する村の首長層群も同じ程度の墳墓を造成しており、とくにその間に格差を生じていなかったとも考えられ、このような状況が、定型的古墳が出現する直前までの姿であったかも知れない。ただ、松任市旭工業団地一塚地区で発見された四隅突出形墳丘墓のように、山陰系譜という特殊な存在ながら、小型前方後方墳と同等もしくはこれを凌ぐ規模をもつ過渡期の首長墓については、十分に検討されねばならない。

犀川下流と浅野・大野川に挟まれた沖積地は、弥生時代末から古墳時代初めにかけて、一つの政治的な纏まりをもつ地域だった可能性が高いと推定し、その中核的集落が、現大徳川沿いに立地する畝田遺跡であろうとも推測した。現時点では未発見ながら、おそらく畝田周辺には、かつての中核集落に相応しい首長墳墓群が存在することは疑いないと考える。古墳時代に入って丘陵部における古墳築造が志向され、浅野川・金腐川中流域では、小坂古墳群・観法寺古墳群・神谷内古墳群・御所八ツ塚古墳群などが形成される。これらの古墳群が、過渡期における首長勢力とどのような関係にあるか不明であるが、大野川河口と河北潟の水運と水利を握ったかつての畝田・寺中周辺勢力の存在を無視するわけにはいかない。

## 註

（1）藤1975。本章の自然環境の変動についての記述はすべて同氏の論考によるものである。

（2）青森県垂柳遺跡が代表例だが、近年はそれ以外にも発見が相次いでいる。

（3）藤・四柳1971。

（4）藤江C遺跡では石川県立埋蔵文化財センターの1990年の調査により確認されている。北塚B遺跡については石川県埋文センター1985に詳しい。

（5）金沢市月影遺跡土坑出土土器によって提唱された北加賀の弥生終末期の標式土器である。本書の「月影式」の概念は月影Ⅰ式・Ⅱ式も含めて、主として石考研1986による。

（6）北陸の弥生時代初期の標式土器である。その時期幅は弥生前期から中期前半にまで及び、湯尻1983、石川県埋文センター1989などで編年細分の検討がなされている。

（7）吉岡1971。北陸の縄紋晩期終末の標式土器である。最大の焦点である柴山出村式への変化すなわち弥生時代への移行については明確に理解されているとはいえない。

（8）C区大溝出土遺物については、藤田邦夫氏から多くの教示を受けた。

（9）石川県埋文センター1987での藤田邦夫氏の論考及び、同氏の教示による。

（10）銭貨については、芝田　悟氏の教示を受けた。

（11）石考研・北陸古代土器研1988で内堀信雄氏が検討している。

（12）（5）と同じ。以下用いる「月影式」の概念も石考研1986による。

（13）一般に「能登型甕」と呼称されるもので、小田木1989では越中にも多いことが明言されている。

（14）その原形は法仏Ⅱ式から存在し、宮本哲郎氏がとりあげて宮本1985・石考研1986で考察を行っており、この分類は前者による。私見であるが、筆者安は小型高坏について、一般の高坏とは大きく器型が異なり、単なる高坏のミニチュア品ではなく、何か特殊な用途をもつと考えている。

（15）㈶愛知県埋文センター1990。

（16）東海地方の土器と形態的に似るが、搬入品ではなく北陸で生産されたと推定できる土器を指す。

（17）（16）と同じく、形態的に北陸以外の地域の土器と類似するが、北陸で生産されたと推定できるものを指す。これと分けられるのは、他地方で生産されて北陸へ運ばれてきた搬入品と北陸の在地の形態をとり在地で生産されたすなわち「在地系の土器」となる。

（18）金沢市古府クルビ遺跡出土土器によって提唱された北加賀の古墳時代初頭の標式土器である。月影式直後より始まる外来系土器の進出が布留系甕の出現と共に加速する段階と考えている。

（19）石川県埋文センター1986a。

（20）小田木1989。

（21）周溝を有する建物は今回とりあげたほかにも、金沢市戸水B遺跡、鹿島町久江ツカノコシ遺跡（以上石川県立埋蔵文化財センター調査）や金沢市上荒屋遺跡、下安原遺跡、新保本町東遺跡、桜田・示野中遺跡、羽咋市太田遺跡（以上各市町村教育委員会調査）等でも確認されている。

（22）埋文研1990での田嶋明人氏の時期区分を用いた。但しここでは、Ⅵ期までを弥生時代とし、Ⅶ期は古墳前期とした。Ⅰ～Ⅳ期はⅠ～Ⅳ様式に相当する。

（23）①説は下谷地遺跡、②説は下屋敷遺跡、③説は寺中遺跡が好例である。

（24）方形周溝墓は、県内では金沢市西念・南新保遺跡と七尾市細口源田山遺跡がそれぞれ加賀能登の現在の代表例でありかつ最古例である。

（25）調査担当の楠正勝氏より丁寧な教示を受けた。

（26）石川県埋文センター-1990、松任市教委1990。

（27）周溝より出土した土器から判断すると古府クルビ式期である。周溝を失った小型古墳というべきだろうか。

（28）徳前C遺跡74～76ライン溝状遺構などが好資料である。

（29）北加賀では野々市町押野タチナカ遺跡、松任市一塚イチノツカ遺跡で類例がある。

（30）口能登の様相については石考研1986で北野博司氏が報告している。

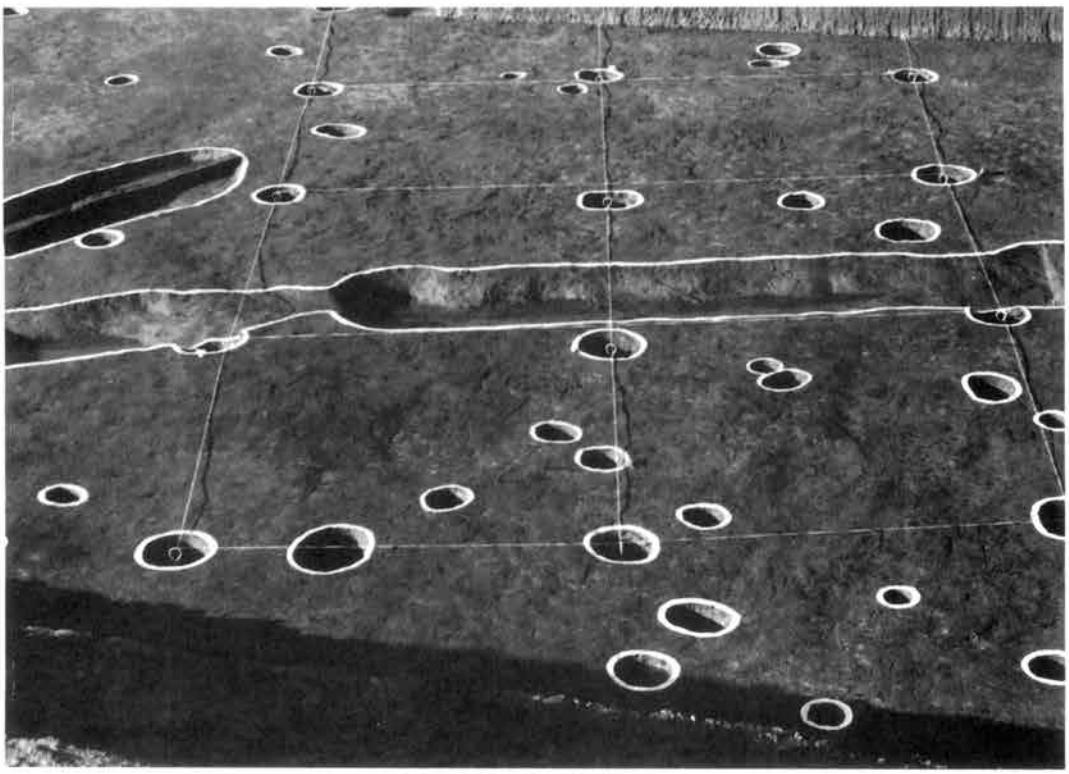
（31）本書以外には、石川考古学研究会と金沢市教育委員会がそれぞれ発掘調査を行っている。第5図参照。弥生中期の墓域については金沢市教委1977に詳しい。

## 参考文献

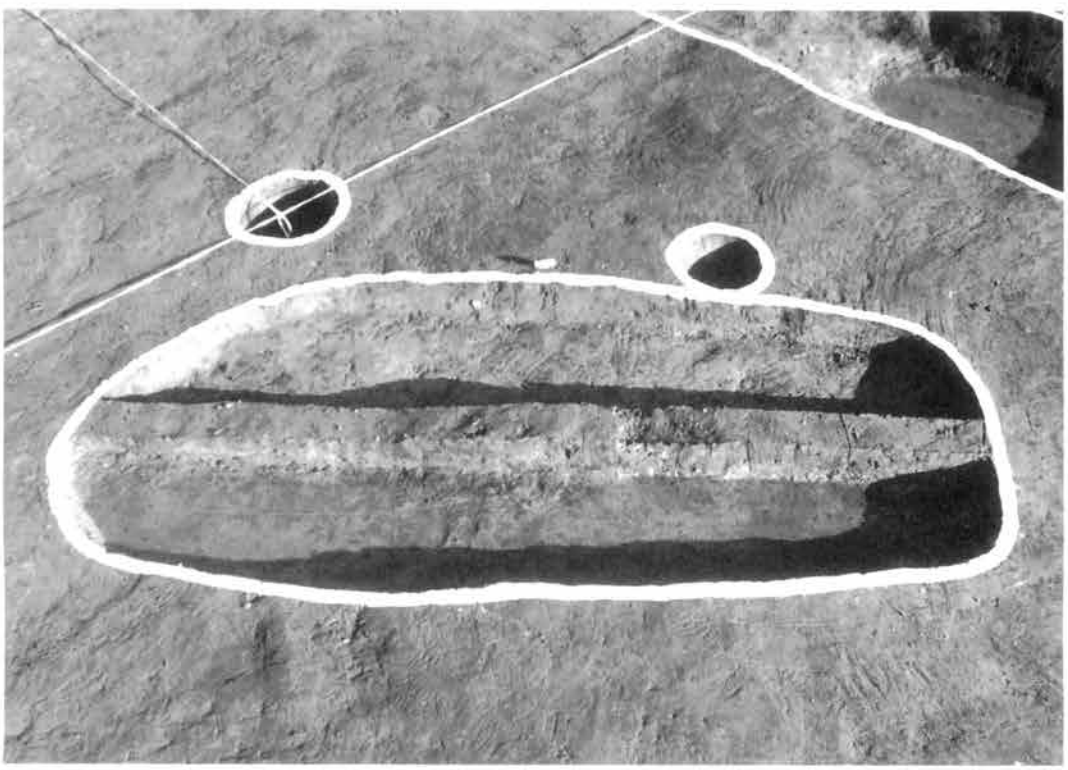

石川県教育委員会　1975　『金沢市戸水Ｂ遺跡調査報告』
石川県教育委員会　1976　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
石川県立埋蔵文化財センター　1985　『北塚遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター　1986ａ　『漆町遺跡Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター　1986ｂ　『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』
石川県立埋蔵文化財センター　1986ｃ　『近岡遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1986ｄ　『金沢市戸水Ｃ遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1987　『敷地天神山遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター　1988ａ　『下安原海岸遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1988ｂ　『八田中遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1990　『一塚イチノツカ遺跡』
石川考古学研究会　1986　『シンポジウム「月影式」土器について』報告編
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988　『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編・資料編
宇ノ気町教育委員会　1987　『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』
小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳出現期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ』（『石川考古学研究会々誌』第32号）
角川書店　1971　『古代の日本』２　風土と生活
角川書店　1981　『角川日本地名大辞典』17　石川県
金沢市教育委員会　1975　『金沢市高畠遺跡－第１・２次発掘調査報告書－』
金沢市教育委員会　1977　『金沢市寺中遺跡－第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告書－』
金沢市教育委員会　1983　『西念・南新保遺跡』
金沢市教育委員会　1984ａ　『金沢市畝田・寺中遺跡』
金沢市教育委員会　1984ｂ　『金沢市南新保三枚田遺跡』
金沢市教育委員会　1985ａ　『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡　金沢市近岡カンタンボ遺跡』
金沢市教育委員会　1985ｂ　『金沢市松寺遺跡』
金沢市教育委員会　1986ａ　『金沢市近岡ナカシマ遺跡』
金沢市教育委員会　1986ｂ　『金沢市無量寺Ｂ遺跡Ⅲ・Ⅳ』
金沢市教育委員会　1987　『金沢市矢木ジワリ遺跡　金沢市矢木ヒガシウラ遺跡』
金沢市教育委員会　1988　『磯部運動公園遺跡』
金沢市教育委員会　1989　『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』
金沢市教育委員会　1990　『金沢市下安原遺跡』
上市町教育委員会　1982　『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』
小松市教育委員会　1987　『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書』
講談社　1975　『古代史発掘』④　稲作の始まり　弥生時代－１
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990　『廻間遺跡』
七尾市教育委員会　1982　『細口源田山遺跡』
新潟県教育委員会　1979　『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　下谷地遺跡』
橋本澄夫・荒木繁行　1969　「金沢市寺中遺跡の第Ⅰ次調査」『石川考古学研究会々誌』第12号
福井県教育庁埋蔵文化財センター　1987　『下屋敷遺跡　堀江十楽遺跡』
藤　則雄・四柳嘉章　1971　「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」『考古学研究』第17巻第３号
藤　則雄　1975　「北陸の海岸砂丘」『第四紀研究』第14巻第４号
藤　則雄・丹羽千枝子　1983　「石川県縄文後・晩期御経塚遺跡の古環境解析」『野々市町御経塚遺跡』
藤田邦雄　1989　「中世土器素描－加賀地方の土師器を中心にして－」『北陸の考古学Ⅱ』（『石川考古学研究会々誌』第32号）
埋蔵文化財研究会　1991　『弥生時代の掘立柱建物』
松任市教育委員会　1990　『旭遺跡群発掘調査概報』
宮本哲郎　1985　「小型高坏の一考察－北加賀における小型高坏形土器の出現と変移についての基礎的考察－」『石川考古学研究会々誌』第28号
湯尻修平　1983　「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）
雄山閣　1969　『新版　考古学講座』④原始文化〈上〉
吉岡康暢　1971　「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻４号

遺跡遠景（南東から、中日新聞北陸本社提供）

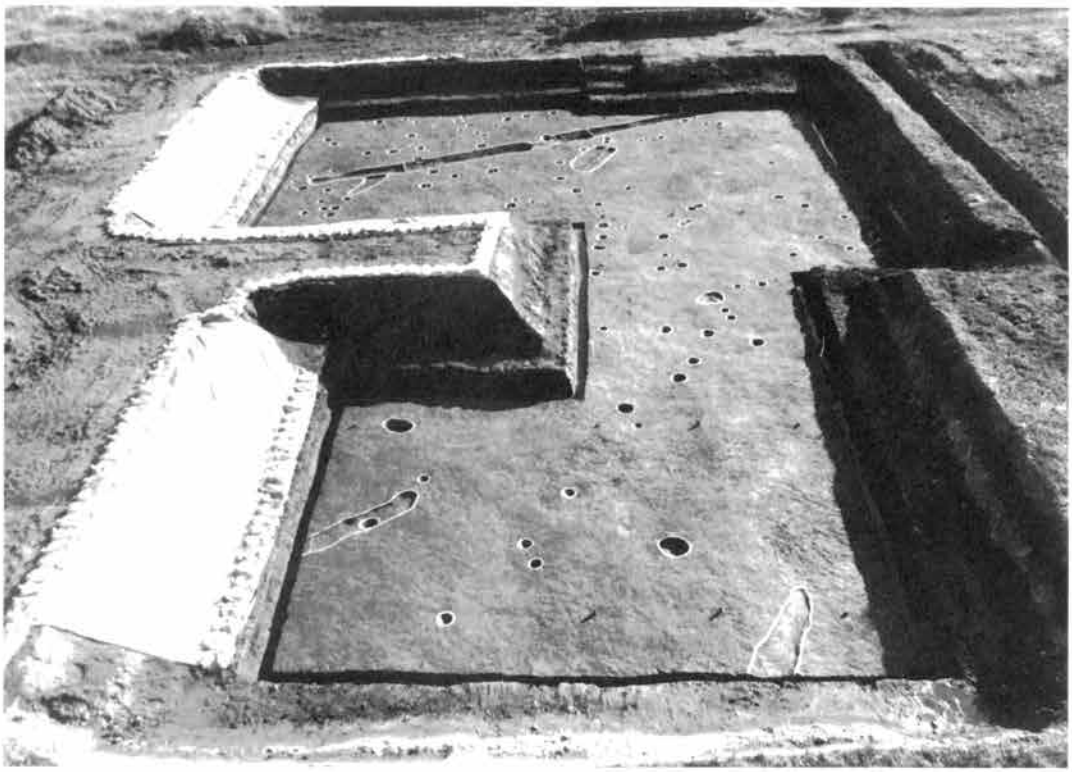
出土玉類（実物大）



A区1号建物（南東から）



A区土坑（北西から）

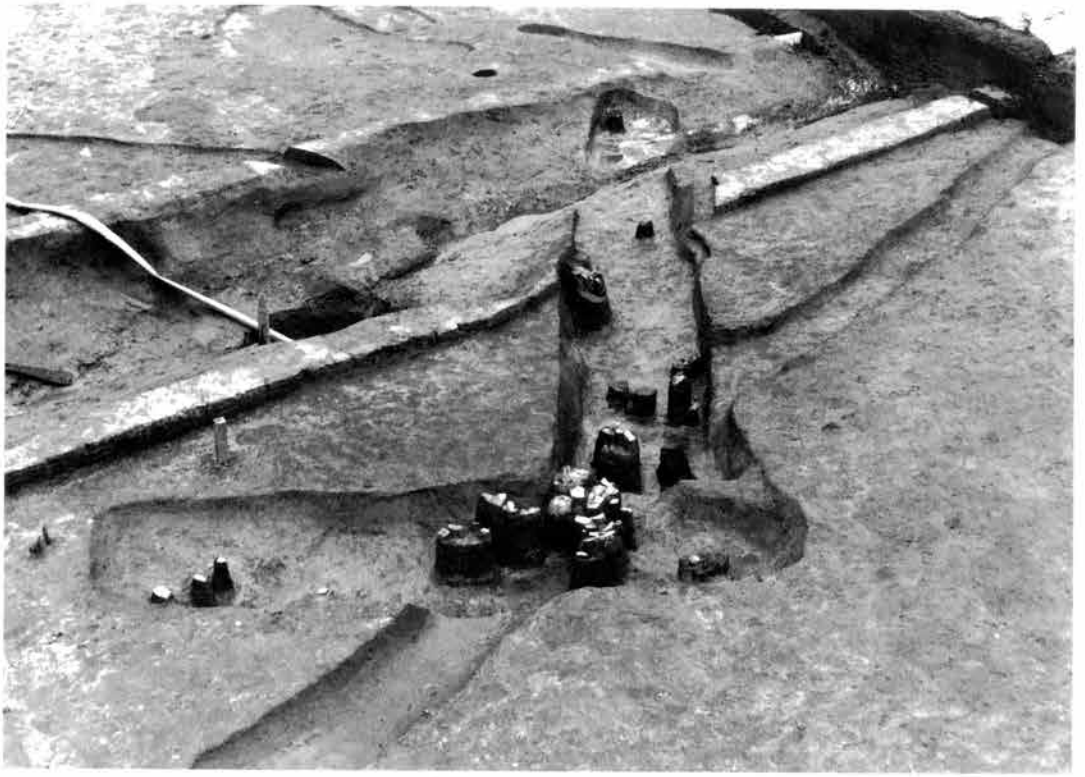


A区調査後全景（北から）

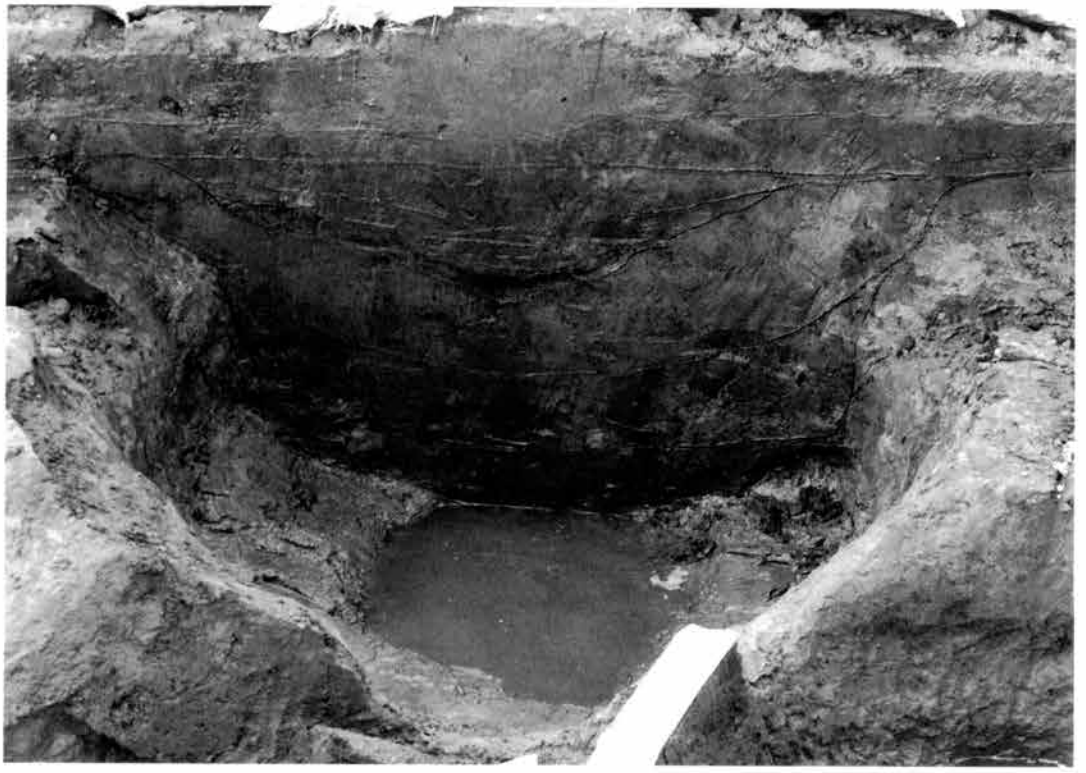
B区調査後全景（南から）

B区調査後全景（北から）

C区竪穴状遺構（北東から）



C区1号土坑・2号土坑（北西から）



C区3号土坑（東から）

C区大溝木器出土状態（西から）

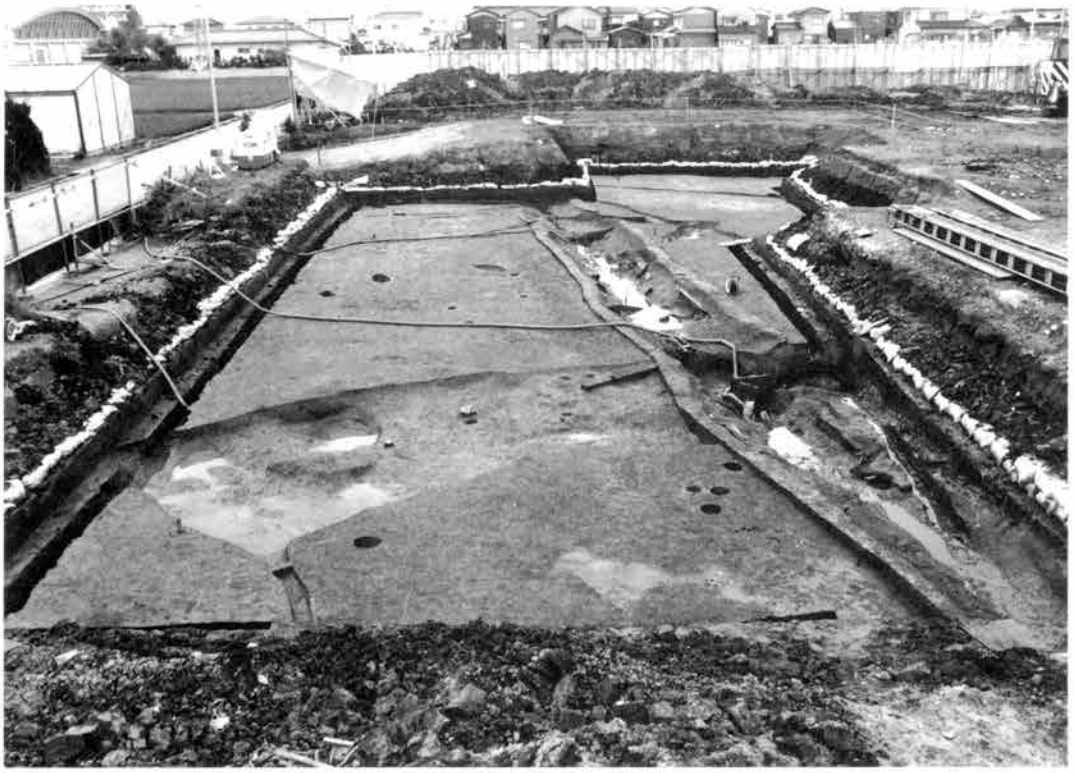
C区大溝南半（北から）

C区大溝北半（南から）

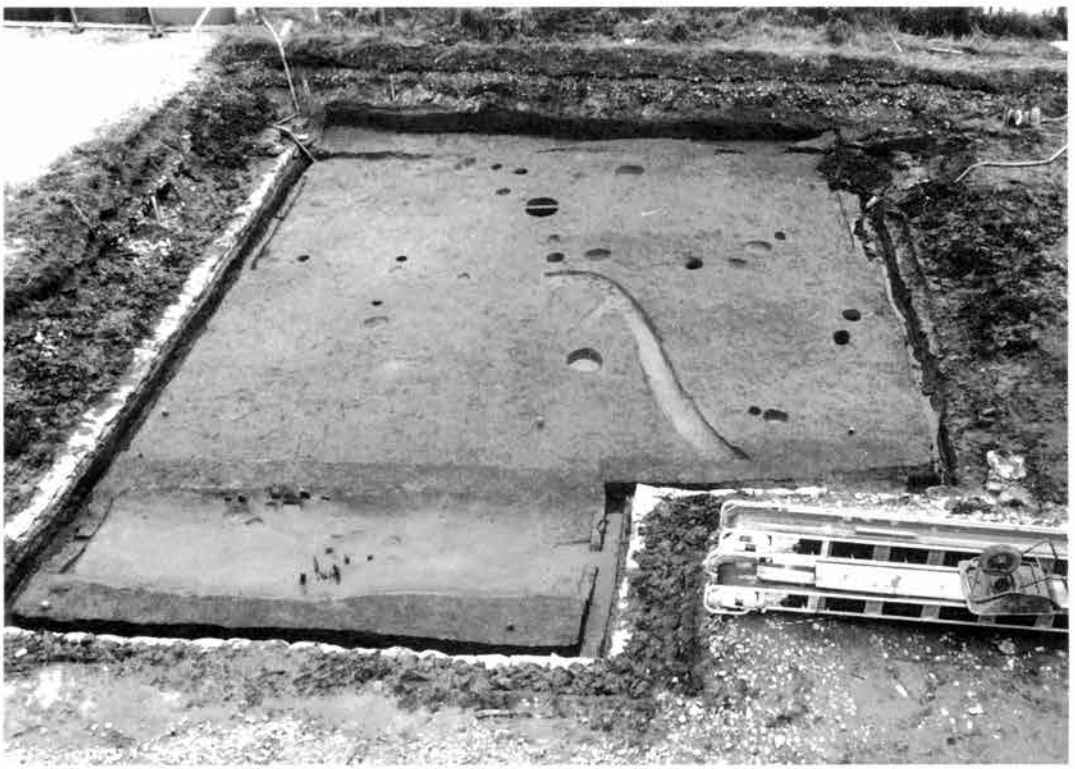
C区1号土器溜まり（北から）

C区２号土器溜まり（東から）

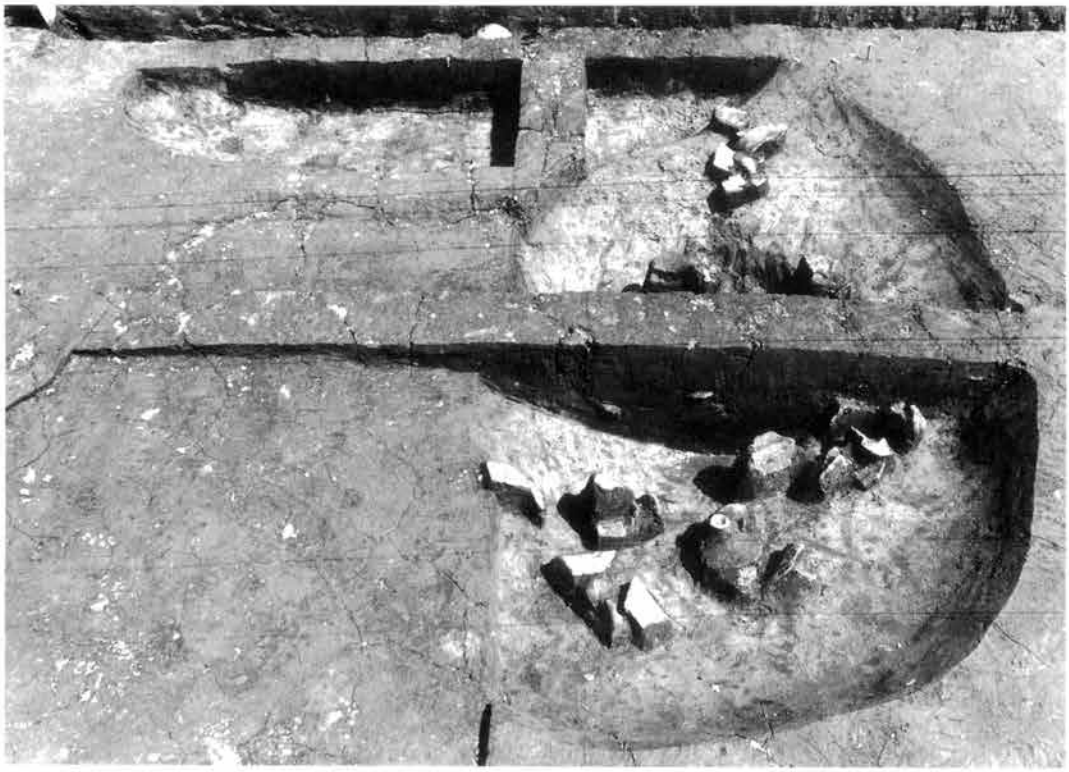
C区浄化槽部分主要遺構（東から）



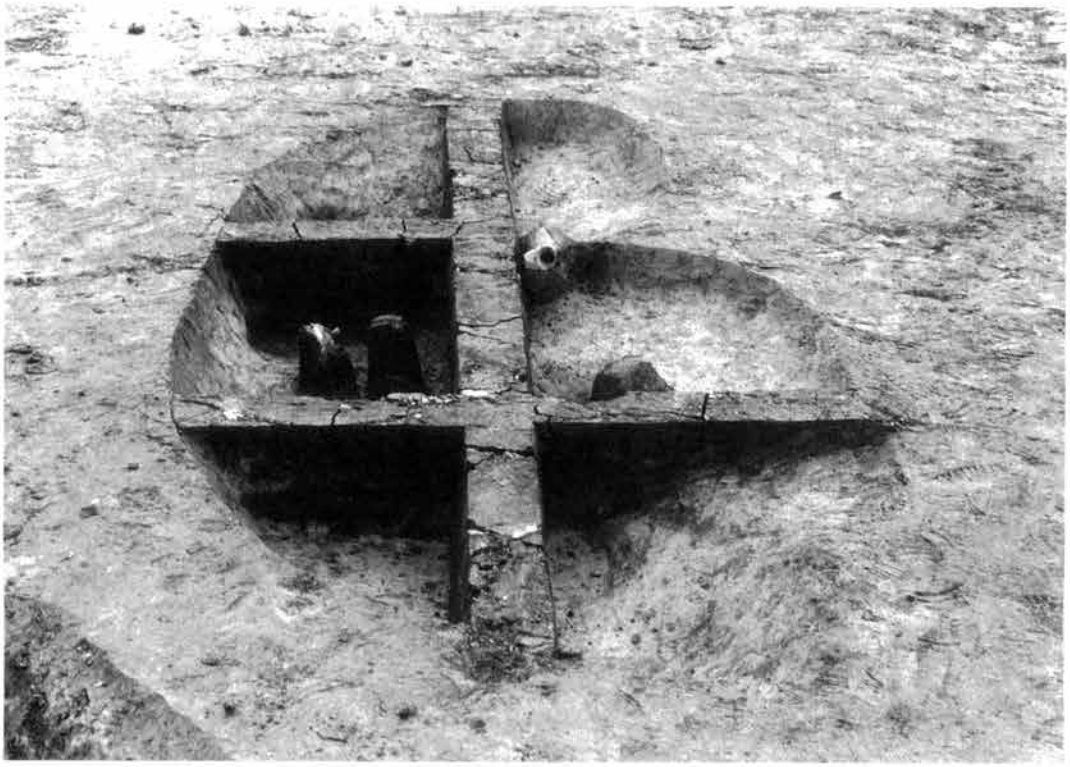
C区南半部調査後全景（北から）



C区北半部調査後全景（西から）



D区2号土坑・3号土坑（南から）

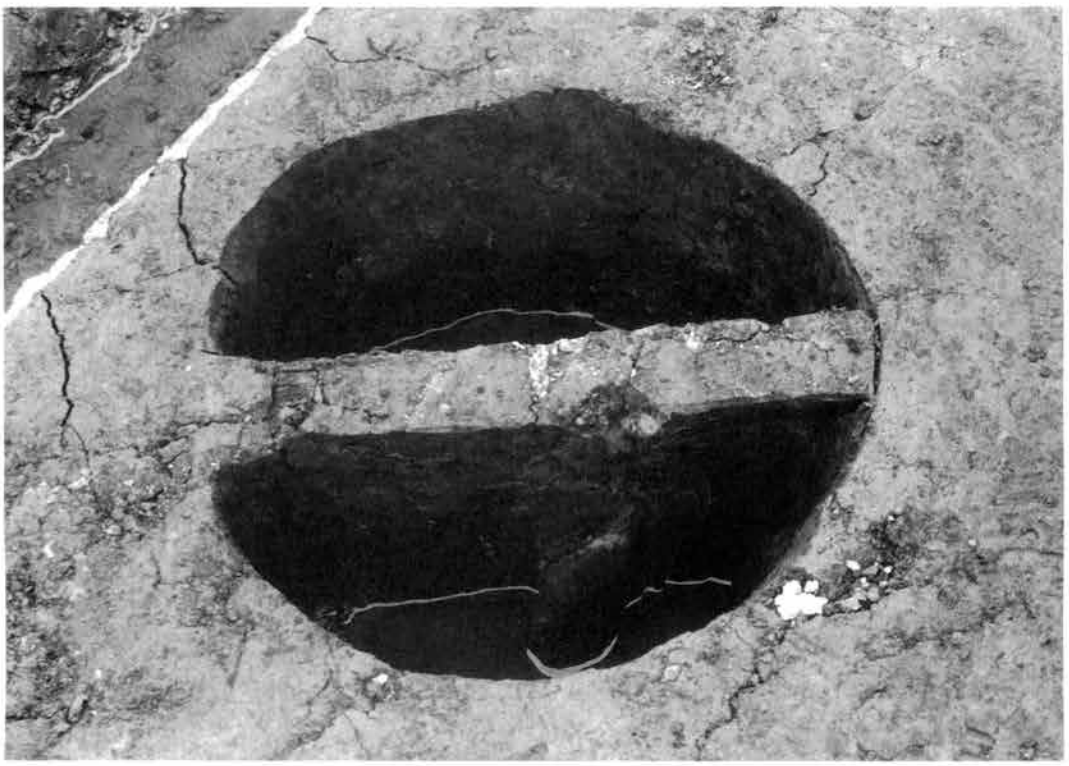


D区4号土坑（東から）

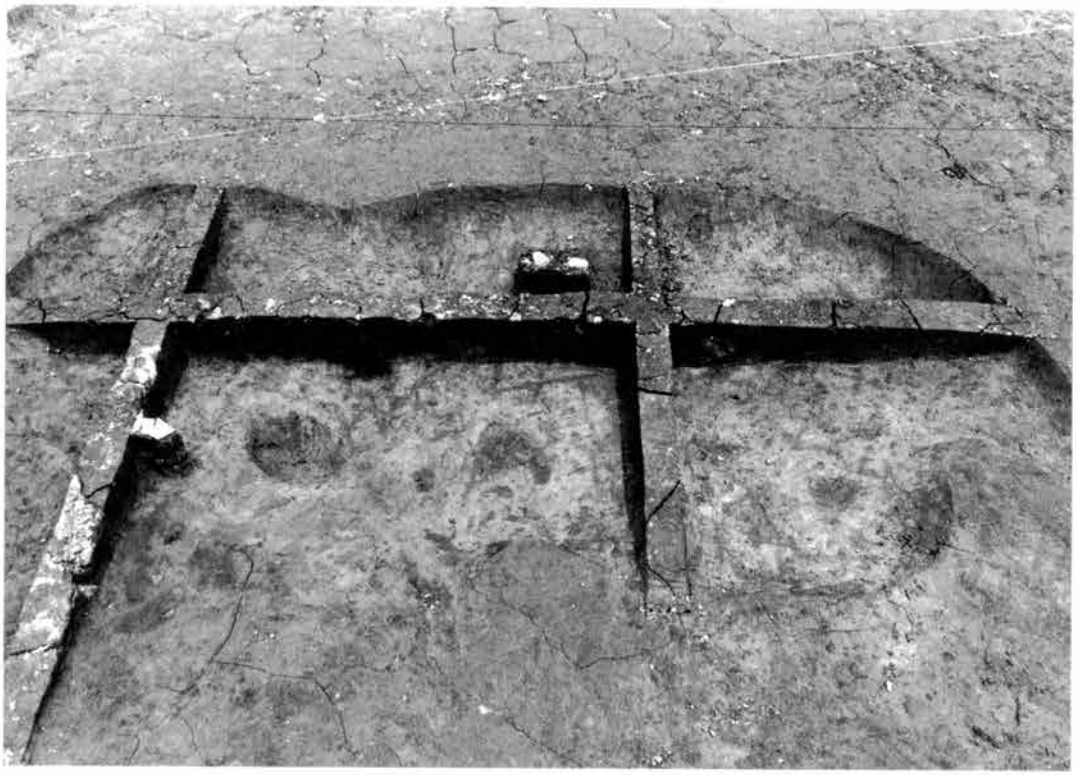
D区5号土坑（西から）

D区1号溝・2号溝（北西から）

D 区 3 号 溝（北東から）



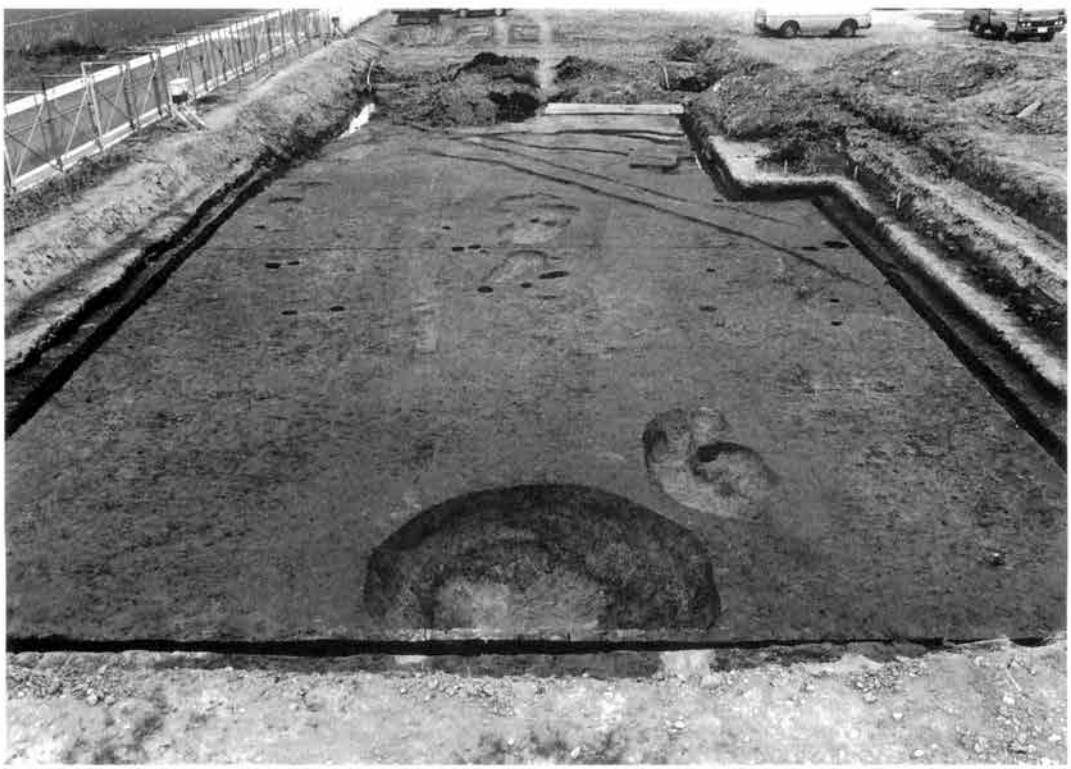
D 区 1 号 柱 穴（南西から）



D区2号落ちこみ（北から）

D区主要遺構（西半部、北から）

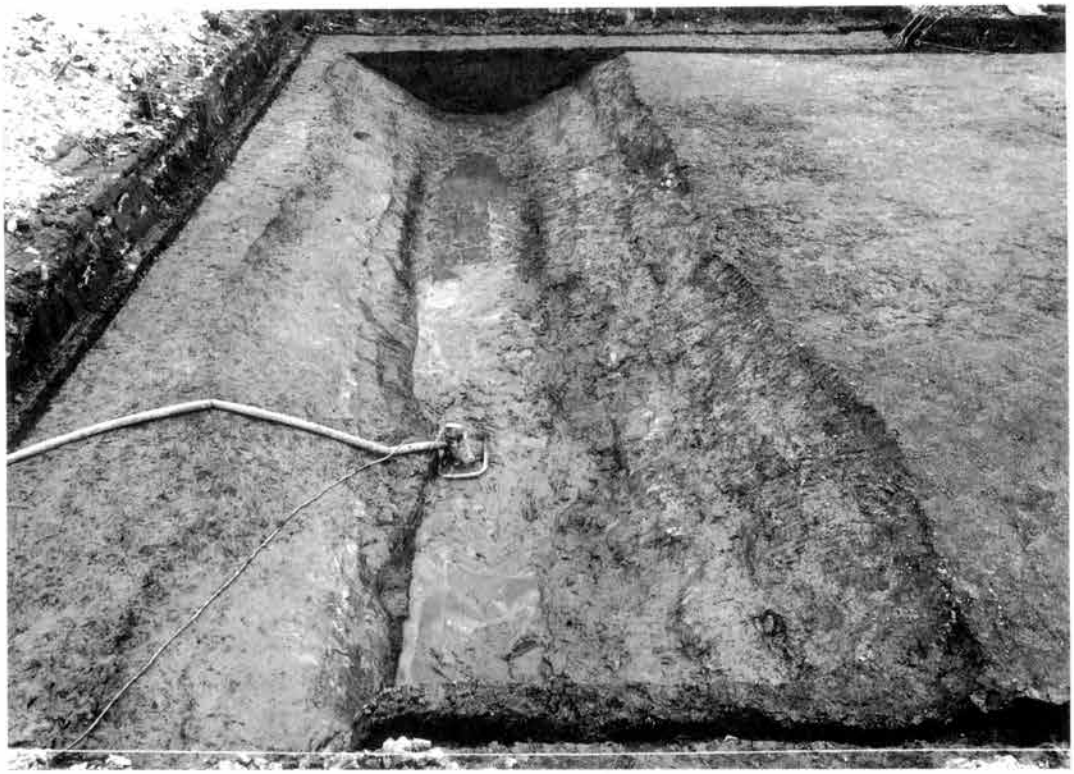
D区西半部調査後全景（北東から）



D区東半部調査後全景（東から）

D区東半部調査後全景（西から）

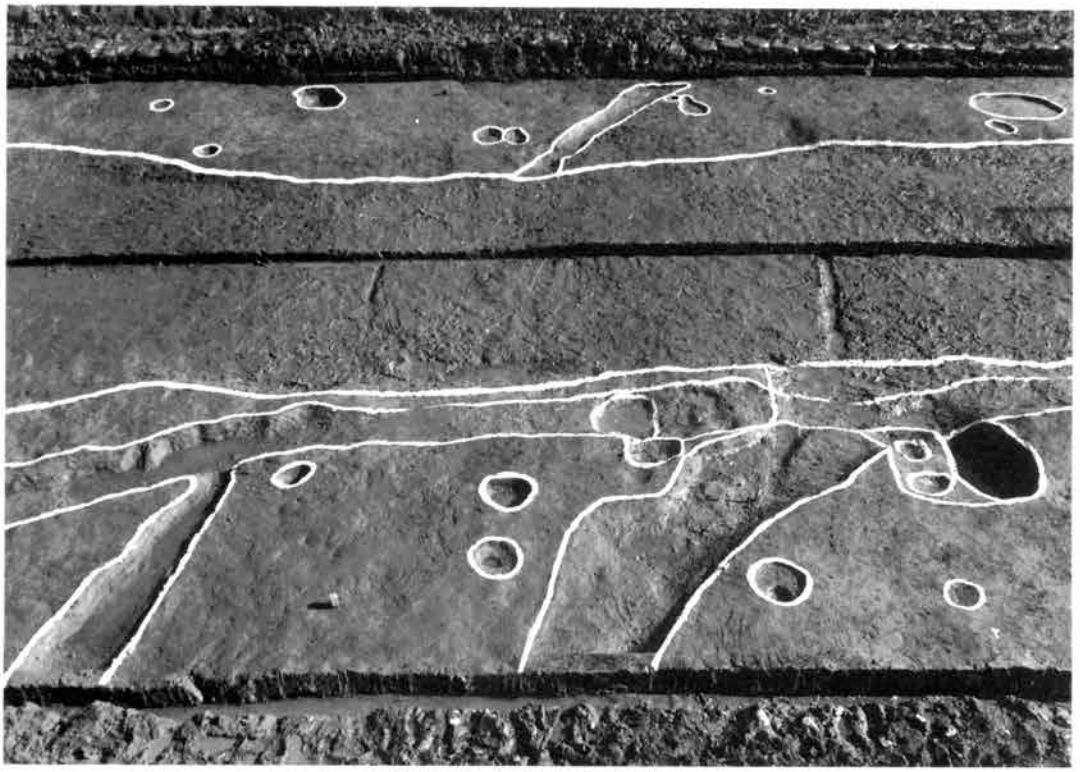
E 区 土 坑（南から）



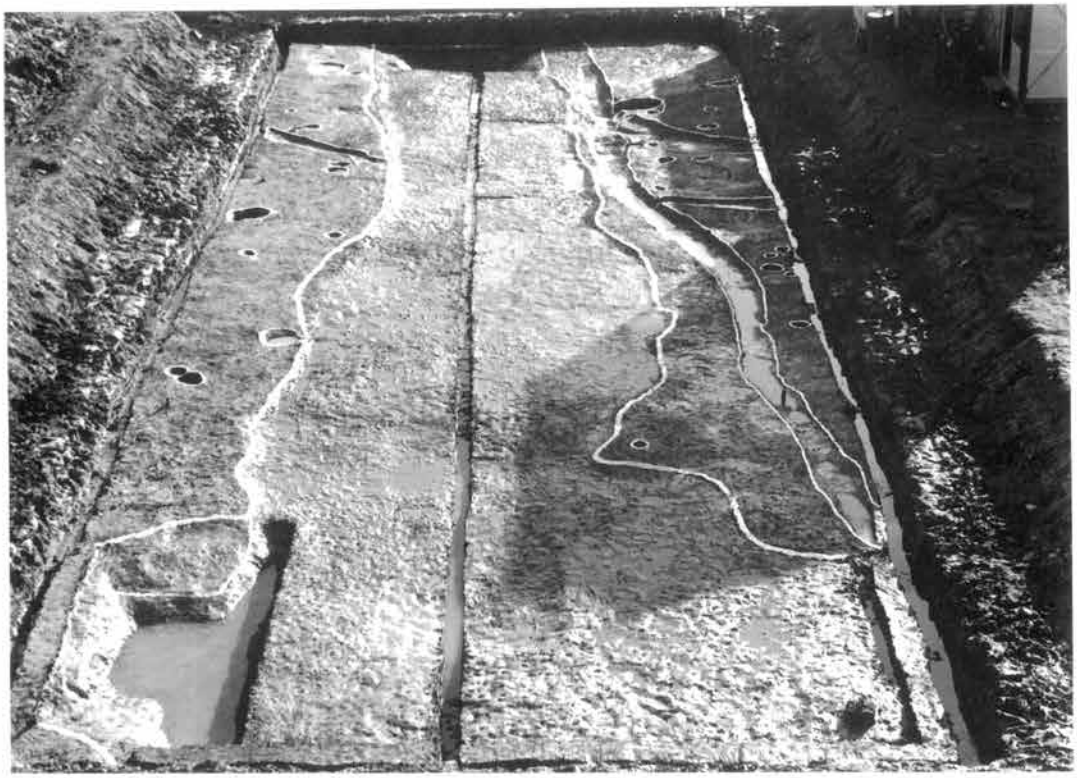
E 区 大 溝（南から）

E区調査後全景（西から）

F区調査後全景（南から）



G区主要遺構（西から）

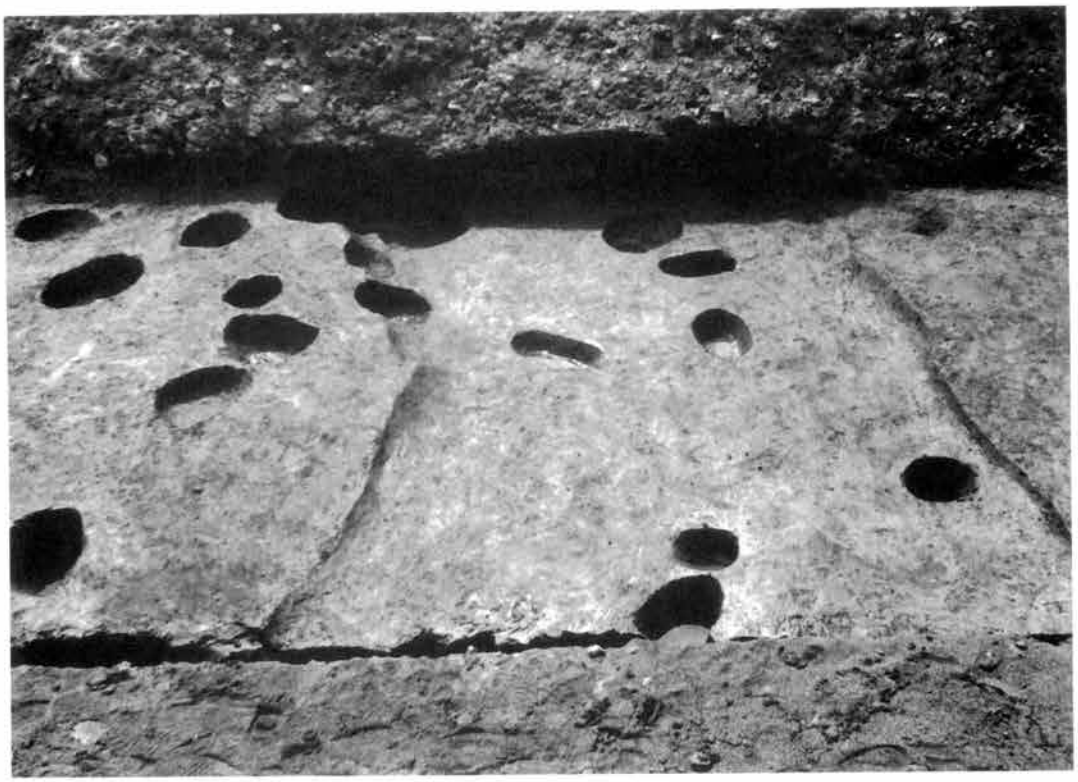


G区調査後全景（北から）

S　区　大　溝（南から）

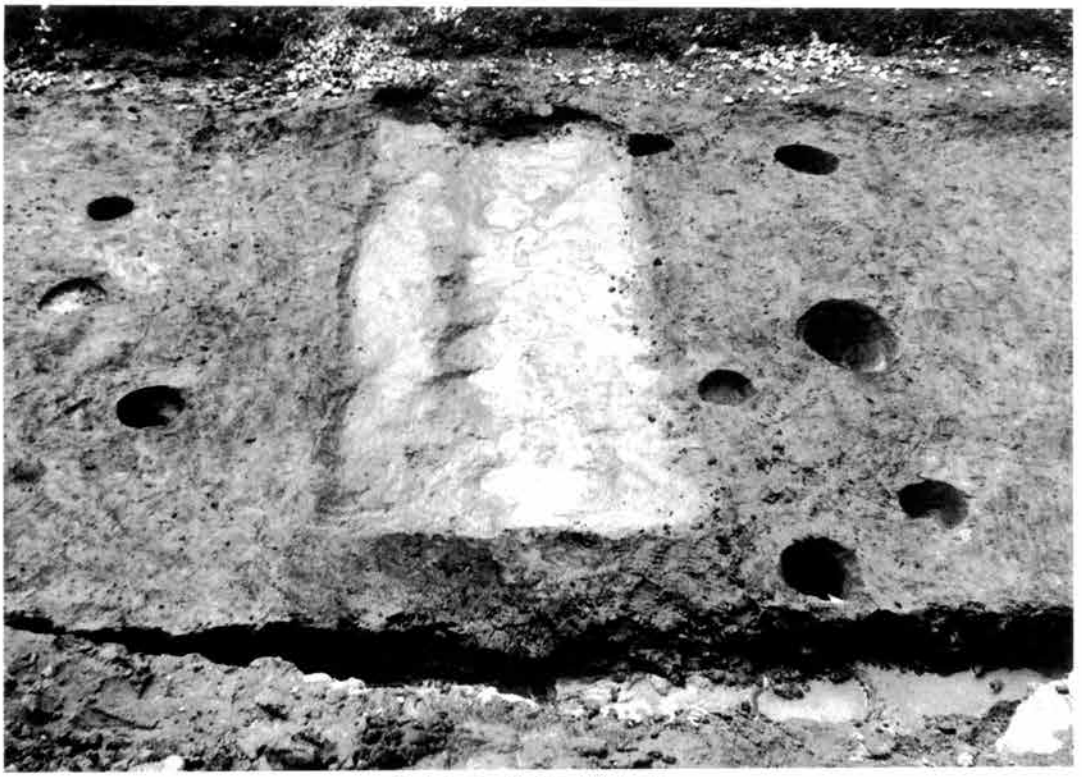
S区調査後全景（東から）

S区調査後全景（西から）



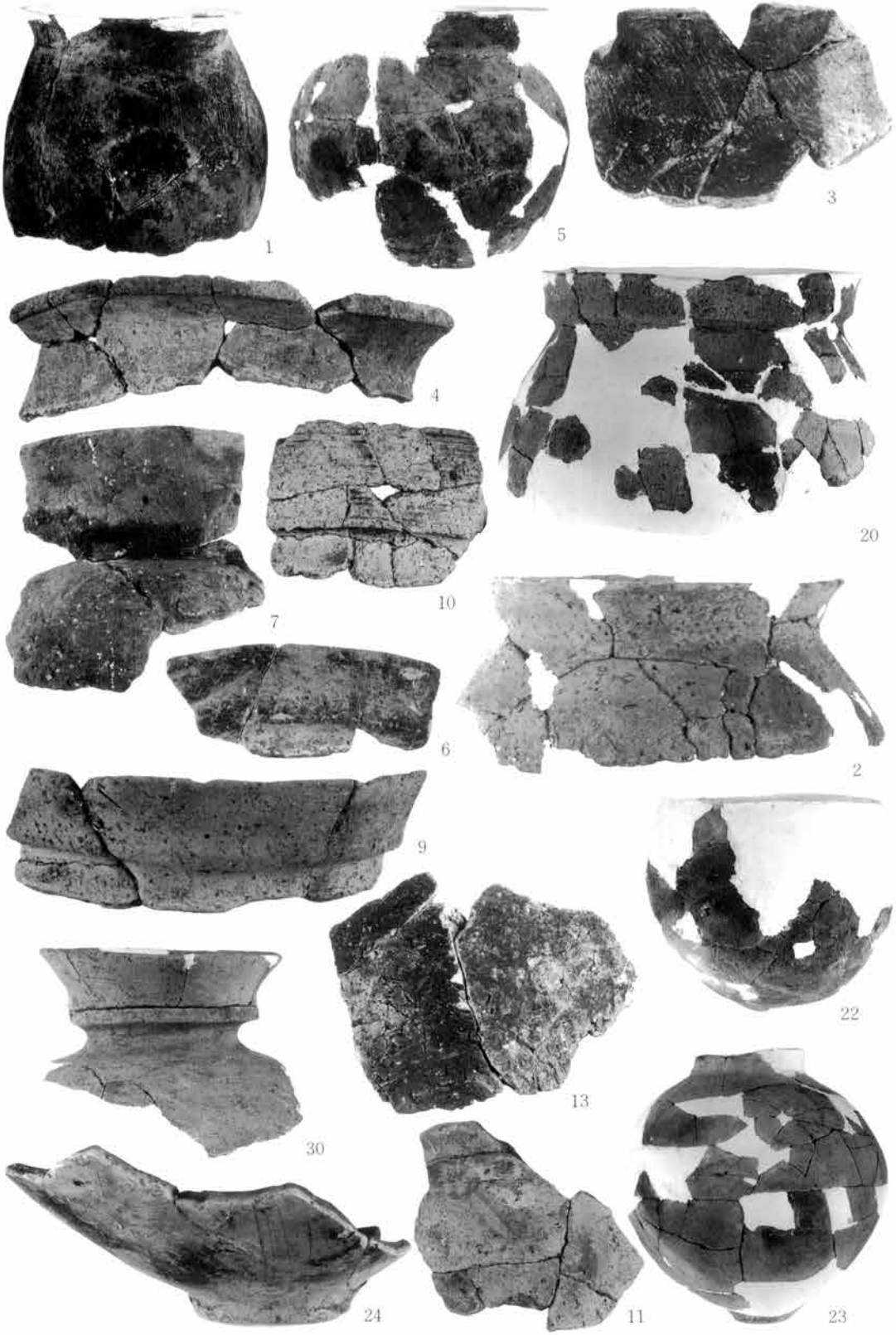
T 区 1 号 溝（北から）

T 区 2 号 溝（北から）



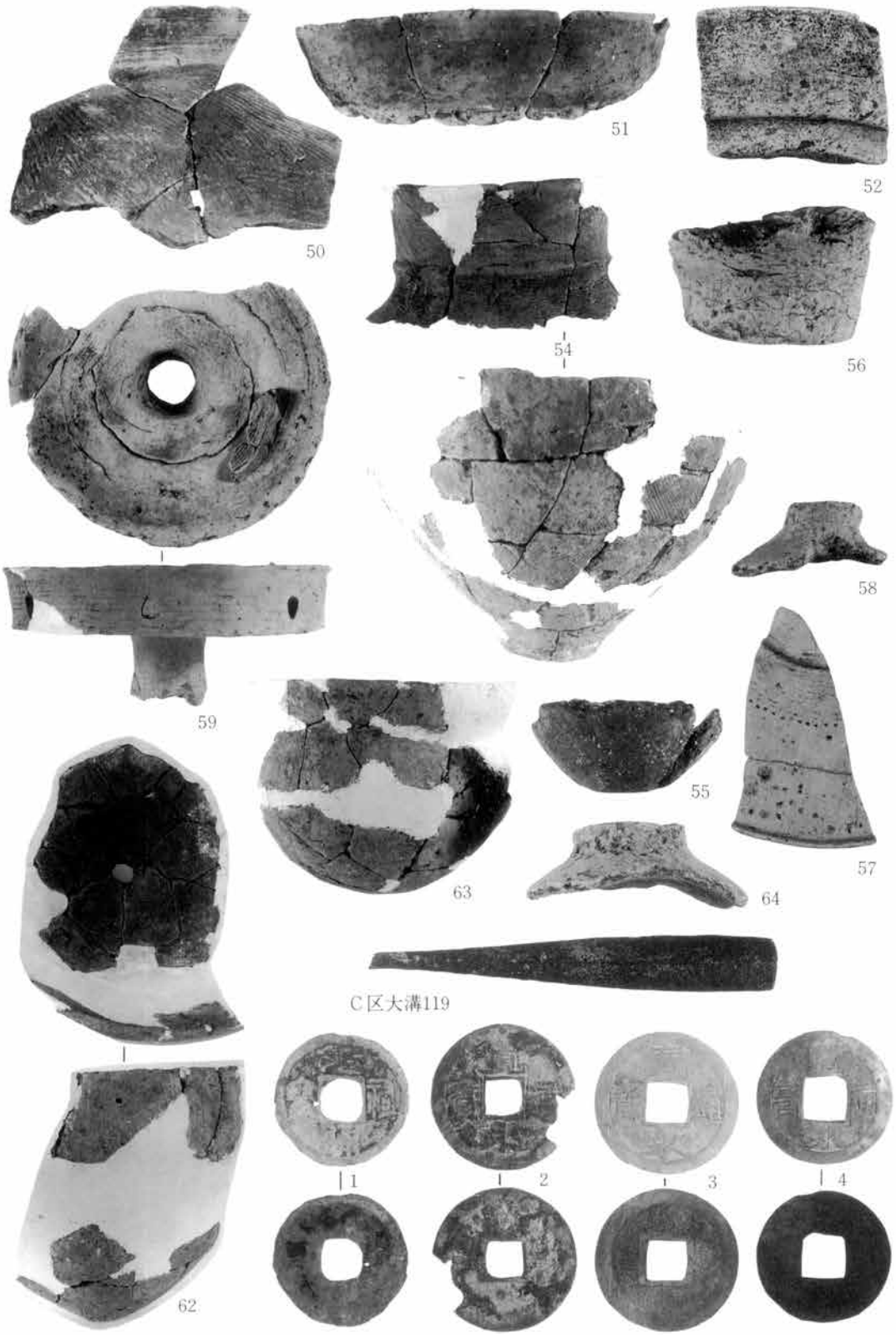
T 区 3 号 溝（北から）

T区調査後全景（西から）

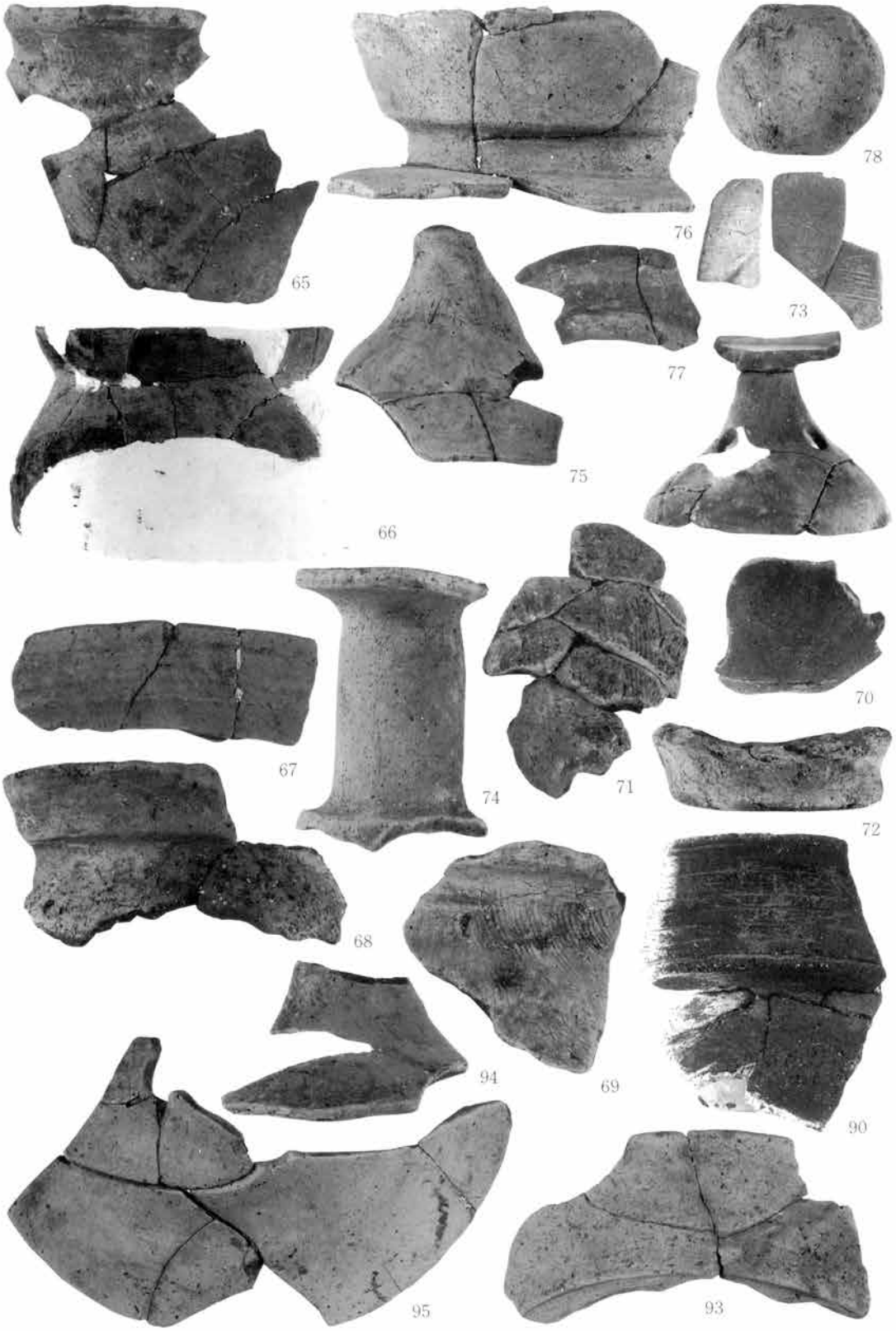



出土遺物(1)　C区竪穴状遺構(1)　縮尺不同

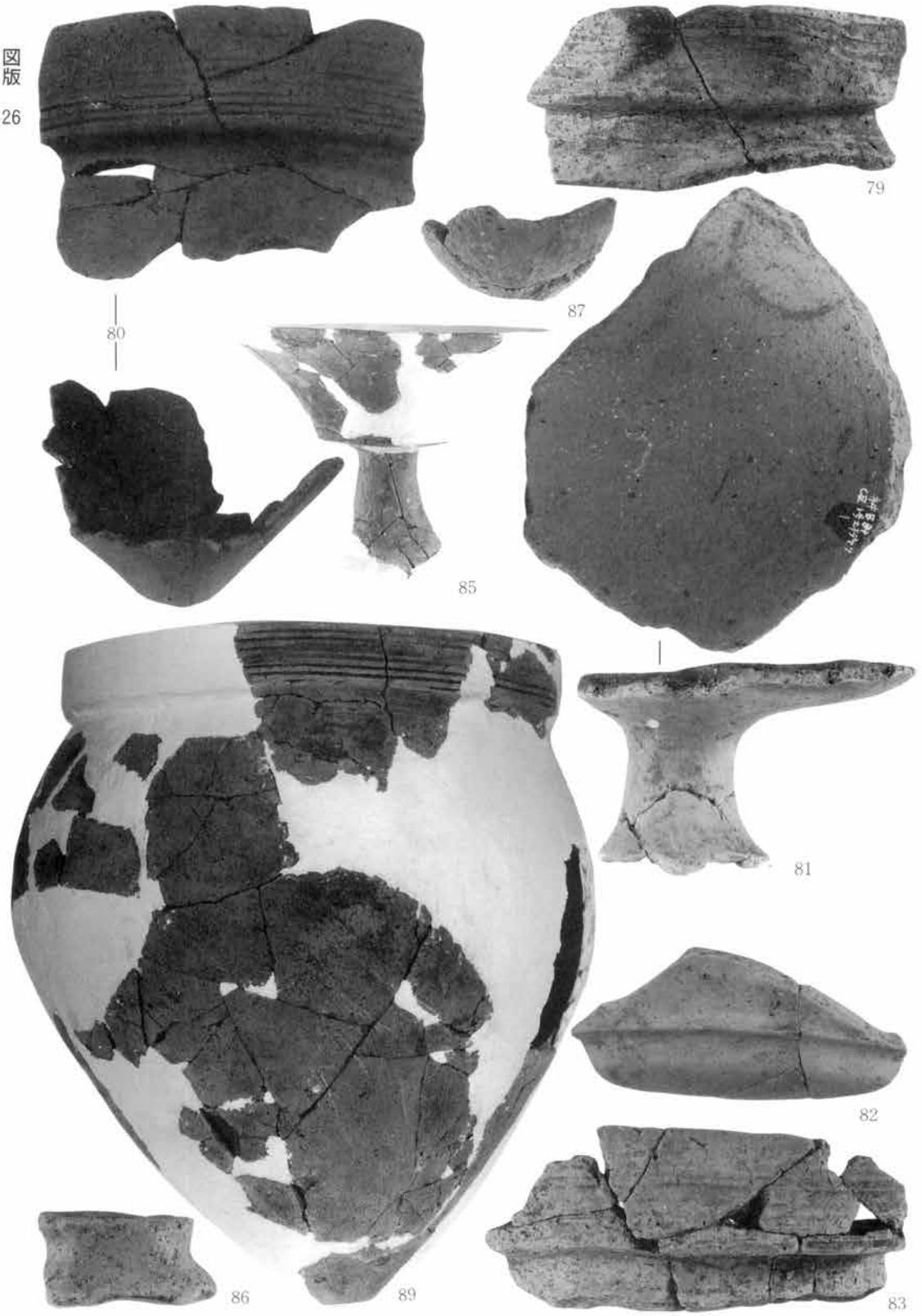
出土遺物(2)　C区竪穴状遺構(2)　縮尺不同



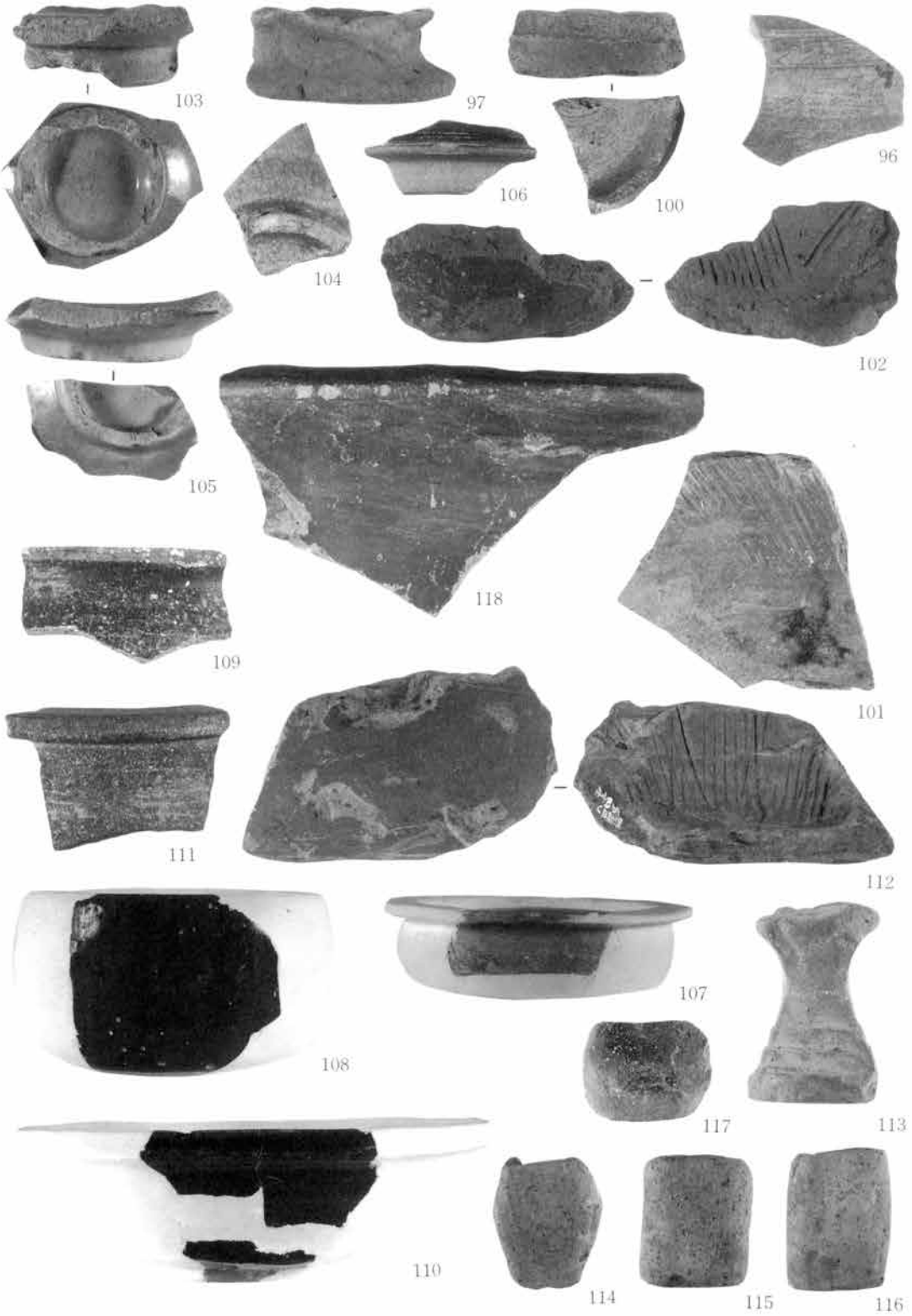

出土遺物(3)　C区1号土坑・2号土坑・大溝（金属製品）　金属製品のみ実物大　他縮尺不同



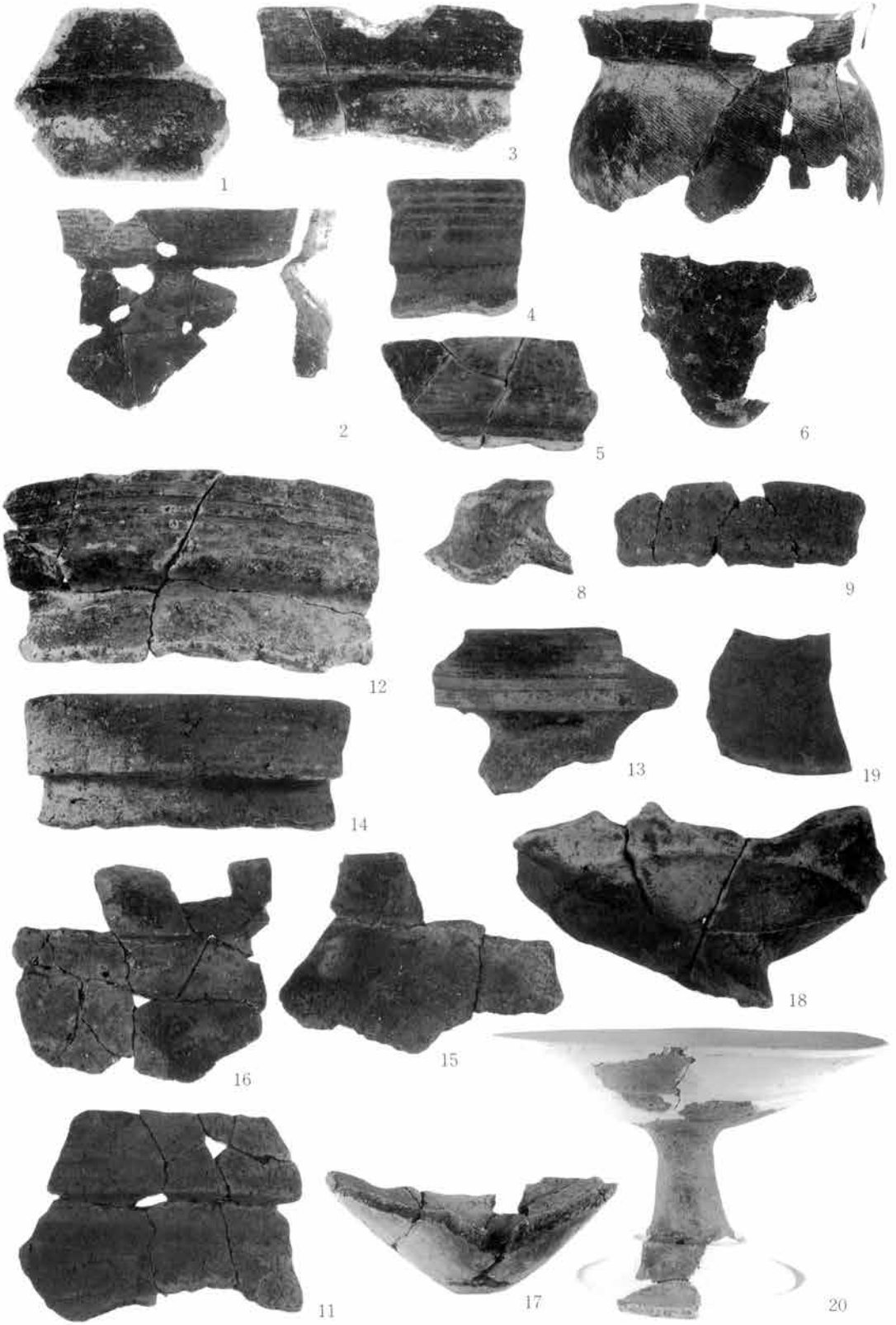

出土遺物(4)　C区4号土坑・包含層　縮尺不同



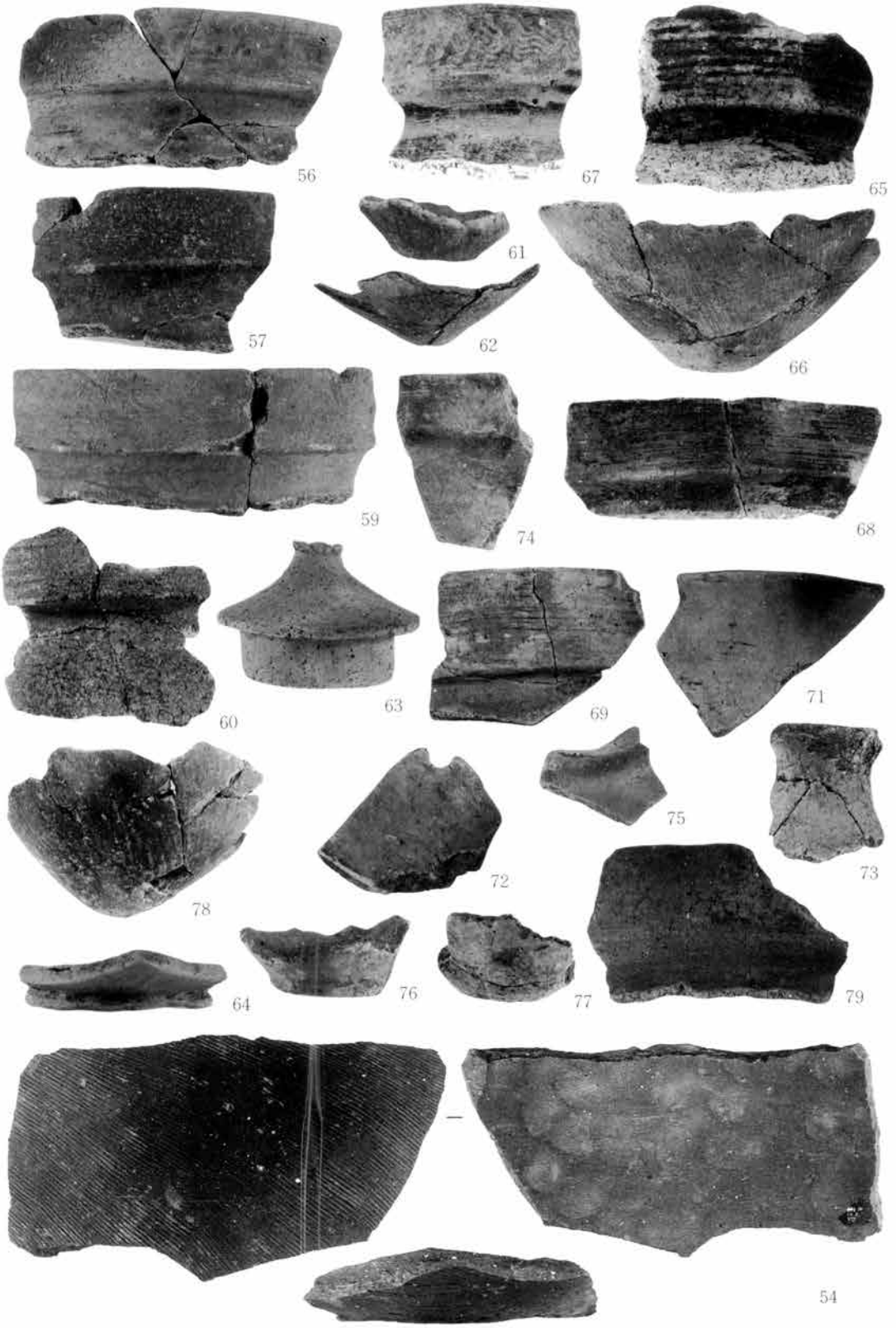

出土遺物(5)　C区1号土器溜まり・2号土器溜まり　縮尺不同




出土遺物(6)　C区大溝　縮尺不同



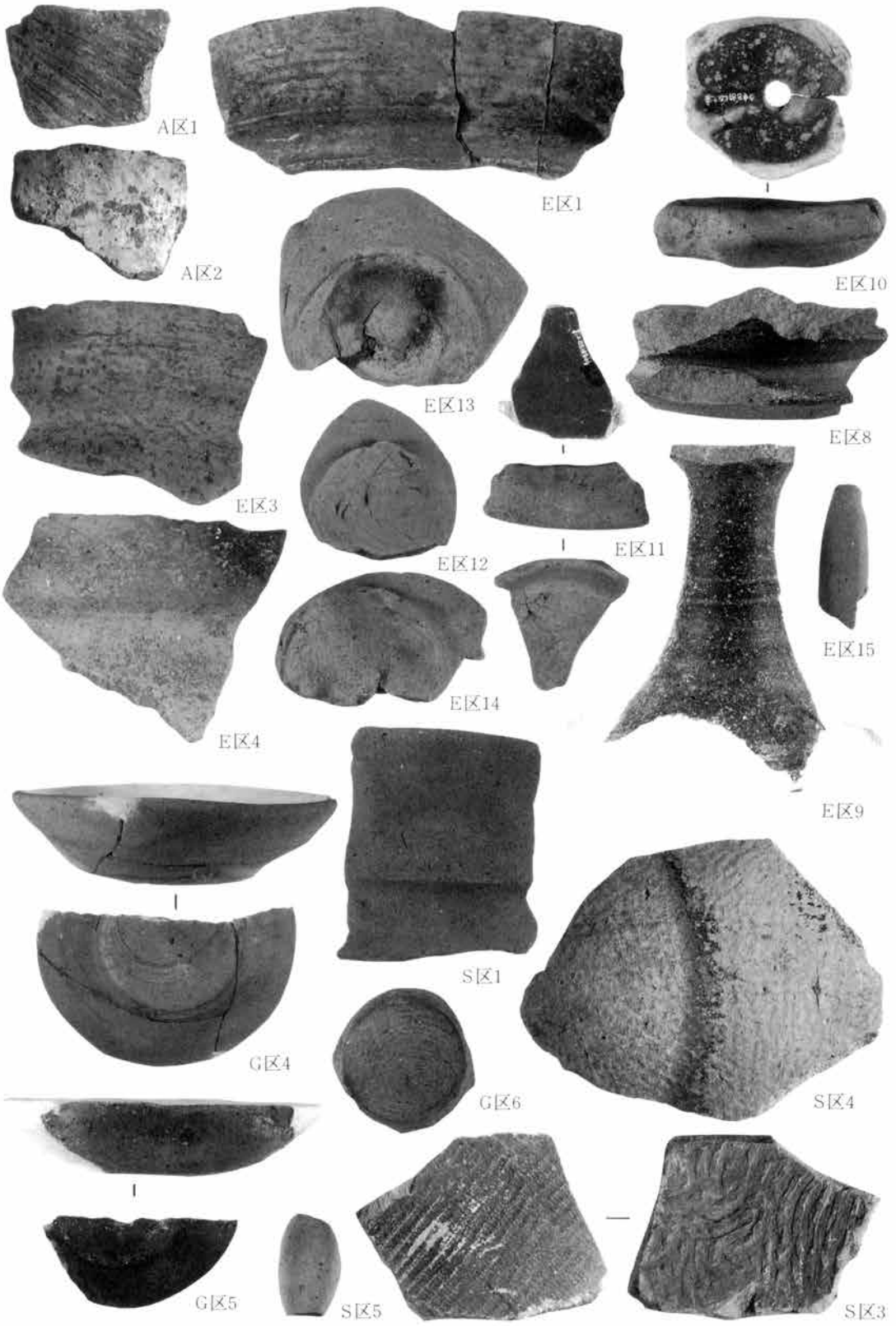

出土遺物(7)　D区1～4号土坑　縮尺不同



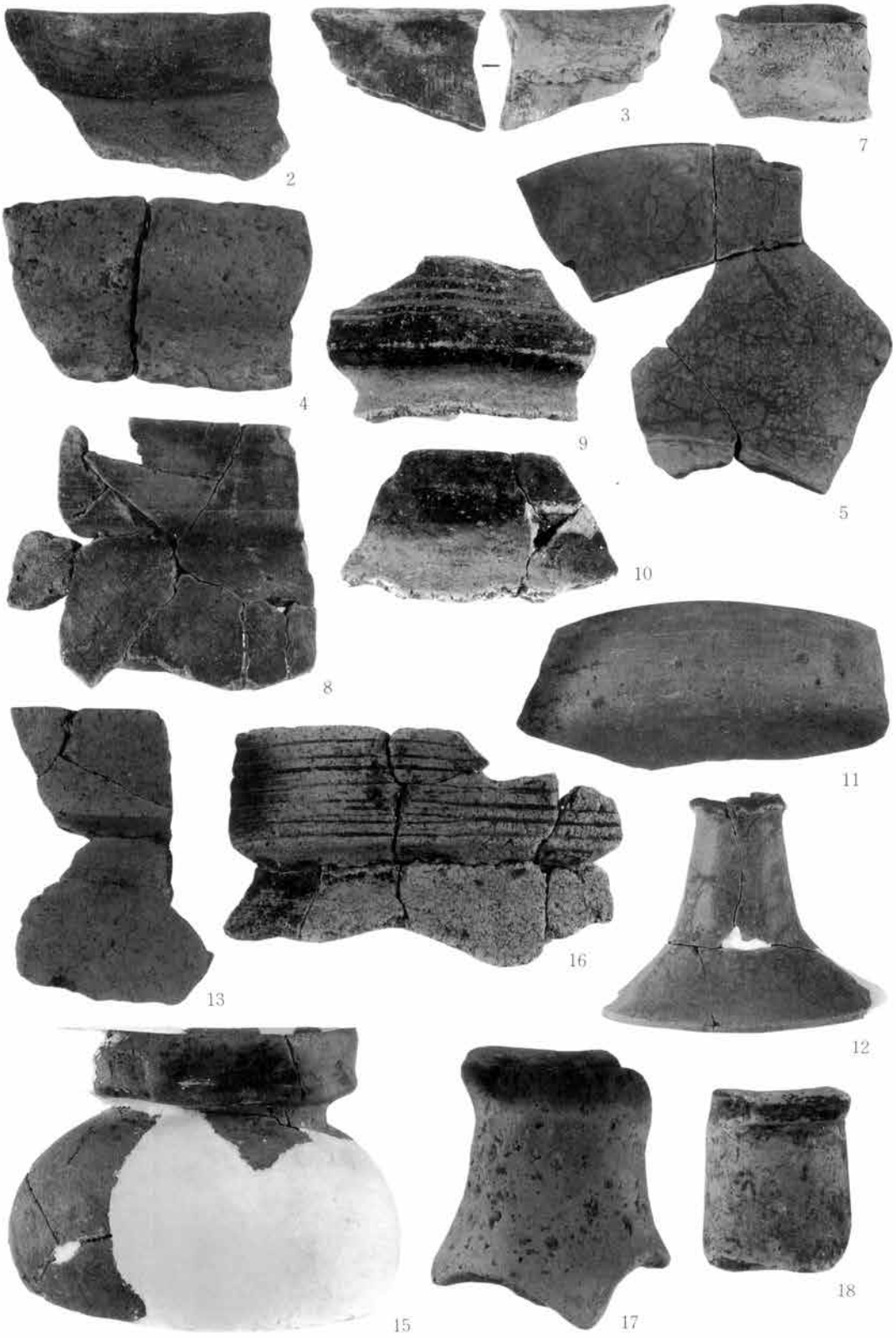

出土遺物(8)　D区溝・5号土坑・ピット　縮尺不同

図版30

出土遺物(9)　D区落ちこみ・5号土坑　包含層　縮尺不同




出土遺物⑽　A区・E区・G区・S区　縮尺不同




出土遺物(11)　T区　縮尺不同

# 金沢市寺中Ｂ遺跡

県営寺中住宅団地建設に係る発掘調査報告書

平成３年３月31日　印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町４丁目133番地

電話（0762）43－7692番

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社

石川県金沢市御影町19－1

©石川県立埋蔵文化財センター1991